
滅火-変形六角関係顛末記

衛狸庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

滅火ー変形六角関係顛末記

【Nコード】

N1853V

【作者名】

衛狸庵

【あらすじ】

海神龍之介は、恋人が欲しいと切に願う高校二年生。

そんな彼は、女子が多い言う理由だけで私立斑鳩大学付属高校を選んだ。

そして、恋人を作るべく、部長の東郷碧に憧れて美術部に入部した。夏休み、越前海岸に美術部の合宿へとやって来た龍之介達は、露天風呂に突如現れた、後輩の鬼迫美貴に関わる不思議な事件へと巻き込まれて行く。

その壱（前書き）

8／1 修正

その巻

□○変形六角関係顛末記○□

○始まりの露天風呂○

「いい……湯だなあ……」ふうう……

「景色も良いし……」うんうん……

「極楽ですなあ……」だよなあ……

視界いっぱい、地球の曲率を教えてくれる水平線が広がり、緋色に輝く夕日が今にも沈みきろうとしている。

夏休みの序盤を利用した三泊四日の合宿初日、私立斑鳩大学付属高校の美術部男子三人は、越前海岸を一望出来る露天風呂から夕日を眺め、幸福感に浸っていた。

掛け流しの広い岩風呂から、雄大な美しい風景を眺め、

「この良さが分かる、日本人に生まれてよかったよ……」と、二年

わたつみりゅうのすけ

ほんだくにひろ

はやまつかさ

生の海神龍之介は、同級生の本田邦博と後輩の羽山司と共に、しみじみと感じ入っていた。

貸切状態の露天風呂で、心と体を癒されていると、

「海神先輩、中学の時、柔道部だったて本当なんですか？」と、司が何気なく龍之介に尋ねた。

海神龍之介は、身長百七十五cm、容姿は、目付きが悪い……いや、失敬、鋭く、季節の変わり目には散髪する無精な髪形と相俟って、見方によってはワイルドなタイプ……かもしれない。

「おお、これを見れば分かるだろ。初段取って、結構強かったんだぜ」龍之介は、にこやかに引き締まった逆三角形の体をアピールし、腕に力瘤を作って司へと自慢げに見せている。

「まあ、筋肉を膨らませただけの、キモイへなちよこボディビルダーとは違う、無駄の無い格闘系の筋肉ってとこかな」と、自画自賛

する龍之介に、

「でも、体育会系特有の脳味噌筋肉的な厳つさは無いですね」と、司が感想を述べると、

「でしようお」龍之介は嬉しそうに、人差し指を口の前に立て、お姉^{ねえ}のポーズを決める。

目付きが悪い割には、お茶目な龍之介だった。

しかし司は、ポーズを決めている龍之介を、汚物を見る様な目で見ながら、

「……じゃ、何で美術部に入ったんですか？うちの学校にも柔道部在るのに……弱いけど」

当然の事を、当たり前前の様に尋ねると、

「まあ、色々と有ってな……でも、考えてみるよ。男ばっかのクラブなんて、面白いかな？俺はそれが嫌に成ったんだよ……第一、何で俺が斑鳩選んだと思っただよ」

「えっ？」思っても寄らない質問に、司は戸惑った。

「結構、必死で受験勉強したんだぜ。進学校とまでは行かなくても、此処、結構レベル高かったからなあ、大学が付いてるのも魅力だけど、なんと言っても女子が多い……しかも、女子の制服が可愛い……これは重要なフアクターだ……」

「はああ……」

右手の人差し指を立てて、司に顔を寄せて真剣な目で語る龍之介に、女子の多いこの学校を選んだ龍之介の目的が、司には何となく分かり、呆れる様に返事した。

「まあ、五年前までは、お嬢様学校だったしねえ。まだ、四分の三が女子だね」少子化の影響を龍之介の隣に座る邦博が、ニコニコしながら解説した。

「やっぱさ、高校生活で彼女が居るか居ないかで、天国と地獄だろ」
「……いや、其処までは……」拳を握り力説する龍之介に邦博が呆れている。

「本田先輩も女の子が目当てなんですかあ？」司が龍之介の目的を

露骨に上げて、軽蔑する様な目付きで邦博に尋ねた。

「いやぁ……僕は……」邦博が言い難そうに、引きつった笑顔を浮かべていると、

「こいつとは、小学校からの友達なんだけど、凄いんだぜ、ずっと成績は学年でもトップクラスだったんだ。まあ、本来なら、俺と同じ学校なんて来るはず無かったんだけどな……」と、龍之介は苦笑いしながら邦博を見た。

本田邦博は、身長は龍之介より少し低く百七十三cmで痩せていて、如何にも秀才タイプと言った感じで、ひ弱な印象がする。長めの髪の毛を横分けにして、眼鏡を掛けているが、まあ、イケメンの部類に入るのでは？……因みに、ヨン様には似ていない。

「僕、本命の学校の受験日に、三十九度の熱を出しちゃって……それで、滑り止めに受けた斑鳩に通う事になっちゃって、ははは……」邦博が、少し恥かしそうに笑いながら答えると、

「そうだったんですか……」と、司は少し身を捻り軽く握った拳を口の前に当てて、まるで女性の様な仕草で邦博を同情する様に見詰めた。

「おい……司……」そんな司を、龍之介は白けた目で見ながら、

「その仕草、何とかならんのか……」と、呆れながら言うのと、

「何の事ですか……」司は頬を膨らませて、龍之介を可愛い目で睨んだ。

一年生で後輩の羽山司は……なんと説明していいのやら……

身長は百五十五cmと小柄で、華奢で色白……その姿は、どう見ても女だ……

背中の中程まで伸ばした綺麗なストレートの黒髪、しかも美人（？）と言っても良い顔立ち……流石に声までは女とは言えないが、高く澄んだ声は容姿に合っている。

露天風呂で、ぶら下がった現物を確認しても、司は女に見える……結構立派な物でした。

「その、お釜みたいなの……」龍之介が言い掛けた時、

「失礼な事、言わないで下さい！あんな変態と一緒にしないで下さい！」と、司は両手の拳を握りながら、龍之介に激しく抗議した。「私は女の子が好きなんです！だから女らしくして何が悪いんですか！」だから何処が、どう違うんだと、聊か解釈しがたい理屈を、司が龍之介達に力強くぶつけると、

「……よう分らんが……」と、龍之介と邦博は顔を見合わせて、首を捻った。

因みに、司の愛読書は『マリア様が見てる』である。

「……私、元々女の子みたいだから、中学の時、男子達に苛められていて……裸にされて……酷い事されて……」司が悲しそうに語って居るかと思うと、

「だから、男なんて大嫌いなんです！」急に、握り拳を胸の前で強く握り締めて叫んだ。

「うっ、そ、そうか……」司の力強い主張に、龍之介は驚きながらも、

「まあ、男が嫌いだと言うのは、ある意味健全だな……」と、同意した。

「だから、本当は女子校に行きたかったのに……こんな物が付いてるから……女の子が好きなのに、こんな物のせいで行けなくて……」司は悔しそうに、龍之介達から顔を逸らす。

「……」苦悩する司の姿を見て、龍之介達は呆れながら、どう対応して良いのやら分らずに困惑している。

「いっその事、ちょん切ってしまうかと……」歯噛みして、無念の思いに涙を浮かべる司。

「！」その言葉に、龍之介達は思わず股間を両手で押さえた。それは、健全な男子だと自負している龍之介にとっては、到底同意出来る事ではなかった。

「だから、女の子の多い、斑鳩を選んだのに……美術部に入ったら、こんなのが居て……」

「おい……」“こんなもの”と言われて、思わず二人は同時に突っ込

んだ。

「でも、良かった。先輩達、良い人で。私、最初は随分と警戒してたんですけど、先輩達って、馬鹿みたいにお人好しで……」と、にこやかに話す司の言葉を遮り、

「おい！」と、今度は力強く、二人は再び突っ込んだ。

二人の抗議の声に驚きながら、司は自分の失言に気付き、

「あっ、ごっ、ごめんなさい！あの、お節介なぐらい、面倒見が良くって言いたくて……」

「あいな！」訂正になっていない司の言い訳に、更に二人は突っ込んだ……その時、

どぼおおおん！と、突然、目の前で爆発したような水柱……いや、湯柱が上がった。

「あっ！」と、大きく目を見開く龍之介。

「いっ！」と、腕で防御する様に体を反らす邦博。

「うっ！」と、湯の中に頭をめる司。

三人が三様の反応を示し、何が起きたのか理解出来ない現状に困惑していると、高く立ち昇った湯柱が納まり、雨粒の様な飛沫が降り注ぐ中、目の前約3m前方の露天風呂中央から広がる、大きな波紋がお湯を揺らしていた。

「なっ、何が起きたんだ？……」三人は恐る恐る爆心地の方を見た。世の中には二種類の間がある。理解出来ない事が起きると、それに好奇心を持つ者と、それを無かった事にする者である。此処にいる三人は好奇心を持った様だ。

三人は警戒しながらその場に立ち上がり、波紋の中心部に注目していると、何やら白い影がゆっくりと浮んで来て、白くて丸い物が、プカッと湯面に姿を現した。

「尻？……」湯面に現れた物は、その形状から“尻”であると判断出来たが、何故此処に尻が浮いているのかと、龍之介は目の前で起きている現状を理解しようと努力した。

現状が理解出来ない三人は、取り合えず確かめようと顔を見合わ

せ、お互いの意思の確認をするかの様に顔を見合わせ頷くと、ゆつくりと近付て行く……と、次の瞬間、ザバァと、お湯の中から上半身を跳ね上げて尻の本体が現れ、龍之介達に背を向けて正座の様に座った。

「えっ？女！」その後姿から“裸の女”と言う所までは認識出来たが、

「なんで……男湯に？」と、更に理解出来ない現象に龍之介は身を構え一歩引いた……全裸かどうかは分からないが、期待はしたい。

三人に囲まれた中央で、正座する様に座っている女は、頭をプルプルと横に振ると、濡れた長い髪の毛を顔からたくし上げて、きよろきよろと周りを見回している。

どうやら、女の方も現状が良く理解出来ない様である。

そして、見回している女の横顔を見て、龍之介は知っている顔だと気付いた。

「鬼追？……」何で？と言う思いと共に、龍之介の口から言葉が洩れた。

龍之介の声に気付いて、女は振向き龍之介の方へと視線を移す……可愛い少女であった。

目線が会い、龍之介は突然現れた女が、美術部の後輩の鬼追美貴きわいみきである事を確認した。

美貴も、目の前に居るのが龍之介である事を認識したようだが、この現状を、今もって理解出来ないのか、キョトンとした表情で、龍之介達を見回していた……が、突然、

「きゃあああ！」と、甲高い悲鳴を上げながら、掌で顔を隠し飛び上がり、慌てて後ろを向いた。

「あっ！やば！前……」見られたか？と、無防備に立っていた龍之介は、美貴の様子を見て気付き、慌てて前を押さえて湯船に座り込んだ。

それに連れられ、現状に気付いた邦博と司も慌てて前を隠して湯船に座り込んだ。

風呂場で同性に見られてた所で問題は無いが（自慢するほどの物でも無いが……）面識のある、同じクラブの後輩の女子に見られたとなると、精神的なダメージは計り知れない。

「何んだよ！お前！何で此处にいるんだよ！」恥ずかしさと気まずさで、座り込んでも前を隠す様に押さえながら、龍之介は美貴に向かって叫んだ。が、今度は逆に龍之介の視線の先には、後ろを向いて立っている、美貴の可愛いお尻があった。刺激的な光景である。

美貴は龍之介達の前方約3mの地点で、後ろ向きで立ったまま、首だけ回して指の隙間から安全と現状を確認する様に、ちらりちらりと三人の方を見ている。

ただし、今もって美貴は“全裸”と言う自分の現状には気付いていない様子だった。

混乱しながらも、龍之介は目をぎゅっと瞑って横を向きながら、「おっ、お前は、遅れて明日から参加する予定じゃなかったのか！第一なんで、男湯にいるんだよ！」と、無防備に立っている美貴に對して叫んだ。

世の中には二種類の男が居る。女の裸に興味が在る奴と、無い奴である。

当然、龍之介は前者であり、女の尻が目の前に、と言う光景に好奇心が奮い立ったが、対象が面識のある女性である以上、見てはいけないと判断したのである。なかなか紳士である。

龍之介が叫んだのを聞いて、美貴は覆っていた手を顔から離し、きよろきよろと回りを見渡すと、自分も全裸である事にやっと気がき、再び甲高い、所謂、絹を引き裂く様な悲鳴を上げ、手で上下の“前”を隠しながら飛び込む様に湯船に座り込んだ。

恥ずかしさのあまり身を竦める美貴を他所に、女性の悲鳴を生まれて初めてリアルで聞いた龍之介は、悲鳴って綺麗なソプラノだなあ……なんて別次元に思考が飛んでいた。

「何でも良いから早く出ろ！僕達は後ろ向いててやるから！」邦博が叫ぶのを聞いて、やっと、別次元から帰って来た龍之介は、司と

共に後ろを向いた。

「すみませえん！」三人が後ろを向くのを確認する事も無く立ち上がり、美貴は泣き声に近い大声で誤りながら、慌てて走って出て行った。

美貴の慌て様に、後ろを向いたままの龍之介は、転ぶなよと、心に念じたが、露天風呂から中に入る扉の辺りで、どてっ☆！と、転ぶ音が聞こえた。お約束な奴だ。

「ちよっと！男子！何、騒いでるの！」行き成り響く女性の怒鳴り声に、

「あつ、部長！」と、龍之介は隣の女湯の方を向いて、

「何でもありません！」としか、返答する言葉が見つからず、半ばやけくそ気味で女湯の方に向かって叫んだ。

「まさか……司ちゃん襲ってんじゃないでしょうね！司ちゃん大丈夫！」との問いに対して、

「するかっ！」と、龍之介と邦博は、間髪入れず二人揃って、強く握り締めた拳を女湯の方に突き上げ、力の限りの叫びで抗議した。

シュプレヒコールを挙げる二人の横で、

「大丈夫でええす……」と、司が二人の剣幕に、少し怯えながら女湯の方に返事した。

「……そう……静かにしなさいよ」司の返事に、明らかに不審そうな声が帰って来た事に龍之介は、自分の人格が身に覚えの無い事で疑われている事に不満があったが、

「はああい」と、現状を説明する術も無く、他の二人と共に声を揃えて返事した。

暫く、大人しく湯船に浸かり、景色を眺めていた龍之介が、

「そろそろ出るか……」治まったか？（何が？）と、隣に座る邦博に問いかける。

「そうだな……」どうやら邦博も治まった様だ……なにが。

「ほんと、男の体って嫌ね。大きくなちゃって……醜い」司が軽蔑した声で小さく呟くと、

「悪いなあ！」と、二人は立ち上がり司に向かって、不可抗力による正当性を訴えた。

「ひっ！」突然の二人の怒鳴り声の合唱に、司はビクッと体を震わせ驚いた。

「全く……恥かしいだろうが……」若い男子として、正常な反応ではあるのだが……

「ごめんなさい……」と、申し訳無さそうに手を前にして下を向く司だが、その仕草も女性的で、龍之介にとっては目のやり場に困る始末である。

今時、ネットで女性の裸なんぞは、龍之介も見飽きるぐらい見てはいるものの、面識のある女性の全裸とあっては話は違ってくる。

先程の突然現れた鬼追美貴は、美術部の後輩で司と同じ一年生だ。容姿は、目がクリッと大きいのが特徴で、腰まである長いストリート黒髪は、普段は高い位置でポニーテールにまとめている。身長は百四十三cmと高校一年生としては随分と小柄で、体型は、はつきり言って、小学生である。

肝心な部分は確認出来なかったものの、龍之介の脳裏には、美貴の白くて可愛いお尻が焼き付いて消えないでいた……龍之介の名誉の為に書き加えるが、決して彼はロリではない。

「でも、美貴ちゃんって、胸、小さかったですね……」しらけた場を和ませようと、にっこりと笑って司が二人に向かって言うと、

「言うなああ！」

「思い出させるなああ！」と、返って火に油を注いだ結果となった。

「お前は平気なのかよ！」龍之介は司に対して力強く抗議し、慌てて風呂に浸かった。

再び二人の下半身は臨戦態勢に入った……お年頃ですもの。

司はタオルを胸から垂らし前を隠して、龍之介の剣幕におろおろしている……だから女みたいにするの、やめろって。

「鳩山幸雄……小沢一郎……出川……なんまんだぶ、なんまんだぶ……」

「宇宙人……フランケン……小豆研ぎ……主よ、我を正しき道に導きたまえ……」

龍之介達は、必死で“萎^なえる”事を、脳内に想い描く事に専念し、何とか平常心を取り戻し危機は回避され、デフコン2は解除となった。

「……出るぞ……」余計な事言うなよと言いたげに、司を睨みながら、ちよつと湯中^{ゆあたり}り気味の二人が脱衣所へと向かった。

脱衣所では、司の着替える姿は艶かし過ぎて、二人は司と距離を取っている。別に男同士だから気にする必要は無いのだが、司の裸を見る事に、二人は妙な罪悪感を持っていた。

更に、司の裸を見て、万が一にも欲情する事なんて、二人のプライドが許さなかった。

「ん？あれ？おかしいな……」

「どうした？龍之介」

龍之介が脱衣籠の周りを、何やらごそごそと探している姿を見て邦博が声をかけた。

「いや……無いんだ……着替えが……」

「えっ？」

龍之介はタオルを腰に巻いたまま、確かに持って来たはずの新品の下着と浴衣を、脱衣籠を持ち上げ必死に周りを探している……旅行に行った時って新品下ろしません？

「あつ、もしかして……鬼追さんが、着て行ったんじゃないませんか？」

「あつ……あいつ……確かに、それしか考えられんな……」司の言葉に、龍之介は確信した。

全裸で突然現れた美貴が、此処から出る術^{すべ}は考えるまでも無い……正に着服。

「邦博、司、鬼追を探してくれ！」

「えっ、うん……いいけど」龍之介の言葉に、邦博は疑問を持つ様な頼りない返事を返した。

「なんだよ？早く行けって、このままじゃ何も出来ないだろが！」
煮え切らない邦博の態度に少し苛付きながら龍之介が怒鳴る。

「ちょっと、待って下さい……髪の毛、乾かさないと……」司が浴衣姿で、長い髪の毛を横に垂らし、バスタオルでもみもみと揉み込む様に拭きながら龍之介の所にやって来た。

その女にしか見えない仕草と、浴衣姿の帯の位置が女性の様に上にある事に、龍之介は訳の分らない怒りを覚え、

「とっとと行って来い！」と、司に怒鳴り付けると、

「もう……分かりました、探してきます」と、司は不満そうにむくれて、バスタオルで髪の毛を包むように巻いて出て行った。

二人が出て行った後、龍之介はする事も無く、とりあえずバスタオルだけでも腰に巻こうと探して見るが、バスタオルもどうやら美貴が持つて行ったらしく見当たらなかった。

龍之介は仕方なく、湿ったタオルを腰に巻いて、扇風機の前に在る長椅子に座った。

何をするでも無く、一人、扇風機を見詰め、待つ龍之介……

「あ あ あ あ……」扇風機に向かって声を出す……やって見たくなりません？

「せんばあい……」其処へ司が、入り口から顔だけ出して呼んでいる。

「わぁっ！……何だ？見つかったか？」突然の声に驚き、自分の間抜けな姿を見られたのでは無いかと心配そうに司を見た。

「はい……でも、どうします……」どうやら、見られて無いみたいですね。

「此処へ連れて来いよ」龍之介は椅子から立ち上がって司に近付き、何気なく言うと、

「そんな事、出来ませんよ！此処、男湯ですよ！」司が少し怒る様に声を荒げて抗議した。

「あっ、そうか……ちっ……」龍之介は探せとは言った物の、今更ながら邦博の煮え切らない態度が理解出来た。たしかに見つけたか

らと言って、どうしようも無い。

結局、最初からこうすれば良かった思いながら、

「すまん、司。部屋から鞆持って来てくれ。それと、浴衣も貰って来てくれ」と、後悔交じりに、司に向かって頼むと、

「はああい」と、司は可愛い返事を残して出て行った。

暫く待っていると、司が着替えの入った鞆と浴衣持って来て、龍之介はやっと風呂から出る事が出来た。

風呂から出てロビーの方に曲がる角で、頭をバスタオルで巻いた美貴が邦博と共にいた。

「おい！」と、美貴を見るなり勢い良く怒鳴り付けたが、小さな美貴が更に体を小さくして、申し訳無さそうに立っている姿を見ると、龍之介は、

「勘弁してくれよ……」何か可哀そうにも思えて来て、怒りは消えて脱力感だけが残った。

「すみません！ご迷惑掛けました……」迷惑そうに話す龍之介に、深々と頭を下げている美貴の姿を見て、龍之介は今更仕方が無い事だと諦めた。

「あの、ちゃんと洗って返しますから、明日、宅急便で荷物が届きますから、それまで貸してください！」と、顔を真っ赤にして、必死になって訴える美貴の言葉を聞いて、

「何も今すぐに脱げとは言わんよ……」何なら、洗わずに返して貰っても……等と善からぬ事が浮かんだが、顔には出さない様にと堪えた。

「それより、何で鬼追は、あそこにいたんだ？それを説明してくれよ」と、邦博が聞くと、

「……………」いや、黙ってないで……

龍之介達三人は、美貴を取り囲んで答えを待っている。美貴は困った様に俯いている。

これじゃ、まるで苛めているみたいで、龍之介はちょっと、周りの目線が気になって来た。

「言い難いかも知れないけど……僕達、見ちゃったから、説明して欲しいな」邦博君、確かに見ちゃいましたね……色々……いやいや、そうじゃなくて。

「そうだ、良いか、あれは上から落ちて来たんでも無く、飛び込んだのでも無い……何の気配も無かったからな。お前は、あの露天風呂に突然現れた、違うか？」

「……………」美貴は、相変わらず困った様に黙って俯いていると、「あっ……………」まずいな、後で話そう……………」部長達が女湯から出て来るのが見え、龍之介達は美貴を取り囲むのを止めて、少し離れた。

「あれ？美貴ちゃん、もう着いてたの？」部長が、美貴を見つけて声をかけて来た。

「はい、今さっき……………」男風呂に、とは言えんだろな……………」

「あら？お風呂……………」入ったの？」美貴の頭のバスタオルを、部長は不思議そうに眺めている。

「あっ、いえっ、まだ……………」準備だけ……………」部長の質問に、美貴は慌てて適当に答えた。

「……………」バスタオルを頭に巻いて準備だけでも無いものだが、自分達が今まで入っていた女湯には美貴はいなかったしと、釈然としない様子で部長は美貴を訝しげに見ている。

「……………」まあ、良いわ。じゃ、温泉入ってらっしゃいよ、食事まで時間あるし……………」あっ、食事……………」今からでも増やせるかな？」と、部長が気付き、心配そうにフロントの方を見た。

「私、フロントに言って来ます」傍にいた司がにこにこしながら、部長に申し出た。

「じゃあ、司ちゃんお願い」微笑みながら、部長が司に頼むと、「はああい」と、司は、にこやかに返事して、パタパタとフロントに走って行った。

「ご迷惑掛けます……………」勝手しちゃって……………」申し訳なさそうに頭を下げる美貴に、

「いいわよ、それぐらい……………」本当に迷惑な人がいるんだから……………」

と、悩む様に部長は、可愛い顔の眉間にしわを寄せた。

部長は東郷碧とうこうみどりと言って、身長が百七十二cmと高く、スリムな体型が更に長身を印象付けている。

ボブカットしたストレートの黒髪に、彫りの深い整った顔立ち。

美少女！……いや、歳から言うと、美人と表現した方が良いのかも……ともかく美人だ。

その上、只の美人じゃない。地味なブラウンのメタルフレームの眼鏡から受ける知的なイメージ通り、学年での成績が常にトップテンに入っていると言う才女でもある。

まあ、欠点と言えば、未開の平原の様な胸か。いや、それはそれで需要が無い訳では無い。

龍之介が美術部に入ったきっかけは、この部長にあると言っても過言ではない。

入学当初のクラブ説明会で、当時二年生だった部長を見て龍之介は一目ぼれした。

龍之介にとっては、可愛い女子のいるクラブなら何処でも良かったようだ。

まあ、ギャルゲーやエロゲーなら、これから見え透いた展開となるのだが、そうは問屋が卸さない……って、なんやねん、それ……

「毎年の事だけど、全く、あの人には責任感と言うものがあるのかしら……」と、あきれる様に、不快感を表している部長が気になり、

「あの、葛西先生……ですか？」と、部長に声をかけると、

「そうよ！」と、龍之介の質問に、間髪いれず部長が声高に答えた。

葛西先生かさいとは、御歳三十歳の美術部の顧問で、これがまた色っぽい先生である。

解けば長い髪の毛をアップでまとめ、きつい目付きに黒縁眼鏡を掛けている美人だ。

男勝りで気の強い人だけど、さばけた性格は生徒達には人気がある……いや、それよりも、巨乳と言っても過言では無い胸は、多くの男子生徒のファンを持っている。

今日も浜辺で、揺れてた揺れてたと、龍之介は回想している。

合宿の初日の今日は午前中が移動で、午後からは、せっかくの海なんだからと美術部の皆で海に入って遊んだ。

しかし龍之介は、どちらかと言うと部長の様な貧乳が好きな異端者で、部長の水着姿を浜辺でしつかりと目に焼き付かせていた……白く長い足が眩しかった……

余談だが……普段、制服姿しか見る機会の無い女子のプライベートルな水着姿って……健全な男子にとっては非常に萌えるものがある。「先生たら、お鮎子三本も開けちゃって……今、四本目よ。付き合ってらん無いわ!」

「えっ、風呂で……ですか?」部長から女湯の現状を聞いて龍之介は驚いている。

「そうよ」怒り半分で、諦めたように部長が答えた。

「それ、危ないんじゃない?……昼間も随分と、缶ビール飲んでいた様な……」

「言っただけ、聞くもんですか!」部長は、風呂場では随分と苦勞したみたいだ。

気が強く正義感の強い部長は、その分面倒見が良く、皆から信頼され頼られている。

葛西先生も“碧が居れば大丈夫だ”と部長に頼る傾向にあり、今も風呂場では、杯片手に羽を伸ばしている、と言った辺りだ。

龍之介と、部長が話している所に、フロントまでお使いに行っていた司が帰って来た。

「お食事、大丈夫だそうですよ」司がにこやかに報告すると、

「あら、ありがとう」飼い主が子犬を可愛がる様に、部長は微笑みながら司の頭を撫でた。

その光景を見て、部長の事を想っている龍之介は、心の片隅に微かな怒りを覚えた。

「そうだ、司ちゃん、男子達に変な事されなかった?」司の頭を撫でながら部長が聞くと、

「何でそう思うんですか！する訳無いでしょ！」と、龍之介は、力強く部長に抗議した。

部長の理不尽な疑いに、こいつにも、ちゃんと立派な物がぶら下ってるんですよ！と、言いたかったが、他の女子も居る中、この発言は控えるべきだと判断した。

「分かるもんですか……司ちゃん、嫌だったら、私達と入っても良いのよ」龍之介を疑うような冷たい目で見ながら提案する部長に、他の女子達も頷いている。

「ぐっ……」おかしいだろ！それ！と、龍之介は、思わずつつこみたかったが、多くの女子を前に、今は形勢が不利だと判断し堪えた。「あっ……いえ……大丈夫ですから……」司は、少し心引かれる所があるらしく、はにかみながら頬を赤く染めて部長から目をそらした。

その様子が龍之介にとって益々気に入らず、

「部長！俺は誘ってくれないんですか！」などと、思わず口走ってしまった。

女子達の冷たい視線が龍之介へと注がれ、重く^の押し掛かる沈黙が続く中、部長が、

「……社会的に抹殺されたい？……」と、一言、背筋に冷たい物が走る様な冷酷な目で、龍之介を睨み付け言うと、他の女子達も、ひそひそと何やら龍之介について囁き合っている。

何だよ！この差は！と思いつつも、軽はずみな発言を龍之介は後悔していた。

「私、お風呂に行つて来ますから、先生見てきます」

殺伐とした場の雰囲気を変える様に、美貴が明るく部長に申し出た。

「そう、美貴ちゃんお願いするわ。甘やかしちゃ駄目よ」

「はい……」

部長の言葉に美貴は、困ったように微笑ながら会釈し風呂場へと向かって行った。

○危険物注意○

次の日、龍之介達は葛西先生抜きで朝食を取っていた。先生は、まだ寝ているらしい……

あの後、美貴が風呂に入った頃には、葛西先生は露天風呂の大きな石の上に胡坐をかいて、五本目のお銚子を上機嫌で味わっていたそう。当然、すっぱんぼんで。

先生は、美貴が諫める言葉など聞く耳持たずの状態で、美貴が出る頃には、空になった六本目のお銚子を握り締めたまま、大の字で石の上に寝ていたらしい。当然、すっぱんぼんで。

酔っ払って寝てしまった葛西先生を、美貴一人ではどうする事も出来ずに、部長達を呼びに行つて、葛西先生を介抱し部屋まで連れて行つたのだ……ご苦労様です。

そんな事とは知らずに朝食を取っている龍之介は、「何で旅館の朝食って、こんなに美味しいんだろう……」と、呑気に小さな幸福感に満たされていた。

普段、朝はトースト一枚の龍之介が、ご飯をお代わりする。

本人も不思議だと思いつつ三杯目を食べていた。ほんと、不思議だ。

「ちょっと、皆聞いて。今日は、午後から陶芸村に体験学習に行きます。お昼ご飯食べたらバス停に集合ね。午前中は自由時間にしますので、各自、スケッチ等をして下さい。ただし、あまり遠くには行かないで、必ず二人以上で行動する事。分かった？」

「はあい！」と、龍之介達は、夕べの事で少々不機嫌そうに話す部長に返事をした。

合宿参加者は十五名。美術部は幽霊部員を含め二十五人いて、其の内、男子は龍之介達三人だけだ……が、約一名、例外的な存在が居るために、実質は二名なのかも知れない。

入学当初、2年生だった部長に釣られて入った龍之介は、ずっと

部長の事を思い続けて居るのだが、告白するに至っていない。

皆の前で話す部長の姿に見とれていた龍之介は、ふと美貴の方を見た。

美貴は、龍之介から少し離れたテーブルで、一年生の女子達と一緒に朝食を食べている。

その姿を何となく見ていると、昨日見た全裸なまの破壊力と、今、美貴が龍之介の下着を着ていると言う事実が入り混じり『ああれえ……おやめ下さい御代官様……』『良いでは無いか。どうせそれはわしの下着じゃ!』などと、龍之介の頭の中で、何やら善からぬ妄想が自然と湧き上がって来た……が、浴衣のまま、臨戦態勢になれば隠しようが無いため、非常事態は避けたいと考え、慌てて脳内の妄想を打ち消した。

鬼追美貴は、何時も元気で明るくて、何て言うか、馴れ馴れしい……いや、人懐っこい性格で、美人とまでは言えないものの、童顔で整った顔立ち、龍之介のストライクゾーンのほぼ中央に入っている。

ただし、個人の感想で、全ての皆様が実感されるとは限りませんって、言う奴だけ……

龍之介も美貴の事は可愛い思っている。美貴の明るい性格がプラスして、部長以外の女子の中では一番気にかかる存在で、一言で言っ、ちっちゃくて可愛い……ロリではないが……

直視で確認は出来なかったものの、好みの貧乳であると想定出来る事と、風呂場で見えた白くて可愛いお尻は、龍之介の心を引き付けるのに十分なものだった。ロリじゃないよ……

九時前に龍之介達は旅館を出て、付近をロケハンのために、うろうろとしていた。

山が海に迫るような此処は、旅館や民宿と民家が混在する集落が、狭い道路を挟み山の斜面か海に面して立っている。

海岸を見ると少し離れた所に港が見え、大小取り混ぜて何隻かの

漁船が停泊していた。

皆は、それぞれの場所で二・三人のグループになって、スケッチをしている。

絵心等無縁だった龍之介にとっては、れた裏路地、船が見える風景、狭い道を挟んで建つ家並み等は、どうって事無い風景にしか見えず、クロッキー帳に鉛筆を走らせている部員達を見ながら、自分は何を描けば良いのか決めかねていた。

感性と言うものだろうか、何気ない風景に何かを感じて絵に起こす事を、龍之介は未だに出来ず、どうしても珍しい物とかをモチーフにしようと探してしまう。

“見るんじゃない、感じるんだ” 有名な台詞だ……ちよつと違うか……でも、武の世界も、美の世界も、そこなんだと龍之介は漠然と感じていた。

龍之介と邦博は、取り留めの無い雑談をしながら歩いていると、なにやら騒々しい。

何事かと騒音の発生源へと近付いて行くと、犬が吠えまくっているのが聞こえて来た。

龍之介達は騒音の拠点である路地に入り、そのいる女の姿を見て少し後悔した。

そこに居たのは龍之介と同じクラスの篠崎翔子しのぎしゅうこだった。

翔子は……危ない奴だ。

外見は、美しい長い黒髪と白い肌が特徴的で、まるで日本人形のような凄い美人だ。

身長は百六十五cmで、スリムな体型に手足がスキツと伸びきった、ファッションモデルとしても十分通用するスタイル。それは、道行く人々が必ず振り返ると言っただけではない。

しかし、そんな翔子は、一年生の時、体育教官の目の前で“大嫌い！”と、叫んでカッターナイフで手首を切った……しかも職員室で……

体育教官には、まったく身に覚えが無かったらしいが、女子高生

が目の前で手首を切るなんて余っ程の事だと、周りの目は善からぬ方へと考えを及ぼした。

結局、最後まで翔子は理由を話さず、それが返って周囲の疑惑を膨らませる事となり、体育教官は同じ学校法人系列で、田舎の山奥にある体育系の男子校へと移動させられた。

噂では奥さんとも離婚したそうだ……哀れな……

まあ、元々、体育教官に有り勝ちな、ガキ大将みたいな奴だったし、好き嫌いで生徒を判断する為、多くの生徒から嫌われて居た奴だから、誰も体育教官に同情などしなかった。

翔子は、見た目は綺麗な奴なんだが、あの事件以来、不倫説、強姦説、妊娠説等が飛び交い次第と孤立して行った。

騒音の発生源である土佐犬の様な大型犬は、繋がれている車で引っ張っても切れそうに無い太い鎖を、引き千切らんばかりに暴れながら、牙を剥き出しにして吼えている。

翔子は吼える犬の前に立ち、犬を睨み付けている。龍之介はその状況に対して、何が起きているのか把握出来なかったが、騒がしく吼える犬は、近所迷惑になる事は理解出来た。

事情を問いたさうと、龍之介が翔子に近付こうとした時、翔子は近くに落ちていた鉄パイプを握り、大きく振り上げて一気に犬へと振り下ろした。

「ぎゃん！」鈍い打撃音と共に、犬が悲鳴を上げる。翔子は再び鉄パイプを振り上げる。

「馬鹿！やめろ！」龍之介は、反射的に駆け寄り、翔子を後ろから羽交い絞めにして引き戻し、次の一撃を止めた。

「放してよ……こいつ、私を見て、笑ったのよ……」翔子は、犬が逃げ込んだ犬小屋の方を睨み付け、振り上げた手を振り回し、怒りで震える声で龍之介に言った。

「落ち着けっ！誤解だ！犬に悪意は無い！……ええっと、その……ほらっ、きつと、性格の明るい、お茶目さんなんだよ！」事的前後が分からず、龍之介は何をどう言えば良いのか分からないまま、と

ても説得出来そうに無い、適当な思い付きを言い放った。

「……あら……そうだったの……ごめんね、ワンちゃん」龍之介の出鱈目な思いつきを、何故か翔子は納得し、優しくそう言って、あっさりと鉄パイプを手放した。

龍之介が、乾いた金属音を響かせ落ちた鉄パイプを確認して、羽交い絞めの手を離すと、翔子は振向き龍之介に向かって、何事も無かったかの様に、にこっと微笑んだ……怖。

吠えていた犬は、犬小屋に入ったまま出て来ない。

「……生きてるんだろうな……」と、龍之介は心配になり、可愛い花柄模様の犬小屋を覗き込もうとした時、

「どうしたの？レイチェル……」と、犬の名前を呼ぶ声が、家の中から聞こえて来た。

「あっ！」その場に居てはいけない事を察した龍之介は、翔子の細い腰に手を回し、タツクルするように抱え、その場をダッシュで駆け出し、路地の入り口付近で待機していた邦博と合流して、表の道路へと駆け抜け、路地から見えない様に身を隠した。

間一髪だった……龍之介達がいた路地の方では、住民が出て来た気配がしている。

龍之介は、翔子を抱えてダッシュした為、手を膝に付いてかがみ込み大きく肩で息をし、

「な、何……やってんだよ……お前は……」と、翔子を睨み付けながら聞くと、

「犬の絵を描いていただけよ」と、龍之介の疲れた様子にお構いなく、涼しい顔で乱れた髪の毛をたくし上げながら平然と言いつ放った。「どういう描き方してんだよ……電波でも飛んで来たか？」龍之介の問いかけに、翔子は無表情のまま龍之介から視線を離さず、画材を入れた鞆から2Hの鉛筆を取り出し握り、

「……喧嘩……売ってるのかしら？」と、冷ややかな怒りを込めた目で睨みつけた。

「うっ！……いえ……失言でした。忘れてください……」翔子の声

から、只ならぬ殺気を感じ取った龍之介は、素直に頭を下げた。

翔子は、少し変わっているが絵が極端に上手い。

その腕前は、一年生の時から展示会で金賞等の高い評価を貰っていた。

そして翔子は、高い評価を自慢とも思わず、美術部の後輩達に優しく指導すると言う一面も持っていて、リストカットの怖い人と思われている反面、優しい先輩として一年生には人気がある。

「それより篠崎、一人か？良かったら一緒に書かないか？」気難しく付き合い難い翔子であったが、未だに絵心が未熟な龍之介にとって、翔子の存在はありがたい物があった。

「別に、拒否はしないけど……」頭だけを傾ける様に振向いて龍之介に答える翔子に対して、傍で聞いていた邦博は何故か不機嫌な様子であった。

「で、何を、書くんだ？」モチーフを決められない龍之介は、翔子に期待を込めて聞いた。

「……そうね……あのガードレールなんかどうかしら……」翔子は辺りを見回すと、道路の海沿いに立っているガードレールさんを推薦した。

推薦されて龍之介と邦博は、たっぷり三分間ガードルを見つめた後、翔子に振向いて、

「……篠崎さん……このガードレールが、どうかしましたか……」と、推薦されのがあまりにも普通の物だった為、龍之介はどう解釈して良いのか分からない。

「分からないの海神君？このガードレールの良さが」翔子が見下すように龍之介を見ている。

「何処が、でしょう……」どう見ても、何の変哲も無い普通のガードレールの、何処がどう良いのか龍之介には理解出来なかった。

「だめだね……良く見なさい。普段、町で見かけるガードレールは、歩道に車が飛び込まない様にと、人を守っているよね……」翔子が、しょうが無いわね、と言った雰囲気首を振り、説明するのを聞い

て、

「その為のガードレールだ……」と、龍之介はうんうんと頷いた。そして翔子は、大げさに振り上げた手を、ガードレールに向かって勢い良く振り出し、

「だけど、このガードレールは、車が海に落ちない様にと、車を守っているのよ!」と、堂々とした態度で、ガードレールさんのプロフィールを紹介した。

翔子の解説が、理解出来ない龍之介達は、

「……だから……何だ?」と、ガードレールさんを見詰めている。

龍之介と邦博は、翔子の言った事を出来るだけ理解しようがんばったが、それは到底自分達、凡人レベルのセンスでは無駄な努力である事に気付き、二人は顔を見合わせて、

「分かった……」と、承諾した……翔子の思考は、少し違った次元と繋がっている様だ。

龍之介は、やけくそ半分の気持と、結局自分ではモチーフを選べなかったので、少し助かった様な気はしたが、

「何が悲しくて、海迄来て、ガードレール描いてんだよ……」と、少し情けなくなってきた。

しかし龍之介は、翔子の言う事を素直に受け入れて、この何の変哲も無いガードレールが、車を守っているんだと感情移入しようと、五分間、必死に努力したが、

「……駄目だ!……まだ、修行が足りん……」と、龍之介はあっさり挫折した。

それでも悩みながらも、鉛筆を走らせている龍之介は、ふと、翔子の方を見た。

翔子の描いている絵は、龍之介のとは明らかに次元が違う。

広角レンズで撮影した様な構図で、ガードレールが堂々と自己主張している絵を見て、

「やっぱり凄いなあ……」と、龍之介は素直に感動した。

その時、翔子の方を見ていた龍之介の視界に美貴の姿が横切った。

龍之介は、美貴が既に私服に着替えているのを見て、今日、宅急便で荷物が届くと言っていた美貴の話を思い出していた。

美貴は、どう言う訳か全力疾走で、龍之介達に気付かず駆け抜けて行った。

気になった龍之介は、昨日の事も聞きたかった為、美貴の後を追う事に決めた。

「邦博、ちょっと行って来る」

「えっ？あ、鬼追？了解」

龍之介は邦博に声をかけ、荷物を置いて立ち上がり、美貴が走って行った方へ駆け出した。

龍之介が走って行ったのを見て翔子は、

「……本田君、ちょっと……」と、邦博のすぐ後ろから声をかけた。「え？……」翔子の声から、殺気にも似た恐怖を感じた邦博は、恐る恐る振り返った。

そこには、般若が居た。

「ちよつと、話があるんだけど……」と言いつつ、翔子はぞつとする様な冷酷な目付きで邦博に近付いて行った……2Hの鉛筆を握り締めて。

○予兆○

龍之介は、美貴を呼び止めようと後を追っているが、走り出した時の美貴との距離はおよそ五十メートル、そして五秒後、龍之介はある事に気が付いた。

ダッシュから全速力で走っているのに美貴に追いつけない。

百m、十一秒前半の龍之介が、画材を入れた鞆を持って走っている美貴に、追いつけないどころか、むしろ離されている。

龍之介は、五百m程走った辺りから持久力の限界が近付き、スピードが極端に落ちて来た。

しかし、美貴は全然平気なのか、スピードが落ちずに龍之介との差は百m以上に広がって行った。

そして集落が切れた緩いカーブの所で、龍之介は美貴を見失い、一km近く走った辺りで、とうとう疲れて立ち止まってしまった。

龍之介は、かがみ込み両手を膝に付いて上半身を支え、肩で大きく息をしながら息を整えていると、大粒の汗が額から滴り落ちて、アスファルトに染みを付けた。

「なんなんだよ……いったい……」息を整えながら、龍之介は不思議で仕方なかった。

「陸上部だったのか? ……なんて話は、聞いてないけど……」一年生の女子に、しかもあんな小柄な美貴に、なんで追い付かなかったのか。

そう考えていると、ふと、山の方へと昇る狭い地道が目につき、何気なく見ていると、

「もしかして……」明らかに新しい足跡が、くつきりと残っているのに気が付いた。

七月末の十一時前、龍之介は汗だくになりながら、木々に挟まれた狭い坂道を、ゆっくり息を整えながら五十m程登って行くと、緩やかな斜面に囲まれた、木々の少ない開けた所が見えて来た。

其処は、小学校のプールぐらいの広さで、其の中程に美貴の後姿が見えた。

「何で、付いて来たんですか!」

「えっ?」龍之介は、後ろ向きのままで叫ぶ美貴に驚いた。

「すぐに、引き返してください!」

美貴との距離は十m以上離れていて、しかも今着いたばかりの龍之介を、後ろ向きのままで姿なんか見えるはずなのにと、龍之介は不思議に思っていた。

すると急に、今まで真夏の太陽が照らしていたその場所が、今にも夕立でも降りそうな薄暗さに包まれた。

「なんだ? ……」龍之介は空を見上げると、その現象が普通では無い事に直ぐに気が付いた。

周囲の薄暗さは雨雲のせいではなく、どす黒く紫がかった霧が空

だけでは無く、周囲を切り離す様に壁と成り包み込んでいる。

「主、^{あるじ}もう遅い……結界を張られた」

急に美貴ではない誰かの声がして、空を見ていた龍之介は、驚き慌てて辺りを見回した。

その声の主は美貴の直ぐ後ろに居た。しかし、それが人なのかは龍之介には分らなかった。

青白く光る霧の様な塊で、確かに人の形はしているが、人ではない……幽霊かとも思ったが龍之介の幽霊に対するイメージとも違う……何故なら、一見、子供に見える白い影の頭には、尖った耳が生えていて、お尻からは太く長い尻尾が生えていた。

「狐?……」龍之介には、そんな印象だった。

「白ちゃん憑いて!」周囲を警戒しながら身構える美貴が叫ぶと、「承知」人間ならば十二・三歳位に見える白装束の狐少女が答え、揺らめく姿が人魂の様な青白い炎へと変わった。

「えっ! えええええ!」龍之介は、自分が今まで生きて来た十七年間で身に付けた、常識と言う範囲での知識では、到底理解出来ない目の前の現象に、目が飛び出すぐらいに驚いた。

そして、その青白い炎が、美貴の背中に吸い込まれる様に消えると同時に、美貴の背中から青白い炎が上がった。

龍之介の脳味噌は、既に思考する事を拒否していた。早い話、茫然^{うぜんじしつ}自失^ぼってやつね。

「先輩! こっちに来てください!」

美貴の叫び声で、やっと我に帰り、美貴が炎を上げているという現在進行形の箇所から龍之介の思考は始まった。

「おっ……おいっ! お前! おいっ! 背中! おいっ! 燃えてる! おいっ!」龍之介の思考は始まったものの、混乱して単語でしか表現出来ない。

美貴は、背中から青白い炎を1mほど上げながら、ゆっくりと振り向き、

「……見えるんですか?」と、背中越しに睨む様に龍之介を見た。

龍之介は、美貴へ恐る々ゆつくりと近付いて行き、

「みっ、見えるも何も……熱くないのか？……えっ？お前どうしたんだよ！その目！」

美貴の瞳を見て驚く龍之介に、美貴は慌てて顔を背けた。

背中から炎を上げる美貴の瞳は、炎の色と同じに青白かった。

「おい、どうしたんだよ、おまえ……それに、さっきの声……さっき居たの誰だ？」と、龍之介が、おどおどと怯えながら声をかけると美貴は、

「後で、説明します……私から離れないで下さい……」と、伏目がちに、少し悲しそうな表情を浮かべ小さな声で答えた。

「何の事だよ！昨日から……早く説明しろよ！分かんねえよ！」

完全に自分の思考レベルを超え、パニックに陥った龍之介は、不安から来る恐怖に自制心を喪い、美貴を怒鳴り付けてしまった。

怒鳴り付けた後に、物悲しい困惑した表情を浮かべる美貴を見て、やっと今の自分の無様な姿に気付き、氣まずい気分です。龍之介は、

「何やってんだ俺は……」と、後輩の女子を感情任せに怒鳴りつけてしまった事を後悔した。

龍之介は、氣を取り直し冷静になろうと周囲を見渡す。

周囲は、真夏の昼前としては暗すぎるという事意外に変わった様子は無かった……様に思えたが、その不気味な現象に気付く龍之介はぞっとした。

木々の枝に止まる無数のカラスが、龍之介達を取り囲み、狙う様に見下ろしている。

「何だよ……これ……」龍之介の背筋に冷たい物が走った。

せっかく、冷静を保とうとしている龍之介に、新たなパニックの材料が降りかかり、この四面楚歌の状況をどうして良いのか分からず、きよろきよろと辺りを見回していた時、美貴が鞆の中から鉛筆を一握り取り出し、鞆を捨てた。

「主、数が多すぎます」

「分ってる……」

次の瞬間、空気を叩き付ける音が響き、カラス達が一斉に、龍之介達に向かって来た。

襲って来るカラスに対して龍之介は、慌てて一步下がりは構えた……その時、龍之介の横を、三本の短い緑色の光が矢の様に通り過ぎ、向かって来るカラスを五・六羽貫いた。

龍之介が驚き、光の矢が飛んで来た方へと振り向くと、美貴が迫るカラス達へと次々に緑に光る鉛筆を投げつけている。

美貴は、残り一本となった鉛筆を握り締め大きく振り上げると、鉛筆から緑の光が五十cmぐらい伸び、青白い炎が美貴の手と鉛筆を包み込み、日本刀の様な形と成り炎を上げる。

炎を上げる鉛筆を振り回しカラス達と戦う美貴の姿を、

「熱くないのか?……」と、思いながら、ただ呆然と眺めている龍之介に、カラス達が特攻をかけて来た。

迫るカラスの口ばしに既^{すんで}の所で気付き、羽に叩かれながら、ぎりぎり身を躲した龍之介は、すぐ側の握りやすそうな木を握って引き寄せ、根元辺りに踵で蹴りを入れて折る。

そして、先の細い部分を足で踏み付けて折り、龍之介は、二mぐらいの生木で襲ってくるカラス達を払い除けた。

生木を振り回す龍之介に対して、カラス達は恐れもせず飛び掛ってくる。

嫌な手応えだった。

幾ら襲って来るからとは言え、生き物を殴る事は、龍之介にとって嫌なものであった。

剣道の心得は無かったが、柔道で鍛えた動体視力が、的確に襲って来るカラス達を捕らえて叩き落していたが、さっきの全力疾走が祟って、龍之介の体力は限界に近付いていた。

疲れた踏ん張りの利かない足で、必死でカラス達を払っていると、「先輩! 暫く頼みます!」と言って、美貴が後ろに飛び退き、クロッキー帳を拾い上げた。

何の事かと、カラス達から目を離さないように美貴の方を見ると、

美貴はクロッキー帳に何かを描いている。

「頼むって……こんな時に、何やっているんだよ！」と、龍之介は疑問に思ったが、

「守ってくれって事かよ！」と、理解し、龍之介は美貴の前に移動した。

「どおりやあああ！」龍之介は、息が上がり動きが鈍くなってきたが、

「女の子に頼むと言わちゃ、引く訳には行かねえな……くっそうおおお！」と、氣力を振り絞り気合を入れなおした。

美貴は考えながら、クロッキー帳に円や三角形の図形を組み合わせた、よくある魔方阵の様な絵を描いている。

そして、書き終わったクロッキー帖を地面に叩き付ける様に置くと、右足でクロッキー帖を踏み付け、目の前で人差し指と中指を揃えて立て、

「臨、兵、闘、者、皆、陣、列、在、前」と、目の前で刀印を切りながら、九字を唱え精神を集中させる。

龍之介は疲労で意識が朦朧としだし、既にカラスの動きを見切る事が出来ずに、カラス達の体当たりを受けながら、闇雲に木を振り回し、何でも良いから早くしてくれと思った時、足を滑らせて横倒しに倒れた。

「まずい！」龍之介を通り過ぎたカラス達が、美貴に迫って行った時、

「そこか！」と、美貴は叫ぶと同時に、横に飛び退き、カラス達を交わし、鞆からまた鉛筆を一握り取り出すと、カラスとは違う方向に放った。

鉛筆は緑色の光を放ちながら飛んで行き、急に空中で止まって浮いている。

そして鉛筆の光が消えた時、鉛筆が浮かんでいる空間に、人の形が黒く表れたかと思うと、直ぐにどす黒い紫の煙を上げながら、黒い人形は塵が崩れる様に消え、そして、鉛筆が地面に落ちる。

それをただ呆然と見ていた龍之介は、黒い影が消える瞬間、にやりと笑った様に見えた。

直後、薄暗かった空間は夏の明るさを取り戻し、飛べるカラス達は何処かに飛んで行った。

龍之介にとって、まるで夢の様な非現実的な出来事だったが、地面に転がる二十羽ぐらいのカラス達が、のたうち羽をバタつかせているのを見て現実である事を実感した。

龍之介は改めて、のたうち廻るカラス達の姿を見て、罪の意識に心が締め付けられた。

美貴の背中の炎は消え、狐少女が美貴の後ろで浮かんでいる。

「大丈夫ですか、先輩」美貴は、倒れている龍之介の脇にしゃがみ、心配そうに声をかけた。

ついさっきまで、訳の分からない出来事に、怒りさえ覚えた龍之介だったが、

「別に、怪我はしてないけど……それより……」目の前に、自分のせいで死に掛けている生き物がある事の方が気になった。

「ごめんね……貴方達は何も悪くないのに……」美貴は力無く、傷付いたカラス達を、悲しい目で見て、振り向き、

「白ちゃん！」と、後ろの狐少女に声をかけた。

「承知……」狐少女が静かに返事をして、カラス達の方へ、ふわりと飛んで近付き手を翳す。

すると、狐少女の体が青白く灰かに光り、カラス達は次々と青白い光に包まれて行く。

「なんだよ……これ……」龍之介は、その非常識な光景に驚いたが、不思議と恐怖は湧いて来なかった。

眩しく輝く光が収まる頃、地面で苦しみがいていた十羽ぐらいのカラス達が、何事も無かった様に元気に飛んで行った。

「……治ったのか？」龍之介は、呆然と飛んで行くカラスの後ろ姿を見ていた。

地面には、まだ、十羽ぐらいのカラスが動かずに残っている。

「ごめんね……白ちゃん、お願い……」涙を浮かべ、動かないカラス達を見詰ながら、美貴が狐少女に言うと、狐少女は手に人魂の様な青白い炎を溜め、

「成仏せいよ……」と、弔いの言葉を掛けながら、一羽ずつ、動かないカラスへと、炎の玉を落として行く。

すると、カラス達は青白い炎に包まれ、蒸発する様に消えて行った。

龍之介は、その様子を黙って見ていた。

全てのカラス達を、茶毘に付したのを見て、美貴が龍之介に振り向き、

「すみません、巻き込んでしまって、あの、私……」と、悲しそうな顔で話しかけると、

「いいよ……今は聴きたくない」と、龍之介は、美貴の言葉を遮り素っ気無く答えた。

「でも……」

「だったら……気を付けて喋れよ。今の俺は気が立ってるんだ……」
「……ごめんなさい」

美貴は、明らかに不機嫌な龍之介の顔を見て、涙が滲んで来た。

龍之介自信、全力疾走で体力を消耗した挙句、脳味噌が付いていけない出来事の中、無益な殺生をした事に無性に腹が立っていた。だから今、美貴に説明を聞いたとしても、とても理解出来るとは思えない、いや、聞く気分ですらなかった。

龍之介が気付くと、何時の間にか狐少女の姿は無かった。

龍之介は無言で立ち上がりながら、

『なっ、なんで、あんな言い方したんだよ……』と、思いっきり後悔していた。

幾ら腹が立っていたとは言え、女の子に対して言う言葉では無い事に、

『謝らなくっちゃ……』と、思ったが、上手く話すタイミングが掴めず、かえって苛立ち、

「行くぞ……」と、不機嫌そうに素っ気無く言ってしまった。

「……はい」そんな龍之介の、角のある言い方に美貴は、目から涙が零れた。

龍之介と美貴は、無言のまま旅館の方へと向かい、邦博達と別れた場所まで帰って来た。

其処で、更に理解出来ない光景を龍之介は目撃した。

「まさか……」と思い、見直す龍之介が見たものは、翔子が邦博の首に手を回し、まるで恋人同士が抱き合う様に立っている姿だった。「うっ……邦博……お前……」動揺を隠せない龍之介が、震える声で邦博に声をかけると、邦博が龍之介に気付き二人の目が合った。

龍之介はその状況を、咄嗟に判断し、

「あっ！すまん！邪魔した！」と言って、慌てて龍之介と美貴は、顔を少し赤くしながら、見てはいけないと気を利かせ後ろを向いた。しかし、事情は少し違っていたようで、邦博は龍之介の姿を見るなり、翔子の手を振り払い、龍之介の方へと駆け出した。

「龍之介ええええ！」泣き声で叫びながら邦博が走って来る。

「えっ？」想像とは違う邦博の声に、龍之介は思わず振り向くと、邦博が目には涙を溜めながら、力強く抱きついて来た。

「おい！……ちょっと……どうしたんだよ」幾ら親友でも、訳も分らないまま男に抱きつかれるのは、龍之介にとって気分の良いものではなく、龍之介は邦博からすり抜けようと体を振らせもがいた……突然のBLに、美貴は頬を赤く染めて、二人を興味津々の目で見ている。

邦博は龍之介の抵抗で、はっと、我に帰り慌てて龍之介から離れて、

「ごっ、ごめん……なんでも無いよ……」と、気不味そうに答えた。俯き加減で申し訳無さそうにする邦博の目に、涙が浮かんでいるのを龍之介は見つけ、

「おい、本当にどうしたんだよ？」と、邦博の肩を掴んで問いただした。

黙っている邦博の後ろを、全く関係の無い第三者の様に、翔子が通り過ぎ様とした時、

「篠崎……何かあったのか？」と、男女の仲の事なら聞くのも悪いかと、少し遠慮気味に龍之介が声をかけると、

「何でも無いわ……」と、邦博の後ろで翔子が長い髪の毛をたくし上げると、邦博は翔子の声に、びくっと体を震わせ、翔子から隠れる様に龍之介の後ろに回った。

龍之介は、なんだ？おかしな奴だなと、邦博の態度に疑問を持たが、男女の仲の事なら、これ以上聞くのも悪いかと思い、話題を変えて、

「昼飯に帰ろうよ」と、邦博に振り向き言うのと、

「早く行こう！」と、邦博が再び龍之介に抱きつこうとするのを、

「やめんか……おのれは……」俺に其の趣味は無いと、言いたげに龍之介は、邦博の顔を手で押しのけ離れた。

翔子は龍之介を……いや、龍之介と美貴を睨んでいる。

翔子の目線が気になったが、何にしても今日は疲れたと、投げやりな気分で龍之介は気にするのをやめた。

その式（前書き）

8月1日修正

その式

○疑惑○

昼食も済んで、美術部のメンバーは、まだ二日酔いで寝ている葛西先生を無視して陶芸教室へとやって来た。

皆は、教材のセットを受け取り、手回しの轆轤ろくろの前に並んで座り、銘々に茶碗や湯飲みを作っている。

「どうしたんですか？先輩……元氣無いですね……」司が、隣に座る龍之介に声を掛ける。

「あっ……うん……」龍之介は、心配そうに覗き込む司に、無氣力に返事をした。

「先輩、楽しみにしてたんじゃ、なかったんですか？」司が、小首を傾かしげる可愛らしい仕草で、龍之介に尋ねると、

「あ、うん……ちょっとな……」と、龍之介は、司の方を見ようとせず、無表情のまま、氣の無い返事をした。

司は、そんな龍之介を訝しげに見ていると、その隣に座る邦博も元氣が無い事に気付いた。

司は二人を見ながら、少し不満げに、可愛らしく唇を尖らせ、自分の作品に取り掛かった。

取り合えず、すし屋の湯呑みの様な豪快なコーヒークップ（ジョッキとも言う）を作った龍之介は、皆と一緒に、焼き上がった後の発送手続きを済ませて、一人、教室の外へと出た。

皆は、陶芸教室に隣接している土産屋で、バスが来るまでの時間を潰している。

龍之介は、真っ青に抜ける青空に、遠くの山から湧き出す様に立ち昇っている入道雲を、自動販売機の前のベンチに座り、ぼーと見ながら昨日からの事を考えていた。

「なんだったんだよ……あれは……」考えれば考える程、もやもや

した疑問が龍之介の心に降り積もって行き、更に、美貴に対して、「ちゃんと謝らなきゃ……」と思うが、何と言えば良いのか分らない。

その、積もり積もった苛々に、我慢出来ずに、

「ああああああ！」と、叫び、頭を掻き毟った時、

「あっ……」少し驚いた表情の美貴が、建物の中から出て来た。

「あっ……」龍之介も美貴に気付く。

二人は、気不味い沈黙が続く中、じっと見詰め合って居る。

暫くして、突然美貴は振向いて、建物の角を裏の方へと駆け出した。

「あっ、ちょっと……」

美貴の走り去る姿を見て龍之介は、咄嗟的に美貴の後を追った。

龍之介が追い掛けて建物の裏に回ると、フェンスで行き止まりに成った所に、美貴はじつと俯いて立っていた。

「……なんで、逃げるんだよ……」龍之介が後姿の美貴に、気不味い思いで尋ねると、

「……」美貴は、只、黙って俯いているだけだった。

尋ねてから龍之介は、昨日から起きている事を、聞いても話し辛そうにしていた美貴が逃げるもの当然かと、我ながら間の抜けた質問をしたもんだと悔やんだ。

ただ龍之介は、自分を見て怯える様に逃げる美貴に、無理やり問い質す様な事はしないと伝えたかった……そして、嫌な言い方をした事を謝りたかった。が、女の子の嫌がる様な事は、絶対にしたくないと思う優しい龍之介だが、女性経験皆無と言っても過言では無い彼は、怯える美貴に、どの様に話せば良いのか分からずに戸惑っていた。

「……あのさ、別に……」

龍之介が、遠慮気味に声を掛けながら美貴に近付くと、美貴は急に振向き、龍之介の横を逃げる様に駆け抜けた。

「おいっ！待てっ！」

龍之介は反射的に振向き、美貴を止め様と咄嗟に美貴の腕を掴んだ……が、その瞬間、身長百七十五cmの龍之介が、信じられない事に、身長百四十三cmと小柄な美貴の勢いに引っ張られてバランスを崩した。

「えっ？」予期せぬ事に驚きながら、龍之介は手を掴んだまま、美貴へと倒れ込む。

「きゃっ！」美貴は、左手を掴まれたまま体を押され、尻餅を付いて倒れた所に、

「あっ……」と、龍之介が美貴を押し倒し覆い被さって来た。

そして美貴の、凹凸も弾力も、なあああ……っんにも無い胸に、顔を押し当てている事に気付いた龍之介は、

「す、すまん……」と、気不味い雰囲気の中、慌てて体を起こし美貴の顔を見ると、

「……お前……」顔を赤く染め、目に涙を溜めている美貴に気付き驚いた。

龍之介は美貴の涙に戸惑い、掴んでいた手を放した時、

「せつ、先輩……」二人の前に、驚いた様に両手で口を覆って、司が立っていた。龍之介が司の方を向いた瞬間、地面に寝そべる様に倒れていた美貴が、勢い良く立ち上がり司の横を駆け抜けて、その場を逃げ出した。

「あっ、美貴ちゃん……えっ、涙？」司は、自分の横を駆け抜けて行く美貴の涙を、振向き様にしっかりと確認した。司は龍之介に振向くと、無言で軽蔑の眼差しを送っている……確実に誤解しているな。

「先輩……何やってたんですか？」司が横目で睨みながら龍之介に聞くと、

「……別に……」と、司の疑惑を知らずに龍之介は、美貴が泣いていたのは自分のせいなのかと、困惑して司から顔を逸らした。そんな龍之介の様子を見て、司の疑惑は確信となった。

「美貴ちゃん、泣いてましたよ……ひどい！」と、司が睨みながら、

龍之介に詰め寄ると、

「……」女の子を泣かせてしまった事に、龍之介は自己嫌悪に陥り、黙って俯いた。

「こんな所で、美貴ちゃん押し倒して……」司が、汚い物を見るかのような目で睨むと、

「えっ？」と、龍之介は、やっと司の軽蔑しきった目の意味に感づいた。

「美貴ちゃんに、何したんですか！」司は、更に龍之介に詰め寄り叫ぶと、

「ちよっ、ちよっと待て！お前、なんか勘違いして無いか！」龍之介は慌てて問い質した。

司は、膝を付いている龍之介を軽蔑の眼差しで見下ろしながら、
「……言い訳……ですか……」と、冷たく言い放った。

「だから！違うって！お前、誤解してるって！」更に必死に訴える龍之介に、

「……けだもの……」と、再び司は冷たく言い捨てて、ぷいっと横を向いた。

そんな司を見て龍之介は、膝を付いたまま、

「だああああ！違う！違う！違う！」と、両手で頭を抱え、絶望の叫びを上げ否定した。

叫ぶ龍之介を無視して、

「とにかく、警察へ……」と、振向き、その場を去ろうとする司を、
「まっ、待てっ！」と、止め様と手を伸ばした時、龍之介の脳裏に
『高校二年生の男子、合宿で後輩の女子を襲う！』と言う、新聞の見出しが過ぎった。

「あ、あのう……何、騒いでいるんですか」と、錯乱する龍之介の前に、美貴が再び現れた。

「鬼追！」美貴の姿を見るなり、龍之介は涙を流しながら、美貴へと這い寄った。

「鬼追！司に説明してくれ！何も無かったよな！俺、何もして無い

よな！」と、龍之介は必死で美貴の腕に縋り訴えた。

「えっ？」美貴は、何の事か分からずに、叫ぶ龍之介を、きょとんとした目で見ている。

「美貴ちゃん、離れて……」司が美貴の腕を引っ張って、龍之介から引き離す。

「大丈夫？怪我は無い？」と、司が心配そうに美貴に尋ねると、
「へっ？」と、何の事か分からない美貴は、目を丸くしている。

「この獣けだものに、酷ひどい事されて……」司は、再び龍之介を蔑んだ目で睨にらんだ。

「えっ？先輩が？何の事？」美貴の頭の上に？マークが飛び交っている。

「さっき、美貴ちゃん……この獣に押し倒されて、泣いてたじゃない……」と、司が美貴を哀れむ様な目で見詰めながら尋ねた。

龍之介は、目に涙を溜めながら、縋る様に美貴を見詰め、首を激しく左右に振っている。

「あっ！」そんな龍之介の哀れな姿を見て美貴は、司が誤解している事にやっと気付いた。

「なんでもないよ、司ちゃん。誤解だよ。先輩、何もして無いよ」と、自分が居ない間に、変な事になっていた事に、美貴は少し焦りながら、司の疑惑を否定した。

「本当に……」司はまだ疑っている。

「うん、本当だよ。ごめんね、司ちゃん。心配掛けて」と、美貴がにこやかに言うのと、

「……そう、良かった」と、司は安心したのか、笑顔で答えた。

「あっ、そうだ！さっきね可愛いお皿があったの。美貴ちゃん一緒に行こ」

司が、にこやかに美貴の手を引っ張って、土産屋へと誘うと、
「えっ」と、美貴は、龍之介を見て少し躊躇ったが、司に引っ張られるままに、土産屋の方へと付いて行った。

静まり返った場所に、龍之介は只一人、立ち竦んでいた。

「なっ……」今のは何だったんだよと、思い起こす龍之介は、
「ばかやろうううう！」と、入道雲に向って、やり場の無い怒りを
ぶつけた……雲も迷惑。

○現実逃避○

「いい……湯だなあ……」ふうう……

「景色も良いし……」うんうん……

「極楽ですねえ……」だよなあ……

龍之介達、美術部男子三人は、越前海岸を一望出来る露天風呂から、合宿二日目の夕日を眺めながら幸福感に浸っていた。

そうだ、平和が一番だ。此処には、理解不能な現象は無いし、誤解も無い……ああ、心が安らぐよ……と、後少しで海に消えそうな夕日を見て龍之介は思っていた。

「そう言えば、どうしたんです？先輩達。何か、お昼から元気なくて……」と、司が二人に向いて尋ねると、

「……そりゃな……あんな誤解されて、何度も獣呼ばわりされて……」と、龍之介が不機嫌そうに司から顔を背けて呟いた。

「もう……謝ったじゃないですか……」と、司が申し訳無さそうに苦笑いをしている。

「それより、邦博、お前どうしたんだよ……午前中、篠崎と絵を描いてから変だぞ……」

龍之介は其処まで言うのと、やはり男女の間の事だと邦博も言い憎いのではない、

「あっ、いや、何も……無理に聞く気は無いんだけど……」と、言葉窄みになった。

ただ、邦博が何時から翔子と、そう言う関係だったのかと、龍之介には疑問が残った。

邦博は、暫く考え込むように目を瞑って俯いていたが、ゆっくりと龍之介の方を向いた。

邦博は深刻な表情で、

「いや……言って良いのか、どうか……」と、言って龍之介から視線をそらした。

「何なんだよ、それ……おい、何があったんだよ」龍之介は、そんな邦博が心配になり近付いて、肩を掴んで問いかけると、邦博は何かに怯える様に強く目を閉じている。

それを見て龍之介の脳裏に、高校生として有っては成らない男女の過ちが浮かんだ。

「おい！……まさか……はつきりしろよ！」邦博を見て龍之介は心配になり、強く肩を揺すると、邦博は意を決した様に龍之介に向かって、

「篠崎の事なんだが……」と、再び深刻な顔で、龍之介を見て言った。

「うん……」やっぱり出来ちゃったのかと、邦博の表情に身構え、龍之介が頷くと、

「……」邦博は再び黙って俯いてしまった。

「早く言えよ！」龍之介が再び邦博の肩を揺すって催促すると、

「誰にも、言うなよ……特に篠崎には“絶対”に、僕が喋ったなんて言うなよ……」と、邦博は龍之介の目を見ながら、小声で怯える様に呟いた。

「分った。絶対に言わないよ」との龍之介の言葉に、司も頷いているのを見て、

「今日、午前中に篠崎と三人で絵を描いてて……」邦博は、やっと重い口を開いた。

「あの時、お前が鬼追を追いかけて行っただろ……」

「うん……」

「その後、篠崎が僕に近付いて来て言っただ……」

「うん」深刻そうに話す邦博の言葉に、二人は緊張して聞いている……気分は既に怪談気分。

「何で、鬼追を追いかけてったのかって……」

「鬼追を？」龍之介は話の内容から、想像していた事では無いと気

付きほつとた。

「あっ、昨日の事、喋ったのか？」

「喋ってないよ……」

「そうか……」

「それから篠崎が、色々と龍之介の事を聞いて来たんだよ……」

「なんだよ……それ……」

「よく分らないけど、何で鬼追を追いかけて行ったのか、とか、鬼追とはどう言う関係なんだって……」

「どう言う意味だ？……」

「うん、その時は僕も訳が分らずに、知らないって言ってた……そうしたら、篠崎が……」

「篠崎がどうした？」と、龍之介が邦博に詰め寄ると、司も一緒に寄って来た。

「鬼追の事、愛してるって……それで、『海神君が、私の大切な美貴ちゃんに何かしたら、覚悟しなさい』って……龍之介をただじゃ置かないって……」

「……………」

どれぐらいの沈黙が続いたろうか……水平線に沈んだ夕日は空を赤く染め、涼しい潮風が磯の香りを運んで来る。

「いい景色だなあ……」赤く染まる水平線を眺めながら龍之介が呟くと、

「何、現実逃避してんだよ！」と、龍之介の前に立ち邦博は叫んだ。すると、見たくはない、邦博の物が目の前に迫り、龍之介は慌てて立ち上がると、

「現実から逃げ出したくなるだろうが！」と、叫んだ。

嫌な物を見た、いや、そうではなく、これ以上ややこしい事は勘弁してくれと、龍之介は聞かなかった事にしたかった。

「何だよそれ！篠崎がレズって事かよ！」

「知らないよ！本人はそう言ったんだよ！」

「第一、それで何で俺が篠崎に狙われるんだよ！」

「知らないよ！自分で聞けよ！」何やら、やけくそ気味に勢い付いて怒鳴りあう二人に、

「ちょっと男子！何、騒いでるの！」と、女湯から部長の怒鳴り声が聞こえ、慌てて二人は、

「何でもありませえん……」と、声を揃えて答え、すぐごと湯船に座った。

「そう……静かにしなさいよ！」

「はああい……」と、二人は素直に返事をした。

そして二人は、女湯の方を気にしながら近付き向かい合う。

「おい……それってまじか？」

「うん……それで龍之介が鬼追の事をどう思っているのかとか、色々聞かれて……」

「何か言ったのか？」邦博に詰め寄り問い質す龍之介に、

「何も言って無いよ。僕だって知らないし」邦博は不機嫌そうに答えた。

「だよな……でも何でそんな事で、怯えるみたいにしてんだ？」

不思議そうに邦博の顔を覗き込む龍之介に対して、邦博は少し間を置いて、

「……本当に何も知らないって言ったら篠崎が『嘘だったら分っているわね』って鉛筆を突きつけて来て……」と、怯える声で邦博は答えた。

「そんな……」一瞬、まさかと思ったが、翔子なら有り得ると、割と素直に龍之介は理解出来、自分も対象になっている事に恐怖し、美術部から犯罪者は出て欲しくないと思った。

「それでも、僕は本当に何も知らないって言い張ってたなら、篠崎が……僕の首に手を回して……首に鉛筆を突き付けて……『強制的に喋らせる方法も有るのよ』って……」と、話す邦博の首筋には、以前は無かったはずの、ほくろの様な黒い丸がぽつちりと付いていた。それを見て龍之介の背筋に何やら冷たい物が走り、

「本当に、犯罪だけは止めてくれよ……篠崎……」と願いながら、

あの場所に帰って来た時は、そういう状態だったのかと理解した。

「嫌……そんなの、嫌……」

「えっ？」

今までの龍之介と邦博の会話に加らず、静かにしていた司が、話し込む二人の横で、肩を小刻みに震わせながら俯いて、何か呟いたかと思うと急に、

「いやあああ！そんなの、いやああ！」と、拳を胸の前で握り締め、立ち上がり泣き叫んだ。

「なにっ?!」

「えっ?!」

一瞬、何かと戸惑う二人だったが、この状態が非常に不味い事だと直ぐに気付き、

「いやああようおお！そんなつぶつ、ごぼつ、がぼつ……」

司を黙らせるために、二人は同時に飛び掛り、湯船の中に押さえ込んだ。

「ちよつと！男子！何よ！今の悲鳴！司ちゃんなの！」

二人の懸念の通り、すぐさま女湯から部長の怒鳴り声がし、

「なっ、何でもありません！」と、力いっぱい邦博が叫び返事した。

「がぼつ……ぶぼつ……」お湯の中から、声にならない泡が浮かんで弾ける。

「何でも無いって、今の悲鳴！司ちゃんでしょ！」

「ぶっ、ぶつぶつぶぶ……」大きく弾けていた泡が次第に小さくなり消えて行く……

「何やってるの！司ちゃん、大丈夫なの！」

動かなくなった司に気付かず、押さええている手を緩める事無く邦博は、

「大丈夫です！転んだだけでえす！大丈夫です！」と、何と返事したら良いのか分らず咄嗟に答えたが、

「なによ！それっ！」その説明は、まったく部長を説得出来ていな

い。

「おい！邦博！」龍之介が動かなくなった司にやっと気付き、

「やば！」邦博と共に、気絶した司を慌てて引き上げる。

「司ちゃん！司ちゃん！」部長の絶叫が露天風呂に響いている。

「おい！司！しっかりしろ！」邦博が、司の後ろから肩を揺すり、

「つかさぁ！おきろお！」と、叫びながら龍之介が、司の頬に往復ビンタを食らわす。

「司ちゃん！司ちゃん！」部長の叫びが聞こえる中、

「あう……あつ」気絶していた司が気付き、

「いややぁぁぁ！」と、再び血の吐く様な叫びを上げる。

その瞬間、慌てて邦博が後ろから司を羽交い絞めにして、

「おいっ！黙れ！司！静かにしろ！」と、龍之介が前から、もがく司の口を必死に押さえ込んだ。しかし、この状況は第三者から見ると、明らかに襲っているとしか見えませんが……

「司ちゃん！司ちゃん！どうしたの！何があったの！」

「げっ！」他の女子達も騒ぎ出し、その状況に危機感を覚えた龍之介が、

「と、とにかく落ち着け！」焦りながら司を怒鳴り付けると、司はやっと我に帰り、

「落ち着いたか？落ち着いたか？」と、尋ねる龍之介を涙目で見ながら、こくこくと頷いた。

「落ち着いたな、落ち着いたな……」龍之介は確認しながら、慎重に司の口から手を離すと、

「部長に説明しろ！早く！」と、女湯を指差し、司に命令した。

「大丈夫です、部長。何でもありません」女湯に向って悲しそうな口調で司が答えると、

「司ちゃん、本当に大丈夫なのお？……警察呼ぶ？」まだ疑っている部長の最後通牒に、

「なんでやねん！」と、龍之介は強く抗議しながら『男子高校生二名、後輩の男子高校生を襲う！』と、言った新聞の見出しが目には浮

かんだ。

「すみません、本当に大丈夫です。ご心配かけましたあ」

「本当に大丈夫？ 犯されて無い？ お尻大丈夫？」

「するかあ！」部長の一方的な偏見による疑惑に、二人は再び拳を振り上げ力強く否定した。

部長のディープな質問に、司は顔を赤くしながら、

「大丈夫です」と、部長を安心させるためか、今度は少し明るく答えると、

「……そう？……静かにしなさいよ……」部長の少し残念そうな声が返って来た。

司の軽率な行動で、危うく自分達が社会から抹殺されそうになった事で、二人は司と向かい合い、睨み付けて殺気を放っている。

「まったく……どうしたんだよ……」

「説明しろよ」と、二人が司を睨みながら、にじり寄る。

迫る二人に司は、涙目のまま、何故か顔を赤らめ恥ずかしそうに俯いている。

その様子を見て、龍之介達は訳が分らず顔を見合わせていると、

「私、翔子お姉様の事……愛しているんです……」と、司が、はにかみながら答えた。

その言葉に二人は暫くは“空耳か”と、聞こえた事を繰り返し頭の中で確認していたが、やがて徐におもむろ振り返り、二人並んで海の方を向いて座った。

どれぐらいの沈黙が続いたろうか……暗くなり始めた空は、茜色から紺色へと美しいグラデーションに染まり、涼しい潮風が磯の香りを運んで来る。

「いい景色だなあ……」

「明日も晴れるね」と、二人が幸福感に包まれていると、

「何、現実逃避してるんですか！」と、司が立ち上がり二人に叫んだ。

「あのな……」司に振り向いた龍之介が、

「！　まあ、座れ……」ある物に気付き、目線を反らして言う、司は直ぐに理解して、「きゃっ！」と、短い悲鳴と共に“前”を両手で押さえながら慌てて湯船に座った。

「……あのな、お前、本気か？」龍之介が確かめる様に司に聞くと、「ええ……」司は、はにかみながら、こくりと頷いた。

「正気か、お前。あの、篠崎だぞ。分っているのか？」問い詰める龍之介に、

「何を言ってるんですか！翔子お姉様、素敵じゃ無いですか！」と、司は、むっとした表情で力強く反論した。

「素敵って……お前……」邦博が呆れたように聞くと、

「そうじゃないですか！綺麗で優しくて……理想の女性じゃないですか！」と、断言した。

龍之介と邦博は困惑を隠せない顔を見合わせると、再び司に向き直り、

「あのな、確かに綺麗なのは認める。異論は無い。だけど篠崎がリストカッターで、メンヘラ、電波なのは知っているな？」と、龍之介が心配そうに司に尋ねると、

「そんなの、個性じゃないですか！」と、司はきっぱりと答えた。

その、司の堂々とした態度に龍之介は戸惑いながら、

「はああ？個性で済ませるのかあ？」と、肩を落とし呆れた。

「さっきの僕の話、聞いていただろ……」邦博が首筋を司に見せながら言う、

「そんな事……例え傷付けられようと、陵辱されようと、恥辱の限りを受けようと……」

陶醉した様に目をきらきらと輝かせながら、遠くを見詰めて語る司を見て、

「うっ！」二人は危険な物を感じ、身構える。

「罵られ、鞭打たれても……あんな事やこんな事……ふふふ、翔子お姉様になら、何をされても……うふっ、嬉しい……」司は両方の

頬に手をあて、恥ずかしそうに身を振よじっている。

倒錯の世界に、どっぷりと浸かっている司の姿を見て、

「こ、こいつはMか!」と、二人は嫌悪を露あらわに後ろへと身を引いた。

どん引きの空気が流れる中、気を取り直した龍之介は長湯に疲れたのか、露天風呂の淵に積んである石の上に腰を掛け、タオルを腰に架け前を隠して、

「そりゃあ、人、好き好き(すきずき)だろうけど……でも、お前、部長の事が好きだったんじゃないのか?」と、司に向かって聞いた……好き好きで済ますのも、どうかと思うが……

司も淵の岩に座りながら、

「部長は好きですよ。でも、部長は頼れるお姉様で、翔子お姉様への気持ちとは違います」と、タオルを胸から垂らし前を隠して答えた。

「でも、何で篠崎なんだ?」邦博も、龍之介の隣に腰をかけながら問い掛けると、

「先輩達は翔子お姉様を見て、何とも思わないのですか? あんな綺麗な人、滅多に居ませんよ。それに、私達一年生に優しくしてくださるし……素敵なお姉様じゃないですか」と、自信たっぷりに司が答えた。

司の言葉を聞いて、半ば呆れながら、

「でも、それだけじゃあ……」と、言いかけた龍之介に対して、

「先輩! 人を好きになるのに、何か理由が要るのですか!」と、司が立ち上がり力説する。

「いや、そう言う訳じゃないけど……」司の勢いに二人は驚いた。

日頃は、女の子にしか見えない容姿に、華奢きゃしゃで儂はかなげな雰囲気きの司が、龍之介達を迫力で押している。

「この気持ち……自分ではどうにも出来ない、熱く込み上げて来るこの気持ち……先輩達は人を好きになった事が無いんですか! この気持ち……分らないんですか!」

司は二人の前に歩みだし、悲しそうな顔で二人の顔を交互に見ながら問い掛けた。

「……………」司の真剣な目に、二人は言葉が無かった。

○鬼の血○

夕食の時、龍之介達の前に翔子が座っている。

司と美貴は一年生達で集まって食事していたが、二人には笑いが無かった。

龍之介は、話でしか聞いた事の無い同性愛者が、目の前に居る事に妙な好奇心が沸いて、ちらりちらりと翔子の顔を見ていた。

そして、夕食が終わって龍之介達は部屋に戻って行った。

途中、邦博がトイレに向かい、龍之介は一人部屋に帰り、布団の上へ大の字に寝転がると、司が言っていた“人を好きになった事が無いんですか？”と言う言葉を思い出していた。

絵なんてまったく興味の無い龍之介が美術部に入ったのは、可愛い部長に釣られたからだ。

「……俺、本当に部長の事、好きなのかな？……いや、あんな可愛い人、他には居ない！」

あばら 肋が浮き出る胸は別として、スタイルも良く成績優秀で美人。

その部長を恋人に出来れば、周りの彼女が居ない暦Ⅱ年齢の男共が羨ましがるのは目に見えている。

大学生の、二人の兄にも自慢出来る。

部長を連れて、町でデートしたら、きっと皆注目されるぞと、身勝手な自分に都合の良い妄想を広げていた龍之介だったが、

「……でも……」と、自分は司の様に、真剣に思っているのかと疑問に感じた。

「恋人欲しいよなあ」と、思っては居る物の、司みたいに真剣に成れない自分が居る。

「何で真剣になれないのだろ……」いや、真剣な筈なのに、

「振られたらなあ……」と、振られた時に格好悪い自分が居るから。それが怖いから。

龍之介は、そんな怯えきっている自分に愛想を尽かし、
「どうせ相手にされないだろうなあ……」と、冷めた気持ちに包まれた。

負のスパイラルに落ち込む龍之介は、更に、

「部長、誰か好きな人がいるんじゃない？」と、考える。それは自分では無い、他の誰か。

振られたら、それが誰かに知られたら格好悪い、恥かしいなんて、下らない体裁ばかり気にかかり、そして振られた後、部長に嫌われたら、部長の本心を知って自分が傷付いたらと、龍之介の心を恐怖が縛り付ける。

そして、嫌われたりするぐらいなら、嫌な思いをするぐらいなら、
「懂れているだけでも良いじゃね？……」と、投げ遣りな考えに逃げる自分に、

「本当に、それで良いのか？……それで満足なのか？……」と、問いかけると、

「くそっ……」見えない恐怖に、尻込みする自分が居る事に気付き情けなくなった。

『それが人を好きになるという事か？そんな体裁を気にする事なのか？臆病になることなのか？真剣に好きなら形振り構^{なりふ}ってる場合じゃないだろ。行動しなきゃだめだろ。そんな事じゃ何時までも恋人なんて出来ないぞ』と、自分に言い聞かせるが、それが自身への虚勢である事を知っている龍之介は、更に情け無い思いが込み上げて来た。

「……ばい……先輩！」

「あっ……なんだ司か……」食事から帰って来た司が、部屋の襖を半分開けて自分を呼んでいる事にやっと気付き、龍之介は寝返りを打つ様に司の方を向いた。

「あの、美貴ちゃんが、お話があるって……」まだ、露天風呂での

事から立ち直れない司が、暗い表情で龍之介に伝えた。

「鬼追が……分かった」龍之介は、ゆっくりと立ち上がり、部屋の出口へと向う。

「邦博、呼んで来るから、待っていてくれ」

「本田先輩なら、美貴ちゃんと一緒に、先に海岸で待ってます」

「そうか、分かった」龍之介は、司と一緒に部屋を出た。

龍之介は、司の案内で旅館を出て裏に回ると、海岸へ降りる階段があった。

其処には街頭が一つ点いていて、歩くには不自由しない明るさだった。

階段で海岸に下りると、幅が2mぐらいのコンクリートの道が堤防沿いに続いていて、其処に邦博と美貴がいた。

下に降りると少し暗くなったが、顔は確認出来るぐらいの明るさはあった。

美貴は、龍之介を見るとペコリと頭を下げた。

「どうした……やっと説明してくれるのか？」龍之介が近付きながら美貴に尋ねると、美貴は、こくりと頷いた。

「じゃ……お前が説明しやすいように進めてくれ」

「分かりました……じゃあ……まず驚かないで、下さいね……白ちやん……」美貴が躊躇いがちに、三人を見ながら言うと、美貴の後ろに青白い光がぼおと現れた。

邦博も司も驚いて声が出ない。

その青白い光は、徐々に人の形へと輪郭を現し、少女の姿へと形作って行った。

三人の前に現れた、膝丈の白装束に赤い帯を巻いた、人間ならば十二・三歳ぐらいに見える少女には、尖った大きな耳と太く長い尻尾があった。

「やっぱり狐か？」目を細め訝しげに龍之介が言うと、

「海神先輩、やっぱり見えるんですね……」龍之介の反応は美貴には分かっていた様だ。

「えっ？狐って何だよ……人魂じゃないのか？」

「えっ？」邦博の怯える言葉に龍之介は思わず邦博の方を見た。

司は、邦博にしがみ付いて震えている。

「今、白ちゃん……この子の名前なんです、白ちゃんには、霊体の姿を表してもらっています。でも、普通の人には狐火……と言うか、人魂にしか見えないんです」

「我は、伏見様の使いの眷族^{けんぞく}。八幡ノ白菊^{やわたのしらぎく}じゃ」見た目は十二・三歳位の女の子が、龍之介の背より少し高い所に浮いて、怖い目で睨んでいる。

「妖怪……」思わず龍之介が口走ると、

「無礼者！我を何と心得おるか！伏見様の使い、白狐^{びやっこ}の一族ぞ！下賤な妖狐^{ようこ}供と一緒にするな！」と、龍之介を怒鳴り付けながら全身から青白い炎を上げると、その炎の迫力に男子三人は慌てて身構え後ずさりした……龍之介以外の二人には、人魂が炎を上げた様に見えてます。

「こら！白ちゃん！皆を怖がらせたら駄目でしょ！」美貴が一括すると、

「だってええ……」白菊から迫力の炎が、すっと消え、甘える様に美貴に訴えて……可愛い。

「この子は、まだ百歳にもなっていない子狐なんです」美貴の言葉に、

「ひどおおい！主^{あるじ}！妾^{めかけ}はもう大人ですよ！」だだっ子みたいに抗議して……可愛い。

「何言っているの、大狐にも成れないくせに……」美貴は両手を腰にあて、白菊を睨みつけ冷たく言い放つと、

「……」白菊は美貴の冷たい言葉に、ふてくされた様にしゅんとして……可愛い。

最初とのギャップに呆気^{あつけ}に取られて見ていた龍之介は、まだ脳味噌の整理が付かず、

「で……こいつが、どうかしたのか？」と、やけくそ気味に美貴に

聞いた。

「白ちゃんは、私に取り憑いているんです……」

「取り憑くって……」あまり穏やかで無い事に、心配そうに龍之介が聞くと、

「あっ大丈夫です。取り憑くと言っても、パートナーみたいな物で、私が白ちゃんの力を借して貰っているんです」と、何でもないかの様に美貴が明るく答えた。

「それで、今日、鉛筆が燃えてたってか」龍之介は少しづつ、部分的に理解し始めた。

「そうです。あれは、白ちゃんの力を借りてたんです」

「言っときますけどね、我は神格化された白狐の一族なんですからねっ！まだ百にもなっていないからと言って、舐めてたら承知しないんだからあ！」威勢良く腕を振り上げ、龍之介達に息巻く白菊だが、龍之介には普通の女の子にしか見えなかった。

「ちょっと黙ってなさい……この子は、こう見えても神通は高大人です。だから、朝はなんとか出来ました……」そう言う美貴の表情は暗かった。

「朝って何だよ……何があったんだ」邦博は、少し慣れて来たみたいだ。

龍之介は、二人に午前中の事を簡単に説明した。

「何だよ……その化物みたいな奴は……」邦博は、信じられないと言う顔して美貴に聞くと、

「其の通りの、化物です」邦博の質問に、美貴はあっさりと答えた。「でも、どうして……美貴ちゃんが……そんな事をしてるの？」司が、邦博にしがみ付いたまま、恐る恐る美貴に尋ねた。

「私が……と、言うより、私のお父さんの事なんだけど……お父さんは修験道一派で瑾きん斂れん宗、鵬ほう願寺がんと言うお寺に所属しています。本山の開祖は、役の行者様と言われています」

「じゃ、お前は何処かの宗教団体か？」龍之介が怪しいものをみる様な目で美貴を見ると、

「少し違います……お父さん達のグループは、僧侶でも信者でもありません……所属はしていますが……傭兵みたいなものです」美貴は言葉を選びながら慎重に答えた。

「傭兵？……で、何やってんだそこで」

「ちよつと簡単には説明しにくいんだけど……お父さん達がやっている事は……瑾斂宗の目的は、大雑把に言うところ、この世の善悪のバランスを、保つ事にあるんです」

「善悪のバランス？」

「そうです。ある人にとって善、でもある人にとって悪……この世の全ての物は、そう言ったバランスの上に成り立っているのです」

「つまり、人によって、善悪は変わると……」

次第に白菊に対する恐怖が薄れて来たのか、龍之介と美貴に邦博と司が近付いて来た。

「で、善悪のバランスって、どうやって保ってるの？」と、腕を組んで、邦博は怪しげな者を見るような目をして美貴に聞いた。

「気の流って……分ります？」邦博の当然の態度に、少し遠慮気味に美貴が聞くと。

「ええっと……風水だっけ？」確か、テレビでやってたなと龍之介が答えた。

「そうですね、風水で言う気とは少し違うんですが……」美貴は少し考え、

「陰陽五行の思想に近い物だと聞かされています。陰陽道おんみょうって聞いた事ありませんか？」と、説明する美貴に、

「安倍の清明とかって言う奴か？」と、邦博が聞いたが、龍之介には誰の事か分らなかった。

「有名所では、そうですね。さまざまな要因の組み合わせが、力を相乗したり、打ち消したりすると思ってください」

「火、水、風、土とか言う奴だろ」と、説明する邦博の言葉を聞いて、

「おお、ゲームに良くある設定だな」やっとな自分の知る範囲に有るものだと感じた。

「ははは……そんな所です」美貴は、細かい事は良いかと、諦めた様な顔で笑ってる。

「この世の物は不完全な存在なのです。不完全故に変化します。つまり、さまざまな要因が絡み合って変化し続けるのです。」

三人は分った様な、分らない様なという表情を浮かべている。

「概念として、分りやすい言葉で言いますと、良い気と、悪い気の流れを監視して、都合の悪い変化をしようとした時に、矯正すると言う事です」

「もうちょい、分りやすく……ならない？」

雰囲気は掴めるものの、今ひとつ理解出来ない様子で龍之介が聞き返した。

「そうですね、具体的に言う……例えば、よく交通事故が起きる場所があるじゃないですか、事故の原因の一つに良くない気の流……つまり、人にとって都合の悪い気が流れ込んでいる場合が有るんです。事故が起きない様にするために、その気の流を止めたり、流を変えたりするんです。ただし、それはあくまでも人間の都合なんですけどね」

「どう言う意味だ」と、邦博が問い質す。

「この世には、人間だけが、存在している訳ではありませんから。重要なのは、様々な観点から見た、善悪のバランスなんです。無理に気の流れを変えたり止めたりすると、何処か他で弊害が生まれます。だから、本山は全体を監視して調整しているのです」

「で、鬼追は、気の流を変えたりしている訳？」邦博は、まだ疑いの目を向けている。

「とんでもない！私にそんな力はありませんよ。それをするのは修行を積んだ出家の僧侶達です。私達は“お役目”と呼ばれていて、おかしな所があれば其の原因を調べたり、バランスを崩して起きた弊害の除去……分りやすく言うと人に害をなす化物、妖怪の退治で

す」

「じゃ……昼間の奴も妖怪？」はっとして、龍之介が美貴を見る。

「そうですね……あれは少し違うと思うのですが……」考えながら美貴が答える。

「じゃあ、あれはなんだったんだ？」

「……正直、分りません……私もあんなの始めてだったから……」

「そうか……」困った様に俯く美貴に、龍之介は諦めるように言った。

「普通、妖怪とは、気の変化した者なのです。気と言うエネルギーが、何かに取り込まれて変化したり、方向性を持って具現化した者なんです」

「だけど、そんな危ない事を高校生の……女の子の美貴ちゃんが何でしているの？」司が心配そうに美貴を見ながら尋ねると、

「お父さんの手伝いで……まだ、正式に役目は負った事は無いのよ。まあ、アルバイトね」と、美貴は、まだ怯えている司を気遣い、勤めて明るく答えた。

「でも、妖怪退治なんて、何で、お前に出来るんだよ……」

「それは……私達には、特別な、力があるんです……」龍之介の質問に美貴は答えながら、言葉窄みに黙ってしまった。

黙ってしまった美貴を、どうしたのかと見ていた龍之介は、

「特別な力って、昼間、背中が燃えたり、鉛筆が光ったりした事か？」と、聞いてみた。

美貴は、暫く黙っていたが、決心したかの様に龍之介の顔を見て、
「はい、そうです……私達の力は、血統によるもので、鬼の……鬼の血筋って言われています。起こりは、開祖の役の行者様に使っていた、前鬼、後鬼だと言われています……」

美貴にとって、それは普通の人には知られたく無い事だった。

「えっ？美貴ちゃん……鬼なの？」美貴の説明を聞いて司は怯える様に聞き返した。

「あっ、いえっ、そうじゃなくて……一応……人間なんだけど……」

美貴は、予想通り自分が化物の様に思われた事が辛く、俯いて黙ってしまった。

「おい、司……」美貴の様子を見て、龍之介が司を睨むと、

「あっ……ごめん……そんなつもりじゃ……ごめんなさい」自分の言葉が、美貴を傷付けた事に司は気付き、慌てて美貴に謝った。

「ううん、いいの……鬼と言っても、御伽噺や、伝説に出て来るのとは違うの。特殊な能力を持った者を、人とは少し違うと言う意味で、鬼と呼んだと思うの。私達に受け継がれている血は……まあ、遺伝みたいなものね。普通の人より体力があったり、感が良かったりするの。それと、闘争心が強く、目の前の敵に対して戦う事には躊躇しないらしいんだけど……余り実感ないな、普段は、戦う事なんて無いし……それと自分の体から発生する気を制御したり、白ちやんみたいな存在と一体化して、自分の力を高める事が出来るの」

そう言うのと、美貴は手を前に突き出し、広げた掌を緑色に光らせる。それを見て、驚いている三人は、その現象が決して下らないトリックでは無い事を十分理解していた。

「ええっと……じゃ、少し整理するね」邦博は、そう言って、上を向いて考えている。

「まず、この世には、気と言う力があって、それは絶えず変化している。その、何とかと言うお寺は、其の流が不都合な変化をしない様に、監視して、不都合があればバランスを取ろうとする……此処までOK?」

「はい」と、美貴が邦博に向かって頷いた。

「で、鬼追達は、おかしな所があれば、調べたり、気の変化の影響を受けて、悪い妖怪となった者を退治している。其の力は、鬼の血統によるもので、白ちやんとか妖怪の力を借りる事が出来る」

「妖怪とは何事じゃああ！それに、なれなれしく呼ぶなあ！お前に白ちやんと呼ばれたくないわい！」と、白菊が叫びながら全身から大きな炎上げた。

「白ちやん！」美貴に、また怒鳴られて白ちやんはしゅんとしてい

る……マジで、子供だな。

「本田先輩の仰った事で、良いと思います……」

どうも、家の子がすみませんと、悪戯をした子供に代わって母親が謝る様に、美貴は白菊の激怒に怯える邦博に、申し訳無さそうに少し笑みを浮かべ頭を下げながら答えた。

「で、何で露天風呂に、素っ裸で現れたんだ？」

龍之介の質問に、美貴の顔が薄暗い海岸でも、はっきり分るぐらい真っ赤になった。

「それは……その……前の日から、お父さんのお手伝いで、ちょっと調査に行っていたんです……そうしたら、私達には手におえない化物が現れて、少しは戦ったんですが……全然歯が立たなくて、ははは……ねえ……」と、情け無い笑顔で白菊を見る。

「ははは……駄目だったねえ……」と、二人は顔を見合わせて、恥ずかしそうに笑っている。

「それで、やばかったので、慌てて主を、飛ばしたんじゃ」

「飛ばしたって……」言葉の意味が理解出来ず、龍之介が聞き返した。

「空間転移みたいなものかな？簡単に何度も出来るものじゃないんですけど……」

「慌てていたから、結局、主の体だけを飛ばす事になって仕もうて……」

白菊が恥かしそうに照れながら話すのを、美貴が恥かしそうに笑って聞いている所へ、

「で、何で男風呂？」と、龍之介が核心を突いて来ると、

「おっ、男風呂は偶然です！」美貴は顔を真っ赤にし、慌てて答えた。

「いわゆるテレポートみたいなものか……」横から邦博が割って入る。

「上手く空間転移出来れば、ですけど……実際、死ぬか生きるかの瀬戸際でなかったら、出来ない様な危険な業なんです……だって、

出た先が地面の中……だったら……」

「それは……怖いな……」想像して邦博はぞっとした。

「線で移動する瞬間移動と違って、点で移動する空間転移は、距離は稼げますが、力の消耗も大きいし、制御が難しいんです。遠見で先の空間を見据えるのですが、具体的なイメージが結べたとしても、出現先の……遠近感みたいなのが、少しでもずれると危ないんです」

「ははは、海なら大丈夫と思ったのじゃが……ちよつと短かったみたいで……ごめんなさい」

白菊が申し訳無さそうに美貴に謝っている。

「確かに、方向を決めても、ちよつとでも角度や距離がずれると、空の上か地面の中……か、今回は、お湯でよかったなあ……」龍之介が美貴の顔を見ながら、しみじみと言うと、

「はい……」美貴は、恥かしそうに微笑みながら答えた。

「しかし、白狐の姿も力も、この目で見たけど……まだ、信じられない気分だな……」

龍之介が改めて腕を組んで、考える姿を見て、

「すぐに、信じるのは無理だと思いますよ……」と、司が既に諦めた様子で答えた。

「あつ、それより、海神先輩、貴方も鬼の血筋じゃ無いんですか？」

「俺が？何で？」思い出した様な美貴の質問に龍之介は戸惑った。

「白ちゃんの姿が見えるんでしょ。本田先輩達には狐火にしか見えません」

美貴の言葉に二人は顔を見合わせて頷いている。

「多分、何代も前の御先祖様に、鬼の血筋の人が居たのかも知れませんが」と、龍之介にこやかに話す美貴に、

「そつ、そう言うものなのか？」と、龍之介は驚きを隠せ無ず呟いた。

「じゃ、たまに幽霊みたいのが見えるのも、鬼の血のせいだったのか？」

「えっ？ そうなのか？ 龍之介……お前、そんな事、一度も言わなかったじゃないか……」 邦博が、始めて知る龍之介の秘密に驚いている。

「……だって、俺だけ見えるんだぜ……変な奴だと思われるだろうが……だから、言わなかったんだよ」

はにかみながら邦博に答える龍之介を、白菊が顔を寄せ、間近でじつと見ている。

「鬼の血が流れてるみたいじゃの……随分と薄いが……」 目を細め、呟く白菊の言葉を聞いて、

「えっ？」 と、思わず龍之介は白菊を見た。

「普通、知らずに居る人は沢山いますよ」

「……そうか……」 美貴に、そうは言われても、自分が普通では無い事を改めて知った龍之介は、妙な不安感に襲われていた。

「じゃ、俺も、鬼追みたいに手を光らせるのか？」 そう言って、龍之介は自分の手を見る。

「いえ、鬼の血筋でも力が発現しないと無理です。それに、力が強く発現するのは、直系の血の濃い者と、隔世遺伝等で偶然に鬼の血が強く現れた者ぐらいです。濃い血筋の人でも発現しない人はいますし、力が発現しても消える人もいます」

「だったら、どうすれば力が発現するんだ？」

「それは……分かりません。私も自然と力が使えたので……」

「そうか……分った……」 初めて知る自分の事に、消化不良的な不安が残ったが、これ以上聞いても仕方が無いかと思い、話を切り上げ、

「で、当然、秘密だよな……」 と、美貴に向かって尋ねると、

「はい！ お願いします！」 美貴は、手を合わせながら懇願した。

「分った。誰にも言わないよ。なっ、司」

「はっ、はい……」 龍之介に促され、司はまだ怖いのか、ぎこちなく返事した。

どうせこんな話、誰も信じてはくれないだろうと思っている龍之

介自信、美貴の話の殆どを良く理解出来ずに、何となく覚えているだけだった。そんなものである。

「で、返せよ……」行き成り、龍之介は美貴の前に手を出したが、「えっ?……」美貴は何の事か分らず、じっと龍之介の差し出した掌を見詰めている。

「下着だよ!……返せよ」美貴の惚けた態度に龍之介は、自分の下心を顔に出さない様に催促すると、やっと理解した美貴は、また真っ赤になって俯いて黙ってしまった。

「おい……どうした?」龍之介は黙っている美貴の姿を見て『まさか、まだ俺の下着を着ているんじゃないだろうな』と、勘繰り期待してしまった。脱ぎたてのほかほかを……

「……ごめんなさい!燃やして捨てました!」暫くの沈黙の後、美貴は意を決して告白した。

「えっ!燃やした!」と、驚く龍之介に向って、

「はい!もう、跡形も無く!」と、美貴は力強く拳を握り締めきっぱりと言い放った。

「何でだよ!洗って返すって言っただろう!」想定外の美貴の言葉に驚き、龍之介は思わず怒鳴ってしまった。

「すみません!」龍之介の怒鳴り声に美貴は、更に頭を下げ謝っている。

「先輩!幾ら洗っても、恥ずかしいですよ、女の子にしたらあ」横から司が、美貴を援護すると『貴様は、女の子の気持ちがあるとでも言いたい様だが、男の子の気持ちも理解しろ!』と、龍之介は拳を握り締め、司を思いっきり睨みながら心に思った……どうやら龍之介君、随分と楽しみにしていたみたいですね。

龍之介の眼光に、司が怯えていると、美貴が小さな体を更に小さくするように恐縮して、

「弁償します!ごめんなさい!」と、龍之介に謝った。

必死に謝っている美貴の姿が、可哀そうに思えてきた龍之介は、「いいよ……もう……」と、この件に関しては諦める事を決意した

……第一、新品が欲しい訳じゃないし、これ以上しつこく言うとか、本性を曝け出してしまおう破目になる。

それは、たかが下着のために、自分と言う人格を貶めるどころか、もし、他の女子にその噂が流れようものなら、それは光の速さで広がり、尾鰭おひれが付きまわって、悪意有る方へと膨らみ、挙句の果てには『海神君が、後輩の女の子のパンティーを、泣いて嫌がるのを無理やりに引き剥がしたんだって……』と成り、それこそ、龍之介が社会的に抹殺されてしまう恐れがあったからだ。

「え、でもう……」と、申し訳無さそうに美貴が言うと、龍之介は、「いいよ、もう……忘れろよ、いいからさ」と、欲よりも保身の為に未練を捨て去った。

「おまえ……なんか変な事考えておらんか？」何時の間にか龍之介の直ぐ横に現れた白菊が、龍之介の横顔を間近で睨みながら呟いた。「！なっ！何がだよ……」こいつ、心が読めるのか？と、ぎくつと驚き龍之介が身を引く。

「白ちゃん、失礼よ……男の子だもの、それが普通よ」

美貴が白菊に向かって悟った様に嗜めると、

「お前な！」と、龍之介はやましい心がある分、美貴の悟った態度に腹を立てた。

「あっ、ごめんなさい……つい……」

「つい、って何だよ！ついつい……」

凶星な分、負い目に照れながらも強く抗議する龍之介に、美貴は慌てて頭を下げている。

「まあまあ……もう、遅いし旅館に帰ろ」と、龍之介の肩に手を置いて、邦博がなだめた。

「まあ、とにかく、今日の事は誰にも言わないから安心して。僕達はどうせ門外漢だしね」

「ありがとうございます！」邦博の言葉に美貴は、微笑みながら頭を下げた。

龍之介達が旅館に帰り掛けた時、

「あつ、海神先輩……」と、美貴が戸惑う様に、遠慮気味に声を掛けた。

「えっ？……なんだ？」龍之介が振向くと、

「あの……本当に済みませんでした……あの、色々と迷惑を掛けてしまつて……」と、美貴が深く頭を下げながら謝った。

龍之介は、可哀そうまでに恐縮している美貴に、

「気にすんなよ、別に迷惑だなんて思つて無いから」と、優しく微笑みながら答えた。

美貴は、龍之介の笑顔を見ると、お通夜の様な暗い顔をぱつと明るくして、

「ありがとうございます！」と、元氣良く笑顔を浮かべて、再び頭を下げた。

「それに、俺も御免な。何か苛々してきつい言い方になって」

恥かしそうに謝る龍之介を、

「いえ、そんな事……」美貴は、目をキラキラさせて見詰めていた。

龍之介達は部屋に帰り、お茶を飲みながらさっきの話を振り返っていた。

「どうも、実感として……湧いてこないよなあ」

「そうですね……でも、嘘を言っている様でもなかったし……」

龍之介が天井を眺めながら呟くと、司も思い出しながら天井を見て呟いた。

「自分の常識の範囲でしか正しいと認識出来ないのは、しょうがないよ。鬼追が風呂に現れた事も、今日の昼の話も、さっき見た狐火も、僕達の知っている常識の通用する範囲じゃない。だから、それについての説明が、理解出来る常識の範囲である訳が無い……科学的でも、オカルトでもね……この目で見えた事に対して、信じるのか、信じないではなく、事実である以上、受け入れるしかないんだよ」と、邦博が二人に向かって、腕を組みながら説明した。

龍之介は邦博の説明を聞いて『確かに、転送装置ってまだ無いよ

な』と、思っていた。

「そうだな……急に現れた事に対して、俺達が理解出来る説明が付くとは思えんな」

「そう言う事だ。それに何であれ、僕達は関わりあう事が出来ないんだらか……」

「そうだな……」龍之介は邦博の言葉で、今日の出来事を思い返している、

「そう言えば、司、風呂で言ってた事、本気か？」と、龍之介が真面目な顔で聞くと、

「えっ？」急に聞かれた司は、龍之介の方へと振向き、

「……篠崎の事」と、龍之介に言われ、司の顔が暗く曇った。

「……本気ですよ。翔子お姉様の事、本気で愛しています」

司は真剣な眼差しで、龍之介の目を真っ直ぐに見て答えると、

「そうか……」龍之介は、そう言って司から目をそらせた。

振られる事を恐れず、誰憚らず、堂々と自分の好きな人の名前を言える司。

龍之介は司が羨ましかった。いや、格好良いとさえ思えた。

女のような見てくれとは違い、男らしく堂々としていとも思ったが、これは司にとっては褒め言葉にはなっていない。

「でも、篠崎は鬼追の事を好きなんだろ……どうするんだよ？」

「どうするって……そうですね、今まで通り、お姉様の事をお慕い続けます」

邦博の質問に、寂しい笑顔を浮かべて司は答えた。

「でも、何もしない訳じゃありませんよ。お姉様に振り向いてもらう努力はしますよ」

努めて明るく答える司が、二人にはいじらしく思えた。

「鬼追は知っているのかな？」

「今日、お土産を買いに行ってから是一緒にいましたけど、そんな様子は無かったですよ」

司はそう言うと、少し間を置き二人の方を向いて、

「美貴ちゃんの事は良い子だと思っているし……お姉様が、本気で、美貴ちゃんの事……好きなら……私……私……どうしたら良いのか分からない……やっぱり諦めるしか……」

話の途中で司の目から涙が溢れ出し、言葉が途切れ途切れになり、最後はテーブルに突っ伏して肩を震わせ、声を殺して泣き出した。

司は二人の前で、自分の感情を抑えようとしていたが、とうとう押さえ切れなくなった。

邦博は司の横に座り直し、肩に手を置き司を慰めている。

龍之介は、司の真剣な気持ちが分るだけに、可哀そうに思えて仕方無かった。

その参(前書き)

8／1修正

その参

○過去○

三日目の朝、昨日の事を思い出し、美味しいはずの朝食が味気無いと思いつつも、龍之介はしっかりと三杯目をお代わりした。

龍之介の隣に邦博、前には翔子、司は一年生で集まっている。

龍之介は目の前の翔子に、司の事を話したい衝動を何とか抑えていた。

翔子が龍之介の視線に気付き、

「何？」と、言っただけで来た。

「えっ！いや、何でも無いよ……」龍之介は翔子の攻撃的な視線に、慌てて目を逸らした。

翔子は、その龍之介の慌てる態度を見て、何を察したのか、今度は邦博を睨みつけると、

「ひっ！」と、邦博は、その殺気を孕んだ視線に怯え、プルプルと首を左右に振っている。

翔子の眼力に怯える二人を他所に、翔子は何事も無かった様に食事を終え、無言で立ち上がり食器を片付け、一年生達のテーブルの所で楽しそうに話をした。

翔子が居なくなると二人の緊張が一気に解け、どっと疲れが襲って来た。

食事を終えて龍之介と邦博は、画材を持って旅館のロビーの前を歩いていると、司達一年生がやって来た。女子の中に一人混じる司だが、まったく違和感はない。

そして、旅館の玄関へ向っている二人の横を、美貴が通り過ぎ様とした時、

「あっ！鬼追！ちょっと待ってくれ！」と、龍之介が声をかけた。美貴は立ち止まり、龍之介へとゆっくりと振り向いた。

「すまない、ちょっといいかな？」

「何でしょう？」昨日の事もあるのか、少し恥ずかしそうに俯きながら美貴が答えた。

「美貴ちゃん、先に行ってるね」同じ一年生の洋子が、意味ありげな笑みを浮かべて、美貴に手を振っている。

「?……うん、ごめん」と、洋子の笑みの意味が分らず、美貴は怪訝そうに手を振った。

一年生達が出て行った所で、龍之介は美貴の直ぐ前で、

「あのさ、鬼の血について聞きたいんだけど……」と、背の低い美貴に対して、少しかがむ様に顔を寄せて小声で聞くと、

「い、いいですけど……」と、近すぎる龍之介の顔に、美貴はドキドキしながら答えた。

「邦博、すまん。先に港に行ってくれ」

「いいよ。了解」邦博は、龍之介に笑顔で手を振って見送った。

龍之介達は海岸の方に降りて行き、昨夜話していた場所で美貴と向かい合った。

「俺に、鬼の血が流れてるって言ってたけど、それって……なんて言うか……良い事なのか？悪い事なのか？」美貴と、手を伸ばせば届く距離で龍之介は美貴に聞いた。

「ええと、どういう意味でしょう？」美貴は、背の高い龍之介を見上げるように話している。

「そうだな、生活する上で便利なのかなって……」

「人によるでしょうけど……先輩ぐらいだと、ちょっと体力がある程度かなあ？」

「じゃ、化物が見えるのは？」

「人に見えない者……化物なんか見えるのは、血筋の人達の特徴だから、仕方ないですけど、特に、見えたからと言って、何か出来る訳じゃないし……」

「……そんな程度か……」龍之介は溜息混じりに残念そうに呟いた。
「まあ、考えてみれば、だから今の自分なんだよな……」

龍之介は、昨日見た美貴の運動能力を思い出し、自分もアニメのヒーローの如く、超人的な力が出せるのかと少し期待していたが、大した事が無いと分り少し残念に思った。

「当たり前じゃ！おぬし程度で他と大きな差があれば、我が主は超人じゃ」十分、超人です。

「うっ、白ちゃん……」いきなり現れた白菊に驚き、龍之介は後ろに飛び退くと、

「なれなれしく呼ぶなと言っとうろが！白菊様と呼べ！」と、叫び、白菊は炎を上げた。

「白ちゃん！まあ、良いじゃない……先輩は少なくとも、白ちゃんが見えるんだから」

「ぶう、主がそう言うなら、許してやる」困った様な顔で宥める美貴に、白菊は炎を収め、不本意では有るがと、膨れっ面で腕を組んでいる。

「ははは、ありがとう……」白狐の迫力と人間臭い仕草のギャップに、龍之介は戸惑居ながら、引きつった笑いを浮かべた。

気を取り直して龍之介は、再び美貴に近付き質問を始めた。

「それで、どれぐらいの数がいるんだ、お前みたいに、血の濃い奴は」

「正式に、本山の元で役目を負っている人達は、四百人ぐらい居ると聞いています」

「四百も居るのか……意外に多いな」思った以上に多い数に、龍之介は驚いている。

「はい、でも日本全国で、ですから少ないと思いますよ。それに、それぞれ能力の出方が違いますし……戦闘向きの能力とか、探査向きの能力見たいに、人によって出方が違うんです」

「そうか……まあ、俺としては、普通に生活出来るって事だな」

「ええ……まあ、そんなところですね……でも、あの、先輩……」つまらなそうにしている龍之介の顔を、下から覗き込む様に見ながら、「鬼の血って、私の事、あの……その、気味悪く……」美貴は、も

ごもごと口籠っている。

最初は何を言っているのか分からなかったが、美貴の態度を見て直ぐに、自分の身の上を龍之介にどう思われているのか心配していると感付いた。

「あっ、別に気にしてないよ。第一、俺にも流れてるんだろ。気にすんなよ」

「あっ！はいっ！」

美貴の気持ちを気遣い、勤めて優しく微笑んで答える龍之介を見て、美貴は安心したのか、元気に笑顔で答えた。

その時の、美貴の笑顔がとても可愛く思え、龍之介はドキッと胸が高鳴った。

「あっ……すまない、時間を取らせたな……そうだ、港の方で、一緒にスケッチしないか？」

少し動揺しながら龍之介は美貴を誘った。

「えっ！はいっ！あの……」と龍之介の誘いに美貴が、笑顔いっばいで答えかけたが、

「……あっ……すみません。一年生の皆と一緒に書く約束があるんで……」と、今度は暗い表情で残念そうに答えた。

「そうか、いや、良いよ。港の方に来たら声でもかけてくれ。すまなかったな。じゃ……」

そう言って美貴と別れて、龍之介は旅館の方へと帰って行った。

旅館の前を通る時、玄関の方を見ると、壁に凭れる様に邦博が立っているのが見え、

「あれ？先に行ったんじゃない？……」と、思いながら、

「よう」と、軽く声をかける龍之介だったが、邦博の様子がおかしいのに直ぐに気付き、

「おい……どうしたんだ？」と、玄関に入り、邦博の顔を覗き込んだ。

涙目で放心状態の邦博は、顔を覗き込んで来た龍之介に、はっと気付き、

「りゅうのすけええ！」と、叫びながら抱き付いて来た。

「わっ！馬鹿！止めろ！」何の事か分らないが、男に抱きつかれる事は遠慮したいと、強く抱き締めて来る邦博を、龍之介は押し離そうと力いっぱい手で押した。

「なっ、何やってんだよ！」

「あう、あう……」押し離そうとする龍之介に顎を強く押されて、邦博は上手く喋れない。

「落ち着け！落ち着け！……落ち着いたか？……落ち着いたか？」龍之介の言葉に、邦博は仰け反りながら、顔をかくかくと動かして頷いている。

「まったく……どうしたんだ？」そう言って、やっと離れた邦博に向き合った。

「篠崎が……」と、邦博が怯える目で、玄関の自分が凭れていた辺りの壁を見ている。

龍之介が邦博の目線を追うと、壁から何か細い物が生えていた。

「何だ？……いっ！」近付き、その物体を確認して龍之介は驚いた。壁から生えていた物は、2Hの鉛筆だった。

安普請で、ベニヤ板に壁紙を張ってあるだけの壁とは言うものの、鉛筆は邦博の顔の高さで深々と見事に壁の板を貫いていた……よい子の皆さんは、絶対に、真似をしないで下さい。

「……これ……篠崎がやったのか？……」恐る恐る振向き、鉛筆を指差して尋ねる龍之介に、邦博は無言で頷いたかと思うと、大粒の涙を流しながら、

「龍之介のせいだぞ！龍之介が鬼追を連れて行くから！」邦博が錯乱して急にわめき出した。

「なっ、何の事だよ！」急な事に龍之介は戸惑い、少し身を引いた。「篠崎が、二人で一緒に海岸の方に行くのを見て、僕に詰め寄って、何処に行ったのかとか、何で行ったのかって、僕を後ろ向きに壁に押し付けて、鉛筆を、鉛筆を、お、お尻の穴に突きつけて、正直に言えって脅したんだよ！」恐怖の体験を、震えながら邦博は語った。

「尻の穴？」龍之介は、今ひとつ理解出来ない様子で聞き直すと、
「そう……そこから直腸を貫いて小腸を傷付けたら？ショック死するぐらいの痛みを味わえるわよ？って、篠崎が……」そこまで言う
と邦博は、泣き崩れしゃがみ込んだ。

その話を聞いて龍之介は、鉛筆がずぶりと肛門に深々と突き刺さった事を想像し、恐怖で背筋に悪寒が走り、思わず肛門がきゅっと締まった……呉々も、危険ですので、よい子の皆さんは、絶対に、
翔子の真似をしないで下さい。

龍之介は、本当に、頼むから犯罪だけは止めてくれよと願いつつ、
「それで……篠崎は？」と、邦博の隣にしゃがんだ。

「それでも僕は知らないって言っていたら、怒った篠崎が、いきなり鉛筆を壁に突き刺して、旅館の奥に走って行ったよ……」邦博は少し落ち着いて来た様だ。

「篠崎の奴……」

邦博の話を聞いて龍之介は、何で邦博ばかり標的にするのかと、
翔子に怒りを覚えた。

「なんで僕なんだよ……僕は何も知らないのに……何もして無いのに……」

「邦博……」邦博の肩を抱いて龍之介は、昔の嫌な出来事を思い出していた。

「……ごめん、取り乱して……ごめん……何時も迷惑掛けて……」

涙目で謝る邦博に、

「言うなよ、そんな事……」龍之介は少し微笑んで、邦博の肩を揺すっている。

「わかった、ちゃんと話して来る。邦博は此处で待ってろ」そう言
って龍之介は翔子を探しに旅館の奥へと向かった。

龍之介がロビーを通り過ぎようとした時、階段から部長達が降りて
来た。

「あっ、海神君！」と、部長が龍之介を呼び止めた。

龍之介が立ち止まり部長の方を振り向くと、部長の他に二年の高

山と三島も一緒に居た。

高山は少しふくらとした体型で、良く言えばグラマーだ。
自己主張の強い巨乳に似合わず大人しい性格で、引っ込み思案な子である。

三島は引き締まった体型で、特徴は短い髪の毛を男みたいに横分けにしている。

男ばい容貌の通り、男勝りで気が強いが、あっさりとした性格の子だ。

えっ？顔？顔はアニメに成った時を考えて、可愛いと言う事にしておこう。取らぬ狸の……

「あの、何でしょう？」

「あのね、篠崎さんに何かあったの？海神君、何か知ってる？」

「何かあったんですか？」困った様子で訊ねる部長に、翔子が何かしたのかと心配になった。

「もう……篠崎には、いい加減、迷惑してるのよ」部長の後ろから迷惑そうな顔で、頭をかきながら三島が吐き捨てる様に言うと、

「えっ？」何の事か分らない龍之介は、三島の方を見た。

「あっ、あの……篠崎さん……さっき部屋に入ってから、鍵をかけて出て来ないのよ……」

高山が、おどおどしながら状況を説明した。

「正直、迷惑なのよね……何で合宿まで来るのよ……」

「やめろよ……そんな風に言うの……」三島の言い方に龍之介は思わず抗議した。

「でも、そうじゃない。一年生の時もあんな騒動起こして。クラスの皆の目があるのに、一緒に居る私達が迷惑だわ」三島が階段を下りながら龍之介を睨む。

「ちょっと待てよ、迷惑ってなんだよ」龍之介も三島を睨み返す。

「何言ってるの！海神だって同じ事、思っているでしょ！」

「ああ、付き合い難い奴だって思っているよ。けどな、不満があるなら直接言えよ！話し合えよ！迷惑とか言って除け者にするなよ

！同じ美術部員だろうが！クラスの奴らの目が気になるなら、美術部の中だけでも受け入れてやれよ！」

「相手にその気が無いのに無理よ！それとも海神が説得するとしても言うの？」

「ああ、やってやるよ……もう、うんざりだ……」三島の挑発的な言葉に龍之介は怒りを抑える様に静かに答えた。

「篠崎が、一年生の面倒を良く見ているのは何でだと思う？」

「えっ？」急に話が変わり、三島は戸惑い龍之介に聞き返す。

「他に居場所が無いんだよ！お前達がそんな態度だからだよ！だから一年生の中に自分の居場所を求めているんだよ！少なくとも俺にはそう見えるよ！」

龍之介に言われた事に二人は言葉が無かった。

「お前達の気持ちも分るけど、自分達のやってる事……楽しいか？」

「そんな……」三島は言葉に詰った。

「そうだろ、嫌な事だろ……自分自身、嫌に成らないか？」

「……」二人は黙って俯いている。

「何も好きになれとは言わないけど、わざと除け者にする様な事は止めろよ……」

「そんな事……じゃ、私達だけが悪いの？除け者にするって……篠崎はどんなのよ……篠崎にその気が無いのに……」

「じゃ、篠崎が打ち解けたら、受け入れてやれるのか？」龍之介が静かに尋ねると、

「……そりゃ、無理に追っ払ったりしないわよ」少し恥かしそうに横を向いて三島が答えた。

話が一段落したのを見て、部長が龍之介に近付きながら、

「じゃ、早速、説得してもらいましょうか」と、龍之介に微笑みかけて言って、

「海神君、部屋の様子見て来てよお」おねだりする様に龍之介に頼んだ。

「えっ？部長、でも、女子の、部屋ですよ……」部長の可愛い笑顔

に、ドキドキしながら龍之介が答えると、

「別に、着替えが散らばってる訳じゃないもの、良いよ、お願い！」

「うん、お願い。嫌ってる訳じゃないけど……やっぱり苦手だもん」と、二人は手を合わせて拝む様に龍之介に頼み込んだ。

龍之介にとって、非常に好奇心が刺激される申し出では有ったのだが、心の奥の何処かにある、邪な欲望が罪の意識を駆り立て、

「でも……」と、躊躇う龍之介に、

「大丈夫。海神は篠崎と仲が良いじゃない。食事と一緒にしてるし」と、三島が龍之介の肩を叩いて、にこやかに言った。

「あ、いや……」旅館での食事の時、たまたま同じテーブルに座っただけで、仲が良いも何も無いんだがと、言い掛けた時、

「じゃあ……お願いね」と、言って、高山がフロントから貰って来た合鍵を、龍之介に押し付ける様に渡すと、二人は手を振って旅館を出て行った。

龍之介は鍵を手には、

「本当に良いのかよ……」と、戸惑っていた。

「海神君って、優しいんだね」龍之介の顔を覗き込み、部長が微笑んでいる。

「安心だな。私が卒業しても、海神君が居てくれたら……」

「そんなああ、ははは……」部長の好感度が、非常に高く上昇した事に龍之介は喜んだが、

「任せてください……とは、言えないですけどね」急に落ち込んだ様な暗い表情に変わった。

「何で？」部長は龍之介の変化を不思議に思った。

「まだ、そんな自身ありませんよ。ただ、嫌だったんです。俺にも覚えがあつて……邦博の奴……あいつ、小学校三年生の時、転校して来て……あんな奴でしょ。だから、皆に馴染めなくて、それで苛められていて……俺も、あいつを苛めていて」

「えっ？」龍之介の意外な告白に、部長は目を大きく開いて驚いた。「何て言うか、クラスの雰囲気と言うか、乗りと言うか……俺も考

えもしないで、気が付いたら、あいつを苛めていました。たいした事無いつて思っていました。皆と、あいつの嫌がる事を言ったり、無視したり……でも、あいつは……あいつ、トイレで泣いていたんです。俺、それを見て、やっと気付いて、苛めるのやめて、あいつと友達になって……」

「そうだったの……」目を少し潤ませながら話す龍之介を、部長は微笑みながら見ている。

「だから、嫌なんです。理由も無く、傷付ける様な事……そんなのって、理不尽ですよね」

「そうだね……でもね、海神君みたいに周りに逆らって、自分も苛められるリスクを負う様な事をする子は居ないよ……そんな、勇気の有る子は居ないよ……だから、三島さん達の気持ちも分ってあげてね」可愛い笑顔で部長がお願いすると、

「分っているつもりですよ。あいつらが、何も意地悪だと思っていませんか」龍之介は部長の笑顔を見て、顔を赤くし照れながら答えた。

「そう、よかった」可愛い笑顔を炸裂させる部長を龍之介は、ぽおーとして見ている。

「じゃ、お願いね。私じゃ手に負えそうにないし」

「……がんばってみます」

部長は、笑顔で手を振っているが、龍之介は、期待に沿えるかどうか不安だった。

○説得○

龍之介は、部屋の前でドキドキしていた。

旅館の部屋なのだから関係無いと言えは関係ないのだが、男の兄弟しか居ない上、彼女いない暦Ⅱ年齢の龍之介にとって、女子の部屋に入る事は、度胸のいる好奇心溢れる冒険だった。

龍之介はドアの前に立ち、とりあえずノックして見た……が、返

事が無い。

聞き耳を立てて中の様子を探ろうとしたが、中は静まりかえっていた。

龍之介は、どうしたんだろうと思っていたら、急に不吉な事が頭に浮かんだ。

翔子にはリストカットの前科がある事を思い出し、

「まさか、早まった事、して無いだろうな！」と、慌てて、

「おい！俺だ！海神だ！入るぞ！」

龍之介は、慌てて扉の鍵を開けて中に入り、中の部屋の襖を開けた。

中に入り龍之介は、二枚重ねた座布団を枕にして横たわっている翔子に一瞬驚いたが、回りに血の後も無く、どうやら眠っているだけだと分り、ほっとした。

体を丸めて横向きに眠っている翔子は無防備だった。

翔子の服装は白のタンクトップのシャツに、グレーの膝上十cm位のスカート。その寝姿は何と言うか、艶かしいというか、危ないと言うか……龍之介は翔子のスカートの奥に白いパンティー……いやスキヤンティーを発見し、高鳴る鼓動を抑え切れなかった。

翔子のタンクトップの隙間から、奥が見える……

「ノーブラ？」かと、目を凝らす。

細身の翔子の寝姿。タンクトップの隙間、長く白い足、更にその奥には、白いスキヤンティーに包み隠された秘密の花園と、冒険者が辿り着いた先は、破壊力ある物ばかりだった。

龍之介は寝ている翔子の脇で、色々と角度を変えて移動しながら、タンクトップの隙間から奥が見えないかと努力していた。冒険者は、何時しか探求者にならっていた。

更に、探求者は、危険を冒す事を承知で勇気を振り絞り、求める物を得る為に、しゃがみ込んで近付こうとした時、翔子がいきなり上半身を起こした。

龍之介は、ぎくつと驚き、反射的に飛び上がり後退る。

翔子は龍之介に気付き、タンクトップの右肩がずり落ちたまま体を捻り龍之介を見た。

「海神君？」と、寝惚け眼で振り向いた翔子に対して、やま疾しい所が有る龍之介は、声をかけられて思わず、“御免なさい！”と言いつつになった。探求者はいきなり臆病者に成り下がった。

翔子は、汗ばんだ肌に纏わり付いた髪の毛を、白く長い指でたくし上げながら、寝起きの虚ろな瞳で龍之介を見ている……龍之介は思わず、ごくつと、唾を飲んだ……色っぽい……

「先に言っておくけど、お前の様子を見て来いって、部長と三島達に頼まれたんだからな……ほら、鍵」龍之介は煩惱を振り払い、自分分は公務で此処へ来た事を強調した。

「そう……迷惑な話ね……」

翔子は龍之介の方に向きを変えて、片手を畳に付いて片膝を立てている。

捲れ上がったスカートからは白いスキャンティーが見え、肩からずり落ちたタンクトップの隙間からは、Bカップと思える膨らみの裾野が僅かに見えた。

「服装、直せよ！乱れてるぞ！」探求者の求める物が目の前にあると言うのに、メデューサの首の如く見てはいけないと、龍之介は後ろを向いた……既に一部、石となっていますが……

「いいよ、別に……見られて減るもんじゃなし」けだるそうに話す翔子の言葉に、えっ、そうなの？と、お言葉に甘えさせて貰おうかと振り向きかけたが、寸前の所で理性が邪魔をし、

「そう言う問題じゃ無い！」と、一部硬直した部分を気にしながら言った。

「なに？海神君。欲情したの？良いよ、おかずにしても」上目使いで色っぽく翔子が言うつと、

「下品な事言うな！」と、ジーンズの中で膨張しきった物の納まりを気にしながら怒鳴った。

龍之介は翔子に気付かれないように、腰を少し引いて、ジーンズ

をたくし上げる様にしながら位置の修正をし、翔子の方に振り向いて、

「俺は男としての、礼儀として言っただけだ。他意は無い！」と、煩惱を振り払い、盗人猛々しいと言おうか、居直ってきっぱりと言いつつ放った。

「もう、見たんだから、出て行ってよ」翔子が、けだるそうに服装を直しながら言うと、

「何を見たって言うんだよ！」と、龍之介は疚しい所がある分、強く抗議した。

「……出て行かないの？」翔子が龍之介を睨み付けながら言うと、「話があるんだよ！」と、龍之介も睨み返した。

「……迷惑だって言ったでしょ」と、言いながら翔子は立ち上がり、タンクトップの胸元を掴み、スカートの中に手を入れスキャンティーを摺り下げ、

「叫ぶわよ……」と、龍之介を、氷の様な冷たい目で睨み付けた。

「まっ、待て！話せば分かる！」翔子の行動に全てを察し、慌てて翔子を制したが、

「問答無用……」と、翔子はタンクトップとスキャンティーを、引き千切ろうと引っ張った。

その瞬間、龍之介は電光石火のスピードで、畳に額を押し付け土下座しながら、

「ごめんなさい！ごめんなさい！お願いします、止めてください！」と、悪代官に年貢の減免を訴える農民の如く、必死で懇願する龍之介の脳裏には『高校二年生、同級生の少女を襲う！』と言う、新聞の見出しが浮かんでいた。

その姿を見て翔子は手を緩め、

「出て行って」と、上から目線で見下ろしながら冷たく言い放った。冤罪を盾に脅迫する翔子に怯えながらも、このままでは引き下がれないと度胸を決めた龍之介は、土下座したままで、

「お願いです！聞いてください！鬼追の事です！」と、ヤケクソ

気味に必死で訴えた。

「美貴ちゃんの事？」翔子が興味を示すように言うと、

「はい！」と、龍之介が返事をした。

翔子が服装を直しながら座ると、龍之介は頭を上げて翔子の前に座りなおした。

龍之介は、邦博の事に腹を立てて抗議しに来たのに、危うく社会から抹殺されそうになり、一瞬で立場が下僕へと成り下がった事を情けなく思っていた。

「教えてください。鬼追と俺がどうしましたか？それで何で邦博に酷い事するんですか？」少し遠慮気味に、警戒しながら龍之介が尋ねた。

「……聞いているんでしょ、本田君から……」

「何の事でしょ……」

「美貴ちゃんの事」

「……ああ……でも、本当なのか？」

「本当よ。美貴ちゃんの事、愛しているわ……悪い？」

「別に……悪くは無いけど……」

龍之介に何の躊躇いも無く答える翔子を見て、龍之介は戸惑い言葉が続かなかった。

龍之介の感覚では、芸能人は別として、通常、同性愛者等と言うのは、日陰者で隠れて居る者だと思っていたのに、何の遠慮も無く堂々としている翔子に違和感を覚え、『やっぱり、こいつは普通じゃない』と、感じた。

「鬼追が好きな事と、邦博に酷い事をするのと、何の関係があるんだよ」

「そんな事……説明する必要は無いわ。馬鹿馬鹿しい……」

まったく他人事の様に、そっぽを向く翔子に、

「お前な！何で、何時もそんな態度取るんだよ！俺はちゃんと話しようとして来ているんだぞ！それを、馬鹿にする様な態度しやがって！」龍之介は、翔子の態度に思わず怒りが爆発し、怒鳴り声を上

げた。

翔子は、そんな龍之介を黙って睨んでいる。

「お前が俺に話す気が無いなら、此処に鬼追も邦博も呼んで来て、四人で話するか？」

龍之介は翔子の逆襲が怖かったが、此処で負けてたまるかと踏ん張り、翔子を睨み返すと、

「脅す気？」美貴の名前を出され、翔子の目に殺気が走った。

「ど、どうとでも取れよ！邦博は俺にとって、大事な親友なんだよ！黙ってられるか！」

怒鳴る龍之介を黙って見ていた翔子が、呆れる様な溜息をついて、
「……本当に、お節介なんだから……」と、龍之介から顔を背け、小さく呟いた。

「えっ？」龍之介は、翔子の言葉が良く聞き取れずに聞き直した。
そんな龍之介を無視して、翔子は黙って壁の方を見ている。

二人の間に暫くの沈黙が続いた後、

「私ね、中学生の時、強姦されそうになったの」と言って、龍之介の方へと振向いた。

突然の翔子の衝撃的な告白に、龍之介は驚き声が出ない。

「未遂……だったけどね……私って狙いやすいのかな？三回も襲われたのよ」

へビーな話を翔子は軽い口調で龍之介に語った……何故、未遂だったかは聞かない方が……

「皆、二度と使い物に成らない様にしてやったけど……」うつ……な、なにを？……

「それでね、トラウマって奴かしら……気付いたら同性にしか興味が無くなっていたわ……別に男嫌いとか、男性恐怖症とかの自覚は無いけどね。あつ、言っとくけどまだ処女よ」

軽く微笑んで話していた翔子は、そこまで話すと急に顔の表情を暗くした。

「一年生の時ね……ねえ、覚えている？坂上響子ちゃん」

「えっと……ああ、十月位だったかな、中途半端な時期に転校して行った小柄な子だろ」

「響子ちゃんね、禿ゴリラに苛められていたの」

「えっ？」

禿ゴリラとは、翔子に目の前でリストカットされた、四十前の若さで額が大きく後退した、筋肉ムキムキの体育教官のあだ名だ。

「私、好きだったの。響子ちゃんの事。響子ちゃんも私の気持ちに答えてくれて……愛し合っていた、とまでは行かなかったけど……それでね、響子ちゃんから聞いたの。あいつから汚らしい行為を要求されて、拒絶していたら、あいつに苛められる様になったって……」

話す翔子の目付きが変わった。

「その事を響子ちゃんから聞いても、私は励ます事しか出来なかった……何とかなると思ってた……でも、響子ちゃんが学校を休むようになって、連絡も取れずに心配していたら、響子ちゃんから電話があって“ごめんね”って言ってそれっきりで……それで、二度と会う事無く転校して……」翔子の、悔しさを滲ませた目から涙が零れた。

「悔しかった……私、あいつが許せなかった。転校の直接の原因が、あいつに在るとは断言出来ないけど、発端となった事は事実よ。だから、仇を取ってやったの」其処まで話すと、急に膝を抱え、翔子は膝に顔を埋めて、声を殺し泣出した。

龍之介は、聞いても良かったのかと、肩を小さく震わせて泣いている翔子を見て思った。

暫くして、翔子が目を真っ赤にして顔を上げ、涙で濡れた目の辺りを指で拭っている。

「今年になって、美貴ちゃんが美術部に入って来て……私にとっては天使だったわ。可愛くて、明るくて……あの子の笑顔見ると、落ち込んでいた私が、何か元気を貰ってるみたいで……美貴ちゃん、ちよっと響子ちゃんに似てるかな？」

「ああ、そう言えば……」龍之介は響子の顔を思い出して言った。
「美貴ちゃんの事、好きなのに……やっぱり勇気が無くて。今日だって一年生達と一緒に描こうって誘って……それで、美貴ちゃんと一緒に居れると思ったのに、海神君が美貴ちゃん連れて行って……」
タイミングが悪かったかと、反省しながら龍之介は翔子に向かって、

「でも、何で邦博に酷い事をするんだよ」と、静かに問い掛けると、
「そうね……確かに変ね……」翔子は天井を見ながら考えて、
「八つ当たりかな」と、しれっと言った……随分と理不尽な話である……

「……お前ね……」と、龍之介が呆れながら、
「だったら、直接の原因の俺に、当たれよ。邦博は関係無いじゃないか」と、翔子に聞いた。

「そんな事……そんな事したら、美貴ちゃんに嫌われちゃうわ……」
「どう言う事だよ」

「……知らない見たいね……私、見たの……」
「えっ？」

「七月に入る頃からだったかな……美貴ちゃんね、校舎の玄関に在る、海神君のロッカーの前で、何度も立っているのを」

「えっ？……なんで？」

「……分からないの？美貴ちゃんね、封筒を持って、毎日、何度も立っていたのよ……可愛らしいパステルピンクの封筒だったわ」

「……」何の事か分からず、龍之介は翔子を見詰め、頭を掻きながら考えていると、

「毎日って、なんで翔子がそんな事知ってんだよ？」などと、的外れな疑問が湧いて来た。

「……なんでって……何故、其処なのよ！……私はずっと、美貴ちゃんの事、見てたの！」

龍之介の呆けた質問に、呆れて怒鳴る翔子の答えを聞いて、

「……ストーリーカー……」と、龍之介が思わず呟やくと、

「何ですって！」翔子が怒鳴り、殺気を孕んだ目で龍之介を睨む。

「……」龍之介は翔子に怯え、思わず口を両手で押さえ、首を左右にふるふると振っている。

「何でそんな話になるのよ！私は美貴ちゃんの事を話してたのよ！」

「あ、ああ……」龍之介は翔子に怒鳴られ、確かに、考えて見れば呆けた疑問だと反省した。

「もう！鈍感ね！普通、そう言うシチュエーションは、ラブレターでしょうが！渡したいと思って、躊躇って何度も海神君のロッカーの前で、立っていたのよ！」

「あっ……」翔子に言われて、驚いた様に目を開く龍之介。

「……じゃあ……それって……」

「そうよ、確証は無いけど、美貴ちゃん、たぶん貴方の事を好きなんだと思うわ」

「……」龍之介は、翔子の怒りと羨望が入り混じった告発に驚いていた。

「ほんと、鈍感ね、気付かなかった？……そう思って美貴ちゃん的事見てたら、よく海神君の方を見ていたわよ、あの子……」翔子は、嘲る様な薄笑みを浮かべ、龍之介を見ている。

美貴の事に全く気付かなかった龍之介は、

「うん……」翔子の嫌味な微笑みに、頷くしかなかった。

「だから殺してやりたいと思って、貴方を標的にしたら、美貴ちゃんに嫌われるでしょ……死体も残さずに消し去るのって、結構面倒くさそうだし」翔子の目が、冷酷に光るのを見て龍之介は、全身の毛が逆立つぐらいぞっとした。

「で、でも、それって邦博関係ないし……」龍之介が気を取り直して、翔子に言うのと、

「そうね、自重するわ……」と、翔子は髪の毛をたくし上げながら、面倒臭そうに答えた。

龍之介は、翔子の言葉を聞いて、ほっとした。

「海神君は、美貴ちゃんの事どう思っているの？」

「えっ？俺か？俺は……可愛いとは思ってはいるけど……」翔子の質問に龍之介は、どう答えていいのか分らずに戸惑い、何となく思っている事を言った。

「そう……その程度ね……私は美貴ちゃんの事、愛しているわよ」「そうか……」自信たっぷり話す翔子に龍之介は思わず、

「でも、女同士だろ……そんなのっておかしくないか？」と、余計な事と知りながら聞いた。

「何だよ、美貴ちゃん明るくって可愛いし、愛するのは自由でしょ。別に体とか、肉欲を求めている訳じゃないわ」刺激的な言葉を躊躇いもなく、平然と言う翔子に、

「にっ、肉欲って……お前……」龍之介は驚き、顔を赤くした。

「鬼追は……知ってるのか？」聞いても仕方の無い事だと思いつつ龍之介が尋ねると、

「私が美貴ちゃんを好きだって事？美貴ちゃんは……知らないわ。貴方の事が好きなんだもの……私の事なんて……」翔子は悲しそうに答えると、抱えた膝に顔を横たえた。

「報われないって分かって……それでも、良いのか……」

翔子は龍之介の言葉に、急に頭を上げ、憎しみの籠った目で睨み付けると、

「良くないわよ！悲しいわよ！辛いわよ！……切ないわよ……でもね、其の悲しみが貴方、分かるの！報われない、恋をした事があるの！貴方なんか、何が分かるのよ！」髪の毛を振り乱し、狂った様に叫んだ。

「篠崎……」翔子の剣幕に一瞬驚いたが、叫ぶ翔子を龍之介は、何となく哀れに思った。

「貴方には分からないわよ……この切ない気持ち」ひとしき「頻り叫んで翔子は、顔を膝に横たえ悲しい表情で目に涙を溜めている。

「……何となく分かるよ……俺、部長の事好きなんだ」翔子の姿に、尋ねてはいけない事を聞いてしまったと思った龍之介は、つい自分の事も話してしまった。

「えっ……振られたの？」翔子が顔を上げて聞いた。

「いや、それが怖くて告白出来ない。だって、何となく分かるだろ。俺の事をそんな風に想っていないって」翔子の目線を気にしながら、龍之介は照れながら答えた。

「へえ、意外と意気地無しね」と、見下す様に翔子が言うと、

「お互い様だろ」と、容赦の無い翔子の言葉に、今の自分を言い当てられ、龍之介は少しムツとしたが、ふと、二人は顔を見合わせ、声を出して笑ってしまった。

笑ってから龍之介は、翔子に向って、

「……強いな、お前」と、しみじみと言った。

龍之介は昨日の司と言い、翔子と言い、何で泣くほど真剣になれるのだろうと思ひ、それに比べて自分の思ひは、真剣じゃ無いのかなと情けなく思えて来た。

「強くなか無いわよ……ただの女よ……」

響子が居なくなった寂しさに耐えられずに泣き通した自分。響子の力になれず、細やかな復習しか出来なかった自分。翔子はそんな自分が情けなかった……リストカットが、細やかかどうかは判断し兼ねるが……

長い沈黙が二人の間に流れていた。

そして、龍之介が徐に翔子に向かい、

「お前、三島達とも馴染むようにしろよ、大きなお世話だろうけど」と、遠慮がちに言った。

「……そうね、大きなお世話ね」翔子は伏目がちに、興味なさそうに答えた。

「だけど、お前がそんな態度だと……」

「お互い様だわ！」龍之介の言葉をさえぎり翔子が叫んだ。

「彼女達は私を必要としていない、私も彼女達を必要としない……それだけよ、海神君が気にする事じゃ無いわ」空虚な態度で翔子が龍之介を睨んでいる。

「でも……」

「止めてよ、迷惑だわ。そんなお節介……」

戸惑う龍之介の言葉を遮り、翔子が龍之介を睨みながら言った。

「でも俺、美術部が好きで、美術部の皆が好きで……だから……だから嫌なんだよ、そう言うの。理由も無く、わざと避けたり、無視したり……嫌なんだよ、上手く言えないけど。話し合おうともせず、歩み寄ろうともせず……お互いに理解し合おうともしないで、最初から意地張って、拒絶するなんて、そんなの嫌なんだよ」考えながら途切れ途切れに話す龍之介は、自分の気持ちをどう言えば良いのか分からず、翔子に上手く説明出来ずにいた。

「だから、それがお節介だって言うのよ」

「で、でも俺達、同じ美術部の仲間じゃないか！」

「……止めてよ……そんな、安物の小説みたいな台詞。上辺だけの言葉で、友情を押し売りされて感動するほど幼稚じゃないわよ。それに、私は一人でも、何の問題も無いわよ」

「でも、でも篠崎、一年生達となら、仲良くしてるじゃないか、鬼追が居るからってだけじゃ無いだろ、だから、高山達とだって……」

「もう、止めてよ……」痛い所を突かれ翔子は、龍之介を睨み付けて言葉を遮った。

周りから少し浮いていた翔子。事件の後、更に皆が翔子を避ける様になって、その疎外感から、一年生の中に居場所を求め様とした自分。其処には弱い自分が居る。

それを龍之介に言い当てられて、翔子は少し悔しかった。

翔子に睨まれ龍之介は、上手く説明出来ない自分を情けなく思い、黙ってしまった。

「ほんとに、何時もそうなんだから……特に中が良い訳でも無いのに……」

弱い自分が、一年生達の中に逃げている事を龍之介は気付いている。

その事は、翔子にとって悔しい事ではあったが、その反面、そんな自分を龍之介は理解してくれているのかも知れないと思うと、少

し嬉しかった。

「私が、海神君の主義に従う義理は無いわ……」翔子は立ち上がり龍之介に背を向けた。

「篠崎……」龍之介が、情け無い顔で翔子を見上げ、声を掛けると、「……でも、考えておくわ」背を向けながら翔子は、恥かしそうに答えた。

翔子は、龍之介のお節介が嬉しく思えた事が、少し恥かしかった。「……ああ、考えてくれ……」自分の不甲斐無さから満足出来る返事は貰えなかったが、完全に拒否された訳では無い事に龍之介は、今はそれで良しと思った。

「用が済んだんなら、出て行ってくれない？」翔子が、首だけを振向かせて龍之介に言うのと、

「ああ……昼飯には降りてくるんだろ？」と、龍之介は時計を見ながら聞いた。

「ええ」翔子は、何処までお節介なのと、少し呆れた笑顔で答えた。

○けりを付ける○

部屋を出てから龍之介は、小学生の頃の自分を思い出していた。邦博を苛める事を止めて、邦博を庇うようになってから、龍之介も理不尽な苛めを受けた。

教科書に落書きされたり、皆に無視されたり、殴られた事もあった。

強くなりたかった。気持は決して負けてはいなかったが、悔しい思いから、腕力さえ強ければ、苛められないのにと、龍之介は思うようになっていた。

そして龍之介は、中学に入ると柔道部に入った。

柔道部に入り、強くなって、誰からも苛められない自分に成りたかった。

でも、それは、思い違いだと教えてもらった。

柔道部で龍之介は、今でも師匠として尊敬している柔道部の顧問の先生から、本当の強さと言うものを教わった。

それは腕力等では無く、正義を貫く事……正義を貫く勇氣を持つ事。

苛められて殴られても、自分を押し通して来た龍之介には、先生の言葉が素直に理解出来、強く心に刻み込んだ。

練習や試合の時、先生は口癖の様に？怯むな！？と言って龍之介達を励ましていた。

どんな相手を前にしても、最初から気持で負けていたら勝負にならない。

龍之介は一生懸命練習し結構強くなった。

一年生の十一月に、学区内で行われた一年生の新人戦で、個人と団体で優勝した事を、校長先生が朝礼の時に全校生徒の前で報告してくれ、龍之介は誇らしかった。

そして、既にその頃には、精神的にも成長した龍之介を苛める者は居なかった。

最終的には三年生の時に、県大会の準々決勝戦敗退まで行った。

微妙な結果ではあるが、本人としては結構自慢に思っている。

しかし、先生の言葉を思い出すと、未だに弱い自分が見える。

振られる事を恐れて怯えている自分は、何て弱いんだと龍之介は思った。

今にも先生の？怯むな！？と言う怒鳴り声が聞こえて来そうな気がして、

「勝負もせずに不戦敗なんて、情けない事はしたくねえな……」と、龍之介は決心した。

――◇――

「あっ、海神君……どうだった？」

部長はロビーのソファから立ち上がって声を掛けて来た。

「説得出来たかどうかは、分かりませんが……でも、昼飯には出て来ますから」

「そう、やっぱり直ぐには無理ね……まあ、良いわ。ありがとう。頼りになるわね」少しは進展した事に部長は満足そうに微笑んだ。

その明るく可愛い笑顔を見て、龍之介は今しかないと決断した。

「何か、評価高そうだから……この機会に、ちょっと言いたい事があるんですが……良いですか？」恥ずかしそうに鼻をかきながら龍之介が言うと、

「何かしら？」と、部長が小首を傾げ、微笑みながら尋ねた。

龍之介は一呼吸置いて、部長の目を見ながら、

「部長の事、好きです。一年生の時からずっと。俺と付き合ってくれませんか？」と、はっきりと伝え、龍之介は意外と冷静な気持ちで言えた事に満足だった。

「……………」部長は少し驚いた顔をしたが、すぐに困った様に下を向いて、

「ごめんなさい……」と、小さく呟いた。

予測出来た答えとは言え、部長の言葉を聞いた途端、龍之介は貧血の様な感覚に襲われた。

自分が今、何を見ているのか、何を聴いているのか、一瞬だった
が頭がふらつき、分からなくなった。

「海神君の事は、後輩としては好きよ。貴方が居てくれると安心して卒業出来るわ……だから、とても頼もしい後輩だと思っているけど……」

部長は龍之介から目線をはずして、申し訳なさそうな表情で言うて、

「ごめん、貴方の気持ちに答えられなくて」と、両手を前に丁寧
に頭を下げた。

龍之介は、嫌な感覚が収まると、自分を取り戻し冷静になって、
「好きな人が、いらっしゃるんですか？……すみません、立ち入った事聞いて……」と、軽く頭を下げて龍之介が聞くと、

「……うん……」部長は、恥ずかしそうに俯きながら答えた。

「分かりました……すみません。何か困らせてしまって……」

「そんな……私こそ、ごめんなさい」

「あの、俺、それでも部長の事好きですから。今まで通り、変わらずに居ても良いですか？」

「うん、それは私の方がお願いしたいわ」

照れながら申し出る龍之介に、部長は笑顔で承諾した。そして、「じゃ」と、龍之介が部長に握手を求めると、部長は、にこやかに応じてくれた。

握手しながら、龍之介の心には小さな満足感があったが、強く胸を締め付けるような苦しみも味わっていた。

――◇――

龍之介が部長と別れ、トイレに行こうとして、ロビーを通り過ぎると邦博が待っていた。

「どう……だった？」と、邦博が心配そうな顔で、おずおずと近付いて来た。

「大丈夫だよ、篠崎と話が付いた。安心しろ」明るい表情で話す龍之介の顔を見て邦博は、

「良かった」と、ほっと胸をなでおろしている。

その時、司が勢い良く玄関から走り込んで来て、龍之介の前まで来ると、

「先輩！お姉様、翔子お姉様見ませんでした？」と、入って来た勢いのまま聞いて来た。

「あ、ああ、篠崎なら……」龍之介は司の勢いに咂然として、二階の方を指差すと、それを見た司は、龍之介の言葉を最後まで聞かず、ダッシュで二階へと向った。

「何だ……あいつ？」龍之介と邦博は、司が昇って行った階段を見詰めている。

「あっ、俺ちよっとトイレに行って来るから、先に港に行ってくれ」

「了解」龍之介に返事をして邦博は、一人港へと向かった。

そして、龍之介はトイレに入って戸を閉めた……限界だった……

涙が一気に噴出した。

声が漏れない様に歯を食いしばって手で口を押さえ、涙が止まるのを只ひたすら待った。

なかなか止まってくれない涙は、トイレの床にぼたぼたと落ちて染みを広げていく。

龍之介は生まれて初めて、失恋の苦しみを味わった。

思いが届かなかったこの気持……切ないって、こんな気持なのかと知り、

「すまん、篠崎……俺、嘘言ってたよ……報われないって、こんなにも苦しいだな……」と、龍之介は初めて体験する、締め付けられる様な胸の痛みに苦しんだ。

家庭の事情（前書き）

誤字、脱字、言葉尻等を改訂しました。
まだ不備があると思いますが、感想と共にご指摘頂けたら幸いです。

家庭の事情

○家庭の事情○

「ええええ！なんでええ！明後日あさってから美術部の合宿なのよ！」と、美貴が抗議の声を上げ、

「すまん！美貴。急に役目が入って……」父親の信仁が申し訳なさそうに手を合わせている。

時は少し遡り、合宿二日前の鬼追家のリビングである。

田舎の山沿いに建つ鬼追家は、村では平均的な百坪の敷地に、6LDKの木造二階建てが建っていて、玄関の脇にはハリヤーとパジエロミニが止めてあった。

巾、一間半の、無駄に広い玄関を入って直ぐに有る、リビングのソファアに座って手を合わせている信仁は三十八歳、身長は百八十七cmと大柄でがっちりとした筋肉質の体型だが、背が高いと言う事もあり、着やせして見えるタイプだ。

純国産だが、日本人離れした彫の深い顔立ちは中々渋く、それ故、若い頃は随分ともてたであろうと推測される。

「そんなの断ったら！」

「本山の“役目”は断れないよお……企業の“祓い”の方が先に頼まれていたけど……それに、企業の祓いは、割りの良い仕事だから断るには惜しいしい……だから美貴、すまないが、変わりに行ってくれよお……」と、低姿勢で懇願する父に対して、

「嫌よ！そんなの！役目が終わってから、祓いに行ったら良いじゃない！」無慈悲にも、躊躇無く断った。

「そう言う訳には行かないよお……企業の工場予定地に化物が現れるとかで、着工出来ないでいるんだよ。工場の完成が遅れたら、借入金の返済の負担が大きくなるし……だから報酬も気前良く出してくれるのに、遅らせる訳には行かないよ……なっ、頼む！」

「だったら、役目を後にすればいいじゃない」美貴は、腕を組みながら信仁を睨み付ける。

「それこそ駄目だよお。俺達は傭兵みたいなもんだから、役目の無い時は何したって構わないけど、役目を言い付けられた契約期間は、本山に従わないとなあ……今回は、広範囲を分担して探査する役目で、他のお役目も何人か日を合わせて出るから、勝手な事は出来ないよお」

信仁が更に深深と頭を下げ懇願すると、まあ、何時もの事だと美貴は半ば諦めて、

「で、何処なよ……」と、思いつきり不機嫌な顔で、信仁の向かいのソファに腕を組んで、どかっと座った。

「福井、滋賀と岐阜の県境に、三国ヶ岳と言う山があって、その近くだ。ほら、夜叉ヶ池で有名な」と、美貴が話しに乗って来た事に信仁は？しめた？と思いい笑顔で説明した。

「じゃ、龍神の杜じゃない。なんで、そんな聖域、調べる必用あるの？」

「聖域といっても、神社とかの閉鎖区域じゃないから、場所によっては日陰の様に力の及ばない所が出来るんだ」未だ不機嫌な美貴に對し、信仁は機嫌を損ねない様に低姿勢で説明する。

「白雪姫だっけ……」と、記憶を探りながら尋ねる美貴に、

「それは、泉鏡花のお話。夜叉姫だよ」と、信仁は得意げに答えた。

「何よ偉そうに……で、バイト料は……」信仁の得意げな態度に気分を害し、美貴は真剣な顔で確信に迫る。

「……………」信仁は聞こえなかったかの様に、横を向いて黙っている。

「出るんでしょね！」美貴は立ち上がって、信仁を睨みながら怒鳴ると、

「お前は、父の手助けをしようと思う気持が、無いのか！」と、信仁も負けじと勢い良く立ち上がって、怒鳴り返す。

「それと、これとは別よ！」

怒鳴りあっている二人の横へ、ダイニングからやって来た母親の百合が、

「あなた、無理言うんだから、出して上げなさいよ」と、優しく声をかけた。

母親の百合は、身長が百七十cm。スリムな体型が、更に長身的印象付けている。

ボブカットに切り揃えた髪に栄える美しい容姿は、とても四十歳には見え無い若々しさがあった。

信仁が、百合の方をチラッと見て、

「まあ、良いけど……じゃ、こんなもんで」と、美貴へ、しぶしぶ手を開いて差し出した。

「何それ？大？小？」指五本と言う意味に、美貴はちょっと期待していた。

「小に決まってるだろ！」信仁が、当たり前だろと言わんばかりに美貴を怒鳴り付けると、

「じゃ、やだ！」美貴は、ふんっ！と、そっぽを向いた。

「おい！もう……じゃ……大で」美貴の反応を見て、齒噛みしながら信仁が、しぶしぶ指一本立てているの横目で確認して、

「二日よね……明日から行って……」と、美貴は業^{わざ}とらしく指を折って数えた。

「あああっ、分かった！これでどうだ！」信仁が、勢い良く指二本を立てて差し出すと、

「OK！今から用意して参ります！」美貴は、にかっ^にと現金な笑顔を浮かべ敬礼した。

「ごめんね美貴ちゃん。私が行ければ良いんだけど」と、百合が申し訳なさそうに言うのと、

「気にしないで。お母さん、私を生んで鬼の力が無くなっちゃんだもの……仕方ないよ」と、美貴は交渉が思い通りに運んで、ご機嫌な笑顔を浮かべている。

「まあ、女のお役目は八割以上が子供を生むと力が消えてしまうか

らな……お母さんが現役の頃は、鬼百合とか、鬼姫とか呼ばれる程の暴れん坊さんだったから、惜しいと言えば惜しいけど……」と、信仁は、しみじみと言った。

「あつ、そうそう……あなた、お金はあなたの、おこずかいからお願ひね」

「ええ！そんな！」微笑みながら容赦の無い百合の言葉に、信仁が驚き抗議するが、

「あなたの、お願いでしょ」と、あっさりと棄却された。

「えええ……でもお……」更に、未練がましく縋る信仁に、

「何言ってるの、家や車のローンだって有るのに……」と、百合が冷徹な目で睨み付けると、

「……」信仁は、百合から目を逸らして黙ってしまった……何処も同じかあ……

「交通費とかの必用経費は家計から出しますから。はい、美貴ちゃんカード。失くさないでよ。それと、領収書はちゃんと貰ってね」百合が、美貴にクレジットカードを手渡すと、

「了解しました！」美貴は、再び現金な笑みを浮かべて敬礼をした。その横で信仁が、しぶしぶ自分の財布を取り出し、美貴に二万円を差し出すと、

「THANK YOU！」と、お金を受け取り、ちょっとファザコンの入っている美貴は、躊躇いもなく、信仁の首筋に嬉しそうに抱き付いた。

なんだかんだ言っても美貴には甘い信仁は、美貴に抱き付かれて、嬉しい様な悲しい様な複雑な表情で中身の少なくなった財布を眺めていた。

信仁達お役目の多くは、瑾斂宗、鵬願寺の役目の他に、一般企業等の仕事も請けている。

命懸けとなる役目の報酬は高額だが、今回の様な定期的に行っている探査の役目は、特に危険も無く報酬額もしょぼい。

それに比べ、企業からの以来される祓いの大半は、レベルの低い

化物相手の割には報酬が良く、彼らにとっては割の良いアルバイトだった。

信仁達は、祓いの相手が化物だからと言って、何も毎回退治する訳では無く、追い払えば済む者なら追い払い、話の出来る者なら話し合って移動して貰う為に、退治とは呼ばずに祓いと呼んでいる。「あっそうだ、簡単な役目だけど、万が一があるといけないから“鬼斬丸”を持っていけよ。もしかしたら“滅火”があるかも知れんからな」信仁はそう言って、刀袋に納められている鬼斬丸を手渡した。

「えっ、鬼斬丸を……」手渡されて、美貴は鬼斬丸を見詰めながら戸惑った。

美貴は袋の紐を解き、鬼斬丸を取り出した。

四十cm程の長さの鬼斬丸は、小さな鰐つばの付いた懐剣で、三十cm程の凍て付いた氷の様な刃やいばは、朱塗りの鞘に納められていた。

「でも、初めてだよ。魔斬りの法具使うの……どうすれば良いのよ……」

刀身の輝きを見詰めながら、不安そうに尋ねる美貴に、

「まあ、心配するなって。お守りみたいに思ってた良いから」と、信仁は、全く問題無しと言うように、軽い調子で答えた。

「俺が使っている、槍の“蒼天撃”そうてんげきと、お母さんが使ってた日本刀の“鳩槃荼”くぼんだも同じだけど、魔斬りの法具自体に化物を滅する力があるんだよ。だから、白菊には絶対触らせるなよ……まあ、あいつは知ってるけど」

説明する信仁の隣に、百合が座り、

「美貴ちゃんは、もう気の使い方が分かってるみたいだし、自然と使えるわよ」と、微笑みながら付け加えた。

「化物って言うのは、気の変化したエネルギー体みたいな物でな、下等な生物や人の思念とか霊をコアにした者と、神様の意思とも思える様な偶然に、多くの気の力が意思を持って集結して生まれた者達なんだ」

「魔斬の法具に込められた霊的な波動は、化物が結合している特有の周波数に干渉して消滅させるのよ。つまり、浄化するって事よ」

「まあ、自我も持たない様な、レベルの低い化物なら、俺達の氣の力や白菊達でも倒せるけど、強力な化物になると、魔斬の法具を使わないと倒せない奴も居るし……」

「それに、私達が使う氣の力も、体力同様の限界があるでしょ。雑魚でも多数の化け物を相手する時は、魔斬の法具を使わないと、体力負けしてしまうわ」

「それと、滅火の影響で凶悪化した奴らは、魔斬りの法具で浄化しないと、滅火をばら撒く事にもなるからな」

「でも……滅火とかじゃ、きっと私の手に負えないよ……」と、不安そうに美貴が言うと、

「大丈夫、滅多に無いって。もし滅火があつたら情報不足の本山が悪い。とっとと引き返したら良いよ」と、信仁は無責任に答えた。

「でも、滅火って何なの……怖い物だって、何時も聞かされているけど……」

美貴の質問に、二人は困った様に顔を見合わせている。

「そうだな……滅火って、他の自然界に流れる氣とはまったく違う物……ってぐらいかなあ」

「そうね、本山の専門家達も研究しているけど……はっきりとは分かっていないのよ」

「そんな……」

正体不明の滅火に、美貴は言い知れぬ恐怖を感じていた。

「まあな、普通の氣の流れは、色々な要素が複雑に絡み合って存在し、それ自体に善悪は無いんだけど、滅火はなあ……人々にとって……いや、この世に生きている者全てに災いする氣……って言うのかなあ……」と、信仁は、同意を求める様に、百合の顔を見た。

「そうね……霊的な毒って言うのかしら……精神的にも肉体的にも生命体を犯して、全ての生き物を死滅させてしまうの。でも、毒は薬にも成るって言うでしょ。滅火の力を取り込んだ化物は凶暴で強

力になるわ。だから、もし滅火があっても、絶対に近付いちゃ駄目よ」

厳しい表情で、美貴に教える百合に、

「でも、見た事も無いのに、滅火って分かるの？」と、美貴が不安そうに尋ねた。

「大丈夫だよ。直ぐに分かるって。普通の気は、白菊が憑いたら見えるんだろ？だったら、他の気とは全然違うから、直ぐに分かるよ」不安そうにしている美貴に対して、信仁は安心させる為に態と明るく説明した。

美貴は、そんな信仁を見ても、まだ見ぬ滅火に怯えていた。

パジャマ姿で美貴は、合宿で使う画材や着替えの荷物を宅急便で送る用意をして、部長に合宿参加が一日遅れる事を連絡した。

調査に向かう場所は登山道も無い山で、美貴は出来るだけ身軽な荷物にしたかった。

「主……此処じゃと、電車とやから降りてどう行くんじゃ？」

白菊がベッドの上で、ふあっと浮かびながら、うつ伏せの姿勢で地図を見ている。

「とりあえず、人気の少なくなる山の麓まで、バスかタクシーで行って……後……お願い！」

たのんます！とばかりに美貴は、白菊に手を合わせて頼み込んだ。「えええ！やっぱりするの！妾はまだ、大狐になれないのに……

…主、重いよ」

美貴は、重いと言う言葉に瞬時に反応し、目をギンッと光らせ、「失礼ね！私、重くなんか無いわよ！」と、白菊に向い怒鳴り、思いつきり否定した。

「抱えて飛ぶ、妾にとっては重いの！」白菊は、美貴の剣幕に戸惑いながらも強く抗議した。

「だって……こんな山、歩いて行けないよ……道なんて無いのに」美貴は困った様子でベッドに座り、置いてある地図を見ている。

「妾は、平気ぞ」何やら白菊は、得意げである。

そんな白菊の態度に腹を立て、

「白ちゃんは、浮いているだけじゃない！歩く身にもなってよ！」と、美貴が強く訴えると、

「そんな事知らないもん！」白菊は不満げに頬を膨らませた。

「何よ！だったら、早く成長して大狐になってよ。それなら、私一人ぐらい乗せて楽に飛べるのに……何時までも子供なんだからああ」美貴が腕を組んで、意地の悪そうな表情を浮かべ、横目で白菊を見ながら言うのと、

「あつ！あああ！あつ、主！妾が、一番気にしてる事を！だったら、主だって、まだ子供じゃない！？生理？とか言うのが、まだ無いんでしょ！百合殿が言ってたよ！」白菊は悔しそうな表情で、美貴を指差し叫んだ。

「なっ、何、言ってるのよ！はっ、恥かしい事言わないでよ！鬼の一族は長寿なの、だから、普通の人より成長も、老化も遅いのよ！」帰って来たブーメランに、顔を赤らめ激しく反論しながら、美貴は余計な事を喋った百合を怨んでいた、所に、突然、扉が勢い良く開いて、

「ちよっと静かにしなさい！何、騒いでいるの！康仁寝ているのよ！」と、百合が怒鳴り込んで来て、大きな声に二人は驚き飛び上がった……康仁とは、小学校四年生の美貴の弟である。

「早く寝なさい！」百合は二人を睨みつけて言うのと、

「はああい……」と、美貴は、お母さんの声の方が大きいわよと、思いながらも、逆らう事無く素直に返事をした。

「あつ、それと白ちゃん」と、部屋を出かけた百合が、急に思い出したかの様に振向き、白菊に話しかけた。

「なんじゃ？」白菊は、何の事かと百合を見た。

「美貴ちゃんに憑いたら、気を付けてやってね」

「何をじゃ？」

「ほら、白ちゃんが憑いたら美貴ちゃん、限界が分からなくなるで

しょ」と、心配そうに話す百合を見て、

「あ、その事か……しかとった」と、白菊は頷き、軽い調子で承諾した。

その様子を見て、百合は言い知れぬ不安が湧いて来た。

「……美貴ちゃんも、良く聞いてね。私達の気の力には、限界がある事は知っているわね？」

「うん、限界は経験した事は無いけど、修練している時に、何時もお父さんが言ってたから」

百合は、美貴の座っているベッドの横に座り、

「私達の気の力は、魂の力で作られているの。だから、魂の力を超えて気を使うと、魂を削る事になるのよ……これは、危険な事なのよ」

「うん……聞いてるわ」

心配そうに話す百合だが、まだ経験した事も無く、現実的な実感の湧かない美貴は、あまり深刻に考えていなかった。

「白ちゃんが憑いて、美貴ちゃん的能力が上がっても、それは、白ちゃんの能力を借りているだけで、それに必要なエネルギーは自前の気を使っているのよ。今回は問題無いと思うけど、限界を超えて気を使うと魂を削り、命の危険さもあるのよ」

「うん……」

「白ちゃんが……あやかし達を憑けると言う事は、とても危険な事なの。あやかしが憑いて居る時は、私達のリミッターが外れるの。だから、身体能力は格段に上がるけど、化け物と戦っている時、幾ら激しく動いても疲れを感じない。どんな大怪我をしても痛みを感じない……だから怖い。疲れや痛みは、言ってみれば体の警報なの。それを感じずに、更に戦おうとする……それが鬼の血筋の者の性^{さが}なんだけど……だから、気を付けて欲しいの……本当は、お役目になんて成って欲しくはないんだけど……鬼の血を引く者の定めと言うか……私にも覚えがあるけど、自然とこの道を選んでしまうのよね……」

「お母さん……」

美貴の事を心配して、少し悲しそうに微笑む百合の顔を見て、
「うん、気を付けるわ」美貴は、心配させない様にと、明るく答えた。

その横で、百合の話を聞いていた白菊が腕を組みながら、
「そうじゃったのう……そのせいで百合殿も、何度も死に掛けたし」と、しみじみと言うと、

「もう……白ちゃんったら……」百合は、恥かしそうに白菊を見た。
「いやいや……それだけ百合殿の現役時代は凄まじかった……」
「もう、止めてよ……今は普通のおばさんよ……」

「とにかく戦った後は、十七ダンプが踏み荒らした見たいじゃと、
信仁殿も言っておったし、お玉殿と山の頂上を吹き飛ばしたのには、
妾も驚いた……」と、長々と昔話を語る白菊に、

「ほんと……やめてよね……」と、百合は、いい加減にしろ、と言
わんばかりに白菊を睨み付けた。

「そう言えば、玉ちゃん最近来ないね……以前なら一年に二・三回
来てたのに……もう、一年程来て無いんじゃない？」思い出した様
に、美貴が尋ねると、

「そうね……忙しいのかしらね？まあ、私の鬼の力が無くなって、
縛りが解けたからね……」百合は少し寂しそうに答えた。

玉ちゃんとは、近江ノ玉江おおみのたまえと言い、齡千年の白狐で神通は高大だ。

「縛りが解けたのは白ちゃんも同じでしょ……なんで居るの？私、
縛ってないのに……」

美貴が白菊に振向き、何となく尋ねると、

「いやあ……妾は、縛りが解けたからと言っても行く所が無いから
……」と、白菊は、恥かしそうに頭をかきながら答えた。

百合は微笑みながら、そんな白菊の姿を見て、

「本来は、呪詛を込めた髪の毛とか体の一部を、あやかしに埋め込
むんで縛るんだけど、白ちゃんには必要ないわよ……それに、美貴
ちゃんはまだお役目じゃないしね」と、美貴に説明した。

「じゃ、何時かは私も、白ちゃんを縛らないといけないのかな？」
友達感覚で白菊と居る美貴は、縛ると言う行為に抵抗があった。

「そうね、それは美貴ちゃんの判断に任せるわ……元々は、自由奔放で享樂的なあやかし達に私達の言う事を聞かせる為に縛るんだから、白ちゃんには必要無いかもね」

「そうだよね」百合の説明を聞いて、美貴は少しほっとした。

「私は、玉ちゃんも白ちゃんも縛っていたけど、結局は縛る必要なんて無かったかも知れないわね。二人とも、私を助けてくれて……あの激しい化物との大戦を、戦い抜けたのも二人のお陰よ……私はずっと、二人の事を大切な戦友だと思っているわ」

「勿体無い……百合殿……お玉殿も今の言葉を聞くと、きっと嬉しく思いますよ……」

微笑みながら見詰め合う二人の話を聞いて、

「大戦と言え、おじいちゃんから、よくお母さんの昔話は聞くけど、お父さんはどうなの？強かったの？」と、ふと、疑問に思った事を聞いた。

百合は、美貴の方に向き直り、

「あら、お父さんは今でも強いわよ」と、当然だと言わんばかりに言うのと、

「ええええ……とても、そんな風には見えないけど……何か、お母さんの尻に轢かれているみたいで……」美貴は、不審そうに百合を横目で見た。

自覚は有る物の、改めて娘に言われると、百合は少し恥かしいのか、頬を少し染めながら、

「尻って……あんなね……」呆れる様に美貴を見て、

「私は、両親が早く死んで鬼追家に引き取られて、お父さんは弟みたいな存在だったから……其のせいかな？」と、今度は少し照れながら説明した。

「ふううん……」少し頬を赤くする百合の顔を、更に不審そうに美貴は眺めた。

「もう、本当にお父さん強いわよ。気の力だけを比べたら、現役の時は私の方が強かったけど、お父さんは気の使い方が上手いの。私はお父さんみたいに、器用に気を使いこなせなかったわ」百合が、美貴に言い聞かせる様に話している姿を見て、

「そうじゃった、そうじゃった……百合殿は何時も、どっかあああなんとか、ぼっかああああと、派手じゃったのう……それに……」

と、再び白菊が、頷きながら昔話を語りだした。

現役の時はいざ知らず、今は御しとやかな母親を目指す百合が、
「おい……やめんか……」と、白菊を殺気の籠った目で睨み付けると、

「ひっ……」白菊は、その迫力に怯え、慌ててベッドの陰に隠れた。
「まあ、大戦があったのは、今から二十二年程前だから、その頃、お父さんは高校生だったの。だから、皆に知られる様な武勇伝は無いけど……」

気を取り直して、其処まで語ると百合は、

「でも、いざと成ったら……とおおっても、男らしいのよ……」
と、赤く染まる頬を両手で押さえながら、小娘の様に恥かしそうに身をよじっている。

そんな百合の惚気る姿を見て、

「……はいはい……」と、美貴は、しらけた気分で呆れていた。

「じゃ、明日は早いんだから、早く寝なさいね」

百合が、まだ頬を染めたまま部屋を出て行くのを見て、

「はあい……」素直に返事をしながら美貴は、まだラブラブな両親が少し羨ましかった。

静かになった部屋で、美貴は隠れている白菊に近付き、

「ねえ、白ちゃん……さっきの話、お願いだから、ねっ」と、手を合して懇願した。

白菊は、恐る恐る顔を出して、

「分かりましたよ……その代わり、きつねうどんですからね」と、膨れっ面で答えた。

「了解！それで手を打ちましょう」それで済めば安い物だと、美貴は笑顔で即決した。

俗っぽい話だが、白菊は狐の好物と言われている油揚げが大好きだ。

白菊にとって、存在を維持する為に食事を取る必要は無いのだが、油揚げが入ったきつねうどんや稲荷寿司には目が無い。

ただし、プライドにかけて、たぬきは食べたくないそうだ。あつ、関西では、きつねそばを“たぬき”って言うんです。

元々、霊体の白菊が物に触れる事は出来ない。肉体が無いため、重さも無い。

しかし、霊力で空気中の微粒子を、高密度に圧縮し変化させ実体化する事が出来る。

つまり“化ける”事が出来る。

そして、実体化する事で、物を持ったり食べたりする事が出来る。

取り合えず、取引が成功したので美貴は寝る事にした。

美貴はベッドへ入り、龍之介と一緒にいけない事を残念に思っていた。

それと、渡せ無いままのラブレター。

まだ鞆の中に入ったままのラブレターの事を思うと、美貴の気分は落ち込んで行った。

「直接、告白するなんて……出来ないし……手紙も渡せない……」

美貴は、自分に勇気が無い事を情けなく思っていた……まあ、普通そんなもんですけどね。

そして美貴は、合宿で龍之介と一日中一緒に居られる事を楽しみにしていたのに、其の日が一日減った事を残念に思った。

でも、二日目からは合流出来るんだと、持ち前のポジティブ思考で気分を切り替え、眠りに入った。

○白菊○

美貴達は、特急サンダーバードで敦賀駅に着いて、普通列車に乗り換える。

「主！きつねうどん」駅中の”今庄蕎麦”の看板を見て、姿を消している白菊が美貴に囁くと、

「我慢なさい！……見なさい、この真っ白な時刻表。乗り遅れたら一時間待ちよ！」美貴が語尾を荒く、周りに気付かれない様に小さな声で答えた。

そして、普通列車に乗り換えた美貴達は、長いトンネルを抜けて今庄駅に着いた。

美貴は、ホームに立ち周りを見渡し、その緑いっぱい……いや、緑しか見えない風景を愕然と眺めていた。

「主、きつねうどんは……」白ちゃん、よっぽど楽しみなんですね。「こんな所に有る訳無いでしょ！」と、駅を出て僅かに連なる集落を見て答えた。

とは言うものの、もう直ぐお昼の時間で、美貴もお腹が空いて来た。

「今庄駅に、今庄蕎麦が無いなんて……」と、北陸ではメジャーな、立ち食い蕎麦屋が無い事に、美貴は不満気に呟いた。

「国道の方に出てみようか……」と、美貴達は、線路を越える道路を歩いて国道に出た。

国道……いや、さすがに国道だけに美貴は一軒の食堂を見付け、「あつ、あそこにしましろう！」美貴が店を指差し、白菊が居る筈の空間に向かって言うと、

「はああい」と、姿を隠したまま白菊が元気良く返事をした。

美貴達は食堂がある事を確認して、再び来た道に戻り線路を越えて、人気の無い神社の中に入って行き、周囲に人の気配が無い事を確認した。

「OK白ちゃん……今よ……」美貴は、周りを見張りながら白菊に合図を送ると、

「承知」と、霊体の姿を現した。

そして、体をぶるぶるっと震わせたかと思うと、全身が青白い炎に包まれ、CGの様な粒子が白菊を中心に渦巻き、まるで魔法少女の変身シーンの如く、次々と粒子が集まり腕、胴、足と、形を作って行く……残念ながら、変身ポーズはまだ未開発の様だ。

そして暫くして炎が治まり、実体化した姿が現れた……が……な
んでやねん……

「あなたねえ……何で、そんな格好するのよ」怪しい者を見る目で美貴が聞くと、

「良いじゃないですか、可愛いんだから」と、白菊はスカートをふりふりさせながら答えた。

レースのフリルが沢山付いた、黒のフレアタイプジャンパースカートと、同じくレース飾りが付いた白のエプロンを組み合わせたエプロンドレス姿で、中には襟幅の広い白のブラウスに、銀のロザリオ。長くて細い足には、黒のニーソックスに、小さな赤い薔薇飾りが付いた黒のエナメル靴。長い白髪は、薔薇模様を編み込んだ臙脂色のレースのリボンでポニーテールにまとめている……ましま、ゴスロリ……夏らしくは無いですが……

「其の格好で、きつねうどんは……似合わないなあ……」そう思います。

「良いじゃないですか！放っておいてくださいよ……趣味なんだからあ……」眉をしかめ呆れている美貴に、白菊は、しれっと答えながら、上手く変化出来たかと、スカートを少し摘み上げ、可憐に体を回し裾を翻しながらファッションチェックに余念が無い。

ジーンズにTシャツとMarine（海兵隊）のロゴ入りキャップと言う、何とも素っ気無い姿の美貴は、ただ呆れて白菊を見ているだけだった。

美貴達は再び国道の方へ引き返し、お店に入ってきたきつねうどんを注文した。

村の食堂では、美貴の予想通り白菊の姿は浮いている。

食事をしている、トラックの運ちゃんとおばちゃんが、珍しい者を見る目で注目しているのに美貴は気付き、自分の事では無いのだが、少し恥かしい気分だった。

お店の人達は、きっと白菊の事を外国人の子供だと思ってると、美貴は想像していた。

白く輝く髪の毛はプラチナブロンド、明るい山吹色の瞳は金色にも見える。

狐顔とでも言うのか、目がくりっと大きくて、彫が深く鼻筋が通っている。

美貴は白菊の美少女ぶりに、嫉妬に似た悔しい思いが少し込み上げて来たが、まあ、どう言う経緯で白菊の趣味がこうなったのかは分からないが、美貴は十二・三歳ぐらいの美少女姿の白菊を見て、似合っているから良いかと思った。

注文したきつねうどんがやって来て、白菊は早速、油揚げから食べている。

そう言う物は最後に取っとくものでしょと、美貴は思ったが、幸せそうな笑顔を浮かべて食べている白菊を見て、美貴も何となく幸せな気分になれた。

「あのさ……この辺だと直接飛べるね。人気無いから……」美貴が白菊に顔を寄せて囁くと、

「えっ！此処から飛ぶんですか？」白菊は今までの笑顔を、あからさまに嫌な顔に変えた。

「はい、どうぞ！」と、美貴がまだ口を付けていない油揚げを、白菊の器へと謙譲すると、

「承知！」あっさりと取引は成立した。

白菊は実体化して食べたりした物は、体内で燃やして僅かだが靈力の補給にしている。

食事が終わって外に出て、川に沿って三百m程歩いた所で民家が無くなる。

「……この辺りから民家は無いわね。白ちゃん行くよ」美貴が辺り

を見回し、白菊の背中におんぶする様に抱き付くと、

「やっぱり、重おおい……」白菊は、迷惑そうに駄々をこねた。

「五月蠅いわね！重くなんか無いわよ！油揚げあげたでしょ！」目を吊上げて怒鳴る美貴に、

「はぁぁい……」と、諦めの表情で白菊が返事した。

高校生になっても、一向に成長する気配すら見せない胸に比べ、お尻だけが不本意にも成長して来た美貴にとって“重い”と言う言葉は禁句である。

白菊が気を溜めると全身が青白く光り出す。そして、光は炎に変わり二人を包む。

「しっかりと捕まっててくださいよ」

「うん」白菊の言葉に美貴が緊張する。

白菊が、一度しゃがみ込む様に弾みを付けて飛び上がると、景色はあっという間に山の姿を上から見下ろした。

「あまり高く飛ばないで、見つかるはずだよ」付近を気にしながら美貴が言うと、

「承知」と、白菊は返事した。

白菊は山肌に沿うように飛んでいる……時速にすれば八十km/hぐらいか……美貴は白菊の狐火に包まれているため風圧は感じないが、速度の速さを感じている。

山の木々が眼下を流れて、遠くには白山連峰が見える。

「主……そろそろ休憩……」五分程たった頃、疲れた声で白菊が訴えた。

「OK……あそこ、見晴らし良さそう」美貴が指を刺しながら指示すると、

「承知」と、白菊が返事をして美貴の指差す方へ向かった。

白菊は、木の無い平坦な所を選んで着陸し、

「はぁぁ、疲れた……」と、言って大の字になって寝そべった。ゴスロリのままで……

白菊は、単独で飛ぶなら地球一周ぐらい平気で飛べるが、それは

白菊の存在が霊体なので重さが無いからだ。それを美貴と言う重さを……本人はたいして重く無いと主張しているが……持った者を運ぶとなると、結構、霊力が消耗する。

成長して、大狐として実体を結ぶ事が出来る様になれば、何でも無い事なのだが、今の白菊にとっては、休憩しながら霊力の回復を待って飛ぶしかない。

時速八十km/hぐらいで五分飛んだので、直線距離で六km以上は移動出来たはずだ。

美貴は、地図とコンパスを取り出し現在位置の確認をする。

そして、辺りの風景を確認しながら目的地の方角を割り出している。

美貴は、直ぐ横で大の字になって寝そべっている白菊を見て、

「はしたないよ女の子が、足開いて……」と、窘めると、

「ふああい……」と、白菊が疲れた声で返事して足を閉じた。

美貴達は、それから約三十分の休憩を二回入れて目的地に到着した。

時刻は三時半過ぎ、美貴は思ったより早く着けたので、明日中に終わらなければ成らない作業を、日が沈むまでの時間に出来るだけ進めようと決め、

「白ちゃん大丈夫？」と、寝そべる白菊に訊ねると、

「もう、ちょっと……休憩……」と、白菊が気持ちよさそうに、まどろみながら答えた。

白菊の眠りは、人間の睡眠とは少し違うが、霊力の回復のために意識を遮断するため、見た目は眠っているのと変わらない。

龍神の杜もりの木陰で、涼しい風と清浄な気に包まれ、気持ち良さそうに眠る白菊の姿を見ていると、美貴も眠くなり何時の間にか眠ってしまい、目が覚め気付くと五時前だった。

「白ちゃん！白ちゃん！起きなさいって」美貴が白菊を起こそうと声をかけると、

「ふえ？……」と、目の焦点が合っていない白菊が上半身を起こし

た。

「もう、寝ばけないでよ……始めるわよ！」美貴がリュックから札を取り出す。

「ふあああい……」意識の回復が完全で無い白菊が、寝惚けながら返事をする。

「日が暮れるまでに、何箇所かマーキングするよ、ついでに寝れそうな所も探して……」

美貴は、何やらミミズが這っている様な文字が書かれた、薄い板で出来た札を何枚か手に持ち、再びリュックを背負った。

「はああい、じゃ、行きますよ」ゴスロリファッションから霊体に戻り、何時もの白装束姿に成った白菊が、おんぶする様に美貴の背中に乗って来た。

白菊は、青白い炎を上げると、そのまま美貴の背中に吸い込まれるように入って行く。

白菊が取り憑き始めると、美貴は全身が熱くなる事を感じ、鼓動が高鳴り、目がちかちかとのぼせた時の様になった。

暫くして不快感が収まってくると、今度は全身に力が漲って来る。

白菊に取り憑かれた美貴は、黒い瞳が青白く変わり、普通の人には見えないが、背中から炎を上げている。

「良い？白ちゃん、始めるわよ」美貴は、右手の人差し指を立て、目の前で振り印を切る。

「承知」白菊の声が頭の中で直接聞こえる。

すると、今まで見えなかった気の流れが見えてくる。綺麗な気だった……清浄で穏やかで。

見えて来た癒しの気に、美貴は眠くなるはずだと納得した。

美貴は、お札を地面に指で押し当て、右手で印を切り念を送る。

すると、お札は僅かに光り静かに地面に沈んで行く。

「これで一つ完了」簡単な作業ではあるが、

「これからが大変なのよねえ……」と言いながら、気の流れに沿っ

て斜面を見上げる。

気の流れに沿って道の無い所を移動して、お札を埋めて行くという、結構大変な山登りだ。

この作業は、マーキングと呼ばれている気の調査で、気の流れを見て変化しているポイントにお札を埋めて行く。そして、もし気の流れに異常が起きれば、お札が反応して本山や各同宗の寺にいる“お守り様”と呼ばれている僧侶達が感じると言う仕組みだ。

お守り様と呼ばれる僧侶達は、はっきり言って化物みたいに法力の強い者達で、お寺にいながら自分の受け持ち地域の、こうして埋めたお札の一つ一つを感じる事が出来る。

白菊が憑き、大きく身体能力の上がった美貴は、山の斜面を木の枝から枝へと猿の様に飛び移ったり、高さ二十mぐらいの崖を駆け登り、気の変化しているポイントを探しながら、札を埋めている。

「本当に、もう！……可憐な乙女に肉体労働させて！」と、信仁に文句を言いたかったが、

「夏休みの二万円はラッキーかな、欲しかったCDも買えるし、友達と海にもいけるな……」と、割切ってもいた。

その頃信仁は、依頼のあった工場予定地の近くにある温泉で、お銚子に乗せたお盆を浮かべ、のんびりと露天風呂に浸かって居た。

「はぁ……生き返るねえ……」

「そうじゃのう……」

山が連なる緑の風景を見ながら、幸福感に浸る信仁の隣には、十五・六歳の少年が同じく景色を眺めながら座っていた。

「でも、良いのか信仁。こんな良い旅館に泊まっても……贅沢すると、また百合殿に怒られるぞ」心配そうに少年が信仁に声を掛けると、

「大丈夫、大丈夫。将鬼丸。今回は全部、企業持ちなんだから……百合ちゃんだって文句はねえよ！……風呂出たら宴会も有るみたいだし、たまには、ばああつと行こうぜ！」と、信仁は、猪口を傾け

ながら気楽に答えた。

将鬼丸と呼ばれた少年は、信仁に憑いている龍の化身だ。

上品な顔立ちの将鬼丸は、長い灰色の髪の毛を、湯船に浸からない様に頭の上で一つにまとめている。

日頃、色々と百合に頭の上がない信仁の事を理解している将鬼丸は、

「ばあっとって……」と、すっかり出来上がっている信仁を呆れた顔で眺めながら、ため息を付いた。

○懸想す思ひ人○

「さて、こんなもんかな……」と、日が翳^{かげり}り薄暗くなった空を見ながら美貴は思った。

薄暗い中、美貴は木々の間に少し平坦に開けた場所を見付け、辺りを見渡すと、

「あっ、ラッキー！川だ！」十m程降りた所に小川があり、今夜は此処に泊まる事にした。

こんな場所での野宿は、小学生の頃から信仁に連れられ何度も経験している。

「白ちゃん、今日はこれぐらいにしましょう」

「承知」美貴の言葉に白菊が返事をして、美貴の体から離れた。

美貴は、まだ辺りが僅かに明るい間にテントを張り、其の中に荷物を入れ、着替えとタオルを取り出した。

そして、斜面を下り川に着くと、ぱっと潔い脱ぎっぷりで素っ裸になって、タオルを川の水に浸け、体の汗を流す。源流に近い小川の流れは、冷たくて気持ち良い。

木々に囲まれた自然の中で、開放感に浸りながら体の汗を流していると、悩んでも仕方が無いと思いつつも、どうしても気になる事がある。

そう、風が吹き抜ける、凍て付いた湖の様な平滑な胸……EF^{エフエクト}

ピュウウウ……

美貴は自分の胸を見ながら、

「遺伝かな？お母さんもだし、希望無いなあ……お祖母ちゃんもだ……絶望的だね、貧乳のサラブレッド……なんやねんそれ！」と、寂しく一人で突っ込んでいた。

美貴は低身長と低脂肪乳が、他人が思うより深刻にコンプレックスを感じていた。

この胸で、本人の生活が不自由である訳では無いのだが、自分の理想とは懸け離れた現実に不満を感じ、周りの目が気になった。

体育の授業で着替える時、周りの同級生達の膨らみが目に入ると、自分は思うわれているのかと気になり、特に、憧れの龍之介が、普段どう言う目で自分を見ているか気になる。

「海神先輩、こんなの嫌かな？貧乳は嫌いかな？男の子って巨乳が好きよね。駄目かな私……悩んでもしょうがないけど。せめて、身長だけでも何とかならないかな。遺伝だしたら、希望はあるんだけどな……」と、胸を見詰、本人にとっては最重要問題を真剣に悩んでいると、

「主？どうしたのじゃ？」と、後ろから白菊が声をかけた。

内宇宙の精神界に、どっぷりはまっていた美貴は、急に声をかけられ飛び上がって驚いた。

「あっ、いえっ、なっ、何でも無いよ、景色が綺麗だなああって」と、あせって答えると、

「もう、真っ暗だよ……」白菊は、きよろきよろと辺りを見回している。

『そんな事は分かってるわよ！きよろきよろすんな！』と、思いつつも、

「あは、そうね……あっ、食事にしましょうね」美貴は、ばつが悪そうに話題を変えた。

美貴は着替えて、ペットボトルに水を入れて、テントの張ってある所まで帰って来ると、ランタンを点けて、コンロに火を点けてお

湯を沸かす。野宿する時の、何時もの手順だ。

「さて、白ちゃん、じゃああん、これなあんだ」美貴がリュックからパックを取り出すと、

「あつ、お稲荷!」と、満面の笑みを浮かべて白菊が叫んだ。

「これ、白ちゃんの分ね」美貴がコンビニで買った、三つ入り二百円のパックを差し出した。

すると白菊は直ぐに実体化し、お稲荷を受け取ると、パックに頬擦りしながら、

「主、忝い……その、気持ち嬉しい……」と、白菊は満足そうな笑みを浮かべている。

「何、大げさに言っているのよ……」白菊の喜び様に美貴も嬉しかった。

「明日も、がんばってよ」

「はああい!」と、美貴の言葉に白菊は元気な笑顔で答えた。二百円で御手軽である。

食事も済み、これからは焚き火タイム。美貴の好きな時間だ。

拾って来た小枝を二十cmぐらいに折り、あまり大きな火にならない様に少しづつ燃やす。

ゆらゆらと揺れる小さな火を見ていると、色々な事が思い浮かんでくる。

今、気になっている事は……龍之介の事。

入学して間もない時、校舎で迷っていると優しく声をかけてくれたり、初めての学食で、食券を買うのに戸惑っていた時に助けてくれた事がとても嬉しかった。

他愛の無い事だが、美貴にとっては、優しくて素敵な先輩と言う印象が刷り込まれ、龍之介が美術部員だと知ると迷わず美術部に入部した。部長に釣られて入った龍之介に似ている。

入部してからは、優しくて面倒見の良い（お節介とも言う）龍之介に益々惹かれて行った。

惹かれて行く内に、あんなに素敵な先輩なんだからと美化し過ぎ

（あるある）きっと自分の他にも、素敵だと思っている人がいるはずだと、また、龍之介には誰か好きな人がいるんだろうなと、ネガティブな不安が湧き上がり、私なんか、だめだよねと、落ち込んでしまう。

渡せずにいるラブレター。

切なる思いを、告白出来無い心の足掻き^{あが}。

膨らむ想いに耐え切れず、書いてしまったラブレター。

文字に託し、優しくして貰った感謝の気持ちと、憧れる気持ちを綴ったが、好きだとは怖くて書けなかった。

一度は書き上がったラブレター、それを何度も読み直し、何度も書き直していると、このまま持って居ようかと弱虫な自分が囁く。

だけど、伝えたい気持ちは押さえ切れない。

直接手渡す事など出来ない臆病者。

それでも勇気を振り絞り、何度もロッカーへと立ち向かったが、

全戦全敗。

ロッカーがまるで、門を閉ざす強固な砦に思えた。

伝えたいのに伝えられない。

もう後ほんのちよつとの勇気があればと思ってみても、勇気の出口を何かが押さえている。

それは怯える自分自身。

幼い恋心は、美貴も今までに何度も経験したものの、龍之介への思いは今迄のそれとは違っていた。

初めて経験する胸を締め付けられる思いに戸惑い、普段は明るい性格の美貴を、不安が臆病にさせていた。

それは、鬼の血筋の事を知られたくない思いが、美貴の勇気を縛り付けていた。

思いに耽^{ふけ}る美貴の前で、白菊は何やら虫達を集めて楽しそうに遊んでいる。

「白ちゃんは、誰かを好きになった事があるの？」と、美貴は何となく白菊に声をかけた。

「何の事じゃ？先の主の百合殿も、今の主の美貴殿も、信仁殿も、皆好きじゃぞ」白菊は美貴の方を向いて、何の事かと不思議そうな顔で答えた。

「ううん、そうじゃなくて、恋したとか、愛したとか……」やっぱり分らないわよねえと、美貴は思いながら聞いた。

「懸想けそうす思い人の事か？」

「えっ、えええと……だぶん……」美貴は、今の日本語？と思いがら適当に返事した。

「妾は、おらん……でも、お玉殿には居ったと聞いた……」

「玉ちゃんに？……」

少し顔を曇らせる白菊に疑問を感じながら、美貴は玉江の事を思い浮かべ、

「プライドが高くって、ハードボイルドな玉ちゃんからは想像出来ないな……でも千年も生きているんだから、恋の一つや二つは有るわよねえ」と、龍之介に憧れている自分を玉江に重ね、両手を胸の前で組んで、浪漫チックな思いに浸りながら空の星を眺めて言う、「そんなもんかの？妾には、よう分からんが」白菊は、美貴の方を見もせずに味気無く言う、また虫達と遊び始めた。

そんな白菊を横目で見ながら、

「まあ、白ちゃんも、大人になれば分かるわ……」と、少し見下す様に美貴が言う、

「何よ！主だって、子供の癖に！」白菊が振向き反論する。

「あのね！……ねえ、前から聞こうと思ってただけど……白ちゃん、話し方おかしいんじゃない？」美貴が訝しげな目で白菊を見る。「なにが？」

「それよ……」妾は、八幡の白菊じゃ”なんて言い方したり、“何でよう”なんて言い方したり……」

「何でだろ？……別に意識してないよ。百合殿や主という時間が長いからかな？……良いではないか、細かい事は」白菊は、そう言いながら屈託無く笑っている。

「外人さんが長く日本にいて、日本語が話せる様になる様なものかな……違うか？」

美貴は何やら話題が変わってしまい、どうしてこうなったか思ったが、

「まっ、いいか……さあ、寝よ寝よ」と、睡眠を優先させ、火の始末をしてから、美貴はテントに入り寝袋を用意した。

「じゃ、おやすみ」美貴がテントから首を出して、外の茂みに横たわる白菊に言うと、

「おやすみなさああい」白菊もそう言って二人は眠りに入った。

— — — ◆ — — —

仮の^{ねぐら}場所に訪れた、静けさに固まった朝に気付いた時、自分の鼓動さえ耳障りだった。

まだ青く硬い空気の中、川を走るラムネ色の水で顔を引き締め目を覚ます。

時間がゆっくりと流れる非日常的な空間で、微風^{そよかぜ}に撫でられる濡れた頬が心地^い好い。

昨夜、居場所を与えてくれた火は、ささやかな思い出を残し、白い灰となっている。

僅かに残る虫の声と、囁^{ささや}き始めた小鳥の声を聞きながら、少しの未練と供に灰を押しわけ、新たに火を起こし、幼馴染^{すず}の煤けたコッヘルに水を入れ、火に架ける。

群青色が徐々に色褪^{いろあせ}せ、透^{すきとお}通り始めた空の深さを眺めながら、コンビーフの缶の封を切る。

缶から引きずり出した塊に噛^{かぶ}り付き、機械的に咀嚼しながら寝ぼけた味覚で味わう。

最後の一口を喉に押し込んだ時、コッヘル^かの蓋が踊りだし、湯が沸いた事を教えてくれた。

口に残った脂っこさを、熱いブラックコーヒーで洗い流す頃、朝焼けの空に閃光が走った。

稜線の背後から放たれた緋色の光は、朝靄^{あさもや}を突き刺し、天空へと

光と影のストライプを絵描いている。

そして太陽が、其の眩しい光を自己主張した時、今日の始まりを感じた……

夏の早朝、美貴が冷涼な一時ひとときに浸っていると、

ク、カァー、ク、カァー、ク、カァーと、白菊の、とても可愛い
とはいいがたい寢息に、気分をぶち壊された美貴は、顛こめかみの当たりで
“ぶちっ”という音が聞えた。

「何時いつまで寝てんのよ！」美貴が仁王立ちで白菊を怒鳴り付けた…
…まだ、五時過ぎですが。

「ふええ？……」白菊は、寝ぼけ眼まなこでよだれをたらしている。
はい、其処の人。霊体なのにと突っ込みを入れない様に。

「今日も忙しいのよ！早く起きなさい！」

「まだ、眠いよ……昨日、力……沢山使って……」白菊は寝返りを
打って、再び夢の世界へ。

美貴は、どうしてくれようかと考えたが、最終手段を執行する事
を決意し、

「終わったら、きつねうどん」と、ぼそっと呟いた。

耳をぴくりと反応させ、それを聞いた白菊は

「おはようございます！」と、飛び起き、満面の笑顔で答えた。効
果覲面である。

初陣

○三十郎○

「……なあ、頼むよ……隣の山に移ってくれよ……」

「うっ、うっ、わっ、わてが、何した言いまんねん……ひ、酷いんとちゃいまんか……」

信仁は、しくしくと泣いている体長二mの大狸を前にして途方に暮れていた。

「わては、此処に二百年住んでまんねんで……せやのに、行き成り、出て行け言われて、どつかれて……無茶苦茶でんがな……」大狸は恨めしそうに、痛む頭を撫でながら信仁を睨んだ。

「悪かったよ、めそめそすんなよ……だけど、お前だって……最初に襲って来たのは、お前の方じゃないか……」

「そりゃ、そうでっしゃろ！あんたら人間の勝手で、行き成り出て行け言われたら、誰でも怒りまっせ！ええ加減にしなければ！」泣いていた大狸は、今度は力強く拳を握りながら立ち上がり、信仁に怒鳴り付けると、

「うっ……そりゃ、そうだけど……」信仁は大狸の迫力に押され、続く言葉が無かった。

「動物虐待反対！官憲横暴反対！妖怪差別反対！自然破壊反対！暴力行為反対！」

「な、なんなんだよ……」

「……また、面倒な奴に当たったな……」信仁の隣で、歌舞伎衣装の様な派手な着物姿の将鬼丸が、地面に付きそうな長い灰色の髪を手持ち無沙汰に弄りながら、面倒臭そうに呟いた。

「わ、わてかて、此処いらじゃ三十郎狸言うて、齡三百の大狸で通ってまんねん。意地でも退きまへんで！」と、三十郎と名乗った大狸は、どかっど、その場に胡坐をかいて座った。

その姿を見て、困った顔で二人は顔を見合わせて溜息を付いた。
下等で自我の無い凶暴な化物が、力尽くで襲って来るなら事は簡単なんだが、大した霊力も無いくせに口だけが達者な三十郎に、二人はどうした物かと悩んでいた。

「工場予定地に測量に來た作業員を、化物に化けて脅かしたり、着工準備の資材を、こっそり谷底に落としたりして、工事の妨害をしたらなあ……」

「されど、人を傷付ける様な事は、しては居らんし……力尽くと言うのも……」

「確かに……気が引けるよなあ……」

「そもそも、こ奴の言い分も正論じゃ……如何致す？ 信仁」

「如何致すったって……昨夜は企業持ちで芸者を上げて遊んだしなあ……大見得を切った手前、このまま、すごすごと引き返す訳にも行か無いし……」と、信仁は、ほとほと困っていた。

将鬼丸が困っている信仁を見て、何とか説得しようと、居座った三十郎の前にしゃがみ、

「しかしな、三十郎殿。このままでは、我らも困る……手荒な事は、したくは無いが……このまま、争えば……その、少々痛い目に……」
おずおずと言いかけると、

「おお、上等やないか！」将鬼丸の言葉を遮って、三十郎が叫んだ。
「人間に言われて、あっさり逃げ出したと知られたら、わての面子がおまへん！ そんならいつその事、一思いに、ばっさりと遣ったってんか！ その方が、わてかてすつきりするわ！」

さっきまで、信仁に殴られて情けなく泣いて居たくせに、二人が強行手段に出る事を躊躇っている事を知ると、今度は一変して大見得を切る三十郎に驚いて、将鬼丸は思わず後ろに仰け反り尻餅を付いた。

腕を組んで、そっぽを向いている三十郎を見て、将鬼丸は尻餅を付いたまま、困り果てた顔で信仁の方を見た。

苦虫を噛み潰した様な顔で、腕を組んで考え込んでいた信仁が、

徐に三十郎を見ると、

「面子が立てば良いんだな……」と、重々しく言った。

「えっ？」信仁の言葉に、二人は注目した。

「……お前、神様になりたくねえか？」

「はあ？」信仁の意外な言葉に三十郎は、訳が分らず眉を顰めた。

「お前は、この土地を人間に貸す。その代わり、社を建てて祀る。^{やしろ}

詰まり、お前は其処の神様に成るって事だ……」信仁は、目論見を^{もくろみ}

三十郎に説明した。

「……ええ……でも……それって……わてに何の得が有るんでしやる？」

今ひとつ、信仁の条件のメリットが読めない三十郎は、確かめる様に身を乗り出して、信仁に尋ねた。

三十郎が自分の話に興味を持った事に、

「何だよ……お前、神様に成りたくないのかよ……中々成れないぞ、神様なんて……」と、意味深な笑みを浮かべて、信仁が誘うと、

「あっ、いや、そりゃ……成りたいでっけど……」と、三十郎は本音を漏らした。

話に乗って来た三十郎に信仁は、しめしめと笑みを浮かべながら、「いいか、たとえ小さくても良いから、社を建てて祀って貰うと、社を中心に清浄な気が流れ込むんだ。そうしたらお前の霊力も強く成るってもんだ」と、説明した。

霊力が強くなると聞いて、

「ふむふむ……」と、三十郎は更に身を乗り出して、興味深々の目で信仁の話を聞いた。

「土地神として祀られたお前は、此処を治め鎮護する……評判が立てば、芝右衛門や団三郎と並ぶんだぞ……お前の格式も上がるってもんだ……」

「……そ、そんな、有名所と並ぶやなんて……」実力の無い者ほど、格式には弱いものだ。

「そして有名になれば、毎月の例祭と、年に一度の大祭に集まる人

々の信仰の心が、更に氣を清浄にしてくれる……どうだ、悪い話じゃないだろ。これだけ広い山なんだ、ちょっとぐらい人間に貸してやれよ。その見返りに神様に成るんだ、お前の面子だって立つたろ？」

信仁が、どうだと言わんばかりに、三十郎の顔を覗き込むと、
「追い出されるやのうて、貸すんか……その見返りに、祀って貰うて、神様に成って、格も上がる……悪うは無いな……」ぶつぶつと呟きながら、三十郎はニヤニヤとにやけて居た。

齡三百と強がってみた所で、所詮は化ける事しか出来ない臆病な三十郎は、？ばつさりと遣ったってんか！？と、大見得を切ったものの、その実は怖くてしょうがなかった。

それに、面子に拘り意地を張ってレジスタンスした所で、どうせ最後は叩き出されるのが落ちだと言う事は、三十郎も十分理解していた。

「どうなんだ？悪くは無いだろ……」三十郎の顔を見て、信仁が駄目出しをすると、

「よっしゃ！わても男や！」三十郎は、ぽんっと腹を一つ叩くと立ち上がり、

「じゃあない！乗ったろ、その話！」と、信仁の手を両手で掴んだ。実力の無い臆病者が、それを悟られまいと虚勢を張って、面子に拘る。

そんな三十郎にとって、信仁の提案は、正に渡りに船。願ったり叶ったりだった。

信仁と三十郎が両手を強く握り合いながら、

「じゃ、後は任せてくれ。俺がちゃんと話を付けるから」と、笑顔で信仁が言うのと、

「よっしゃ、任した！」と、三十郎も笑顔で返した。

三十郎を説得出来た事で信仁は、三十郎以上に嬉しかった。

昨夜の宴会で散々飲み食いをした挙句、駄目でしたでは、非常に不味い事になる。

こんな簡単な祓いで手こずって居ては、言わば、信仁一人の評判を落とす事に止まらず、お役目全員の評判を落とす事に成るからだ。そう成れば、何れは嫁である百合の耳にも入るだろう……信仁は、そんな恐ろしい事だけは絶対に避けたかった。

「いやあ、良かった良かった！」

「ははは、頼むでえ！」

乾いた笑いを浮かべながら肩を抱き合う二人を見て、

「なんだかなあ……」と、将鬼丸は呆れていた。

○玉江○

「はぁーい」インターフォンが鳴り、百合はパタパタと走って玄関に向っている。

インターフォンなんだから、台所にある受話器を取れば済む事なんだが、田舎では、近所の耳の悪いお年寄り達が、取れたての野菜等を持ってやって来る為、直接応対した方が早い。

百合が、無駄に広い玄関の、鍵なんぞ盆と正月に行く家族旅行の時以外、閉めた事の無いドアを開けると、其処にはレディースーツに身を包んだ二十歳ぐらいの女性が立っていた。

「あら！」

「ご無沙汰いたしております」

不意の訪問者に驚く百合に、その女性は丁寧に頭を下げた挨拶をした。

微笑んでいる女性の、気品ある美しい顔の額には、刺青の様な赤い十字の文様が有り、後ろで一つに束ねて居る長い白髪が、聊か、レディースーツには不釣り合いにも見える。

「玉ちゃん、お久しぶり……元気だった？」懐かしそうに微笑みながら尋ねる百合に、

「はい、百合殿も、お変わり無い様で……」若い女性も、微笑みながら答えた。

玉ちゃん……近江の玉江。現役時代の百合に憑いていた、齡千年の白狐だ。

「ええ、さっ、上がって」百合が玉江を招き入れると、
「失礼致します」と、玉江は一礼をして玄関を潜った。

「何も玄関から来なくても、霊体なら何処からでも入れるのに」

「いえ、それでは、ご無礼かと……」

「暫くは居てくれるんでしょ」

「ええ、ご迷惑でなければ」

「そんな、迷惑だなんて……ずっと居てくれても構わないわよ」
懐かしそうに話をしながら二人はダイニングに入り、玉江は椅子に座った。

そして、キッチンに入った百合が、暫くしてお盆を持ってやって来て、

「玉ちゃん、久しぶりでしょ。お稲荷さん食べる？」と、玉江の前に、稲荷寿司を三個乗せた皿とお茶を置くと、

「おお、これは……忝い！」玉江は、上品な顔に笑顔を炸裂させて礼を言った。

玉江も白菊同様、お稲荷ときつねうどんには目が無い。

二人はお稲荷を食べながら、他愛の無い雑談を懐かしそうに話していた。

「そう言えば、どうなの……相変わらずなの？」百合が真面目な顔で尋ねると、

「……ええ、相変わらずです……」玉江は、少し悲しそうに微笑んだ。

「やっぱり、許して貰えないの？」

「……そうですね……妾も赦免されるとは思っては居りませぬ」

「でも……」

「いえ、それで構いませぬ……妾の犯した罪は、決して許される事では有りませぬ故……」

「でも、ずっと弔ってるじゃないの」

「……百合殿、弔うと言う事は、死者の為では無いのやも知れませぬな……」

「えっ？」

寂しそうに話す玉江の言葉に、百合は意外そうに少し驚いた。

「死者の魂の安寧を願ひ弔う事は、結局は、妾の為やも知れませんが……五百年前……三十年の間、夫婦（めおと）としてお慕ひした殿と、その家臣、百人以上を殺した妾の……怒りに任せて殺した妾の罪の贖罪やも知れませぬ……」

「そんな……」

「幾ら弔った所で、死者は帰っては参りませぬ……三十年の間、一途にお慕ひした殿……なのに裏切られた……それは、妾が白狐である事を謀り、人として殿に近付いたせい……全ては愚かな妾の罪……弔う事は、そんな妾の虚しい贖罪……弔う事で、罪の意識に苛まれる妾の心は、一時の安らぎを得る事が出来ます……言わば、自己満足に過ぎませぬ」

「玉ちゃん……」

玉江は、寂しそうな顔で窓の外を眺めている。

遙かな昔、人間の男に惚れて、人に化けて近付いた玉江。

一途に愛し、幸せの内に共に夫婦として暮らした三十年。

しかし、正体がばれて殺されかけた玉江。

愛した男に刃を向けられ、その絶望感に正気を失い、殺戮に狂った玉江。

百合は、そんな玉江の深い悲しみを誰よりも理解していた。

「本来なら、妾はその罪で滅せられる筈でしたが、伏見様は妾を滅する事無く、真の贖罪の道を見付けよと仰せられた……百合殿と出会うまでは、妾はその意味が分からず、あれ以来、人なぞ信用出来ぬ者と思って居りました」

遠い昔に思いを馳せる様に、遠くの景色を眺めながら、寂しそうに話す玉江の話を百合は黙って聞いている。

「全く、情け無い話です。額に咎の十字を刻まれ、死者への贖罪を

命じられたのに、人に不審を持つなんぞ……そんな事では、何も見付ける事なんぞ出来んの……妾はそれに気付かず、五百年の時を無駄に迷い苦しんで居りました……未だ、贖罪の道を見付ける事は出来ませぬが、人に不審を抱き迷い苦しんでいる妾を、百合殿は救って下された」玉江は、静かに百合へと振向き微笑んだ。

「そんな、救っただなんて……助けて貰ったの私の方だわ。玉ちゃんのお陰で、あの大战をお役目として戦えた……本当に感謝しているわ」

「勿体無い……妾は使徒として当然の事をしたまで。褒められる様な事はしておりませぬ」玉江は、そう言って静かに頭を下げた。

「ううん、そんな事無いよ。役目だけじゃ無く、まだ若かった私の、心の支えにもなってくれて……私ね、ずっと思ってるよ。玉ちゃんと出会えた事を感謝して、共に戦えた事を誇りに思ってるよ」百合は、目に涙を浮かべながら、玉江の手を両手で強く握った。

「主……有り難いお言葉……妾も主と出会えた事を幸せに思い、主のお役に立てた事に喜びを感じて居ります」百合の握る手の上に、もう片方の手を置き、玉江も強く握り返した。

人とあやかし。

その壁を乗り越え、心を通い合わせた二人は、強い信頼と尊敬で結ばれていた。

○初陣○

「よし！終了。白ちゃん、もう良いよ離れて……」白菊が百合の背中から姿を現す。

「五時過ぎか、あああ、喉、乾いた……」白菊が離れた後、美貴に疲労と喉の渇きが襲う。

真夏の太陽が照付ける中、険しい斜面の昇り降りに、美貴は汗だくになっていた。

木陰はあると言うものの、用意したペットボトルの水は既に無く

なっていた。

へたり込む美貴の姿を見て、

「大丈夫？」と、白菊が心配そうに美貴の顔を覗き込むと、

「うん……喉、渴いちゃって……」美貴は力なく答え、その場に寝転んだ。

「あれ……川？……主！川、有るよ！」白菊が、崖下を覗きながら美貴に伝えた。

それを聞いて美貴は、這うように崖に近付き覗き込み、

「おお、ラッキー！白ちゃん飛んで！」五十m程下に川を確認して美貴は歓喜の声を上げた。

「承知」白菊が実体化し、美貴が負ぶさる。

麓まで、休憩を入れると二時間程掛かる為、此処で飲めれば助かると美貴は思った。

白菊は、下の木々の間に見える川へと飛び降り、あっという間に下に降りた二人は、急に顔色を変えて辺りを見回した。

「……何？此処……」

「……………」川の傍に着地した二人は、異様な雰囲気警戒した。

幅三mぐらいの浅い川が流れている谷間には、特に変わった様子は見えないが、空気が体に重く圧し掛かり、何かどろどろとした物の中に居る感覚に、美貴は軽い吐き気を模様した。

初めて体験する、明らかに尋常では無い気配に、美貴は恐怖を感じ身を縮める。

「主……此処、空気悪いよ……」警戒する白菊の釣りあがった目の淵に、刺青の様な赤い筋の隈が浮かび上がり、長く白い髪の毛は波打つ様に逆立っている。

「分かってる……気を付けて……」

「承知」

美貴は、警戒しながら川にペットボトルを沈め、幾らか入った水を一気に喉に流し込んだ。

「白ちゃん、早く離れよう……」美貴が周囲に目を走らせながら言う

と、

「何じゃ、あ奴等……」白菊は目を細め一点を見つめながら呟いた。
「えっ？」と、白菊の目線の先にある物を見た瞬間、美貴の頭の中がホワイトアウトした。

「……じ……るじ……あるじ！」

「あっ！えっ！何？」白菊の叫び声を聞いて、何で自分は寝ているのだろうと思っていると、

「こんな時に、気絶しないでよ！」と、目の前で白菊が叫んでいる。一瞬ではあったが、美貴は気絶していた事に気付き、

「なっ、何よ！あれ！」状況を思い出した美貴は、慌てて上半身を起こし後ずさりした。

「ムカデの化身です！」

長さ十mは有ろうかと思われる黒いムカデ達が、川の下流の方から狭い谷間を覆い尽くす様に蠢き迫^{うごめ}って来る。

「な、何匹いるのよ！こんなの見て、気を失わない方が変よ！……気持ち悪ううい！」

美貴は腰を抜かした様にへたり込み、震えながら自己弁護した。

「……後ろからも……」白菊は振向き、背後から迫る気配を感じていた。

「主！早く掴まって！」白菊が美貴に向かって叫ぶと、

「うん！」美貴は、飛び付く様に白菊に掴まった。

白菊が、飛び上がろうと上を向いた瞬間、辺りは急に薄暗くなり、「えっ！……」と、声を上げて白菊は、動きを止めた。

高さ五十m程の、緩やかな斜面に挟まれた谷間の上空には、どす黒い紫色の雲が蓋をする様に掛かり、辺りを薄暗くしていた。

「……結界……」白菊が不安そうに呟くと、

「えっ？結界……って……」美貴は、始めて見る結界に戸惑いながら、上空を見詰めた。

「何者だ？……」白菊が、迫るムカデ達を見越す様に、周囲の気配を探る。

「主！鬼斬丸を！」

「えっ？逃げないの？」

「だめ、結界を張られたら逃げられない」白菊が、周囲を警戒しながら美貴に言っていると、

「そんな……」美貴は、不安そうに呟き、白菊から離れた。

「隠れる場所も無いし……やるしか無いでしょ……」

「う、うん……」美貴は、初めての体験に戸惑いながら、不安そうにリュックを下ろし鬼斬丸を取り出した。

白菊が辺りを見回していると、後ろから迫って来たムカデ達が姿を現した。

「主、憑きます」

「お、お願い……」

不安を隠せない美貴の背中に、白菊が溶け込む様に入って行くと、美貴の背中から青白い炎が立ち昇り、美貴の瞳が青白く光る。

この程度の化物なら、白菊単独でも相手出来たが、数が多すぎる。隠れる場所も無い狭い谷間で、美貴と別行動を取れば、美貴を守りきれないと白菊は判断した。

「あっ！で、でも、私……どうしたら良いの！初めてだよ！こんな
の！」

初体験に戸惑う美貴。嫌！優しくして……と、まあ、誰でも最初
は不安です……

「落ち着いて！妾が、繰ります」白菊の声が美貴の頭の中で響く。

「えっ？何？どうするって？もう！どうすれば良いのよ！」美貴は、
未体験の不安から苛付き、訳の分からないまま、取り合えず鬼斬丸
を刀袋から取り出し、封じの鞘から抜き放った。

と、その時、いきなりムカデが数匹飛び掛って来た。

「ちようう！まだ準備が……」ムカデが襲い掛かると同時に、慌て
ふためく美貴の意思とは関係なく、体が勝手に飛び退きその場を離
れた。

「あれ？何これ？……勝手に体が動いてる」と、美貴は不思議に思

っていると、

「主、急いで！」と、白菊が催促した。

「うん！」美貴は、抜き放った鬼斬丸に気を送ると、鬼斬丸は緑色の光に包まれた。

その瞬間、又、体が勝手に動き、迫るムカデへと飛び掛った。

「いやああ！アップはいやああ！」ムカデのアップは思いっきり、きもい！

迫るムカデから、美貴は目をそらす。が、手が勝手に動き鬼斬丸を振り下ろす。

すると、緑の光に包まれた鬼斬丸がムカデの頭を切り裂き、美貴が着地した直後、ムカデはどす黒い紫の煙を出しながら塵となって消えた。

「なっ、何がどうなっているの？」美貴は、光る鬼斬丸を不思議そうに眺めている。

「落ち着いて！妾が繰るから、主は気を送り続けて！」

「くる？繰るって……あっ！」美貴は今、白菊に操られている事を理解した。

理解して美貴は、母親と一緒に戦っていた経験者の白菊を、心強く思い、初体験に対する不安が和らいだ。

安心感から気を取り直した美貴は、

「ファツキュウ！カモオオン！かかって来んかい！」と、中指を立てて挑発すると、ムカデ達が一斉に体を起こし、戦闘態勢に入った……女の子が言う言葉じゃねえだろ……

美貴は、体を起こしたムカデ達の黄ばんだ薄紫の腹を見て、

「いやああ！やっぱ気持ち悪い！」と、顔を背けながら、一気に気を送ると、鬼斬丸から緑色の光が五十cm程延び、それを青白い炎が包み込み日本刀の様に形を作る。

襲ってくるムカデを飛び退き交わしながら、次々とムカデ達を薙ぎ払って行く美貴は、

「ちくしょう！行け！やれっ！やれっ！白ちゃん！」と、気分は、

すっかり応援団。

美貴は、自分自身が戦っていると言う道理を忘れ、完全に傍観者になっている。

但し、目にムカデの姿が映ると、

「きゃああ！こつち見ないでえ！こつち来ないで！」等と、とんだ我ままを言っている。

「きゃああ！きゃああ！きゃああ！キモイのいやあああ！」まあ、分からなくも無いが……

美貴が叫んでいる間に、白菊の活躍で何時の間にか辺りは嫌な臭いを残して静かになった。

白菊が美貴の背中から、すうっと抜け出すと、美貴の体から急に力が抜け、体の重さに思わず膝を付いた。

「主、大丈夫？……」白菊は周囲を警戒しながら、美貴を気遣った。

「うん、大丈夫……はあ、はあ、片付いた、みたいね、はあ、はあ」美貴は、叫び疲れ、大きく息をしている。

「まだ、油断しないで……」白菊は、まだ警戒している。

「うん……でも、私もう限界かも……」美貴は、そのまま座り込み、大きく息をしている。

まだ、気の力は残ってはいたが、激しい動きをした事で、体力は限界に近付いていた。

元々、鬼の血筋の者は、普通の人より身体能力は上でも、所詮は人間、筋肉も骨格も同じ組成に変わらない。

それが、あやかしを憑けて超人的な動きをするのだから、限界は直ぐにやって来る。

特に、未熟な美貴は、初めての経験と言う事も有り、限界は早かった。

美貴は叫び疲れた事は別として、今の戦いで可也体力を消耗していた。

「……早く此处を離れて、信仁殿に報告しないと……」

「うん、とにかく、逃げましょう……」何とか息を整えた美貴は、

ゆっくりと立ち上がった。

「でも……あの結界が、妾で破れる程度のものであれば良いんだけど……」と、上空の結界を眺めながら、白菊は実体化した。

「駄目なの?……」と、美貴が不安そうに白菊に尋ねると、

「主、下がって……やばいかも……」白菊は何かに気付き、怯える様に身構える。

「そんなに、やばいの……」白菊の様子を見て、美貴は不安な気持ちに更に膨らんだ。

「ええ……小さいとは言え、結界が張れる奴ですから……大将のお出ましか……」

白菊は、何かの気配を感じて一点を睨みながら身構えている。

「下賤なムカデの化物達に、結界など張れる訳が無いとは思ってたけど……」

「えっ?……」美貴は、白菊の言葉の意味が分から無いまま、白菊の見詰める方を見た。

その視線の先に、灰色の靄が掛かったかと思うと、次にどす黒い紫の煙が、小さな竜巻の様に渦を巻き始め、徐々に姿を固まってく。

それを見て美貴は、

「もうムカデは止めてよね……」と、怯えながら思っていた。

立ち昇る渦は、徐々に人の姿へと変化し始め、ムカデでは無い事に美貴はほっとした。

しかし変化が進むどす黒い影に、ムカデとは違う恐怖を美貴は味わう事となった。

姿を現したのは、戦国時代の甲冑を身に纏った鎧武者だった。

三mを越える鎧武者は、赤黒い禍々しい色の甲冑を身に纏い、面体の奥で目を光らせて美貴達を睨んでいる。

離れて立っているのに、鎧武者の重圧感が、美貴に恐怖として押し掛かかって来る。

鎧武者はゆっくりとした動作で、腰から二m近くある太刀を抜き、

片手で頭上高くに振り上げた。

「主、逃げて！」叫ぶと白菊は、身構え飛び退く。

「えっ？」と、白菊の叫び声に振り向いた瞬間、鎧武者が太刀を一気に振り下ろし、太刀から放たれた衝撃波が、三日月の様な形で飛んで来て美貴を直撃した。

「きゃああ！」美貴は、悲鳴を上げ十m程弾き飛ばされ、地面に三度バウンドして転がった。

「ぐうえ……」まるで暴走した車に跳ね飛ばされた様な衝撃を、ともに食らった美貴は、地面に転がりながら呻き起き上がれない。

「しまった！主！」飛び上がった白菊が、美貴を置いて飛び上がった事を後悔し叫んだ。

再び太刀を振り上げる鎧武者の姿を見て、白菊は美貴の危険を察し、

「こっちだ！」と、叫び、狐火を放った。

鎧武者の上空十m位から、白菊が連続で固まりとなった狐火の炎弾を放つ。

鎧武者は、刀で炎弾を払っていたが、放たれた一発が鎧武者に命中した。

炎弾の爆発で鎧武者が怯んだ瞬間、続けて命中した炎弾が次々と爆発して、鎧武者は炎に包まれた。

白菊はその隙に、美貴の傍へと着陸した。

「大丈夫ですか、主」心配そうに見つめる白菊の目の淵には、赤い隈取が浮き上がっている。

「何とか……」

美貴は全身の痛みに耐えながら上半身を起こし、

「くそっ……普通の人間なら死んでいたな……」と、思った。

次第に鎧武者を包む炎が治まると、何事も無かったかの様に鎧武者は立っていた。

白菊は鎧武者を睨みながら、

「おのれ……我の炎弾では効かぬか……」と、己の非力さを痛感し

た。

「妾が囧になります。その隙に鬼斬丸で」

「えっ？」白菊の言葉に驚き、美貴が白菊へと振り向いた。

「結界を張られて居ては逃げられません……何とか、相手の隙を作らなくては……」

「そんな……私一人で？」不安そうに尋ねる美貴に、白菊は無言で頷いた。

「白ちゃんが憑いて操^{あやつ}ってくれないの？」

「繰^くれば細かい動きが出来ません……先^{せん}のムカデなら単純な動きでも十分でしたが……奴には効きますまい……」白菊は、炎が消え二人に向って歩いて来る鎧武者を睨みながら思った。

鎧武者が二人の十mぐらい前で立ち止まり、光る目で睨んでいる。「それに、隙を作らなくては、又あの技でやられる……時間が有りません、行きます」

「うん……やってみる……」美貴は、自信の無い声で返事した。

美貴は、全身の痛みに耐えて立ち上がって、何とか自分の体が動く事を確認した。

「いざ！」と、叫び白菊は、目にも留まらない速さで一気に急上昇する。

上空の結界ぎりぎり迄、一気に上昇した白菊は、そのまま体を捻り込み全力のスピードで急降下し、勢いを殺さず鎧武者に体当たりをすると、弾かれた様に再び上昇する。

白菊の、渾身の体当たりを喰らった鎧武者は、吹き飛び地面に転がった。

上空で霊体に戻り、白菊が両手に狐火を溜め、炎弾を作ると、「どおりゃあ！」気合と共に、倒れて居る鎧武者に、炎弾を有らん限りの力で放ち続けた。

其処には、何時もの可愛いゴスロリ白ちゃんでは無く、目が釣りあがり、鼻が突き出し口が裂けて狐の形相を露にした白菊がいた。

白菊の放った炎弾が爆発し、倒れている鎧武者を凄まじい炎が包

み込んだ。

美貴はこの隙に、鎧武者に気付かれない様に身を屈め近付きながら、

「幾ら何でも……あの炎の中で無事な訳、無いわよね……」と、思っていた。

が、しかし、鎧武者は炎の中でゆっくりと立ち上がり、体制を立て直し刀を構える。

その様子を見て、

「まさか！効いて無いの！」と、美貴は驚いた。

立ち上がった鎧武者は白菊を睨み付け、構えた刀を白菊に向って振り下ろすと、一筋の光が飛んで行き、白菊の腹を貫いた。

「いやあああ！白ちゃあああん！」美貴は、その衝撃的な光景に絶叫し、腹を貫かれて力無く落下してくる白菊を見て、美貴の中で恐怖と怒りが爆発した。

ドックンと、鼓動が一つ大きく脈打ったのを感じると、全身が震え、熱くなり、体が仄かに光り、気が揺らめく様に立ち昇る。

「おおおおおお！」そして、美貴の体を流れる鬼の血が？戦え？と、美貴を煽り立てる。

怒れる美貴は、生まれて初めて？敵？と言う者に出会った。

「このやろう！」頭に血が上り、怒りだけが美貴を支配した。

両手で握った鬼斬丸を頭上へと振りかざし気を送り込むと、一気に飛び掛り、勢いを付けて振り下ろした鬼斬丸を鎧武者の背中に突き立てた。と、同時に、鎧武者は苦しそうに体を反らす。

「やった！」と、美貴は確信した。が、その瞬間、鎧武者が体を捻り、肘を振り出した。

「ぶっ！」肘は腹部に直撃し、美貴は弾き飛ばされ、

「ぐうえ……」と、苦しそうに地面に転がりながら美貴は、腹部を押さえている。

その時、何故かは分らないが結界が解け、辺りが明るさを取り戻した。

苦しみながら美貴は、未だに無事でいる鎧武者の方を見て、

「鬼斬丸は、奴の背中に刺さったままなのに……何で平気なの？」
と、不思議に思っていた。

「主！無理です！飛ばします！」叫び、美貴の傍に降り立った白菊の腹には、腕が楽に通りそうな穴が開いていた。

「だっ、大丈夫なの！其の穴！」霊体であるため血は出てはいないが、今にも千切れそうな胴体を見て美貴は驚き、白菊を心配している。

「霊力を、ごっそり持っていきました……申し訳ありません。勝ち目はありません……主！飛ばします！」白菊は、美貴の前で鎧武者との距離を見て、余り時間が無い事を悟った。

「飛ばすって？何？それ？……」白菊の言葉が理解出来ずに、美貴は狼狽うろたえている。

「説明している時間が有りません！」白菊は、近付いて来る鎧武者を気にしながら叫び、青白い狐火で美貴を包み込む。

鎧武者は弱っているのか、動きが鈍くなっている。

「海なら……何とかなるか……」白菊は呟きながら、美貴の肩越しに遠くを見据えている。

鎧武者はゆっくりと刀を振り上げながら近付いて来る。

「見えた！」と、白菊が叫んだ瞬間、白菊の体が眩しい光を放った。

其の時美貴は、光の向こうで、鎧武者が刀を振り下ろすのを見た。

○再会○

『ああ……何か、温かいな、此処……ふわふわしてて……私、死んだの……』と、暗闇の中で美貴は、心地良い浮遊感に包まれていた……が、

「がぼっ！くっ苦しい……」と、急に心地良さは打ち消され、息苦しさが襲った。

その苦しさに耐えかねて、

「ぶっはああ！」と、一気に体を跳ね起こし、

「何？何なの？此処何処？」と、美貴は前を見たが、真っ暗で何も見えない。

見えない原因が自分の髪の毛である事に気づき、頭を振り髪の毛を手でたくし上げると、美貴の目の前には、既に日が沈み茜色に染まる空と、水平線が広がっていた。

つい先程まで山の中にいたのに、何故水平線が見えるのか、現在の状況が一切把握出来ず、美貴は此処が何処なのかを確認するため、辺りをきよろきよろと見回していると、

「鬼追？……」聞いた事のある声に美貴は、はっとして振向いた。

肩越しに振向くと龍之介と視線が合い、何で此処に龍之介がいるのかと不思議に思いながら、暫く龍之介の顔を見つめていた。

美貴の思考が徐々に落ち着いて来て、周りの風景が認識出来始めて来た時、龍之介の他に邦博と司がいる事に気付いた……が、同時に龍之介達が全裸である事にも気づき、美貴の目の前には、大小取り混ぜて三本の、ぶら下がっている”物”が、視界に入った……誰が小とは言いませんが……

「きゃあああ！」父親と弟の物以外では、始めて見る危険物に美貴は、掌で顔を覆いながら、飛び上がり悲鳴を上げた。

美貴の悲鳴を聞いて、無防備に危険物を曝して立っていた龍之介達は、

「あっ！やば！前……」と、それに気付いて、慌てて前を隠して湯船へと座り込んだ。

「何んだよ！お前！何で此処にいるんだよ！」

龍之介に、そう聞かれても、何がなんだか分からない現状に美貴は混乱していた。

とにかく、現状を確かめようと、恐る恐る振向き、顔を覆った掌の指の隙間から、ちらりと、龍之介達の様子を伺った。

そして龍之介達が、湯船の中に座っている事を確認して、美貴は

少し安心した。

湯船に浸かりながらも、気不味さから両手で前を押さえ、

「お前は、遅れて明日から参加する予定じゃなかったのか！第一なんで、男湯にいるんだよ！」と、叫ぶ龍之介の？男湯？と、言うキーワードが更に理解出来ずに、

「えっ？」と、顔から手を離し辺りを確認しようとする、自分の寂しい胸が目に入った。

「きゃあああ！」やっと自分も全裸である事に気が付いた美貴は、再び悲鳴を上げて、少しでも見せたく無い、一番見られたくない、絶対、ぜったあい、づええったああいに、知られたく無い部分を慌てて手で隠して、湯船に飛び込む様にしゃがみ込んだ。

『なっ、なっ、なんなの？どうしちゃったのよ！』美貴の思考は、オーバーヒート寸前で、

『見られた！先輩に見られた！どうしよう！見られた！先輩に見られた！見られた！見られた！どうしよう！どうしよう！見られちゃったよおううう！！』と、憧れの龍之介に、自分の裸を暴露してしまった事に、恥ずかしいやら情けないやらで、完全にパニックに陥っていた。

「何でも良いから早く出ろ！僕達は後ろ向いててやるから！」

「すみませえん！」

邦博の叫び声に反射的に反応して、美貴は湯船から飛び出した。

飛び出しダッシュで出口へと向かったが、パニックってる美貴は足元が疎かとなり、足を滑らせ見事に尻餅を突いた。

「何でこけるのよ！」泣きっ面に蜂と言う奴か、転んで可愛いお尻を思いつきり打ち付け、美貴は痛みと恥ずかしさが入り混じり、やり場の無い怒りに半ばやけくそになっていた。

それでも何とか脱衣所に辿り着いた美貴は、此処から脱出する為には、必要な物がある事に気付き辺りを見回した。

「どうしよう……何か無いかな……」そう、お気付きですね。着る物です。

美貴は置いてある脱衣かごの中に、まだ開封していない新品の下着を発見した。

「誰のかな？……えええい！お借りします！」誰の物か分からないが、この際、仕方が無いと判断し開封して取り出したが、やはり男物の下着を身に着けるのには勇気がある。

美貴は躊躇い、暫く手にしたブリーフを眺めていた……確かに勇気がある……

しかし、緊急事態だと割り切り、先程からの出来事で、やけくそ気味の美貴は勢い良くブリーフを履き、そのままの勢いでバスタオルで濡れた髪の毛を簡単に拭き、続いて開封した、美貴には、可也大きめのTシャツを着て、髪の毛を乾かしている暇は無いと判断し、バスタオルで髪の毛を包み込み、浴衣を着た。

そして美貴は、出口へと向かい、暖簾のれんの所で少し顔を出して左右を確認してから、脱兎のごとく逃げ出した。

そして、ロビーのソファが並べてある所まで来ると、ソファに倒れ込んでしまった。

倒れ込んで美貴は、今此処に居ない白菊の事をが心配になり、「しろちゃあん……無事でいてよう……」と、美貴の平滑な胸は、張り裂けんばかりの思いに痛みを感じた。

鎧武者が刀を振り下ろした所までは覚えている……しかしその先は、自分は無事に此処にいるが、白菊はもしかしてと思う不安が、無制限に湧いて来た。

百合に連絡を取りたかったが、携帯も小銭も無い。おまけに鬼斬丸も置いてきてしまった。

「あ、美貴ちゃん……」途方に暮れている美貴の後ろから、司が声をかけて来た。

「えっ？」美貴が振向くと、司と目が合い、

「あの……さっきは……」と、司は恥ずかしそうに顔を赤くして俯いた。

それを見て、露天風呂での事を思い出し、美貴も顔を真っ赤にし

た。

「あの、もしかして……海神先輩の、その……下着……着てる？」
司が遠慮気味に聞くと、

「えっ！海神先輩のだったの！」と、美貴は飛び上る程の勢いで驚いた。

美貴は、今、自分が男物の下着を、龍之介の下着を、しかもブリーフを着けている事を、憧れの龍之介が知っている事を知り、全てが終わったと目の前が真っ暗になった。

しかし冷静に考えてみれば風呂には三人しか居なかったのだ、結局の所、龍之介の知る事になるのは分かりきった事なのだが、あの時パニックっていた美貴には考える余裕など無かった。

「美貴ちゃん！美貴ちゃん！」ソファに座ったまま、氣を失った様に白目をむいている美貴を、司が心配そうに揺り動かすと、

「……はっ！」と、美貴は我に帰り、絶望の淵のどん底の更にヘドロに深く埋もれた心境で、

「先輩……怒ってる？」と、涙目で司に尋ねた。

「ううん、怒って無いよ……でも、ちょっと来て欲しいって……良いかしら？」司は美貴の様子を見て、龍之介に怒られるのを怖がっているのだと思い、笑顔を浮かべ優しく言った。

「うん……」と、返事はしたもの、美貴は龍之介に会うのが恥ずかしくて仕方が無かった。

――◇――

昨日は散々だったなど、美貴は合宿二日目の朝食を取りながら昨日の事を思い出していた。

白菊の事が心配で食欲が無い。

そして服もお金も無い今の状況で、何も出来ない自分を情けなく思っていた。

美貴は、少し離れたテーブルで朝食を取っている龍之介達を見た。白菊の事も心配だったが、昨日、憧れている龍之介に、自分の醜態を一部始終曝した事に立ち直れず落ち込んでいた……お年頃です

ものねえ……

常識的に、自信が有るからと言っても、見せびらかす物では無いのに、コンプレックスだらけの裸体を、憧れの龍之介に曝してしまった精神的なダメージは、波動砲の直撃を受けた以上に凄まじかった。

更に美貴は、龍之介の前で一緒に朝食を取っている司に対して、神様は不公平だと愚痴を言いたかった……男なのにあんなに綺麗と嫉妬に似た気持ち湧いてます。

自分も司みたいに綺麗だったら、きっと龍之介の気を引く事が出来るのにと、浅き夢に浸っていた。

そして、あんなに綺麗な子に、あんなに立派な“物”が付いていたなんてと、昨日の露天風呂での出来事が脳裏を過ぎると、再び顔を真っ赤にして奈落の底まで落ち込んでしまった。

食事の後、皆はスケッチに出かけて行ったが、美貴は一人、旅館の部屋で宅急便が届くまで何も出来ないでいた。

何をするでもなく、落ち込んで部屋で待っている美貴は、自分には大きな目の下着を、時折、浴衣の上から腰の辺りを摘んで、ずいっと引き上げ、

「男物はしっくり来ないなあ……」と、思っていると、美貴は重大な過失を犯した事に気が付いた。

「あっ、ちょっと待ってよ……洗って返すって、言っちゃったけど……やだ、何言ったのよ、そんなの恥ずかしいじゃないの！」今更ながら、自分の愚かさに気が付いて慌てた。

「……捨てよう……先輩には悪いけど、一度、身に着けた下着を、男の人に渡すなんて……出来る訳無いじゃない！」などと、龍之介の気持ちも知らずに、無慈悲な判断を下した。

美貴にとって、これ以上、龍之介に対して恥ずかしい思いをする事は、死を意味していた。

需要と供給から、使用済み下着を販売している者も居るが、一般的な常識ある女性にとっては出来る事では無い。

況^ましてや、面識ある男性、更には憧れている男性になど出来るはずが無い。と、思いたい。

「あ・る・じ！」突然、窓から聞こえた聞き覚えのある声に、美貴は驚き振り向くと、

「白ちゃん！」窓際に白菊が笑顔で浮かんで居た。

美貴は白菊の姿を見るなり、立ち上がり窓の所へと駆け寄った：下着を引き上げながら。

「無事だったのね！」美貴は喜び、窓を開けて笑顔で白菊を迎え入れると、

「遅くなりました。これ」白菊は、山に置いて来た美貴の荷物や衣類を差し出した。

「何してたのよ！もう！心配したんだからあ！」美貴は、笑顔に涙を浮かべている。

「へへへ、主を飛ばして、すぐに逃げただけど、やっぱり、もう限界で……最初に降りた辺りで、動け無くなって……でも、さすがに龍神の杜だけありますね。結構早く回復しましたよ……それで、一旦戻って荷物を拾って、主を追って来ました」白菊は涙目で見詰める美貴に、少し照れながら報告した。

「もう、大丈夫なの？お腹は？」美貴は、荷物を持つ為に実体化している白菊の腹を見ると、

「もう、大事無いです」と、白菊は照れながら、自分の腹を撫で回している。

「主も無事でよかった……本当は自信なかったんですよ……あんな大技、成功するとは……」

笑顔だった白菊が、一変して腕を組んで難しい顔になり、しみじみと思いついている。

美貴は、白菊の様子を見て急に不安になり、

「えっ、ちょっと待て……何それ？」と、問いただした。

「いえね、初めてだったんですよ。飛ばすのって、難しいんですよ

……行き先をちゃんと思い描いていないと、何処行っちゃうか分かりませんし……下手したら、地面の中だったりして……」白菊は腕を組んで、うんうんと感心する様に頷いている。

「あんたね！そんな危険な技、一か八かで私にかけたの！」急に怒りが込み上げて来た美貴は、白菊に顔を着き付け怒鳴り付けた。

「だって、しょうが無いでしょ！死ぬか生きるかの時で、他に方法なんて無かったんだからあ！」白菊も負けじと握り拳を握り閉め怒鳴り返した。

顔を着き付け怒鳴りあったが、美貴はあの危機的状況を思い出すと、

「そうか……ごめん……そうだったね……うん、ありがとうね」結果オーライかと、むしろ助けてくれた白菊に感謝した。

美貴はとりあえず、白菊が届けてくれた荷物から携帯を取り出すと、昨日の事を百合に詳しく報告した。

百合は予期せぬ出来事に、もの凄く心配していたが、二人が無傷である事を告げると少し落ち着いたみたいだった。

そして百合は、信仁と相談するから、もう気にしないで良いと伝えたが、美貴は鬼斬丸をなくした事に責任を感じている。鬼斬丸は百合の母親、つまり、祖母の形見でもあった。

「ねえ、何で昨日の奴、鬼斬丸で滅っせ無かったのかな？」美貴は、昨日の化物が魔斬りの法具である鬼斬丸で、滅っせなかった事を不思議に思った。

「おそらく……妾が見た所、主があ奴めに鬼斬丸を突き立てた、とたんに結界が解けた……あ奴めは、とっさに結界を鬼斬丸に張りおったのでは無いかと……」白菊は昨日の事を思い出し、考えながら話している。

「鬼斬丸に結界……そんな事出来るの？」

「封じの鞘があるじゃないですか。あれも、結界の一つですよ。抜き身の鬼斬丸なんぞ、妾は触れる事も出来ませんから……霊力ごっそりと削られますからね……」

「でも、ムカデなら、一撃で倒せたのに？」

「ムカデ程度なら、一撃で倒せますけど、霊力の高い化物なら、浄化が進む前に影響を受けた部分を切り離したり、鎧武者の様に結界で包み込んだりして、逃れる者も居るんです……」

「そうなんだ……」

「しかしながら、そこいらの、並みの化物に出来る芸当ではありませぬ……我らが歯が立たぬのも分かります……恐ろしい奴です……」
白菊は、恐怖に顔を曇らせている。

「何者かな？」

「そこまでは……ただ、他の化物とは違いますね……」 深刻な表情で話す白菊を見て、

「うむう、やっぱ、ラスボスか？」と、美貴は訳の分らない事を口走った。

その時、部屋の備え付けの電話が鳴った。

「はい……はい……あつ、分かりました」 電話に出ると、荷物が届いていると伝えてくれた。

美貴は、フロントで荷物を受け取り、再び部屋に戻って早速着替えた。

「ああ……やっぱり女性用の方が、しっくり来るわ……この、フィット感」と、白地に小さなイチゴ柄のショーツを、食い込むぐらい（何処に？）きゅっと上まで引き上げ、小さな幸福を感じていた。

そして龍之介のTシャツを脱ぐと、何となく名残惜しくなり、そつと頬を寄せ、

「男の人って……先輩の胸って、こんなに大きいんだ……」と、自分には大き過ぎるサイズのTシャツに、龍之介の胸の大きさを想い重ねて頬を赤く染めていた……所に、白菊が美貴の目の前で、龍之介のブリーフをひらひらさせている。

「ちよっと……何やってんのよ……」 美貴は、甘い想像の世界にトリップしていたのをぶち壊されて、むっとした。

「主い、こんなの履いてたのお？」 白菊がブリーフを指で摘みなが

ら、あからさまに嫌な顔をして美貴に尋ねると、

「しょうが無いでしょ、無かったんだから……」美貴は、Tシャツから顔を上げて呟いた。

「これ、どうします？」と、訊ねる白菊に、美貴はTシャツを手渡し、

「……燃やして」と言っ、AAAカップのブラを付け始めた。当然パッドも入れてます。

「へっ？」

「燃やすのよ！ 跡形も無く！ 完璧に！」下着姿で、力強く拳を握り締め美貴は命令した。

「はああ……承知……」と、何の事だかと美貴の真意を測りきれず、白菊は命令通り、両手に持ったブリーフとTシャツを、その場で燃やそうとすると、

「ちよっと！ 待ちなさいよ！ 部屋の中で燃やさないでよ！」慌てて美貴が叫び止めた。

「えっ？」訳が分らず目を丸くする白菊に、

「外！ 窓開けて外！」美貴は、窓を指示した。

「火災警報器が鳴りでもしたら、大恥よ！」と、怒鳴る美貴に、

「はああい……」と、面倒臭そうに返事をして、白菊は窓を開けた。

白菊は、不満そうに窓から下着を持った手を差し出し、狐火で一瞬にして灰にした。

「これで、一安心……先輩……不義理な後輩ですんません！」と、ほっとした美貴は、燃えた下着の方に向って、下着姿で深々と頭を下げた。

「どうしたの？ 白ちゃん……」美貴は、プリーツの入ったアイボリーのスカートを履きながら、まだ窓の傍に居る白菊に訊ねた。

「……追っ手かも……」白菊は遠くの方を眺め、顔に緊張を走らせている。

「何処？」美貴は、慌ててパステルブルーのTシャツを着ると、白菊の横に走りよった。

窓から首を出して気配を探るが、美貴には何も感じられなかった。
「まだ……遠いかも……」白菊も気配を見失ったみたいだ。

「みたいね……でも、警戒はした方が良くもね……」美貴の顔に緊張が走った。

こんな人里で、昨日の鎧武者が現れる事を想像すると、鎧武者に對して何も出来なかった美貴の不安は広がった。

「どうします？」

「……とにかく、外に出ましょうか……」

不安を抱きながら美貴は、荷物を片付け画材を持って旅館を出て、
「さて、どうしようか……今は気配を感じ無いし……」と、美貴は左右を見渡し、

「皆は港の方かな？……取りあえず、そっちに行って見るか……」
と、歩き出した。

緊張の中、美術部の皆が鎧武者に襲われたらと考えると、美貴に言い知れぬ不安が湧いて来て、皆の事が心配になって来た。

港へと向かう美貴は、龍之介は邦博達と一緒になんだろうなと思いつつ、
龍之介に会いたい反面、昨夜の事で会うのが恥ずかしいと言っている間に陥っていた。

せっかくの合宿なのに、普通に話す機会が少なくて残念だなと、
美貴は思っていた。

龍之介の事に思いを馳せていると、

「……あれ？何？この気配……嫌な感じ……」と、美貴の頭に警報が鳴り響いた。

「白ちゃん」美貴は、姿を消して傍に居る白菊に声をかけた。

「主……以外に近かったみたいですね……気配を消しておったのかも……もしかして……」

もし鎧武者なら、美貴には勝算など無かったが、異様な気配に鬼の血が反応して、美貴に戦えと煽る。

「白ちゃん！行くよ！」全身に熱い物を感じながら美貴は、気配の方へと駆け出した。

駆け出した美貴の前に、立ち塞がる様に姿を現した白菊は、
「待って！主！昨日の奴ならどうするのじゃ！」と、叫んで美貴を止めた。

「でも、だからと言って放っておけないでしょ！早く！」

「そんな！鬼斬丸も無いのに！」

「あんな奴が居たら、皆が危ないわ！なんとかしなきゃ！早く、行くよ！」

自分の横を駆け抜けて行く、美貴の後ろ姿を目で追いながら、

「……承知」と、白菊は、しぶしぶ了解し、再び姿を消して美貴を追った。

美貴は海岸線沿いの道路を、気配のする方へと走っていると、

「こっちか？この上、気配が強い……」と、何かを感じ立ち止まる。
小高い山を見詰めている時、美貴は山へと登る山道を見付け、再び走り出した。

山道を登り、少し開けた所に来ると気配を更に強く感じ、美貴は警戒して立ち止まった。

辺りを神経を集中して見回すが、何も変わったものは見付けられない。

しかし、前方から感じられる禍々しい気配に、美貴は背中に冷たい物を感じた……と、其の時、近づく人の気配がした。

「これは……えっ？海神先輩？」自分の背後で、龍之介の気配がする事に驚いた。

美貴は、前方の禍々しい気配から目をそらさずに、

「何にしに来たんですか！……すぐに、引き返してください！」と、叫んだが既に遅く、あたりは結界で包まれ薄暗くなった。

「主、もう遅い……結界を張られた」白菊が警戒しながら、霊体の姿を現した。

『ええい！やるしか無いか！……でも、先輩が見ている……』と、美貴は躊躇した。

鬼の血筋だと言う事を知られたく無い美貴は、自分が戦う姿を龍

之介に見せたくなかった。

しかし、今はそんな事で躊躇していれば龍之介の身が危ない。

懂れている龍之介に、知られたく無い事を知られる恐怖より、龍之介が傷付く事を恐れた美貴は、断腸の思いで覚悟を決め、

「白ちゃん憑いて!」と、戦う事を決意した。

「承知」美貴の言葉に白菊が答え、青白い炎を上げて美貴の中へと入って行った。

「先輩!こっちに来てください!」美貴は龍之介の身を案じて呼んだ。

「おっ……おいっ!お前!おいっ!背中!おいっ!燃えてる!おいっ!」

「えっ、何で!」龍之介の言葉に驚き、美貴は恐る恐る首だけを振り向かせ、

「……見えるんですか?」と、龍之介を不安な気持ちで見詰ながら、背中から立ち昇る狐火の炎は、普通の人には見えないと油断し、白菊を憑けた事を美貴は後悔した。

「みっ、見えるも何も……熱くないのか?えっ?お前どうしたんだその目!」白菊が付いて青白く光る目を見られて、美貴は慌てて顔を背けた。

「おい、どうしたんだよ、お前……それに、さっきの声……さっきいたの誰だ?」

明らかに怯えている龍之介に、

「後で、説明します……私から離れないで下さい」覚悟はしたものの、知られたく無い事を知られてしまい、美貴は絶望的な思いに涙が出そうだった。

「何の事だよ!昨日から……早く説明しろよ!分かんねえよ!」

龍之介が取り乱しわめく姿を見て、美貴は巻き込んでしまった事を後悔し、昨日からの事や今起きている事を説明したって、自分はどう、龍之介に嫌われてしまったのではと思えて来て、美貴の目に涙がにじんだ。

が、しかし、今は泣いても居られない。

気を取り直し美貴は、自分達を取り囲む異様な気配を察知し、辺りを見回すと、木々の枝に無数のカラスが止まり美貴達を取り囲み見下ろしていた。

「何だよ……これ……」龍之介は、不気味な雰囲気おののに戦っている。

美貴は、カラス達は何者かに操られていると考え、辺りに神経を配り、操っている者を見つけようとしていたが、今の美貴の能力では見付ける事は出来なかった。

カラス達は、今にも襲って来る様に羽をばたつかしている。

美貴は、鞆から鉛筆を一握り取り出し鞆を捨てた。

「主、数が多すぎます」

「分っている……」龍之介だけは、なんとしても守ろうと、美貴はカラスを睨む。

その時、カラス達が二人を目掛けて一斉に飛び掛って来た。

美貴は、気を送り込み緑色に光った鉛筆を、龍之介に向かったカラス達に投げ付けた。

飛んで行った鉛筆は、光の矢と成って襲って来るカラス達を貫いた。

更に、次々と鉛筆を投げ付けながら、襲って来るカラスを躲す。

貫かれたカラス達は、地面に転がりもがいている。

残り一本となった手持ちの鉛筆に、更に気を送ると、光が五十センチぐらい伸び、それを刀のように青白い炎が包み込こんだ。

そして美貴は、炎の刀でカラス達を薙ぎ払いながら、

『……確かに、数が多過ぎる……このままじゃ、先輩を守りきれない。操っている奴を見付けなきゃ……でも何処だ……気配を消されては、心眼の開いていない白ちゃんじゃ見付けられない……』と、考えていた。

すると、龍之介が木を振り回し、カラス達を叩き落としている姿が目に入った。

木をめちゃくちゃに振り回しているが、的確に襲ってくるカラス

から身を躲している龍之介の姿を見て、美貴は何とかなるかと思っ
た。

「先輩！暫く頼みます」

美貴は、そう言って後ろに飛び退き、クロッキー帳を拾い上げ、
開けたページに思い出しながら円や三角の図形を描き始めた。

それを見て龍之介は、

「頼むって……こんな時に、何やっているんだよ！」カラス達を叩
き落しながら、

「守ってくれつつって事かよ！」と叫び、庇う様に美貴の前に出た。
「どおりやあああ！」龍之介は、必死でカラス達を払い除けなが
ら。

「女の子に頼むと言われちゃ、引く訳には行かねえな……くっそう
おとおお！」と、気合を入れなおす。

『先輩すみません……確か、探査の法陣は、簡単な組み合わせだっ
たはず……ええっと、こうだっけ……よし、多分こうだろう……い
い加減だな……』と、美貴は図形を書き上げた。

美貴はクロッキー帖を地面に叩き付け、法陣を踏んで、

「臨、兵、闘、者、皆、陣、列、在、前」と、目の前で刀印を切り
ながら、九字を唱え精神を集中させる。

『見えた！……良かった、合ってた……』と、美貴がほっとした時、
足を滑らせて倒れた龍之介を通り過ぎ、カラス達が美貴に向って来
た。

「そこか！」と、叫ぶと同時に横に飛び退き、向って来るカラス達
を交わし、鞆からまた鉛筆を一握り取り出すと、美貴は姿を消して
いる者に向けて、気を込めた鉛筆を投げ付けた。

鉛筆は命中し、姿を消して居た者は、黒い紫の煙を上げながら、
塵が崩れる様に消えた。

黒い影が消える瞬間、薄笑みを浮かべたのを美貴は見逃さなかつ
た。

結界が解け、夏の眩しい日差しが照りつける中、

「……見逃してもらった？」と呟き『昨日の奴じゃない、探りに来たのかしら？』と、考えていた。

戦いの跡に、カラス達が地面で羽をバタつかせていた。

白菊が美貴から離れ、美貴は漠然とした不安を抱いて、倒れている龍之介の傍へ行った。

「大丈夫ですか、先輩……」美貴は申し訳ない気持ちと、見られなく無い自分の姿を見られて、嫌われたのでは無いかと言う不安な気持ちが入り乱れ、今にも泣きそうな気分だった。

「別に、怪我はしてないけど……それより……」

龍之介は、地面で苦しんでいるカラス達に目をやっている。

「ごめんね……貴方達は何も悪くないのに……」美貴は自分 gammott と早く、あいつを見つけられていたらと、カラス達を見て後悔していた。

「白ちゃん！」美貴は振向き、白菊に声をかける。

「承知……」

白菊は静かに返事をして、カラス達に近付いて行き、掌を広げ差出すと体が光だし、体力を補い治癒力を高める癒しの術をカラス達に掛ける。

手から広がった光がカラス達を包み、治ったカラス達は、何事も無かったかの様に飛んで行ったが、既に死んでしまったカラス達はその場で動かない。

美貴は、動かないカラス達を見て、

「ごめんね……白ちゃん、お願い……」と、涙を浮かべながら、白菊に言った。

白菊は静かに頷き、手に狐火を溜めると、

「成仏せいよ……」と、弔いの言葉を掛けながら、一羽ずつに狐火を落として行く。

既に魂の離れてしまったカラス達を、弔いの炎が包み、やがて蒸発する様に消えて行った。

美貴は、全てのカラスを茶毘に付したのを見て、龍之介に振向き、

「すみません、巻き込んでしまつて。あの、私……」不安な気持ちで声を掛けると、

「いいよ……今は聴きたくない」龍之介は、素っ気無く美貴の言葉を遮った。

「でも……」明らかに不機嫌な龍之介に、遠慮気味に美貴が声を掛けると、

「だったら……気を付けて喋れよ。今の俺は気が立っているんだ……」と、龍之介は美貴を睨んだ。

「……ごめんなさい」龍之介に睨まれ、美貴は完全に嫌われたと思つた。

龍之介を危険な目に合わせて、自分が普通では無い姿を曝してしまった。

美貴は、その絶望感から涙が滲んで来た。

更に、立ち上がった龍之介が、

「行くぞ……」と、吐き捨てる様に言った言葉に、

「……はい」と、返事をした時、涙が一筋零れた。

○鬼百合○

「信仁！信仁！起きろ信仁！……携帯鳴ってるぞ！……」将鬼丸が何故か焦った様子で、寝ている信仁を起こそうと揺り動かして居る。三十郎の一軒で、企業とも折り合いが付き、昨夜は再び芸者を上げての宴会で、調子に乗って遅くまで飲んで酔い潰れた信仁は、午前十時前だと言うのに高軒を上げて寝て居た。

携帯が鳴り続ける中、

「信仁！信仁！……」と、将鬼丸は必死で信仁を起こそうとしているが、

「うっ……ああ……ふう……」と、信仁は寝返りを打って起きない。

将鬼丸は、携帯のサブモニターに表示されている名前を見ながら、「信仁！百合殿だぞ！百合殿から電話！」と、焦って伝えると、

「へっ！」信仁は一瞬で飛び起き、携帯を手に取り見た。

サブモニターに？鬼百合？と表示されているのを見て、

「いっ！」と、驚き、焦ってお手玉の様に落としたかけた携帯を掴んで、

「はっ、はい！もしもし！」信仁が慌てて電話に出ると、

「何やってたのよ！早く出なさいよ！」と、耳を劈く怒鳴り声つんざが響いた。

信仁は、顔面を蒼白にしながら、

「ご、ごめん！トイレに入ってたから……」と、言い訳をして誤魔化した。

「まったく、呑気にトイレに入ってる場合じゃ無いわよ！美貴ちゃん大変だったのよ！」

「えっ！美貴が？」聊か、理不尽とも思える百合の怒鳴り声で、信仁の二日酔いの頭は覚醒した。

そして百合は、美貴から聞いた事を信仁に報告した。

「それで、美貴は無事なんだな」百合の話の聞いて、信仁は狼狽うろたえながら聞き直した。

「ええ、電話では何とも無いって言っていたわ……それで、もう近付いちゃ駄目だって言ったんだけど……ねえ、おかしいと思わない？」百合が真面目な声で尋ねると、

「何がだ？」無事と聞いても美貴の事が心配な信仁は、他の事に頭が回らない。

「その、鎧を着た化物よ。ムカデなら分るけど、鎧を着た化物なんて……おかしいわよ」

その上、二日酔いで頭の重い信仁は、百合の問い掛けに、
「……ああ、そうだな……」と、上の空で返事をした。

百合は、信仁の反応が遅いのと、話し方が普段とは違う事に気付
き、

「……なに？……あなた……酔ってるの？……」と、信仁に尋ねると、

「えっ！な、何言ってるんだよ、酔ってる訳無いだろ！」と、信仁は慌てて虚偽の報告をした。

実に、女の感とは恐ろしいもので、さも受話器の向こうから此方が見えているかの様に、的確に指摘する事がある。だから皆さんも気を付けた方がよい……何がだよ……

「……そうお……」信仁の慌て様に、百合は思いつき不審な声を返して来た。

別に、祓いの仕事も無事終わり、今、酔っていても何ら問題は無いのだが、可愛い娘の美貴が危ない目に会っていた時に、自分は高級旅館で芸者を上げての宴会で享樂的な時を過ごしていた事が、重く負い目として圧し掛かっていた……更に、それが百合にばれたらと思うと……

「とにかく……美貴が無事なら良いじゃないか」

「良くないわよ！何、呑気な事言ってるのよ！」

「えっ？な、何がだよ……」百合の言葉の意味が分らず、信仁は狼狽ながら尋ねた。

「あなた、本当に大丈夫？頭、回ってる？」電話の向こうに、不機嫌な百合の顔が見える。

「何でだよ……」百合の馬鹿にした様な言葉に、信仁は少しむっとした。

「氣の流れを監視している“お守り様？達は、明後日あさってにはマーキングの札を起動させるのよ！それまでに、本山に化物の事、報告しないと不味いでしょ！」

「あっ……」百合に怒鳴られて、信仁の思考はやっと現状を理解した。

「早く報告しないと、本山の命令に従わ無いで、アルバイトしてた事がばれるでしょうが！」

「……確かに、それは……不味い……」信仁の額から冷や汗が流れ出した。

「何も無い時なら問題ないけど、作戦期間中なのよ。懲罰ものよ……

…ばれたら……」

「そ、そうだな……」

「他のお役目達も、ばれない様に上手くやってるのよ……こんな事で、報酬ランク下げられでもしたら……分ってるでしょうね……」

「……はい……」 殺気の籠った百合の声を聞いて、信仁の背筋に冷たい物が走った。

「だったら、早く行って調べてらっしゃい！」 激怒する百合の怒鳴り声に、

「はいっ！」 信仁は、慌てて返事をして電話を切った。

「ほんとに、もうお……頼り無いんだからあ……」 百合は、唇を尖らせ電話を切った。

「くっ……信仁殿ですか？」 百合の不服そうな顔を見て、玉江は失笑して尋ねた。

「ええ……ほんと、未だに頼りない弟みたいだわ」 そう言って、百合は椅子に座りなおした。

「それでも有りますまい。信仁殿程の実力者も、そう多くは居りませんまいに」

「そりゃ、そうだけど……」 笑いを堪えながら話す玉江に、百合は不機嫌そうに答えた。

「百合殿が強過ぎたのですよ……」

「もう、止めてよ……」 懐かしい思いに微笑む玉江の顔を見て、百合は恥ずかしそうに頬を赤く染めた。

「ねえ、玉ちゃん。お願いがあるんだけど……」

「はい、何なりと」

「あの人の様子見て来てくれないかな……」

「それは、構いませんが……何故に……」

「どうも、緊張感が無いのよねえ……あいつ……だから、玉ちゃんが居ると、気合が入ると思うの」

「はああ……」

「面倒だとは思うけど、お願い。もし、信仁が呆けた事してたら、がつんと言ってやってね」

「ええ、承知しました」再び、笑いを堪えながら玉江は、百合と信仁の若い頃を思い出し、変わっていないなと懐かしく思った。

○絶望○

合宿二日目の午後、バスに乗ってやって来た陶芸教室で、美貴は完全に放心状態だった。

昼食に何を食べたかすら覚えていない。

美貴は、手回しの轆轤の前に座り、焦点の合っていない目で手元を見詰めながら、ぺち、ぺち、と、粘土を機械的に叩いていた。

思い返せば返す程、今朝の事と言い、昨日の事と言い、龍之介に見せた失態は、美貴にとっては致命傷だった。

もう、情けなくて涙も出ない……

美貴は、始まりもしなかった恋愛の崩壊に、未練だけが心に重く残った。

「美貴ちゃん……何、作ってるの……」隣に座る同級生の弥生が、轆轤の上の粘土を不思議そうな目で見ながら尋ねた。

「えっ？」弥生の言葉に、美貴は我に帰り自分の手元を見た。

美貴は、轆轤の上でお好み焼きの様に広がっている粘土を見て、今、自分が何をしているのかに、やっと気が付いた。

「あっ……」龍之介の事で思い悩んで、自分でも何をしていたのか自覚の無い美貴は、陶芸教室で作る物とは思えない、奇妙な物体を作っていた自分を恥かしく思い、顔を赤くした。

同じテーブルの一年生達も、美貴の作っている、お好み焼きに注目している事に気付き、

「あ、あはっ、なんだろうねえ……はははは……」と、笑うしかなかった。

結局、美貴は最初から作り直す事となり、フィンガーボウルの様

な、口の広がった巨大なティーカップを作った。

落ち込んだまま、焼き上がった後の発送手続きを済ませて教室を出た時、自動販売機の前で、頭を掻き毟っている龍之介と目が会った。

「あっ……」美貴は、龍之介を見て固まった。

予期せずに落ち込んでいる原因の龍之介に突然会った事で、美貴は蛇に睨まれた蛙の如く、体が硬直して動かなかった。

見詰め合う二人の間に、気まずい沈黙が重く押し掛かる。

美貴は、其の沈黙と龍之介の前に居る事が辛くて耐えられなくなり、突然、その場から逃げた出した。

夢中で走っていた美貴は、目の前にフェンスがある事に気付き、立ち止まる。

行き止まりのフェンスの前で美貴は、

「駄目だよ……先輩の顔、見れないよ……」と、目に涙を貯めながら呟いた。

次第に溢れる涙は、ぼたぼたと地面を濡らす。

その時、美貴は後ろから追いかけて来る龍之介の気配を感じた。

「……なんで、逃げるんだよ……」背後から、問い詰める様に龍之介が声をかけて来た。

美貴は、不機嫌そうな龍之介の声を聞くと、確実に龍之介に嫌われたと確信し、その絶望感から目の前が真っ暗になった。

そんな美貴の頭の中に、色々な思いが蘇って来る。

新学期が始まって二日目、図書室の場所を尋ねると、龍之介は『分かり難いから』と言って、隣の校舎の三階に有る図書室まで一緒に案内してくれた。

学食で、始めて見る食券のメニューに戸惑っていると、後ろから『早くしろ!』との声が飛んで来て、更に焦っている所を『一年生なんだぞ、待ってやれよ!』と、美貴の後ろに偶然並んだ龍之介が、後ろに向って怒鳴り助けてくれた。

其の後、戸惑っていた美貴の後ろから、お勧めメニューをレクチ

ヤーする龍之介が、美貴にはキラキラと輝いて見えた。

そんな美貴は、龍之介が美術部員だと聞くと、全くの未経験の美術部に躊躇いもなく入部した。

入部して、たった二ヶ月の短い時間だったが、美貴の思いは、長さに関係無く膨らんだ。

遠くから、見詰めているだけの時間。

テノールの響きに聞き惚れている時間。

溢れる思いを、伝えたい、知ってもらいたいと願いラブレターを認めた時間。

想いをいっぱい詰めて書き上げたラブレターを胸に抱き締め、届けようと時めいた時間。

そして、勇気が無く、渡せない事を悔しく思った時間。

そんな時間が好きだった。

思い悩みながらも、憧れているだけの時間が楽しかった。

何気ない小さな幸せを思い描いて居る時間が幸せだった。

だけど……もう、幸せな時間は終わった。

龍之介に嫌われたと思うと美貴は、龍之介の前に居る事が、辛くてたまらなかった。

「……あのさ、別に……」

龍之介が後ろから掛けた言葉が引き金となって、美貴は振向き、その場を逃げ出した。

「おいっ！待ってっ！」

龍之介の隣を駆け抜けようとした時、突然腕を掴まれたが、

「えっ？」鬼の血筋である美貴の脚力が、龍之介の腕力に勝り、龍之介を引った。

「きゃっ！」バランスを崩し、美貴の腕を引っ張ったままの龍之介の体が、美貴にぶつかり、二人は、重なる様に倒れ、

「あっ……」気が付くと、龍之介が美貴の上に覆い被さって居た。

「すっ、すまん……」慌てて体を起こす龍之介と目が合う。

気不味い雰囲気の中、龍之介の顔を見ていると、美貴の目には再

び涙が溢れて来た。

「……お前……」 龍之介は美貴の涙を見て驚き、掴んでいた手を緩めた。

美貴は、近過ぎる龍之介の顔に、顔を赤く染め戸惑っていると、「せつ、先輩……」突然、沈黙を破る声の方を見ると、司が驚いた様に、両手で口を覆って立っていた。

龍之介が司の方を向いた瞬間、美貴は勢い良く立ち上がり司の横を駆け抜けて、その場を逃げ出した。

美貴は勢い良く、前を良く見ずに走って、建物の角を曲がった瞬間、

どがあっんと、自動販売機に頭突きをかました。

「いったあ……」と、再び尻餅を付いて倒れた美貴は、思いつきりぶつけた頭を両手で押さえた……頭突きをかまされた自動販売機は迷惑な事に、三c m程へこんでいる……

流石、鬼の血筋と言おうか、自動販売機の鉄板をへこまし、いったあ……で済んでいる美貴は、其の痛みで少し冷静さを取り戻した。

そして、考えて見れば、自分のせいで迷惑を掛けたのに、ちゃんと説明もせず謝らないのは、龍之介に対して失礼だと美貴は感じた。「そうよね……ちゃんと説明しないと……謝らないとね……」

美貴は、龍之介には既に嫌われたと思うと、逆に気が楽になって来た。

「もう、見られたんだし、鬼の血筋の事も話したって、構わないよね……ははは、そうよ……もう、怖い物なんかないわ……」と、虚ろな目で、真夏の真っ青な空に沸き立つ入道雲を見詰め、投げ遣りな気分にあふれていた。

『もう、どうせ……』と、虚しい思いと共に美貴は、ゆっくりと立ち上がり、龍之介の居る方へと向った。

様々な想い（前書き）

少しエロティックな表現が含まれています。

様々な想い

○危ない奴○

「主、良いんですか……あんなに色々話して……昨夜も……」

話は現在に戻り、合宿三日目の午前。旅館の裏の海岸で龍之介と別れて、一年生の皆を探しながら歩いている美貴に、白菊は霊体の姿でふわふわと浮いて付いて来ている。

「しょうがないでしょお、先輩達の目の前に出ちゃんたんだからあ。説明しない訳には行かないでしょう」と、美貴は妙に明るく答えた……アニソンを口遊くちずさみながら。

美貴は嬉しかった。

憧れの龍之介に完璧に嫌われたと思い、ヤケクソ気味で決心して自分の秘密を話して見れば、意外にも何時もと変わらない龍之介を見て、地獄の血の池地獄の底から浮かび上がって、地上を通り過ぎ、天国へと上り詰めたぐらい美貴は浮かれていた。

こう言った性格を、古来より日本では？単純？と呼んでいる。

美貴が一番気にしていた鬼の血筋の事も、龍之介は大して気にしていないみたいで、何よりも龍之介と二人で話が出来たし、スケッチにも誘ってもらったしと、気分はウキウキである。

「そうだ、白ちゃん。海神先輩にあまり酷い事しないでよね」美貴が、不機嫌そうに白菊に向かって言うと、

「何がじゃ？何もしてないよ」美貴の言葉の意味が分からず、白菊は目を丸くしている。

「何言ってるの、炎を上げたり怖い顔したりしたじゃない。普通の人にとっては怖いものなのよ」全く他人事のような白菊の態度に、美貴はムツとして睨み付けた。

「そう言うもんかの？」興味無さそうに浮かんでいる白菊に、更に苛いらっとして、

「それと、さっきみたいに先輩がいる時に、呼びもしないのに急に
出たりしたらだめじゃない！何時も言っているでしょ！」と、美貴
が怒鳴り付けると、

「分かってるよお……」白菊は美貴の方を向いて、膨れっ面で答えた。

「姿を消している時に、聞いたり見たりした事も、濫^{みだ}りに言っ
てはいけないでしょ」

「そうそう……」

「たとえば、主にまだ生理が無いとか、お股に毛が無いとか、お尻
だけが大きくなって……」

「黙れ、殺すわよ……先輩に言ったら……」美貴は、気を溜めた手
で白菊の首筋を掴み、顔を寄せて、殺気を孕^{はら}んだ冷徹な目で睨み付
けている。

「は、はい……」白菊は美貴の目に恐怖を感じ、怯えながら返事を
した。

霊体に対してダメージを与える事が出来る気を使う事で、霊体の
白菊も掴む事が出来る。

暫く歩いて、美貴は港で他の一年生達と合流した。

「あれ？篠崎先輩は？」美貴は、辺りを見渡し翔子が居ない事に気
付いた。

「先輩、気まぐれだから……ねえ」と、眼鏡をかけている舞が言
うと、他の一年生の女子2人が顔を見合わせて頷いている。

翔子が、この場に居ない原因の一端が、美貴にある事は誰も知
らない。

「確かに……優しい人なだけだね」と、美貴も納得している。

「でも、最初、噂でリストカットの事聞いて怖かったけど……意外
よね」髪をお下げにしている背の高い洋子が皆に向かって言う
と、うんうんと皆同意している。

美貴以外の女子三人と司は、中学校の頃から美術部に所属してい
たが、美貴は龍之介に釣られて入ったと言うだけで、お絵描き程度

の経験しかなかった為、絵の上手な翔子を頼った。

そして度々、頼って来る美貴を最初は疎ましく思っていた翔子だったが、美貴の明るく素直な所に引かれ、翔子にとって大切な存在となっていく。

最初は、リストカットの噂で怖がっていた一年生達も、屈託無く近づく美貴の姿を見て、次第に打ち解けて行った。

この年頃の女子が五人……いや、四人と類似品か……が集まるとおしゃべりが止まらない。

たっぷり一時間は無駄話に花を咲かせた。

「わっ！もうこんな時間！喋っている場合じゃないわよ！」と、少しふっくらとした弥生が皆に言うのと、皆も慌てて絵を描こうとモチーフを探しに散らばった。

今回の合宿の一番の目的は、夏休み明けに高校美術展があるため、そこへの出品作品のネタ探しが目的だ。入学して四ヶ月に満たない一年生にとっては、必死になるべきなんだが、彼女達に危機感という言葉は適用されてはいない。

船着場には、決して大きいとは言えない漁船が、大小取り混ぜてひしめきあっていた。

美貴が、漁船のある漁港の風景を描いていると、司が美貴の直ぐ隣に座った。

司は昨夜、邦博から聞いた事が気になって仕方がなかった。

美貴は、暗い思いつめた表情で、絵も描かずにじっと座っている司に気付く、

「どうかしたの？」と、司の顔を心配そうに覗き込んだ。

司は邦博に聞いた事で、翔子と話をしたかったのだが、翔子は来ない。

思いつめ、美貴の隣に座ったものの、何を話して良いのか分らずに黙っている。

「？……」黙っている司が、美貴には訳が分らず黙って見詰めていると、

「美貴ちゃん……好きな人、いる？」司が暗い表情で、前を向いたまま美貴に尋ねて来た。

「えっ？」美貴は突然の司の言葉に、どう答えて良いのか分らずに戸惑っている。

司がゆっくりと美貴の方へと顔を向けると、美貴は司の思いつめた顔を見て少し驚き、

「うん、いるよ……」と、司の雰囲気を押されて美貴は正直に答えた。

「その人は……美貴ちゃんの事、どう思っているの？」

「わかんない……誰か好きな人がいるかも知れないし」

「……そう……辛いね……」

「……そうだね」

昨日からの失態に、龍之介が変わらずにいてくれた事に浮かれていたが、改めて、司にしんみりと聞かれ、何事も進展していない事に美貴は気付き、再び鬱^{うつ}の沼に填^はまり掛けた時、

「で、美貴ちゃんは海神先輩が好きなんだよね！」と、いきなり洋子が美貴達の背後から声をかけて来て、無防備だった美貴は、口から心臓が飛び出すかと思うぐらい驚いた。

「なっ！な、何で……」美貴は驚き振り向くと、一年生の女子三人が立っていた。

「ほら、やっぱり！」美貴の狼狽ぶりに、凶星だと悟った洋子はVサインで二人に合図した。

「えっ？どうして！分ったの！」現状が理解出来ないまま、美貴はつい口走ってしまった。

「えっ？どうして……何となく」洋子がしれっと言うと、自分が語るに落ちた事に気付き、美貴は慌てて口を手で押さえた。

「私達は、本田先輩なんだよ」と、言いながら洋子は、二人から百円玉を徴収している。

「美貴ちゃんも本田先輩だと思ったのに」と、ぶつぶつ言いながら舞が、洋子に百円をしぶしぶ渡した。こらこら、未成年が賭け事す

んな……いや、成人でもだめでしょ……

「あ……」その様子を見て、美貴は自分が考えているほど、深刻なレベルでの話では無い事に気付き、少しほっとした。

「美貴ちゃん、海神先輩が好きなの？」騒いでいる三人を他所に、司がそつと美貴に聞くと、

「……うん」美貴は話の流れ上、司には頷くしかなかった。

「美貴ちゃん少数派だね」

「本田先輩の方が素敵だよ」美貴の気持も知らずに、三人は明るく騒いでいる。

「だね、海神先輩も遅しくて頼れそうだけど、本田先輩の方が知的で素敵よね」

「ははははは……」美貴は、本気だとばれない様に作り笑顔で答えた。

「だけど、本田先輩が好きって言っても……どうするの？」司が三人に聞くと、

「えっ？別に、何もしないよ」しれっと、洋子が言い、

「うん、憧れてるだけだもん」と、舞が頷き、

「優しくて、イケ面で……やっぱり憧れるよねえ」と、弥生が言つて、

「ねええ」と、三人は顔を見合わせて同時に頷いている。

「何時か本田先輩みたいな素敵な彼氏が出来たら嬉しいなって」

「だよねえ……そりゃ、本田先輩で良いんだけど、まだ、出会って間が無いもの、まだ盛り上がりに欠けるね」

随分と余裕のある贅沢な洋子の発言に、出会って直ぐに盛り上がった自分は何なんだと、美貴は文句を言いたかったが、当然言えずに黙っていた。

「素敵な人と、素敵な出会いがあって……ねえ」

「そうそう、何時かは告白される……なんてね」

「告白されるのを待っているの？」洋子と舞の会話を聞いて、司が問い掛ける。

「そうね……ただ待っていると言うのも変だけど、自分から告白するのは……やっぱ恥ずかしいし、雰囲気を考えても、告白される方が絵になるじゃない」弥生の他力本願な言葉に、美貴を含んだ三人が、うんうんと頷いている。

女子四人が再び、絵を描く事なんぞ忘れて、告白される時のシュチュエーションの話で盛り上がっている時、司は一人深刻に考え込んでいた。

自分が男だと言う理由だけで、女子校に行けなかった（当たり前だろ……）司は、女子の数が多い、元、お嬢様学校だった斑鳩大学付属高校に妥協して入った。

中学校の時から美術部に所属していた司は、迷う事無く美術部に入る事を希望し、放課後、美術室を尋ねると、其処には、一人の美しい少女がキャンバスに向っていた。

窓から差し込む、傾き始めた柔らかい春の光に照らされ、少女は輝いていた。

漆黒の長い髪に包まれた、日本人形の様に美しい顔には、紅を差しているのかと見紛う赤い唇が、白い肌に染えていた。

一瞬だった。

初めて出会った僅かな時間で、其の少女に、心の全てを奪われた。今、この美しい女神に、自分の全てを奪われたとしても、何も後悔はしない。

太陽の光を受けて輝くアルテミスの妖美な反照に曝されて、全身が優しい浮遊感に包まれた。

そして、アルテミスから放たれた麗しい矢が、胸を射抜き甘美な鎖と成って心を締め付けた時……恋に落ちた事を知った。

一人、孤高の花の様に振舞う少女は、時が過ぎ、やがて優しい微笑を投げ掛けてくれた。

そして、美しい少女の隣に座り、優しい指導を受ける甘い至福の時間に陶酔した。

少女に付いての悪い噂も耳に入ってきたが、少女に心酔する上で、

それは些細なスパイスでしか無かった。

司は、そんな甘い日々幸せを感じて居たが、苦しみも味わっていた。

翔子に会う度に、膨らむ思い……胸が締め付けられる思いに、幾度となく、涙で枕を濡らし眠れぬ夜を過ごした事か……何故、自分は男なんだと……えっ？

あんな素敵なお姉様に、醜い男である自分が吊り合う筈など無い、と……もしもし……

今まで、自分が男である事に嫌悪していた司は、翔子に憧れる事で、今度は自分が男であることを呪った……えっ、ええと？

そして、翔子が美貴の事を愛している事を知り、自我が崩壊する様な衝撃を受けたが、諦める事など出来無かった。

そして今、龍之介の事が好きだと言った美貴の言葉に、成らば、自分にはまだ翔子の心を掴む好機が必ずあると確信し、弥生達の会話から、ある決心をした。

司は鞆に道具を仕舞込み、意を決し立ち上がると、旅館へと走って行った。

突然の、理解不能な司の行動に、美貴達は司の後姿をただ呆然と見詰っていた。

司は弥生達の話で刺激されて、男が告白すると言う部分だけが、司を突き動かしていた。

「そうよ！落ち込んでいるだけじゃ駄目よ！駄目でもともと、自分の気持ちを伝えなきゃ！」

憧れの翔子が美貴の事を好きだと言う歯痒さ、自分が男だと言うジレンマ、それらが入り混じり、司の精神は破綻しかけていた……普段から、少々壊れていましたから……

「そうよ！男なら、当たって木っ端微塵よ！」いや、砕けろでしょ……

日頃、男は嫌いだと主張していた司だが、都合の良い所は男を主張する気である。

司は翔子に会う為、海岸を探したが見つからず、旅館へと向い、玄関で龍之介に尋ねると、龍之介が二階の方を指差すのを見て、勢いよく二階へと昇る階段を駆け登って行った。

そして、翔子の部屋の前に来ると、露天風呂だけが自慢のしょぼい旅館の、オートロックなんぞである訳が無いドアを勢いよく開け、「羽山です！お話があります！」と叫び、中からの返事を待たずに勢いよく中の襖を開けた。

「お姉さ……」司は、言葉途中で固まった。

中には、寝汗で湿ったシャツを着替える為に脱いで、上半身裸の翔子が立っていた。

「あら、どうしたの？」司を見て翔子は、意外と冷静に声をかけると、

「ひっ！ごっ、ごめんなさい！」と、司は慌てて後ろを向いた。

「そんなに、慌てなくても良いわよ」翔子は、カップイン・トップスのシャツを面倒くさそうに畳むと、自分の鞆が置いてある方へと向った。

翔子は小ぶりで形の良い、Bカップの胸を露にしている……白い肌が眩しい。

「どうかしたの？司ちゃん」翔子は、シャツをバッグにしまうため司に背を向けている。

既に、司の最初の勢いは消え、翔子の美しい裸体を見て、司の胸は高鳴り収まらない……苦しいぐらいに。

「司ちゃん？……どうかしたの？」翔子が黙っている司に声をかけると、

「あの、お話があるんです……」胸の苦しみに耐え、虫の泣く様なか細い声で司が答えた。

「こっちにいらっしゃいよ……もう着替えたから」翔子は、

別のタンクトップに着替えて、長い黒髪を整えながら司に言う、後ろを向いたまま動かない司の方へと向った。

「どうかしたの？」

翔子が、入り口で後ろ向きに立っている司の肩に手を置いた瞬間、それが引き金と成り、司は意を決し、勢い良く翔子に振向き、

「おっ、お姉様の事好きです！愛しています！」と、司は真剣な目で翔子の目を見て叫んだ。

突然の、司の告白に翔子は一瞬驚いたが、微笑みながら一呼吸置くと、

「ありがとう……でも、聞いているんでしょ。私のこと……」翔子はそう言うと、今度は少し顔を曇らせて、部屋に置いてあるテーブルの方へ向かい、静かに座った。

「知っています。美貴ちゃんの事。お姉様が美貴ちゃんの事、好きだって事、でも、でも好きなんです！お姉様の事、愛しています！」司は翔子の前に進みながら、徐々にテンションを上げて再び告白した。

「……」翔子は黙って、司から視線を逸らしている。

「どうしようも無いんです！この気持ち！私、美貴ちゃんは良い子だと思っているし、お友達だし、だから余計に、辛くって……美貴ちゃんは海神先輩の事が好きだし、私はお姉様の事が好きだし、だから二人で話したけど、辛くって。それで……」既に、支離滅裂の状態である。

「司ちゃん！」恐らく本人も、何を言っているのか分からない言葉を、翔子は怒鳴り遮った。

司は翔子の言葉に、ビクツとして黙り、目に涙を溜め翔子を見詰めている。

翔子は司を、冷たい目で睨み付けている。

見詰め合う二人……すると、司の肩が小さく震えだしたかと思うと、肩に架けたバッグの中からカッターナイフを取り出し、鞆を畳みに投げ捨て、翔子の前で、ジーンズの裾をハイカットしたショートパンツのボタンを外しチャックを引き下げ、

「わ、私が男だから駄目なの！そうよ！こんな物があるから！こんなもの！」と、目に狂気を浮かべ、狂った様に叫びながら、シヨ

トパンツを膝までずり下ろし、明らかに女性用のスキャンティーの中に手を入れ、片手で“竿”を取り出し引っ張りながら、刃を出し切ったカッターナイフを勢い良く振り上げた。

翔子は、目の前五十cm前方に、強姦未遂のトラウマから絶対見たくない物を、引きずり出されて驚き怯んだが、カッターナイフが司の頭上で鈍く光った瞬間、反射的に立ち上がり、

「だめ！」と、叫び、司のカッターナイフを持った手を両手で掴んだ。

翔子と司は絡む様に畳に倒れ込み、翔子は司からカッターナイフを取り上げ投げ捨て、体を起こして司の剥き出しになっている下半身に馬乗りになると、

「馬鹿な事で、部屋を汚さないで」と、司を見下す様に見下ろし、冷たく言い放った。

司は、その言葉を聴いて、大声で泣き出してしまった。

翔子は、子供の様に大声を上げて泣いている司を見て、哀れむ様に微笑みを浮かべ、

「本当に馬鹿ね……」と、優しく司の頬をなでた。

「良く考えなさい。そんな事をしても何も変わらないわ」翔子は司の頬をなでながら、愛しいそうに微笑み見詰めている。

司は泣き止み、目にいっぱい涙を溜めながら翔子を見詰めている。

「でも、司ちゃんの気持ちは良く分かるわ。私も美貴ちゃんに、私が男だったら振向いてくれるのって、泣き叫びたい時があるわ」微笑を浮かべ、司を見詰る翔子の目に涙が滲んでいる。

「人を愛する気持ちって、色々な好きがあるじゃない。友達とか良い人とか親とか兄弟とか……でも、その色々な好きの中で、自然と膨らんで来るものがあるのよ。それは自分ではどうしようもないのよ。押さえる事も掻き消す事も出来ない、どうしようもない気持ち……だから辛い」翔子の目から司の胸に、涙が零れ落ちている。

「だけど、それを、相手に強制しても……分かって欲しいって、訴

えても、虚しいだけよ。愛って、一人で盛り上がるものじゃないの。二人で、育むものなの。男とか、女とか、関係ないの。お互いの……気持ちが……通じないと……」翔子が泣きながら途切れ途切れの言葉で話していると、途中で手で顔を覆って泣き出してしまった。声を出さず、しゃくり上げる様に泣いている翔子。二人の間に長い沈黙が続いた。

翔子は、ゆっくりと顔から手を離し、涙の流れる目で司の顔を見て、

「辛いね……」と、寂しそうに言うと、司は頷いた。

「お姉様……だったら、分かってくれますよね。私の気持ち。お姉様の傍に居たいんです。振向いてもらえなくても、お姉様が美貴ちゃんの手好きでも……傍に居たいんです」

目を閉じて暫く考えて居た翔子が、ゆっくりと目を開け、

「そうね、分かるわ……でも、辛いわよ……そんなのって」悲しげな表情で問い返すと、

「知っています……」と、司は悲しげな微笑を浮かべて答えた。

翔子は、報われないと分かっている、思いを募らせる事が、どれほど辛い事か知っている。

「お傍に居ても良いですよ……」司が遠慮がちに翔子に聞いた。

翔子は司の一途な気持ちに、少し困った様な微笑を浮かべ、小さな溜息を付いた。

そう、それは自分も同じだから。

美貴を思う自分を、一途に願う司に重ね、

「結局は、傷を舐め合うだけ……かもしれないけど……」分かり合える司となら、心の痛みを消す事は出来なくても、和らげる事は出来るのではない、

「それも悪くないわね……好きにきなさい……」と、静かに言って立ち上がった。

その時、立ち上がった翔子の股間が、司の目に飛び込んで来た……清楚な白でした。

司は顔を真っ赤にして、直ぐに顔を背けたが、今まで自分の下腹部に座っていた翔子の股間と太股の柔らかさと温もりが、翔子の股間が見えた事が引き金となり、急に脳髄へと刺激的な官能の信号を送り着けて来た。

司は、その甘美な感覚を味わい陶醉した時、股間がビンツと激しく反応した……所詮、男。

爆発的な股間の反応に気付き、司は慌てて下着とショートパンツを引き上げようとした時、

「お昼ご飯に、い、ぐっ！……」と、翔子が司の方に振り向き、畳みの上で肥大化した障害物に手間取りながら、ショートパンツのチャックを上げようと苦戦している司を目撃した。

「……」翔子は、司のパステルピンクのスキヤンティーから、こんにちわぁ！と顔を出している物を、見下した冷たい目で見ている。

司は、今にも泣き出しそうな顔で、翔子の顔と自分の股間とを交互に見ながら、チャックを引き上げようともがいているが、焦っている為になかなか上手く上がらない。

翔子は、殺気を漂わせた残酷な目で司を睨み付けながら、

「私の前で、こんな物は……」と、膝を高く上げ、

「に、ど、と、出すな！」と、司の股間を力いっぱい踏み付けた。

「ぶっ！」うっ……っ、司は……悶絶し白目をむいた……御無体な……

「わ、かつ、た！」翔子は、更に踏み潰すように体重をかけ、足を捻り動かしている……無慈悲な……

「ぎっ！うぐっ！」痛みで気が付き、司は苦悶の表情を浮かべていたが、

「わかつ、ひっ、わ、分り、ました……あうっ……あふっ……」翔子が足を動かす度に、次第に新しい世界を感じ始めていた……とある人達にとっては御褒美です。

「うっ？」翔子は、薄笑みを浮かべ恍惚としている司を見て、思わず身を引いてしまった。

「あつ……」翔子が離れると、司は急に名残惜しそうな表情で翔子を見詰めた。

「は、早く片付けなさい！そんな物！……行くわよ！」司の表情に、自分も何か危険な物を感じてしまった翔子はそれ以上踏み込まず、食堂へと向う為、部屋を出て行った。

「まってくださいよう……」司は慌てて立ち上がり下半身を仕舞い込み、翔子を追った。

○臆病になるなよ○

「はああ、何だろう……この、喪失感……なるほど、心に穴が開いたって、こんな感じなんだ……」と、龍之介が今更ながら、失恋した事を実感している。

龍之介はトイレの前で、壁に額を付けて、もたれ掛かる様に立っていた。

「よう！海神、元気無いな。失恋でもしたか？」

突然の声に、ぎくつと、して振向くと、

「せつ、先生……」葛西先生が、浴衣姿で現れ、

「今、起きたんですかあ？」と、龍之介は眉をひそめている。

寝起き姿の先生は、ノーメイクで、寝癖が残ったままの髪をアツプに適当にまとめている。

乱れたままの浴衣の胸元がはだけ、巨大なブラに拘束された、メロンの様な巨乳の谷間が、必要以上に自己主張している。

胸のメロンは、御歳三十には見えない艶と張りが有り、最高級「富士」の称号を与えるのに相応しい物だった……是非、香り、弾力、味も確めたいものだ。

「いやあ……昨夜、飲み過ぎちゃって……」昨夜だけじゃないでしょ……

「まあ、碧がいるから大丈夫だろ？」照れながら頭をかいて話す先生を見て、

「そうやって何時も部長に頼って……」と、龍之介は呆れている。
「……で、碧に振られたか？」核心を突き、先生は龍之介に、ずいっと顔を突き出す。

「なっ！なんで！」突然の、先生の顔のアップと、心を見透かした先生の言葉に驚き、龍之介は思わず仰け反っている。が、近付いた先生の谷間も気になる！

貧乳好き、と言う異端者の龍之介だが、平たく言えば好みと興味は別物で、思春期の龍之介にとって、白くて大きな揺れる谷間には、探究心が湧き上がる。

「なんでって……見てりゃ分かるよ……お前、碧の事、好きなんだろう」

あっさり言い切った先生の言葉に驚き、目を大きく見開いて、
「わ、分かるって……ど、ど、どうしてですか？」と、狼狽る龍之介に、

「そりゃあ、分かるさ、お前、何時も碧の方見てたぞ」と、先生は腕を組んで向き直る。

先生の言葉を聞いて、自分では意識してはいなかったが、そんなにも自分は、目だって部長の事を見ていたのかと、恥かしい思いに顔を真っ赤にした。

「でっ……振られたのか……」先生は、腕を組んで盛り上がった胸と共に、顔を龍之介の耳元に寄せ、興味深々の目をして囁いた。

龍之介は近付く谷間を、興味深々の目で観察していたが、

「……ええ、振られましたよ」ぷいっと顔を背け……だが、横目でしっかり観察しながら、素っ気く答えた。

そんな龍之介を見て、先生は、

「へえ……お前……」感心した様な顔をしたかと思うと、

「振られて、一つ大人になったか！いやああ、偉い偉い！」と、にこやかに大声で褒めながら、龍之介の背中をバンバンと思いつき叩いた。

「なっ、何の事ですか！」痛みに耐え、横目で観察しながら龍之介

が聞き返す。

「お前達、童貞諸君は、そういう事を聞くと、すぐに恥かしがって誤魔化そうとする、余裕が無いんだな、お子ちゃまは」先生は、また腕を組みなおし、困ったもんだと言いたいようだ。

「だけど、お前は素直に認めた……経験と共に成長したって事だな」行き成りにこっと微笑み、龍之介の腕を、組んだ腕の肘で突いている……突くたびに胸がプルンプルンと揺れている。

「でも、失恋なんて幾ら経験しても、自慢には成りませんよ……」龍之介は、恥ずかしそうに顔を少し赤くして先生から顔を背けた……これ以上の観察は、緊急事態を招く恐れがある。

「その辺は、初心者だな……言いふらして歩くもんじゃないだろ、元から……経験して、皮が剥けて行くって事だよ。剥けてるか？お前」

「どっ、何処の事なんですか！」

「まあ、お前らの年頃は、只、漠然と彼女が欲しいって事で、誰が好きだとか、誰が好みだとか、やってんだよ。何も分らずに恋に恋してるってやつかな。その中で、失恋なんて言う現実を突き付けられて大人になるんだよ」

「でも、それは失恋する事が前提の話じゃないですか。最初から上手に行く奴もいるでしょ」

「当然いるよ。ただし、道程が違みちのりうだけだよ。上手く行くと行って、出会ってすぐに恋人になる訳じゃ無いだろ。どっちにしろ、お互いが、切ない想いや悲しい想いをして、愛って奴を理解して行くんだよ」珍しくまじめな顔で話す先生の言葉を、龍之介は何となく理解出来た。

「何でもそうだけど、自分が経験しなきゃ、相手の気持ちなんて理解出来ないだろ。男と女の違いはあるだろうけど、お互いが理解出来なきゃ、心を通わせるなんて出来る訳無いだろ」

龍之介は先生の言葉が、素直に理解出来た。部長に振られて、初めて知った切ない思い。

翔子の気持ち理解出来た事。そして、他に好きな人がいると言った部長。もし、部長が振られたら、こんな苦しい思いをするのかと思うと、やるせない気持ちで胸が痛んだ。

「まあ、色々経験しないとな。エロゲーやギャルゲーじゃ無いんだよ人生は。精々ゲームのパターンなんて百か二百程度だろ……良く知らんけど、だけど、現実の人間の感情が絡む物にパターンなんて無いんだよ」

「はあ……」

「流動的に変化する感情を理解しようとするなら、経験が必要なんだよ」

「はあ……」

「だから……まあ、教師らしく、一つアドバイスしてやるよ……」

「はあ……」

「臆病になるなよ……」先生の眼鏡の奥に真剣な目が光った。今振られたばかりの龍之介にとって、心を抉られるような言葉だった。

振られたばかりの龍之介。恋に対して身を縮め震えている自分が見えて来た。

「はっはっは、そう言う事だ！がんばれ！童貞！」先生はまた、龍之介の背中を思いっきり叩きながら笑っている。

「はあ……」龍之介は、痛みに耐えて迷惑そうに返事した。

龍之介がトイレの前で葛西先生を見送っていると、翔子と司が二階から降りて来た。

二人は食堂に向うため龍之介の前を通り過ぎ様とした時、「海神君、早速、トイレでおかずにしてたの……」と、冷たく蔑んだ目で翔子が言うと、

「してねえよ！」と、龍之介は拳を握り抗議の叫びを上げた。

「何よ……どうせ、♀#&*@して、♂★♂☆を、○♀℃♂するんでしょ……」

「おっ、女の子がなあ！そんな事言うなあああ！」翔子の放送禁用語に龍之介は激怒した。

司は目を大きく開けて、真っ赤になって翔子を見ている……なんぞ知っているの？と……

「ふんっ……幻想だわ、そんな考え……」翔子は龍之介を一瞥し振向き、食堂に向った。

「行くわよ、司ちゃん」翔子のショッキングな言葉に硬直している司を促すと、

「はっ、はい」と、司は慌てて翔子の後を追った。

「おい、龍之介」

後ろからの声に龍之介が振向くと、

「何だよ……待ってたのに……来ないから……」と、不満そうな顔の邦博が立っていた。

「あっ、すまん……葛西先生に捕まってた……ほら」泣いてた事を誤魔化す為、食堂の前で部長と話している先生の方を顎で示すと、邦博はそれを目で追い、

「ははは、先生、今、起きたのか」と、寝起き姿の先生を見て笑った。

葛西先生はどうやら、部長に怒られているみたいで、しゅんとして立っている。

先生と部長が食堂に入って行くのを見て、龍之介と邦博も食堂へと向った。

食堂に入り、既に翔子と司が並んで座っている前に、二人も並んで座った。

「はい、どうぞお姉様」翔子の隣で、にこやかにお茶を入れたり、箸を丁寧の手渡したりしている司を、龍之介は不思議そうに見ていると、

「で、海神君。けりは付いたの？」と、司から箸を受け取りながら翔子が聞いて来た。

「……」邦博が何の事か分からずに、眉を顰めて翔子を見た。

「ああ、付けて来た」龍之介は、仕出し弁当の蓋を開けながら答えた。

「そう……」静かに翔子は答えると、食事を始めた。

「おい、何の事だよ……」と、訝しげに問いただす邦博に、

「ん、ちょっとね……後で話すよ」と、龍之介は寂しそうな顔で答えた。

その後、なぜか四人は無言のまま食事をしていた。司は一人ニコニコしながら食べていた。

「司ちゃん、行きましようか」食後のお茶を飲み終わった翔子が、澄ました顔で司に言うのと、

「はい、お姉様！」と、司は明るく元気に答えた。

○気が付いたら三十○

「まったく、先生は、教師としての自覚がありません！」

「……すみません……」

「引率すべき、教師が、生徒に迷惑掛けてどうするんですか！」

「面目ない……おっしゃる通りです……」

食堂の前で、手を腰に当て文句を言っている部長を前に、葛西先生は両手を前に添えて俯き、しおらしい態度で部長の小言を聞いている。

先生の両腕に挟まれた巨乳が、窮屈そうに盛り上がっている。

部長は二日連続で、露天風呂で酔い潰れた先生に、下着と浴衣を着せて二階の部屋まで運ぶという、屈辱的な重労働を強いられた。

何故、屈辱的かと言うと、頭にかぶれそうなブラを先生に着けながら、貧乳の部長は巨乳の重さを知り、自分の知らない世界に嫉妬していたのだ。夏場は汗疹にも気を付けないとね……

「午後からは、部員の指導をお願いしますよ！」と、部長は、きつく叱り付ける様に先生に言うのと、ぷいっと振向いて食堂の中へと入

って行くと、

「はああい……」と、先生は申し訳無さそうに返事をして、部長の後を追った。

テーブルに並んで座り、二人が無言で食事をしていると、

「碧……まだ、怒ってんのか？」と、先生が部長の顔を覗き込むようにして尋ねて来て、

「怒ってません……」と、部長は、そっけなく答えた。

すると先生は、更に顔を近づけ、

「怒ってるだろう……」と、しつこく尋ねると、

「怒ってません！」部長は、先生を睨み付け声を荒げる。

先生は、部長の迫力にビクッと身を引いて、

「ほら、怒ってる……」と、上目遣いの情け無い表情で部長を見た。

「あのね、先生、食事がまだ済んでいないのは、海神君達と私達だけなんですよ！早く食べてください！」既に他の部員達は外にスケッチに行っている。

「……お前、海神、振ったのか？」先生が部長の耳元でぼそつと言うと、

「ぶっ！」と、部長はご飯を吹いてしまった。

「なっ、何の事です！」部長は、身に覚えがあるだけに、焦り顔を赤くしている。

「いやね、海神がトイレの所で、しょんぼりしていたんでさ……」

先生は、龍之介の方をチラッと見ながら言った。

「そっ、それが、どうして私が、振った事に繋がるんですか！」紙ナプキンで恥ずかしそうにテーブルを掃除しながら部長が聞いた。

部長は先生が何故、ついさっきの事を知っているのか不安だった。「いや、何となくだよ。海神、あいつ何時も碧の事見てたし……碧の事を好きだというのは分ってたしね……で、さっき随分と落ち込んでいた訳よ……」

先生は龍之介の名誉のために、龍之介が口を割った事をわざと隠している。

「まあ、これでも教師の端くれでね、生徒の様子は、見ているつもりだよ……」

「……………」部長は、根拠の無い事で良くもそこまで言えるな、と睨んでいる。

「お前、好きな奴居るんだろ。だったら、とつとと、けり付けたら？」

「大きなお世話です」傍に近付き話す先生から顔を背けて、部長は食事を続けた。

「美術部の平和の為だぞ」

「論理が飛躍しすぎています」

「言えよ、誰なんだ、好きな奴は」先生が箸を持ったまま身を乗り出し、部長に迫る。

「話す義務はありません。黙秘します」部長は、更に横を向く。

「教えるよ……クラスの奴か？」先生が箸に挟んだ食べかけのトンかつを、部長に近付る。

「個人情報に付き、守秘します」近付けられたとんかつを避け、部長は体を軽く反らす。

「つまんねえな……」先生は諦めた様に元の椅子に座りなおし、憮然として食事を続けた。

「先生の個人的な好奇心を満たすために、何故、私が個人情報を公開しなくてはいけないのですか！」先生の態度にカチンツと来て、部長は先生の方を向いて強く抗議した。

「だから、美術部の平和の為だって。それが分らず、次の世代を担う大事な男子資源が、心を痛めて、自己崩壊しても良いのか？それが、部の責任者のする事か？」と言う理屈よ？

先生は好奇心丸出しで、屁理屈を捏ねて部長を説得している。

「先生の、観測的意見には、根拠がありません。それに、責任者は先生でしょ！」

「あっ、そうだね。はははは」激しく抗議する部長に対して、先生は笑って誤魔化している。

食事が一頻りして、先生は食後のお茶を入れながら、

「でもさ、碧みたいな気の強いタイプは、プライドが高くて、すぐに自分の周りにバリエー張っちゃうんだよな」と、しんみりと言うと、

「何の事ですか」また変な事を言うと、少し呆れた顔で部長は先生を見た。

「自分の欠点を見せまいと、バリエー張っちゃうんだよ。その欠点が、他人から見れば些細な事でもね」そう言って先生はお茶を飲んでる。

「そんな、私、バリエーなんか張ってません！」訳が分らず、部長は段々と腹が立って来た。

「どうだか……クラスの男共が近付こうとしても、寄せ付けないくせに。学年でも可愛い方に入っている碧を、男子が退いてるのはどう言う訳だ？」

「そんな事、知りません！」

ほっといってくれと、言わんばかりに部長は立ち上がり、大声で先生に抗議した。

激怒している部長の顔を、お茶を飲みながら横目で見ると、先生は溜息を一つついて、

「そうか、なら重症だな……私がさ、昔そうだったから……自分の弱みを見せまいと、意地張ってさ、気が付いたら三十だぜ。素直になれなかったんだよな……だから、自分の生徒には、同じ失敗をして欲しくなくてさ……」と、俯き加減でしんみりと言った。

「……………」部長は、急に真面目な顔で話す先生の顔を、少し驚いた様な顔で見た。

「プライドが高い分、臆病にもなっちゃって……世間の目が気になつて、更に自分を縛り付けて……もう少し、自分に素直に自由でいられる勇気があったら、人生変わったかもある……」

窓の外を見詰ながら寂しそうに先生は話している。

「十八の夏は一度だけだぞ。大事に使いな……じゃ、着替えてくる」

先生は、最後に静かにそう言うのと立ち上がって、部屋の方に向かって行った。

先生の後姿を見ながら部長は、自分の心を見透かされたみたいない気分だった。

「何よ、言いたい事、言って……」

しんみりと部長が視線を戻すと、先生は人参だけを残していた……子供か！

「私の何処が、意地張ってるって言うのよ！」とは言ったものの、自分には分っていた。

其処に臆病になっている自分が居る事を。

容姿、成績共に上位にランキングされて、美術部の部長としての職務を、顧問の教師よりも責任感を持ってこなし、周りの人望と信頼を集めている部長だが、やはり悩みはあった。

身長が百七十二cmもある事と、背ばかり延びて、全く育つ気配すら無い胸の事を、深刻に悩んでいる。

しかし、背の高い事を羨ましく思う人も居るし、発育不良の胸も需要が無い訳では無い。

悩みとは、本人が気にしている割には、回りには別段どうでも良い場合が多い。

しかし、部長にとっては深刻で、世間には身長百六十九cmと公表して、動くはずれるのにAカップのブラにパッドを入れている……本体は成長せずとも乳首だけは成長するもの……

そんな自分を、部長は？女らしく無い？と、思い込んでいる。

クラスの男子達は、当然、可愛い部長に御近付きに成りたいと話しかけるのだが、何時も素っ気無い態度であしらっていた。

現実、部長は勘違いしている。十分女の魅力を持っている事は、龍之介が証明している。

なのに部長は、女らしく無いと思い込むコンプレックスに支配され、被害妄想に襲われる。

話しかけてくる男子に対して『どうせ女として見て無いわよ』と、

思い込む部長は、素っ気無い態度どころか、無意味な負けん気を出して、男子に食って掛かる。

そして、プライドが高い分、女らしく無いと思われる事に、自分が負い目を感じている事を悟られ無い為に、負けるもんかと率先して（でしゃばって）クラスを仕切ろうとする。

成績も優秀で、言っている事も道理が通っている、間違っていれば先生にも食って掛かる。

そんな部長をクラスでは、良い意味で言えば、正義感が強く、統率力もある頼れる存在だったが、男子達の目からすれば気の強い可愛気の無い女としか写らなかった。

結局部長は、欠点を気にし過ぎる余り、自分の長所すら打ち消していた。

そして、何よりも一番深刻なのは、好きな人より、自分が年上である事だった。

それも世間では大した問題では無いのだが、本人にとっては深刻の様だ。

「こんな年上の私なんか……てっ、まてよ」と、さっき龍之介が告白した事を思い出した。

「あれ？もしかして私って、年下からもてるタイプ？」と思い、首をかしげた。

部長は、生まれて初めて好きだと言われた事に、ある意味ショックを受けていた。

女らしくないと、思い込んでいた自分が、女として見られていた事に。

しかも、好きな人に対して年上コンプレックスを持っていた所に、年下の龍之介から告白された事に、部長の心は乱れていた。

「そうか……いや、まてよ……しかし……だとしても……でも……だからと言って……」と、何やら部長は腕を組んで、一人ぶつぶつと呟いている。

そして、其処にはコンプレックスに拘り、素直になれない自分が

居る事に気付き、

「あああ、もう！そうよ！素直じゃ無いわよ！どうせ、可愛気が無いわよ、私は！」と、一人残った食堂で、立ち上がり叫んでいる部長が居た。

思わず叫んでしまった部長は、はっと我に帰り、自分の醜態を誰にも見られなかったかと、顔を赤くして辺りをきょろきょろと見て、誰も居ない事を確認してから、

「もう、やだあ……何、悩んでんのよ……」と、力が抜けたみたい

に、どさつといすに座り、
「でも、気が付いたら三十か……それだけは絶対に避けたいわ！」と、強く拳を握った。

先生に言われた事を思い出し『簡単に素直になれば悩まないわよ！でも、気が付いたら三十は嫌……勇気があれば、苦労しないわよ！でも、気が付いたら三十は嫌……』と、同じ言葉が何度も頭の中で繰り返されていた。

○女の甲斐性○

昼食も済み、画材を持って一人遅れて出かけた部長は、

「まったく……なんだったのよ調子狂うわね。先生は何時もそう、放り投げるだけ……だから、どうしろと言うのよ」と、悩みながら三年生の皆を探しに港までやって来た。

しかし、他の三年生は、どうやら海岸の方へ行っただけで、港には見当たらなかった。

部長は、きょろきょろと皆を探して歩いていると、邦博の姿が目についた。

「あつ！……本田君……」邦博の姿を見るなり部長は足を止めた。

部長が邦博の周りを見ると、辺りには誰もおらず、何時も、金魚と糞の関係の様に引っ付いている龍之介も居ない（どっちが金魚でどっちが糞とは言わないが……）

邦博は、一人で海に浮かぶ船を描いていた。

この状況を見て？チャアンスッ！？と、部長の心のゴングが鳴り響いた……ファイト！

部長は、それ行け、ほら行け、今なら誰も居ないぞ！二人っきりだぞ！と、心の中で自分自身を鼓舞しているが、足が動かない……そうです。部長は邦博君が好きなんです。

せっかくの、お近付きのチャンスと言うのに『どうせ、私なんか……』と、思う部長は、今一步の勇気が出ない。

そんな自分を悔しく思い、俯き唇を噛みながら部長が佇んで居ると、

「あっ、部長」邦博が斜め後ろに立っている部長に気付き、

「一人で、どうしたんですか？」と、柔らかに微笑みながら部長に問いかけた。

「あ、あの、司ちゃん見なかった？」邦博の笑顔にどきつとして、部長は慌てて誤魔化した。

「司なら、もう少し先に居ましたよ」邦博は爽やかな笑顔を浮かべ、司の方を指差している。

「あっそう……」部長は顔を赤くて、邦博が指差す方を見た。

部長は、司の名前を出して誤魔化している自分が情けなく思えて嫌だった。

更に、そんな自分に気付かれるのは、もっと嫌だった。

年上で有る自分にコンプレックスを感じ、年下の邦博の事を好きな自分を世間が、邦博がどう思うのかと不安だった……歳だけじゃなく、胸とかも……

「あの……どうしたんですか？」ただ立っているだけの部長を、不審に思い邦博が尋ねた。

「いっいえ、何、描こうかなって……船も……良いかなって……それで……」

船ではなく貴方の隣が良いと言いたいのだが、言える訳も無く言葉が窄んでしまった。

たった五mの距離。この距離が部長には果てしなく遠かった。

普段、皆と居る時は平気なのに、二人つきりと言うシュチュエーションに緊張して、心は既に邦博の隣へと駆け寄っているのに、体が動かない。

「あつ、そうだ、部長これ使って下さい、スカート白いと、汚れるの気になるでしょ」

邦博は、画材を入れる布製の鞆の中身を出して、自分の隣に置いた。

それを見て部長は『何て、優しいのよ。ぐっと来た!』と、感激の渦に身を沈めてる。

邦博の直ぐ隣の鞆……目標、約五メートル前方、ロックオン!

何やら体がふわふわと足が地に付かない感覚の中、部長の目には鞆しか映っていなかった。

『それっ行いけ!それっ行いけ!行け!行け!行け!GO!』と、心の中で、三三七拍子をバックミュージックに、再び自分自身を鼓舞するが動けない。

その時、ふと先生の言葉が頭に浮かび『ええいっ!絶対に三十は嫌!素直になって!勇気を出して!行け!行け!私!頑張れ!頑張れ!私!』と、心の中で絶叫にも似た声を上げると、

「ありがとう……本田君、優しいのね」やうやう漸く、体が動き邦博の隣に座る事に成功した。

ミッシヨンが成功して『やったああ!座ったぞ!なああんだ、簡単じゃないの、どうって事無いわよ!ははは!ひゃほーい!』と、心は歓喜の声を上げ、サンバを踊っているが、顔には出していない。そして、普段の信仰心なんて、正月に近くの神社にお参りに行く程度しか無い部長が、神様が勇気を与えてくださったと、心から感謝した……いきなり感謝されても、神様も迷惑。

部長は邦博の隣に座り、心の中の葛藤がばれてはいないか、その為に動きにぎこちなさは無かったか、成功した喜びが顔に出てはいないか、と言う不安を微笑で隠している。

しかし女と言う生き物は、昔から贅沢を好む様に出来ていて、部長は念願の邦博の隣にやっと座れたと言うのに、更に会話が欲しいなどと思い始めていた。

「あっ、あの……部長……こんな事言って良いのか分らないんですか……」

「えっ？何？」^{ほっ} 欲すれば何とやら、希望通りの展開に部長は目を輝かせ邦博を見た。

「龍之介から聞いたんです。その……」邦博は、何やら言い難そうに俯いている。

部長は、邦博の話し振りが何となく察しが付き、

「海神君から聞いた事……」会話は求めていたが、その内容が自分としては、恐らく触れたく無い内容である事に、少し不機嫌そうな顔になった。

部長は龍之介が振られた事を、どの様に話したのか気になったが、今は邦博と居る時間の方が大切で、いかに自分をアピールしようかと、立て膝に頬杖を突いて首だけを回し、自分なりにポーズを決めて、微笑みながら邦博を見ている。

「……部長に、振られた事……」邦博は、部長がせっかくポーズを決めているのに、見もせずに、俯きながら悲しそうな声で答えた。

「へえ……そうなんだ……羨ましいな、二人はそんな事も話し合える中なんだ」と、部長は微笑んではいるが、邦博が自分に注目してくれない事を不満に思っていた。

「あいつ、良い奴なんです。小学校の時から一緒に……俺、小学校の時、苛められていて……それを、あいつ、助けてくれて」邦博は昔の嫌な思い出に、苦渋の表情を浮かべている。

「馬鹿ですよあいつ……僕を庇って、結局自分も苛められて……馬鹿なんですよ……」

部長は、じっと邦博の横顔を眺めている。

女と言う生き物は、こんな時、話の内容等ほとんど頭には入らず、イケ面の憂いをおびた表情を、だだ？よいわああ？等と想いつつ観

賞しているだけである。

「でも、僕……そんな馬鹿が大好きで……だから、あいつが部長の事、好きだって聞いた時、どうして良いか分らなくなって……」

「……本田君?……」 邦博の横顔鑑賞をしていた部長は、その目に涙が浮かんでいるのに気付き戸惑った。

「あいつの気持ちを考えると、僕、辛くて……あいつが部長の事好きだなんて、聞かなきゃ良かった……あいつの悲しむ顔なんて見たくない……だけど、僕……僕だって……」

両手に拳を握り締め、目を強く瞑り、涙を流している邦博の姿に、ただのんびりと邦博の横顔を觀賞していた部長は、邦博の異常な悲しみ様が少し不安になって来て、

「どうしたの……本田君」と、身を乗り出すように手を差し伸べると、

「僕、僕だって、龍之介の事、愛しているのに!」と、邦博が叫んだ。あら、えっさっさ……

邦博の告白を聞いて、手を差し出したまま、

『な・ん・で・す・と?』と、部長の思考は、情報処理が追い付かずフリーズした。

「なのに、龍之介は僕の事なんか、少しも気付いてくれなくて……」

「……」 まだ固まっています……

「熱を出して、受験出来なかったなんて、嘘を付いたのも、龍之介と一緒に高校に行きたかったからなのに……なのに、あいつ、何も気付いてくれなくて」

「……」 まだです……

「部長!」 黙っている部長に痺れを切らし、邦博は叫びながら部長の両肩を両手で掴んだ。

「ひっ!」 突然の事にびくつと体を震わせ、やっと部長の思考が再起動した。

「僕じゃ駄目なんですか! 龍之介には、僕じゃ駄目なんですか!」

「さっ、さあ?……どうかしら、ねえ……」 座ったまま邦博に両肩

を掴まれ、自由に身動きが取れない部長が、邦博から逃げようと引きつった笑顔で身をよじっている……どん引き……

「何で、部長なんですか！」

「なっ、なんででしょう……」部長は邦博の手から逃れ、後ろ向きに這いずり逃げた。

「男同士じゃ駄目なんですか！」這うように迫る邦博から、

「どっ、どうでしょう……」部長は、更に後ずさりしている。

迫る邦博を見て部長は、初めはその異常さから恐怖を覚えたが、段々と、自分が好きになった男が同性愛者であった事に腹が立って来て、

「部長！」と、迫る邦博に、

「やめんかぁ！うっとうしいい！」部長は絶叫し、上向の姿勢のまま体を捻り足を引き寄せ、一気に邦博の顔面に蹴りを入れた。

見事な蹴りが入った直後、部長は翻ったスカートを慌てて直した。眩しい白でした……

部長は情けなかった。今の今まで懂れていた邦博が、同性愛者だったなんて。

そんな事は知らずに恋焦がれ、悩んでいた自分が惨めで情けなかった。

「なっ、何なのよ……こんなのって……こんなのて……」

部長の顔は青ざめ、蔑んだ目で邦博を見ながら、唇がわなわなと震えていた。

「ぶ、部長……」邦博は、眼鏡が曲がってずれた顔面に、部長のスニーカーの跡をくっきりと付け、鼻血を少し流しながら涙目で部長を見詰めている。

部長に蹴られた事で、邦博は我に帰り冷静さを取り戻し、言っていけない事を言ってしまった事に気付き後悔していた。邦博は龍之介から部長の事を聞いて、気に病んでいたみたいだ。

「すみません、余計な事言って……」冷静になり、邦博は恥かしくて部長から顔を背けた。

女と言う生き物は何事においても、自分の都合の良い方に解釈したがるものである。

眼鏡が曲がり、鼻血を出してしようと、涙目で憂いを見せる邦博の顔を見ると、やはり部長の胸に迫るものがあり、現実を何とか自分の都合の良い方へ解釈しようと努力していた。

部長の解釈は、小学校の時、苛められていた邦博を龍之介が助けた事で、邦博は恩義を感じ、友達以上の強い感情を、愛だと”勘違い” しているのだと結論付けた。

そして、部長は間違った考え方をしている（と、部長は決め付けている）邦博を何とか更正させてやる、いや、更正させるのは自分しかない」と強く決心した……大きなお世話である。

女と言う生き物は、打算的な考えが全てに優先されるものである。

『そうよ！誰にでも欠点はある！イケ面で、優しくて、成績優秀、今逃したら、二度とこんな上玉、出会えるもんですか！絶対に三十は嫌！』と、本音の部分が心の中で爆発した。

「そうよ！私がやらなきゃ駄目なんだわ！」どすこおいつ！

立ち上がり、絶叫し盛り上がっていた部長は、個人モードから対人モードに切り替え、まだ地面にへたり込んでいる邦博に振向き、優しく微笑むと、

「それで……本田君は、どうしたいの？」と、小首をかしげ可愛らしい仕草で尋ねた。

「えっ？」絶叫の後の、部長の変化に戸惑いながら、邦博は部長に聞きなおした。

「つまり……海神君の事を愛しているって……その……抱き合ったりとかあ、キスしたいとかあ……それ以上とかあ……」刺激的な言葉に、部長は少し頬を赤くして邦博に尋ねた。

「そっ、そんな事……」実際、邦博も、そこまでは求めていなかったで、焦って否定した。

「出来ないわよねえ、そんな事。そんな事したら、海神君に嫌われるわよねえ」

「……」考えて見れば当然の事を言われて、邦博は落ち込んだ。

邦博としては、プラトニツクな心の繋がりを求めているだけであって、決して体の繋がりを求めている訳ではなかった……繋がる、広がる、響きあう、DoCoGa?……失敬。

しかし、龍之介に対して、恋愛感情を持っている事を知られたら、現段階では、それは破滅を意味していた……いや、現段階だけで無く、未来永劫に置いて、確実に破滅する。

部長は笑顔から一変し、厳しい顔で腰に手をやり足を踏ん張って、「じゃあ、貴方はそれでも、海神君を愛すると言うの!それが正しい姿だと言うの!」と、邦博を指差し叫ぶと、

「うっ……」邦博は、自分は心の繋がりを求めているだけだと反論したかったが、部長の迫力に押され反論出来ずに言葉が詰まった。それに同性愛と言う負い目もあるし、正しいかどうかと聞かれれば、やはり答えに困ってしまう。

龍之介への想いが膨らみ、気付いて欲しいと願った所で、気付いた龍之介は、確実に邦博を別な生き物を見る目になるだろう。

その事を考えると、自分はどうしたいのか邦博は分らなくなっていた。

「落ち着いて考えなさい!貴方は海神君への……親友への強い思いを、愛だと勘違いしているだけなのよ!……それとも、本当に男が好きなの?」

「そんな!男が好きだとは言っていないません!龍之介が好きただけで……」

「じゃあ、女の子は嫌いな?」

「……別に、嫌ったりはしてません……」

「そうでしょ。故に貴方は、”勘違い”いしているのよ!」見事な、屁理屈の三段論法が完結した。

「……………」邦博は、腕を組み考えるが、どうも理解、いや、部長の論理が納得出来ない。

Mr. スポックなら、瞬時に『非論理的ですね……』と、指摘す

るのだが、邦博は腕を組みながら首を捻り、頭の上に？マークを並べている。

女の屁理屈を理論的に分析しよう等と、無駄な努力をしている邦博を見ながら、部長は慈愛に満ちた微笑を浮かべ、

「私に任せなさい」と、座り込んでいる邦博の前にしゃがんだ。

「えっ？」微笑み見詰める部長の言葉の意味が分からず、邦博は聞き返した。

「私に任せなさい。きっと貴方を更正させて上げるから」だから、大きなお世話だって……

「部長？……」邦博は、脈絡の無い部長の申し出に、訳が分からずに戸惑っている。

女と言う生き物は、周りの都合を考えずに、自分の意見を強引に押し付けるものである。

「私と付き合うの」これも告白なのでしょうか？素直に好きですと言えない部長……

「へっ？」急展開に付いて行けない邦博君……

もう此処まで来たら、形振り構ってられない。

突然告白されて、鳩が豆鉄砲を食らった様な顔で部長を見詰める邦博に、

「私の事……嫌い？……こんな……背の高い女は嫌？」甘える様な口調で部長は涙ぐみ、邦博へ縋る様に身を乗り出し迫ると、

「そんな事、無いです……けど」邦博は、部長の憂い顔にドキッとした。涙は女の武器だ。

「私と付き合うの嫌？……と、歳上じゃ駄目？……」部長は両手を胸に当て、更に迫る。

「部長……」元々、綺麗な部長である。その部長が涙を浮かべ可愛い仕草で甘え声を出して……何時も自身に満ちて指導力を発揮している部長が、弱々しい女の部分を演出している姿を見て、邦博の心に、何かキュンッとした思いが芽生えて来た。

日頃、女らしくないと思い込んでいても、女の本性は自然と出て

しまうものである……いや、寧ろ、部長は女らしい女なのかも知れない。

今、邦博の目の前二十cmで、頬を赤らめ、怯える様な潤んだ目で訴えている部長は、恋する乙女の姿そのものであった。

「私と言う彼女を作って、見事に男らしくなった姿を海神君に見てもらって、初めて貴方達の友情は完成されるのよ」どう言う理屈やねん……

「でも……そんな事したら、龍之介に……」邦博は、迫る部長から離れ、顔をそらした。

「海神君に申し訳ないと……そこよ！」ビシッと、音が聞こえる様な勢いで部長が指差すと、

「えっ？」何処？と、辺りを見回す邦博は、度重なる急展開に益々付いて行けない。

部長は、戸惑っている邦博の両肩に手を置いて、

「貴方達の友情は、その程度のものなの！どんな事も許しあえる……それが友情！それこそが親友！貴方が、海神君に求めているのは其処じゃないの！私という彼女が出来ても、変わらずにいる事が出来れば、海神君と強い心の繋がりを求める貴方にとって、正に目指す所じゃないの！」と、訴えると、

「目指す所……」部長の言葉が、邦博の心を揺さ振った。

「そうよ！真の友情を目指すのよ！出来るはずよ！こんなにも、海神君の事を思っている貴方には出来るはずよ！いえ、やるのよ！」

部長の熱弁に、根拠の無い感動を感じた邦博は、

「部長おうう！」と、思わず叫びながら部長に抱き付いた……もう、どうでも良いや……

部長は、抱き付いて来た邦博を強く抱きしめ、心の中でガッツポーズを決めていた。

部長は盛り上がっていた。生まれて初めて、恥も外聞も無く、愛する人の為に尽くそうと決心し燃え上がっていた……そう、周りの目なんてどうでも良い。

相手が年下であろうと、ホモ予備軍であるとも、自分が愛した人の為にと……気が付いたら三十は嫌と、こんな上玉逃がしてたまるか、と、尽くす決意をした。

恋は盲目。周りの事も、自分の事も見えない……今、部長の目には邦博しか見えない。

抱き締める邦博の腕の中で、邦博の体温と鼓動を感じていると、今まで自分のコンプレックスを悟られまいと張巡らせていたバリアーが解け、心の中が甘いもので満たされるのを感じて、部長は更に強く邦博を抱き締めた。

邦博には数多くの疑問が残ったが、これで良かったのかも知れないと思っていた。

龍之介を愛している事は本心だが、それが世間では受け入れては貰えない、いや、龍之介には絶対に受け入れて貰えない非常識な事だと邦博にも分かっている。

自分が龍之介を愛するあまりに、戻れない深みにはまり込んでしまう事を恐れても居た。

その中でもっとも怖かったのは、そのせいで龍之介に嫌われる事だった。

そして今、傷の浅いうちに本当に部長に救ってもらえるのなら、期待を寄せていた。

元々、綺麗で人気のある部長である、邦博にとっても文句の付けようの無い彼女である。

出会いと言うか、きっかけがどうあれ、これから更正……いや、二人で愛を育てて行ければ自分にとっても幸せな事なんだと、まだ数々の疑問が残って釈然としない自分に、言い聞かせていた。流され易いタイプやね……

波の音と共に揺れる小汚い漁船に見守られて、二人は座ったまま、長い間抱き合っていた。

○拭い去れない気持ち○

「さて、何を描こうか……」と、呟きながら龍之介は、港を一人口ケハンしていた。

食事が済んで、部長に告白して振られた事を邦博に報告すると、龍之介は恥ずかしい思いもあり、邦博と離れて一人で港を歩いていた。

高い所に登れば三百六十度、山が見える所に住んでいる龍之介にとって、港の風景は非日常的な風景ではあったが、部長に振られた事で龍之介のテンションは下がりきっていた。

憂鬱な気分で、船を引き上げる為のスロープに、

「あああ、どっこいしょと……」と、年寄り臭く座り、ふと横を見上げると、

「……あれ？面白い……」船底の塗装を仕直す為か、台車に載せて引き上げてある船を、舳先の正面より少し左下から龍之介は眺め、新鮮な迫力に感動した……仰瞰と言う。

「何か、迫力……目線を変えるって奴か」

龍之介は、舳先を見ながらクロッキー帖を開き鉛筆を取り出すと、下から見上げた仰り迫る舳先の迫力を、必死に表現しようとクロッキー帖に鉛筆を走らせるが、心を感じた迫力がどうも上手く表現出来ずに苦戦していた。

苦戦する龍之介の後ろを、モチーフを探している美貴が通り掛かり、

「あっ！」龍之介の姿を見付け、辺りを見回し龍之介が一人である事を確認すると、

「ラッキィー！」と、美貴は一直線に龍之介に向かって走り出し、傍まで来て、

「先輩！一人ですか？」と、言いながら、龍之介の隣に座った……誰かとは大違いである。

「あ、ああ……」突然、隣に座った美貴に、龍之介は少し驚いた様に返事をした。

龍之介は翔子から聞いた、美貴が自分に好意を寄せていると言う事を、今まで全然気付かなかったが知ってしまったと妙に意識してしまう。

それに、以前から可愛いとは思っていたが、改めて見るとやっぱり可愛い。

龍之介は美貴の明るい笑顔を見て、少し恥かしくなり、慌てて絵の方へと顔を向けた。

美貴は、合宿での念願である、龍之介と二人でスケッチすると言う、シークエンスの第一段階を、龍之介の隣五十cmの距離に座り満足していた。

憧れの龍之介に告白する事も、ラブレターを渡す事も、勇気が無くて出来ずに居る美貴だが、それとこれとは別物で、元々、明るく人懐っこい性格の美貴は、龍之介に嫌われたと言う誤解も解け、隣に座る事に何の抵抗も感じなかった。

今の美貴は、龍之介の傍に居るだけで楽しい時間が過ぎた。

「何を描いていたんですか？」美貴が龍之介のクロッキー帖を覗き込んだ。

「あっ、ああ、この船なんだけど……」龍之介が船を見て、

「何か上手く表現出来ないんだよね……」と、途方に暮れて言うと、

「どんな所が？」と、美貴が龍之介に近付き絵を覗き込んだ。

龍之介に体を寄せて絵を覗き込む美貴の上から、龍之介の視線は、美貴の胸元の隙間に釘付けされた……可愛い小さなレース模様の入った白だった。

「何て言うかな……えーと、迫力と言うか……その、立体感と言うか……」僅かに見える美貴のブラが気になり、龍之介はしどろもどろで答えた……美貴の胸に立体感は、無い！

龍之介の絵を眺めていた美貴は、

「ふううん、よいしょつ」と、龍之介へ、更に体を引っ付ける様に座りなおした。

「なるほど……こういう時はですね、この線が地面の線で、此処に点を打って、これが先輩の目線の位置で、こう線を結んで行くと……」美貴は体を寄せた事を、まったく気にならない様子で、何やら龍之介のクロッキー帖に描いている……龍之介はドキドキである。

美貴の小さくて柔らかな体が自分の胸に触れて、顔の直ぐ下には美貴の髪が、微かな甘い香りを漂わせている。世の女性に伝える、余計な物はいらない、シャンプーの香りが最強だ。

龍之介が、そんな美貴にドキドキしながら、クロッキー帖に目をやると、

「……?……おっ……ほう……おおお！すげええ！何だよこれ？迫力出た！すごい、立体感！」クロッキー帖には、迫力ある船が浮かび上がり、龍之介は思わず叫んでしまった。

それを聞いた美貴は、龍之介の方を向いて、
「でしょ！」と、満面の笑みを浮かべた。

その時、美貴の顔が近すぎて、龍之介は思わず赤面してしまった。「二点透視って言うんですって。私も篠崎先輩に教えてもらったんですよ」屈託の無い笑みを浮かべる美貴を見て龍之介は、美貴に心引かれている自分に気が付いた。

直接聞いた訳ではないが、美貴は自分に好意を寄せている。そして、素直で明るい美貴に自分も引かれている。恋人が欲しいと強く願っている龍之介にとって、美貴は願っても無い存在ではあったが、龍之介には割り切れないも気持ちも強くあった。

部長の事が諦めきれない。一年以上憧れ続けた部長に比べて、美貴の存在は弱かった。

だから安易に美貴を選ぼうとする自分が、卑しい奴と思えて嫌だった。

美貴はそんな自分を知らない。だから、何の疑いも無い美貴の笑顔を見ている事が、龍之介には段々と辛いものとなって来た……まじめやなあ……

美貴の事は可愛いと思っても、こんな中途半端な気持ちでは

美貴に対して失礼だと、結局は美貴を傷付ける事になると、龍之介は自分で自分を戒めている……硬い、硬いわ。

そんなジレンマから龍之介は苛付き、

「おい、離れろよ……暑いだろ……」と、つい言ってしまう、嫌な言い方だったと後悔した。

「あつ、ごめんなさい……」美貴は龍之介の言葉に少し驚いて、慌てて元の五十cmの間隔をあけて座りなおした。

先程から龍之介に、密着するように引っ付いていた美貴に、恥じらいが無いのかと思われるだろうが、美貴にも人並みに恥らう心はある。

だが、龍之介と二人つきりになれて、美貴の頭の中は沸騰していた。

現実では、未だ告白もラブレターを渡す事も出来ずに居る美貴だが、脳内では既に龍之介とはハレルヤ状態である。

そして、あれだけ嫌われたと落ち込んでいた事が、誤解だったと分かった事も有り、美貴の気持ちは聊か大胆に成っていた。

古来より日本では、この事を、図に乗ると言う。

その為、脳味噌がチャンキおけさ状態で龍之介に引っ付き、絵まで描いてしまった。

其処へ、離れろと、龍之介に冷たく言われて、初めて脳味噌が急速冷凍して、調子に乗っていた自分が急に恥かしくなっていた。いや、それ以上に、今度こそ龍之介に嫌われたかと、心配になって来た。

どんどん心配になって来た。更に心配になって来た。心配になり始めたら止まらない。

せっかく、一旦は天国まで上昇したのに、美貴の心のパラメーターは、再び、地面を突き破り、血の池地獄のヘドロの中まで落ち込んでいた。

美貴は今までの事を考えると、憧れている龍之介に対して、恥かしい事ばかり思い出され、

『こんな事じゃ、本当に嫌われてしまう……』と、涙が滲んで来た。龍之介は、背を向けて座っている美貴が、さっきの言葉で傷付いたのではと心配だった。

とは言うものの、女性経験皆無の龍之介にとって、この場合、どう対処して良いのか分からずに戸惑っていた。

何も悩む事無く、素直にごめんと謝れば良いものを、龍之介は恥かしくて出来ないでいた。

その事と、二人の間に長く続く気不味い沈黙が、更に龍之介の苛々を大きくさせて、

「届かない想いって……悲しいよな」と、思わず龍之介は、ぼそりと言った。

そして、言うてから、又しまったと後悔した。

自分は、美貴が好意を寄せている事を知っているのに、何て意地悪な事を言ってしまったのかと、これでは自分が部長に振られた事での、八つ当たりじゃないかと龍之介は思った。

美貴は龍之介の言葉を、龍之介とは違う意味で捕らえていた。

「そうですね……」と、答えて、美貴は龍之介の言葉を、今の自分に当てはめていた。

伝えたい気持ちが伝えられない、届けたい想いが届けられない……何もしなければ、どんなに想いが膨らんでも、伝える事は出来ない。

龍之介の言葉は、何も出来ずに想いだけを膨らませて居る美貴の心に突き刺さった。

ただ懂れて居るだけの時は楽しいのだが、何も出来ずに時が積み重なると、それは何れ虚しさへと変わる。

その虚しさに気付いた時、懂れる事自体が苦しみとなる。

「どうしようもない事が分かっていて……切ない想いばかりが膨らんで……」

言っているうちに、部長に振られた切ない思いに堪え切れず、泣いてしまった時の事が鮮やかに蘇って来て、再び龍之介の心を締め

付けた。

「それでも、好きだ何て……辛いよな」龍之介の目には、何時しか涙が浮かんでいた。

諦め切れない思いは、やがて『何で、俺じゃないんだよ……』と、口惜しい気持ちへと変わり、龍之介を苦しめる。

美貴は、その言葉を聞いて『やっぱり……先輩には好きな人が居るんだ……』と、思った。

その事は覚悟していた事だったが、美貴は絶望感に目の前が真っ暗になった様に思えた。

図書館に案内してもらった事、学食で助けてもらった事、ラブレットを何度も書き直して書いた事、渡そうとしたが渡せずに、毎日鞆に入れて持ち歩いていた事……その思い出は、龍之介に好きな人がいる事を知った今の美貴には辛かった……全てが辛かった。

「叶わないと分かっていて……何処かで期待して……」涙が龍之介の頬を伝う。

美貴は、龍之介の言葉はまるで、今の自分の気持ちだと思った。

『先輩の事、こんなにも好きなのに、私はその人には敵わない……だけど……』と、何処かで根拠の無い期待をしている自分が居る。

ただ、それは虚しいだけの事。期待しても悲しみの堂々巡りになるだけ……だけど……

「馬鹿みたいに、虚しい事を繰り返して……」

そのまま自分に当てはまる龍之介の言葉に『だから何よ！好きなんだもん！しょうがないでしょ！』と、美貴は心の中で叫んだ。

『そうよ、だからって、どうする事もできないわよ！』と、美貴は両手で拳を強く握り、悔しい気持ちを堪えていた。

出会って懂れて、その懂れが時を経て膨らみ、それが苦しみと変わる。でも、一度膨らんだ想いは、自分ではどうする事も出来ない……悔しい程に。

「いっそ、嫌いになれば……なんて、思ってもみたりして……」寂しそうに話す龍之介の言葉を聞いて、

「そんな事!……そんな事、言わないで下さい!」美貴は、目にいっぱい涙を浮かべ叫んだ。

「えっ?……」振られた切なさで頭がいっぱいだった龍之介は、我に帰った様に美貴を見た。

「嫌いになんて!なれる訳無いじゃない!」美貴は立ち上がり、龍之介を睨みながら叫んだ。

「鬼追……」涙を溜めて叫ぶ美貴に、龍之介は戸惑った。

「わっ、わ、私だって……私だって、先輩の事好きだもん!先輩、誰か好きな人がいるって分かっているけど……それでも、好きだもん!きっ、き、嫌いになんてなれないよ!」

目から大粒の涙をこぼしながら、美貴は必死になって叫んでいる。「入学して直ぐの時に、私一人で……同じ中学校の子いなくて、独りで不安で……そんな時先輩優しくしてくれて……嬉しくて……嬉しくて……」美貴は込み上げて来るものを必死で堪えていたが、我慢し切れなくなり一気に吐き出す様に、

「辛いけど、先輩の事、好きだもん!しょうがないけど、好きだもん!らっ、らかあら、そん、あうっ、ひっく、そん、えうっ……いわっ、ひっく……ないで、えふっ……よ!」龍之介に向って叫び、そして、とうとう美貴は、子供の様に大声を上げて泣き出してしまった。

大声で泣いている美貴が、何故泣いているのか分からずに戸惑い、「鬼追……」龍之介は何も出来ずに美貴を見ていた。

大声で泣いていた美貴は少し落ち着き、しゃくり上げる様に泣きながら、

「せ、先輩!出来るんですか!す、好きになった人を……い、一度、真剣に好きになった人を、そん、そんな簡単に、嫌いに成れるんですか!」と、龍之介に迫り問い詰めた。

「……」問い詰められて、龍之介は美貴から顔を逸らし、

「分かっている……そんな事分かっているよ……」と、呟く様に答えた。

「だったら!……」

「でも、辛いんだよ!好きでいる事が辛いんだよ!苦しいんだよ!」
美貴の言葉を遮り、龍之介も立ち上がって叫んだ。

「どうしようも無いんだよ……」

「先輩……」

俯きながら悲しそうにしている龍之介の姿を見て、美貴は何も言えなかった。

自分も同じ気持ちだから……だけど、美貴は龍之介を嫌いになる事なんか出来ない。

「ごめんなさい……」と、俯く美貴だが、何故だか悔しくて仕方がなかった。

「馬鹿、お前が謝るなよ……俺の方こそ、ごめん……嫌な事を聞かせた……」

美貴が自分に好意を寄せている事を思い出し、美貴が泣いた気持ちを、やっと理解して、

「辛いな……」と、龍之介も目に薄っすらと涙を浮かべて美貴を見詰めると、

「うん……」と、美貴は頷いた。

落ち着いて来た美貴は、勢いに任せて言ってしまった言葉を思い出し、顔から火が噴出しそうな思いだった。泣きながら叫んだ言葉は、紛れも無い告白だったからだ。

その恥かしい思いに『どうしよう、どうしよう、何で言っちゃったの』と、戸惑っていた。

性格なのか、美貴は勢いだけで行動している所が多いみたいだ。

龍之介は、泣き止み落ち着きを取り戻した美貴から離れ、

「俺さ、部長の事が好きなんだよ……」と、静かに海の方を見ながら話し出した。

「でも、さっき振られちゃって……だけどさ、振られたからって、急に思いが変わる訳無いだろ……だから……」

けりを付けた積りだった。しかし、人の気持ちとは、あっさりと

切り替えられる訳も無く、龍之介は、部長に対する未練が捨て切れないでいる。

「……やっぱり、まだ部長の事が好きで……だから、辛くって……」

静かに話す龍之介の言葉が、美貴には怖かった。今、自分は振られているのだと。

勢いで後先も考えず告白した事を、言わなきゃ良かったと、後悔している。

振られるぐらいなら、ずっと憧れるだけで、思いを心の中に仕舞って置くべきだったと。

龍之介は美貴に対して、何と言葉を続けたら良いのか迷っていた。部長に振られたからと言っても、今でも部長の事が好きな自分。部長に好きな人が居ると分っていても、まだ諦められない自分。かと言って、美貴の事が嫌いな訳じゃ無い……だから、はつきりと断れない。

龍之介は、そんな自分が卑怯に思え嫌だったが、それが正直な気持ちだった。

黙って俯く龍之介を見ていると、美貴は段々と怖くなって来た。龍之介に振られ、告白した事を後悔し、振られた事に空虚な悲しみを覚えながら美貴は、嫌われたくないと言う思いが強く湧いて来た。

この事で、龍之介に嫌われでもしたらと怖くなり、

「あ、あの……先輩……」黙っている龍之介に、美貴は恐る恐る声を掛けると、

「え？」と、俯いて居た龍之介が、美貴へと顔を向けた。

美貴は怖かった。その事を龍之介に尋ねる事が怖くてしようがなかった。

だけど、その事を聞かずに居られずに、勇気を振り絞り、

「せ、先輩の事……先輩の事、好きで居て……良いですよね……」と、言葉窄みに、恐る恐る尋ねた。

龍之介は、そんな美貴を暫く見詰めて、

「……そんなの……辛いだろ」と、問い直した……今の自分がそうだから。

「うん……でも、好きだから、先輩の事、好きだから……迷惑……ですか？」

美貴は龍之介の隣に座り、龍之介を思い詰めた目で見詰めた。

「そんな……迷惑だなんて思っていないよ……何で？」

「ほら、私、チビで……部長みたいにスタイルも良くないし、美人じゃないし……それに、鬼の血が……だから……」美貴は、言葉窄みにぼそぼそと答えた。

「そんな事無いよ。お前可愛いよ。真っ直ぐで、明るくて……鬼の血の事も、気にするなって言っただろ。なんとも思っていないよ」龍之介は美貴の顔を見て、今の気持ちを正直に伝えた。

美貴は、龍之介の？可愛いよ？と言った言葉だけが頭の中でリフレインして、再び脳味噌が沸騰し始めたが、コンセントレーションで制御して、

「ありがとうございます……」と、答えると、美貴の心に儂い想いが込み上げて来て、

「……でも、駄目……ですよね……」と、遠慮気味に尋ねた。

「何が？」

「先輩、私の事、好きに、なってくれないよね……」美貴の声がフエードアウトする。

「……………」二人の間に沈黙が流れた。

沈黙の中、美貴は龍之介の答えを聞く事が急に怖くなって来て、「いいんです！ごめんなさい！好きになって欲しくて、先輩の事好きになった訳じゃないですから……いいんです、先輩の事、好きでいるだけで……仕方ないですよ、先輩、部長の事が好きなんだから」龍之介の答えを聞きたく無いかの様に、大げさに首を左右に振って言った。

美貴は、今自分が振られている事を改めて実感して、再び大声で

泣き出しそうになった。

龍之介は、今にも泣き出しそうになるのを必死で堪えている美貴を見て、

「可愛いな、本当に……お前って」と、柔らかに微笑み、美貴の頭を撫でた。

涙が溢れそうだった美貴は、龍之介の言葉を聞くなり、ぴたりと涙が止まり、優しく微笑む龍之介の顔を見て、再び脳味噌が沸騰しそうになり顔を赤くした……単純……

龍之介は、自分に正直で好きな人の前でも自分を曝け出している美貴を見て、龍之介は自分は、部長の前で泣き叫べるのかと考えていた。

男と女の違いもあるだろうが、自分には出来ない。

龍之介は、そんな美貴が愛おしく思えて来たが、其処には部長の事が忘れられない龍之介もいた。

暗転（前書き）

少し残酷な表現が含まれます。

暗転

暗転

ズズウウウン！

一瞬、地響きの様な振動が起き、二人は目眩に襲われた。

次の瞬間、気が付けば薄暗い山の様な所だった。

「何？……どうしたの？……」突然の変化に二人は警戒して辺りを見回している。

「結界？……」美貴はその空間の異常さから、結界を張られた事を感じた。

「結界って……なんでだよ、又カラスが襲ってくるのか？」龍之介は経験から、上空を警戒して辺りに武器になる物が無いか探している。

「あっ、部長！」美貴は、邦博と体を寄せ合っている部長を見付けた。

部長達は美貴達に気付いて、駆け寄って来た。

「なんなのこれ……港に居たんじゃ……」非常識な出来事に、何時もは自信家の部長もすっかり怯え、辺りを見回している。

「何処なんだよ此処？」邦博が、怯えながら龍之介に聞くと、

「俺にも分からんよ……」と、武器になりそうな一mぐらいの枝を拾い上げて、龍之介は邦博の方へと振向くと、其処には、邦博の腕にしがみ付き寄り添っている部長が居た。

二人の様子を、龍之介が訝しげに見ているのに気付き、二人は慌てて離れた。

そんな二人を見て、

「邦博……」と、龍之介が何か言いかけた時、

「部長！」大声で呼びながら司と翔子が走って来た。

「どうしたのよ、皆。此処は何処なの？」

翔子も、現状が理解出来ずに不安な表情を浮かべている。

「鬼追」龍之介が、美貴に問いたですように声を掛けると、美貴は不安げな顔で首を左右に振って、

「私にも良く分かりません。いきなり此処ですから……」と言って、辺りを見回した。

美貴も現状が理解出来ないでいたが、自分のせいで巻き込んだ事は感じていた。

そして美貴は、空を覆う結界を見て、今まで二度経験した物とは桁違いに広範囲に渡っている事に、不安と恐怖を感じた。

薄暗くどす黒い紫色の雲の様な物に囲まれ空間は、周りを見れば山である事は分かる。

その範囲は、ざっと一つの山を覆っている様にも見える。

美貴達がいる場所は、細長く開けている場所で、片方は崖なのか地面が消えて下の森が見えている。そして、もう片方は山の斜面が迫っていた。

美貴は、この場所に見覚えがあった。

この場所の下には、鎧武者と戦った川がある筈だと。

「白ちゃん！」美貴は、自分だけではどうしようもないと判断して白菊を呼んだ。

「よいのか？出ても」白菊は、何も知らない部長と翔子に気を使っている。

「緊急事態よ」美貴が重々しく言うと、空間が仄かに光り、白菊が姿を現した。

姿を現したと言っても、龍之介と美貴意外には、人魂の様な狐火としか見えない。

「何、それ……」真っ青になって驚いている部長を見て、そりゃ驚くわねと、美貴は思った。

「部長、大丈夫です」邦博が、怯えてしがみ付く部長の肩を抱き寄せる。

龍之介が二人を見て、また不審そうな顔をした。

龍之介は、二人を見て沸き起こった漠然とした疑問を尋ねたかつ

だが、何故か怖くて聞く事が出来無い。

「人魂なの？」翔子は狐火の白菊に近付き、じろじろと観察しながら、

「人魂って燃えてるの？……熱くは無imiたいね……」と、指でつんつんと突付いている……

美貴と龍之介には、頬を突かれて迷惑そうな顔で我慢している白菊の姿が見えていた。

美貴は『白ちゃん……我慢してね』と、心の中で呟いた。

司は、そんな翔子を見て、

「怖くないんですか？……」と、予測は出来た事だが、翔子らしい反応に呆れていた。

翔子は、狐火を突付きながら司へと振向くと、

「なんで？どうして怖がるの？」と、平然として言った。

「大体、幽霊とかを何で怖がるのよ？」と、無然と翔子が尋ねると、

「それは……呪われるとか……取り憑かれて、殺されるとか……」

司は考えながら、おずおずと答えた。

「そんなの恨みを買った人がでしょ。私は人に怨まれる様な事をした覚えは無いわ」

「えっ！」きっぱりと言い放った翔子に、皆が驚いて目を剥いた。

「なによ……」皆の反応が気に食わなかったのか、翔子は眉間にしわを寄せた。

龍之介は、白菊の様子を気にしながら、

「後で、説明してやるから……止めろって……」と、翔子の腕を引っ張り白菊から離し、

「鬼追、どうなんだ、おかしい奴はいないのか？」と、美貴の方に振向いた。

「分かりません……白ちゃん分かる？」美貴は首を左右に振って答え、白菊の方を見る。

「空気は可也悪いね、此処……何か、丸ごと飛ばされた……いや、引き寄せられたみたいですね」白菊の顔に、戦闘態勢の赤い隈が浮

き上がった。

「丸ごとって……港にいた皆を……」その能力の強さを考えると、美貴の心は恐怖に震えた。

狐火から聞こえる声に、

「へえ……喋れるんだ」翔子は、狐火を好奇心に光る目で見ている。部長は怯え邦博の腕にしがみ付く。

その部長と邦博の姿を見て、龍之介の心は締め付けられる様に痛んだ。

その時、白菊が何かの気配に感付き、急に髪の毛を逆立て、

「主！気を付けて！」と、叫んだ。

すると、遠くの方から、がしゃっ、がしゃっ、がしゃっ、がしゃっ、硬いものが擦れる音が近づいて来る。美貴は『奴だ！』と、悟った。

小さな黒い影が近づいて来て、やがてはつきりと其の姿を現した。鎧武者だ。

鎧武者は刀を抜いて、鎧のこすれる音と共に、美貴達を睨み付けながら近付いて来る。

さすがに翔子も、これには、やばいと感じて司と共に龍之介の後ろに隠れた。

迫る鎧武者に、美貴達は何も出来ずに、じりじりと後ずさる。

「白ちゃん、どうしよう……」

「主と妾だけなら、何とかやり様もあるのだが……数が多い……守りきれん」

全身を狐火で包み、皆を眺めながら、白菊は鎧武者に対して無力な自分を痛感している。

「そんな……あっ！逃げて！」鎧武者が太刀を振り上げた姿を見て、美貴が叫んだ。

が、皆は何の事かと、美貴を見ると、

「ええいっ、間に合わない！」と、美貴は飛び出した。

美貴は、太刀の射線上にいる部長と邦博に飛び掛り、突き飛ばす

……その瞬間、鎧武者の放った三日月型の衝撃波が、その場を通り過ぎ地面を引き裂いた。

飛び散り飛んで来る土砂を、腕で防御しながら、
「な、なんだ……」龍之介達は、その非常識な現象を見て、顔色を失った。

間一髪の所で逃れた美貴は立ち上がりながら、太刀を振り上げる鎧武者を見て、

「もう一発来る！」攻撃を察知し、手を掴み二人を起こすと、

「こっち！」と、二人の手を引っ張り逃げた瞬間、また衝撃波が二人が倒れていた地面を切り裂いた。

二発目を交わして美貴は、不味い事に気が付いた。後が無い崖っぷちに三人は立っていた。

「逃げれない……来る！」と、察した美貴は、邦博と部長を庇う様に抱き付き、

「白ちゃん！」すぐさま振向き白菊を呼ぶと、

「はああっ！」白菊は三人の前に立ち、狐火で障壁を張った。

三日月の様に飛んで来た衝撃波は、白菊の障壁に遮られ、砕け散るように消えた。

衝撃波が衝突し、その凄まじい衝撃から空気が震え、白菊の障壁も消し飛んだ時、地面にひびが走り、美貴達是不気味な振動に襲われた。

次の瞬間、美貴達が立っている地面が滑る様に動いたかと思うと、一瞬にして崩れ落ちた。

「あっ！」美貴は、邦博の手を掴み二人は崖下へと落ちて行く。

「きゃっ！」部長もバランスを崩しながら落ちて行く。

「白ちゃん！部長、お願い！」美貴は邦博を引き寄せ、胴を抱きかえながら白菊に叫んだ。

「承知！」白菊は瞬時に実体化し、部長に迫り着き部長を捕まえた。美貴は、崩れて来る土砂を避けながら、邦博を抱かかえ、足場になる所を選んで飛び移りながら、五十m以上はある崖を降りて行っ

た。

「大丈夫ですか、怪我は？」下の川に降りきって、美貴が邦博に心配そうに尋ねると、

「だ、大丈夫みたい……」と、生まれて初めて経験したフリーホールの恐怖に震えていた。

「白ちゃん！」美貴は、部長が心配で白菊の方を見た。

「大丈夫です、早く上に！」白菊は部長を無事に下ろし、美貴に向かって飛んで来る。

部長と邦博は、始めて見る実体化した白菊の姿を、不思議そうな顔で見っていた。

「分かった、白ちゃん飛ぶよ！」美貴は、上に残っている龍之介達が心配で、

「先輩……無事でいて……」と願い、白菊の背中に掴まった時、

「……駄目みたい……」と、白菊が辺りを警戒している。

「えっ……何？この気配……」美貴も異様な気配に感付いて身構える。

そして、小川の下流から、蠢く者達が姿を現した。

「やだあああ！また、ムカデ！何匹いるのよお！」美貴は、今度は気絶せずに絶叫した。

「ひっ……」しかし部長は、巨大なムカデを見て瞬時に気絶し倒れ、「ぶっ、部長！部長！」それを邦博が受け止め抱かかえ、叫びながら揺り動かしている。

目の前のムカデ達は、一昨日戦ったムカデに比べ遥かに大きく、赤黒い筋が血管の様に全身に浮き出ていた。

美貴はムカデに嫌悪を感じながらも、ムカデ達の様子がおかしい事に気が付いた。

「……何してるの？……」迫ってくるムカデの後ろで、数十匹のムカデ達がのたうち、何かに群がっている。

そして、近づくムカデ達に続いて、上流の方からもムカデ達が迫って来る気配がした。

「どうします……」白菊が不安な様子で聞いて来た。

「どうするも……先輩達を一人づつでも先に上に運んで！その間、私があいつ等の相手をするから！」

美貴は、手近に落ちていた五十cmぐらいの枝を拾い上げると、気を送り込みムカデ達に向って構え、

「早く！」と、白菊に叫んだ。

「しかし、主！」白菊は、残る美貴の事が心配だ。

「早く行け！」美貴が、躊躇している白菊に苛立ち怒鳴ると、

「あっ……」その姿に白菊は、現役時代の百合を思い出し姿を重ね、今の美貴なら大丈夫だと思った。

「……承知」白菊は、少し微笑みながら返事をする、気を失っている部長に振向き、

バシッ！バシッ！と、躊躇う事無く往復びんたを食らわした。

「わああああ！」驚き声を上げる邦博を他所に、

「目を覚ませ！早く！」と、再び容赦無く往復びんたを食らわせた。

「ひええええ！」可愛らしい少女姿の白菊の、無慈悲な攻撃に邦博が悲鳴を上げる。

「うっ……うう……」頬の痛みで気が付いた部長に、

「つかまれ！」と言って、白菊は背中を向けた。

「えっ？」部長は、訳が分からずに戸惑っている。

「上に行く！早くつかまれ！」

「えっ？あっ、う、うん……」部長は遠慮気味に、いや、初めて見る不思議な少女が何者か分からずに、小さな白菊の体へと、恐々（こわごわ）負ぶさった。

「もっと、強く！」

「はっ、はい！」白菊の怒鳴り声に部長は一瞬驚いたが、素直に従い強くしがみ付いた。

「行くぞ！」と、白菊がしゃがみ、勢いを付けて飛び上がると、

「きああああ！」と、部長は、始めてのカタパルト発進の体験に絶叫した。

美貴は白菊が飛び上がったのを見て、躊躇せず一気に迫るムカデへと飛び掛った。

一昨日の美貴とは違う。今は白菊に操られていない。自分の意思で戦っている。

龍之介の事が心配で早く助けに行きたいのに、それを邪魔するムカデ達は、美貴にとって明らかに敵だった。敵に対して戦う事を躊躇しない。それが鬼の血を持つ者の性^{さが}である。

ムカデが、飛び掛る美貴に対して、臨戦態勢を取る為に胴を立ち上げた時、美貴はムカデの頭へと一気に光る枝を振り下ろし叩き付けると、光が炸裂しムカデの頭は碎け散り、続けて胴体も飛散しながら、どす黒い霧となって消えていった。

それを見ながら着地した美貴は、
「よし、いける！」と、美貴は自信を持ち、次の迫るムカデへと飛び掛った。

邦博は美貴の後ろで、谷の斜面に寄り添い、震えながら其の様子を見ていた。

崖の上に降り立った白菊は、龍之介達と鎧武者の姿が無い事に気付いた。

「どうした？……何処に行った？」白菊に不吉な予感が走ったが、今は考えている暇は無い。

「此処で隠れて待っている！」太い木が立ち並ぶ場所で、不安そうに立っている部長に指示すると、白菊は崖下へと飛び降りた。

美貴の気の気配に感づいて、何かに群がっていたムカデ達も、ぞろぞろと美貴の方に向かって来た。

「たあああっ！」美貴はそれを見て、ムカデの群れへと踊り込んだ。

「主！大事無いか！」部長を上而降ろし戻って来た白菊が、邦博の隣に降り立ち叫んだ。

「構うな！早く行け！」美貴は、ムカデ達に囲まれ、凄まじい勢いで舞い踊り、次々にムカデ達を叩き潰している。

「百合殿の血じゃな……」白菊は呆れる様に眩くと、邦博を連れて上へと飛び上がった。

美貴は、休む事無く光る枝を振るい、ムカデを達を叩き潰していたが、美貴の膝が急に力が抜けた様にがくつと折れ、その場にしゃがみ込んだ。

「な、何？……これ……」美貴は、膝を付きながら苦しそうに胸を押さえた。

胸が焼ける様に痛み、重苦しい重圧感が美貴の体に押し掛かる。

まだ、可也の数が残っているムカデ達が迫って来るのを見て、

「くそっ……」美貴は胸の苦しみに耐え、立ち上がりムカデ達に向かい構えた。

が、その時、胸の苦しみが激痛に変わり、

「ぐふっ！」と、唸り声を上げて美貴は、痛みを耐え切れずその場に倒れてしまった。

「くっ、く、くそ……」美貴は顔だけを上げて、苦しそうにムカデ達を睨み付けた。

白菊は、邦博を部長の傍に下ろし、直ぐに下に降りようすると、「おい！待って！龍之介達は何処なんだ！」と、邦博が慌てて白菊に聞いた。

白菊は、邦博に振り向こうともせずに、

「知らん！とにかく此処から動かずに待っている！」と、叫び、

「あの……」と、何か言かけた部長を無視して下へと向った。

下に飛び降りた白菊が美貴の姿を見つけた時、二匹のムカデが体を起こして、倒れている美貴に襲い掛かろうとしていた。

「主！」白菊は叫びながら、細い槍の様な狐火をムカデに向かって投げ付けた。

美貴の傍に居た二匹のムカデは、狐火に胴を打ち抜かれ、どす黒い霧となり消えた。

続いて、その周りのムカデに連続で炎弾を投げ付けると、爆発でムカデの頭が次々と消し飛び、どす黒い霧となり消えて行った。

ムカデ達が消える寸前に白菊は、美貴の傍に着地し、

「主！大丈夫か！しっかりして！」と、美貴を抱き起こした。

美貴は白菊に気付いたが、

「しろ、ちゃん……」虚ろな目は、焦点が合っていない。

美貴を心配そうに見てた白菊が、

「はっ！」と、何かの気配を感じ顔を上げた。

「まずい！」白菊は、一瞬でその気配が何であるか理解し、恐怖に引きつった顔になった。

白菊は、ある一点を見詰めながら、

「ぐっ、抜^ぬかった……何故、気付かなかった……」と、苦しそうに顔をゆがめ、

「くそっ……」美貴を抱かかえると、その場から飛び上がり離れた。しかし、ムカデ達の囲いを抜け、十m程離れた所で失速し、地面へと落ちた。

白菊は、顔を歪め苦しそうに立ち上がり、落ちて倒れている美貴に寄り添い、

「主！……主！しっかりしてください！……主！」と、叫びながら美貴の体を揺すっている。

白菊の声に気が付いた美貴は、

「……白ちゃん……ごほっ、どうしたの……ごほっ、ごほ、何なの……」苦しそうに咳き込みながら、目眩にふらつく頭を左右に振っている。

「滅火……です……あれは……」

「えっ！」滅火と聞いて、美貴の背筋に冷たい物が走った。

白菊は睨むように一点を見詰めながら、

「あの岩から漏れているのは、滅火です……」と、怯える声で言う

と、
「漏れてるって……」美貴は白菊の視線を追って、二十m程先に大きな岩を見付けた。

ムカデ達の群がって居る場所に、高さ五mぐらいの大きな先の尖

った岩が立っていて、群がるムカデ達の隙間から、岩がめり込んでいる地面が見えた。

その地面から岩を取り囲む様に、黒い炎の様なものがゆらゆらと湧き上がっている。

僅かに漏れ出している滅火は、ほんの小さな炎であつたが、二人はその醜惡な禍々しさに襲われて怯えていた。

「あれは、おそらく、滅火を封印している大岩……ムカデ達のせいで封印が弱まり、滅火が漏れていると思います……」岩を揺り動かす様に群がるムカデ達を見て、白菊は戦おのっている。

大岩を見ていた美貴は、大岩を中心に周りの木々が広い範囲で枯れているのにやっと気付き、改めて滅火の禍々しさに恐怖した。

「どうしよう……」美貴は不安そうに白菊を見た。

「今の我らでは、どうする事も出来ません……それより早く上へ」白菊は美貴を抱き起こし、

「大丈夫ですか？」と、美貴の顔を心配そうに覗き込んだ。

「うん……だいぶましになって来たみたい……行こう、白ちゃん！」美貴は白菊に掴まると、

「承知」白菊は、飛び上がり二人は上へと向った。

○男が立つ！○

場面は少し遡り、

「鬼追いい！」美貴達が落ちて行つた崖下を覗き込んで、龍之介が必死になって叫んでいる。

高さは五十m程だが、結界のせいで薄暗くなっている為、白菊だと思われる青白い光が、動いているのが見えるだけだった。

何度か叫んだ所で、龍之介は鎧武者の近付いて来る音に気付き、

「逃げるぞ！」と、司と翔子の手を引いて走り出した。

「あいつ、鬼追が言つてた？全然齒が立たなかった？って奴か？だとしたらやばいぞ……俺で何とかなる奴じゃねえ……」

龍之介は走りながら何処かに隠れる場所が無いかを探したが、幅が10m位のなだらかな斜面が開けている所で、大木が何本かは生えて居たが、隠れる場所など見当たらなかった。

龍之介は走りながら後ろを振り向き、ゆっくりと迫る鎧武者の姿を見ると、

「駄目だ。追って来る……くそ！」成す術も無く、悔しそうに呟いた。

「海神君！前！」

翔子に言われて龍之介が前を向くと、壁の様に景色が終わっていた。

どす黒い紫色をした壁は、霧のような粒子が渦巻き流れ、その先の風景を遮断していた。

「何だ？……」龍之介が壁に、恐る恐る触れた瞬間、

「あちっ！」壁は稲光のような光を放ち、龍之介の手を弾き返した。

龍之介は火傷の様な痛みに耐えながら、手を見て出血していない事を確かめ、

「……これが……結界？」と、痛む手を摩りながら呟いた。

司が近付き龍之介の手を見て、

「大丈夫ですか？」と、心配そうに聞くと、

「ああ、大丈夫だ……でも、進めないな……」龍之介は、結界を見詰め不安な声で答えた。

龍之介は鎧武者が近付いて来る姿を見ると、落ちていたバットぐらいの木切れを拾い上げ、力を込めて一気に振り下ろし壁に叩き付けた。

その瞬間、壁は稲妻の様な閃光を放ち、木切れの先端が砕け散り弾き返され、反動で龍之介は倒れた。

「先輩！」司が驚き叫び、倒れた龍之介の脇にしゃがみ込む。

「畜生……」近付いて来た鎧武者を睨みながら、どうしようかと龍之介は考えていたが、

「篠崎！俺が隙を作る！お前は司を連れて、あっちにすり抜けて逃

げろ！」現状では、逃げる事しか思い浮かばなかった龍之介は立ち上がり、翔子に指を刺しながら指示をした。

それを聞いた翔子は、

「わかった！」と、頷き、司の手を握ると、

「司ちゃん、行くわよ！」と、司を立たせる。

「そんな、先輩はどうするんですか……」司が、龍之介を不安な目で見ると、

「大丈夫だ！」自信なんて無いが、司を安心させるために龍之介は笑顔で答えた。

龍之介と翔子達は、化物に対して左右に分かれた。

不安そうに怯えている司。翔子が龍之介を見る。龍之介が目で翔子に合図する。

龍之介の合図を見て、翔子が司の手を強く握り直し、頷いた瞬間、「走れ！」龍之介の叫び声を合図に、三人は同時にダッシュし走り出した。

龍之介は、真っ直ぐに鎧武者に向かい、太い木切れを振り上げ、「どおりゃああ！」と、掛け声と共に鎧武者に飛び掛り木切れを振り下ろした。

見事に木切れは鎧武者の肩に当たったが、鎧武者は毛ほどにも堪^{こた}えていない様だった。

次の瞬間、ブウウンと唸りを上げて、鎧武者の腕が龍之介目掛けて飛んでくる。

「わっ！」龍之介は、ぎりぎりの所で飛び退き交わして、倒れて転げ廻った。

上半身を起こし、翔子達が逃げた事を確認して、龍之介は立ち上がりダッシュした。

『奴の動きは、そんなに早くない……逃げ回るだけなら何とかなるか……』と、龍之介は走りながら考えていた。

翔子達を追って走って行くと、再び其処には結界の壁が立ち塞がっていた。

「海神君！」壁の前で、不安そうに待っていた翔子が龍之介を見付けて叫んだ。

龍之介は壁の傍まで来ると、苦々しい思いで結界を見詰めながら、「どうやら、閉鎖された空間みたいだな……畜生……逃げ道は無いのかよ……」と、現状を理解し悔しそうに呟いた。

鎧武者が追いついて来たのを見て、龍之介は同じ事を繰り返すしか無いのかと考えた。

何とか美貴が来るまではと思ったが『鬼追達は無事なのか？こっちに上がって来れるのか？』

それに、鬼追が来たとしても、勝てるとは限らない……』と、龍之介に不安が押し掛かり、

「篠崎！もう一度だ！良いか！」と、上手い考えが浮かばず、龍之介は叫んだ。

「分かった！」翔子も同じ思いの様だ。

三人は再び二手に分かれ、鎧武者に向かい構え、

「行くぞ、走れ！」龍之介の合図で、三人は同時にダッシュして、龍之介は鎧武者に向かう。

しかし、今度は既に、鎧武者は刀を構えていた。

龍之介は危険を感じて、手に持っていた木切れを投げ付けたが、あっさりと木切れを太刀で弾くと、鎧武者は上段に太刀を構えた。

「まずい……」そう感じた龍之介は、急いで鎧武者の横を通り過ぎようとした時、太刀は振り下ろされ三日月型の衝撃波が飛んで来た。間一髪で龍之介は飛び退き直撃は逃れたが、通り過ぎた衝撃波の余波で体が飛ばされた。

3mぐらい弾き飛ばされ地面に落ちる瞬間、前回り受身を取り立ち上がり再び走り出し、

「覚えているもんだな、体に叩き込んだものは」と、龍之介は自身に感心した。

走りながら、翔子と司だけでも何とかならないかと考え、龍之介はせめて二人が隠れられるような場所があればと、辺りを再び見な

がら走った。

『崖付近には何本か木が生えているけど、直ぐに見つかるな……斜面の方は、林の様に木が生えているけど、あの斜面を登るには可也の体力がいる。それに、林の中だと俺達も自由に動けないし……崖の方は？駄目だ、確かめている暇が無い』と、龍之介は走りながら付近の状況を見て考えていたが、これと言ったものが思い付かなかった。

崖っぶちに、五・六本密集して生えている大木の影から、走って行く龍之介達の姿を見付けた部長は、

「あっ……」と、咄嗟に、龍之介を追いかけようと、木の陰から出かけた時、龍之介の後ろから来る鎧武者に気付き、慌てて木の陰に再び隠れた。

司は走りながら思っていた。

龍之介に比べて、怯えて何も出来ない自分は、何て情け無い存在なんだろうと。

そして、翔子と手を繋いでいる事は嬉しいのだが、翔子に守られている様な自分が更に情けなかった。そして、自分の非力さを怨んだ。

その怨みは、徐々に怒りの様なものに変わり、司の心の中にむくむくと、

「私だって……いえ、ぼ、僕だって……」と、金玉が付いている事の自覚が目覚めて来た。

『愛していると伝え、傍にいたいと、お姉様をお願いしたけど、僕は何が出来るの？お姉様の傍に居て何が出来るの？求めるだけじゃ駄目なんだ。お姉様を愛しているなら、いえ、愛しているからこそ、求めるだけじゃ駄目なんだ』と、司の胸にそんな想いが湧き上がって来た。

始めに折り返した結界の傍で、二人が汗だくになり、息を整えながら不安そうに待っている所へ龍之介はたどり着いた。

龍之介も連続の全力疾走で息が上がり、苦しそうに肩で大きく息

をして、

「以前は、五Km、ぐらいいは、平気で、走れたのにな……」と、美術部に入ってから運動不足を悔やんだ。

息を整えながら、又、同じ事を繰り返すしか無いのかと、龍之介が考えていると、

「不味いな……」追いついて来た鎧武者は、今度は龍之介達と距離を取り立ち止まった。

「馬鹿じゃ無い様だな……これじゃ、奴を走り抜ける前に、やられる……」龍之介は鎧武者を睨みながら、半ば諦めるかの様に呟いた。美貴はまだ来ない。部長達の安否も分からない。翔子達の体力も限界に近い。

「しょうがねえか……」龍之介は、勝てる相手では無い事を百も承知の上で、囨になる為、鎧武者と戦う決心をした。

「短い人生だったなあ……恋人、欲しかったなあ……」と、呟きながら落ちている木切れを拾い、鎧武者に向かい構えて、

「二人とも……離れてろ……」と、鎧武者を睨みながら二人に言った。

鎧武者を前に構えながら龍之介は『鬼追、結構好きだったぜ……ただ、素直に成れなくてな』と、美貴の気持ちを、素直に受け入れられなかった自分を悔やんでいた。

「海神君……何をやる気なの！」翔子が、尋常では無い龍之介を見て叫んだ。

「なに……お前らを、俺よりちょっとだけ、長生きさせてやろうってだけだ……奴を止めている間に逃げろ」龍之介は木切れを構え、鎧武者を睨み付けながら、翔子に指示した。

「馬鹿！何言ってるの！そんな……」と、翔子が叫ぶ中、司も落ちている木切れを拾い、龍之介の横に並び、木切れを構えた。

「……お前……」龍之介が司を不思議そうな顔で見ている。

「司ちゃん！貴方まで何やっているの！」翔子が叫びながら司に駆け寄る。

「ぼ、僕も、お、男です。お、お、お姉様は、僕が守ります」

司は、青ざめた顔で震えながら鎧武者を睨んでいる。

「馬鹿！ 貴方に勝てる訳無いでしょ！」 翔子は司の肩を掴んで叫んだ。

「篠崎！ 司はな、お前を守りたいんだ……自分より一秒だけでも、長く生きて欲しいんだと」

龍之介は『やっぱりお前は強いよ』と思い、笑顔を浮かべながら司を見る。

司は龍之介の顔を見て、少し落ち着いたのか、微笑んで龍之介に頷いた。

「……司ちゃん」 龍之介も司も何故、死ぬかもしれないのに戦うのか。翔子には二人の行動が理解出来なかった。

「何でよ……何で、何時もそうなのよ……」 翔子は、龍之介に振向き問いかけた。

何時も迷惑なくらいお節介を焼いて来る龍之介、今も、翔子と司の為に、勝てる筈など無い相手に戦おうとしている龍之介……翔子には理解出来なかった。

「え？ 何がだ……」

「何で、そんなお節介ばかりするのよ！」

すっとぼけた顔で聞き返した龍之介に、翔子はたまらずに叫んだ。
「お節介じゃあねえよ……だって俺達、仲間だろ。だから、自分の出来る事をするだけだよ。だから、お前がもし生き残ったら、今の一年生達や来年入って来る一年生達に、絵を教えてやってくれ」

「馬鹿！ そんな事言ってる時じゃ無いでしょ！ 敵^{かな}う分け無いのに！」

「まあ、そうだな……」 翔子の言葉に、最もだと龍之介が頷いた。

「だったら……」

「負けたくねえんだよ……死んだって、負けたくねえんだよ、自分にな。あの世で後悔なんてしたくねえ。あの世でも堂々として居たいんだよ」

「海神君……」

「篠崎。たまには当^{あて}にしてくれよ……仲間なんだからさ……なっ、司」

「はい！」笑顔で同意を求める龍之介に、司は元氣良く答えた。

「海神君、司ちゃん……」屈託の無い龍之介達の笑顔を見て、翔子は、心を閉ざしていた物が溶けていくのを感じ、目に涙が浮かんた。「よし！司！お前は篠崎から離れるな！篠崎を守れ！」龍之介の言葉に、

「はい！」と、司が潔く答えた。

龍之介は五m程前に出た。鎧武者との距離は十m程だ。

龍之介は鎧武者を前に、正直な所、怖かった。怖くて足が少し震えている。

龍之介は心の中で？怯むな！？と柔道部の先生に言われた言葉を思い出していた。

「くっそう……かつこいいいな、俺……命がけの勝負だぜ！先生、俺、殺されるかも知れないけど、怯みません。怯まず立っています」と、小便をちびりそうな自分を鼓舞していた。

でも考えてみれば、二人を放りだして逃げた所で、誰にも咎められる事は無いのという考えも頭を過ぎったが『そんな無様な事が出来るか！』と、一瞬で打ち消した。

「どうせ死ぬなら、かつこよく死んでやる！怯まず正面から戦って死んでやる！」

龍之介は木切れを振り上げ、

「くっそうおううう！」と、叫びながら鎧武者に向って打って出た。

鎧武者が太刀を振り上げた。龍之介は鎧武者の注意を引き付ける為、横へと走る。

鎧武者が太刀を振り下ろす。龍之介が更に横に飛び退き、衝撃波を躲す。

そして、一気に駆け寄り鎧武者の正面。

「このやろう！」と、掛け声と共に鎧武者へと木切れを振り下ろし

た。

木切れは見事に鎧武者の顔面に当たったが、当然、鎧武者は平然として立っている。

「くそう！」と、再び木切れを振り上げた時、鎧武者の腕が龍之介を襲った。

「ぐうええふっ！」まともに、横っ腹に拳を受け飛ばされて、倒れて苦しそうに転がりながら龍之介は唸り声を上げている。

「先輩！」

「海神君！」

「だ、大丈夫だ！来るな！早く逃げろ！」龍之介は痛みに耐え、上半身を起こし手を振り上げて、二人を心配させない為に空元気を出している。

苦しみながら龍之介は『何で刀を使わない？』と、不思議に思っていた。

「遊ばれているのか？いや、もしかして、近距離じゃ、あの技は使えないのか……」と、思い付き、懐に入れば何とかなるかと思ったが、それが無駄な考えだと先程証明された事に気付き絶望した。

「くそ、勝負以前の問題だ……まったく相手にならない……」と、悔しそうに鎧武者睨んだ。

まだ腹が痛む中、龍之介は昔を思い出していた。

「馬鹿だよなあ、ほんと馬鹿だよ俺。振られるって分かって部長に告って……小学校の時だって、苛められるの分かかって、邦博庇って……苛められて、殴られて、鞆隠されて……でも、負けなかった。俺は負けなかった」龍之介は、ゆっくりと膝を付く。

「柔道部入って、先生に教えてもらった。正義を貫く勇気を持つ事、それが強さだって……」

体を起こしながら龍之介は、柔道部の先生に言われた事を思い出していた。

「苛められるから強く成りたいって言ったら、先生、教えてくれませんでしたよね。力に強さを求めるのは愚かだって……苛められても、自

分を曲げなかったお前は正しいって……正義を貫いたお前は正しいって……」龍之介は、鎧武者を睨み付ける。

「俺、涙出たよ……俺、間違ってたって……」そして、龍之介は渾身の力を振り絞り、

「間違ってたんじゃないんだ!」と、叫び、木切れを地面に突いて、勢い良く立ち上がった。

「くっそう! 負けるか! このやろう!」龍之介は再び木切れを構え、鎧武者を睨み付ける。

だが、既に龍之介はふらふらの状態で、立っているのがやっとだった。

其処に鎧武者の放った衝撃波が襲って来た。

「わあああ!」咄嗟に身を捻り躲して、辛うじて直撃は免れたが、衝撃波が通過する衝撃で、龍之介は五m程弾き飛ばされ、地面にバウンドして転がった。

「ううう……」地面にうつ伏せに倒れ、龍之介は動けず唸っている。

「海神君!」

「先輩!」二人は叫び、龍之介に走り寄る。

その時、二人に向けて鎧武者が太刀を振り下ろし、衝撃波を放った。

衝撃波は三日月の形で、正面斜めから真っ直ぐに翔子に向っている。

「危ない!」司は、それに気付き翔子を横へと突き飛ばす。

次の瞬間、司の体は、まるでボールの様に宙を舞い、十mぐらい弾き飛ばされ、地面に三度バウンドし、関節が人形の様に出鱈目な方向へと曲がりながら転がった。

翔子も、衝撃で三m程飛ばされて肩を強打した。

「司! 篠崎!」龍之介は叫ぶが、起き上がれない。

「司ちゃん!」痛む肩を庇いながら、翔子はよろよろと立ち上がり、司へと走り寄った。

「司ちゃん! 司ちゃん!」翔子は、叫びながら司を抱き起こした。

司のシャツは消し飛び、直撃した胸から腹にかけて青黒い内出血の跡が斜めに走っている。

司は、体をびくつ、びくつと震わせて、耳と鼻から血を流し、口からは血が混じった泡を出して、目は半開きで、うつろに空を眺めている。

「司ちゃん！司ちゃん！」叫ぶ翔子の目からは、何時しか涙が溢れていた。

龍之介が自由に動かない体で、這いながら二人に近付いている時、後ろで爆発が起きた。

○愛の力○

白菊と美貴が上に着くと、美貴は龍之介が居ない事に気付き、不安になった。

「海神先輩達は？」部長に向かい不安な目で美貴が聞いた。

「あ、あの……」と、部長が、戸惑いながら何か言おうとした時、

「これは！あっちだ！主！」白菊が、鎧武者の放った衝撃波の気配に気付き叫んだ。

「うん！白ちゃん、飛んで！」美貴も気付き、白菊の背中に乗る。

白菊が勢い良く飛び上がると、二人は気配のする方へと飛んで行った。

部長は二人が飛び去ったのを見ながら、今まで我慢して来た感情が爆発した。

「なっ、何なのよ！さっきから！もう、此処何処なのよ！いったい何なのよ！」

部長は拳を握り締め手を上下に振りながら、ヒステリックに叫び、邦博の方に振り向くと、

「説明しなさいよ！本田君！説明してよ！しなさいよ！何とか言いなさいよ！」

部長は目に涙を浮かべ、叫びながら拳で邦博の胸をポカポカと叩

いている。

不安から来る恐怖で、真っ青な顔で目にいっぱい涙を溜めて、感情を剥き出しに自分を曝け出して叫んでいる部長の姿を見て、邦博は部長が無性に可愛く思えて来た。

小学校の時、苛めに怯え臆病になっていた自分は、何時も龍之介を頼っていた。

しかし、邦博は今、怯えながら縋って来る部長を見て『僕が、守ってあげなきゃいけないんだ』と、勇気が湧いて来た。

順序は逆かも知れないが、部長を守りたいと思う気持ちが湧いて来た事で、邦博は『部長は、僕にとって大切な人なんだ……』と、思い始めた。

「もう！何とか言いなさいよ！何で黙ってるのよ！」

邦博は叫んでいる部長の手を掴み、そっと引き寄せ肩に手をやり、「大丈夫です。僕がいます……僕がいますから」と言っ、強く抱きしめた。

「あっ……」邦博の腕の中で、部長はやっと我に帰った。

「こんな僕ですけど、部長を守ります。絶対に守ります……」

部長は邦博の胸の温かさを感じ、

「……ありがとう……」その安心感から落ち着きを取り戻し、部長も邦博を強く抱きしめ、頬を肩に寄せた。

「ほん……邦博君……ありがとう……邦博君の前なら、私、素直になれそうな気がする」

「部長……」

その時、部長が急に邦博の肩から顔を上げ、邦博の額に自分の額をくっ付けて、

「み、碧って……呼んでよ……」と、顔を真っ赤にして言った。

邦博は、そんな部長に驚きながら、顔を真っ赤にして、

「……は、はい……」と、答えた。

美貴と白菊が鎧武者の気配へと向かっていると、再び衝撃波の気

配がした。

前方を見据えていると、鎧武者の姿が見えて来て、その前に龍之介達三人が倒れている。

倒れている龍之介の姿を見た瞬間、美貴の頭に血が上がった。

「はああ！」美貴は白菊の背中を蹴り飛び出し、その勢いで鎧武者へと体当たりをする。

「主！」急な事に白菊は驚き叫んだ。

美貴に背中から体当たりをされた鎧武者は前のめりになり、バランスを崩して膝を付いた。

体当たりした美貴は、勢いが付いたまま地面に転がる。

鎧武者から美貴が離れたのを見て白菊が、炎弾を鎧武者へと叩き付けると、炎弾は爆発し炎を舞い上げ鎧武者を包んだ。

「先輩！」美貴は立ち上がり、倒れている龍之介に向かった。

「大丈夫ですか！」龍之介を抱き起こしながら、美貴は泣きそうな顔で叫んでいる。

「俺はいい、大丈夫だ！司を、司を助けてくれ！」龍之介は痛みに顔をゆがめながら、司の方を見て叫んだ。

龍之介の言葉に、美貴は司の方を見た。ぐったりとして翔子に抱かれている司を見て、戦慄が走る。尋常では無い司の姿に、美貴は死を感じた。

「白ちゃん！助けて！」美貴は司を見ながら、反射的に白菊を呼んだ。

「待ってください！今は！」白菊は鎧武者の放つ光りの矢を避けながら炎弾で応戦している。

美貴は、司の様子に時間が無い事を知り、立ち上がり一気に鎧武者へと駆け出した。

「はああああ！」美貴は走りながら、気合と共に両手に気を込める。美貴の両手が激しく緑の閃光を放ちだし、更に美貴の全身が緑の光で包まれた。

美貴は鎧武者に駆け寄ると、勢いを殺さずそのまま飛び、肩から

体当たりをかます。

美貴が、鎧武者の背中に体当たりした瞬間、爆発の様に空気が弾け、白菊に気を取られていた鎧武者は、衝撃でバランスを崩し地面に倒れた。

体当たりの反動で倒れた美貴は、直ぐに立ち上がり、鎧武者の背中に刺さったままの鬼斬丸を取る為に、倒れている鎧武者に飛び掛った。

倒れた鎧武者の背中に、腹ばいに着地した美貴は、鎧武者の腰の辺りから手を伸ばし、鬼斬丸を掴もうとした時、鎧武者が体を捻りながら、肘で美貴を突き飛ばした。

「きゃっ！」美貴は悲鳴を上げて地面へと転がった。

「主！」白菊が叫び美貴に向かって急降下する。

美貴が立ち上がろうと手を地面に突いた時、鎧武者が美貴の手首を掴んだ。

「うっ」美貴は必死で鎧武者の手を離そうとしたが、びくともしない。

そして、鎧武者はそのまま、ゆっくりと立ち上がり、美貴を盾にする様に差し出した。

「くそっ……」白菊は美貴の傍まで来て慌てて止まり、手が出せずに悔しそうにしている。

「くそっ！放せ！放せ！ちくしょう！」鎧武者に高く持ち上げられ、ぶら下がっている美貴は必死に逃げようともがいている。

鎧武者が美貴を持ち上げながら、白菊を睨みつけ太刀を振り上げた。

白菊は危機を感じ、その場を全速力で離脱し、龍之介の横に着地した。

「頼む！助けてくれ！司が、司が」龍之介が、白菊に縋り懇願している。

「分っている……だが、今は、あ奴が居っては……あ奴を何とかせんと……」白菊も司を見て時間が無い事を悟った。

その時、毒々しい紫色をした煙のような物が、鎧武者から染み出す様に表れ、鎧武者に掴まれている美貴の体を包んで行く。

その煙に全身を包まれ、美貴は苦しそうにもがいている。

「主！」

「鬼追！」二人が叫んだ時、紫色の煙の中で稲光の様な閃光が走った。

「きゃあああ！」美貴は悲鳴をあげると、ぐったりと体の力が抜けた。

「主！」

「鬼追！」煙の中で、ぐったりとぶら下がる美貴を見て、二人が叫んだ。

「くそっ、鬼斬丸さえ有れば……もう少しだったのに……」白菊が悔しそうに呟く。

「鬼斬丸？」龍之介が白菊の顔を見ながら聞いた。

「奴の背中に刺さっている短刀じゃ……あれさえあれば、何とか……」

「取れないのか？」

「我では無理じゃ、我はあれに触れる事すら出来ん」

「俺なら……俺なら触れるのか？」龍之介が、腹を押さえながら白菊に這い寄る。

「えっ？……お主は人じゃから触れるが……」何の事か分からずに白菊が答えた。

「おい！俺に憑け！」龍之介は、突然白菊に怒鳴った。

「なっ、何を言っておる」白菊は、突然の龍之介の申し出に驚いている。

「俺に憑けって言ってんだよ！お前が憑けば強くなれるんだろ！早くしろ！」

「無茶を言うな！幾ら、鬼の血が流れているからと言って……」怒鳴る龍之介に怒鳴り返す。

「うるせえ！ごちゃごちゃ言ってんじゃねえよ！早くしろ！」龍之

介が怒鳴り、白菊の胸倉を掴もうとしたが、霊体に戻っていたために空振りして、不思議そうな顔で自分の手を見た。

「……とにかく、鬼追を救う方法が、他にあるのかよ！駄目で元々だ！」掴めない事が分かり、龍之介は白菊に顔を寄せて怒鳴り付ける。

「どうなっても構わんのか？……死ぬぞ！貴様！」白菊は無茶な申し出に怒鳴り返すと、

「とっくに覚悟は出来てるよ！」白菊を思い詰めた目で見詰め、龍之介が叫んだ。

白菊は暫く考える様に目を閉じていたが、

「……承知……」と、静かに呟いた。

白菊は龍之介の背中へと廻り、青白い炎を上げて龍之介へと入って行った。

のぼせる様な感じに龍之介は戸惑っていたが、直ぐに痛みが消え、体に力が漲って来た。

「あ、あ、あ……なんか、すげえ……」

白菊が憑いた龍之介は、美貴と同じく目が青白く光り、背中から炎を上げている。

「よいか！長くは無理じゃぞ！」龍之介の頭の中で、白菊の声が直接響いた。

「おっ、おお……」龍之介は、その感覚に少し戸惑い返事をした。涙を流しながら、司を抱きかかえている翔子に向って、

「司を頼むぞ！」と、龍之介が言っていると、翔子は黙って頷いた。

「行くぞ！」

「承知！」

龍之介は一気に走り出すと、

「す、凄く、早い……体が軽い、力が溢れている」と、感じた。

「どおりやああああ！」龍之介は5mほど飛び上がり、鎧武者にとび蹴りを食らわせた。

龍之介は意識していなかったが、気合と共に足がオレンジ色に光

り、そして鎧武者の背中を蹴った瞬間、爆発の様に空気が弾けた。

鎧武者は、のけぞり美貴を離して倒れ込んだ。

「鬼斬丸を！ 奴の背中中の刀を抜け！」 白菊に言われ、龍之介が鎧武者の背中を見ると、

「分かった！」 背中に短刀が刺さっているのが見えた。

立ち上がろうとしている鎧武者に、龍之介は再び飛び上がり、真上から背中に両足で蹴りを入れ踏み付け、再び地面に這いつくばった鎧武者の背中に馬乗りになり、刀を引き抜いた。

「それは、魔切の短刀じゃ。其の刀に気を……気合を込めて切れ！」
「良く分かんが……」 白菊の言葉の意味が分からないまま龍之介は、

「死ねええ！」 と、気合と共にオレンジに光る鬼斬丸を、渾身の力を込めて突き立てた。

刀を突き刺し、やったと思った瞬間、鎧武者は体をよじり、肘で龍之介を突き飛ばした。

龍之介の脇腹を肘が直撃して、鬼斬丸を持ったまま、五m程突き飛ばされたが、不思議と痛みは無かった。

「くそっ！ 効いてないのかよ！」 龍之介は地面に転がり鎧武者を睨む。

「いや……効いている」 まだ立ち上がれない鎧武者の、ぎこちない動きを見て白菊が言った。

鎧武者は自分の体を維持しようと、鬼斬丸で刺された傷に結界を張り、可也の霊力を使っている為に、その動きは明らかに弱っていた。

「行くぞ！」 龍之介は勝てると確信し、鬼斬丸を握りなおし立ち上がろうとしたが、

「あれ？……」 と、力が入らず尻餅をついて、地面に座り込んでしまった。

「駄目だ！ 限界だ！」 白菊は叫ぶと龍之介から離れた。

「ぐっ！」 龍之介の体から力が抜け、消えていた痛みが一気に戻り、

龍之介は顔をゆがめた。

「限界じゃ！これ以上憑いていると、お前を取り殺す事になる！後是我が何とか……」白菊は自信は無かったが、後は自分が何とかする積もりで、手に狐火を溜めた。

「だからなんだよ！憑けよ！皆を助けるのに、それしか無いだろうが！」

「馬鹿を申せ！そんな事が出来るか！」怒鳴る龍之介に振向き、白菊も怒鳴り返す。

「だって、もう少しじゃないか！奴は弱ってるんだろう！」

「お主の気概には感服するが……これ以上、無理じゃ……」

「死ぬ覚悟は出来てんだよ！早く！頼むから！早く、憑けよ！」龍之介は倒れたままの美貴の事が心配で仕方が無かった。

「……分かった……」白菊は言い合いをしている時間が惜しかった。

「良いか良く聞け。只の一撃で力を使い果たす様な者に、これ以上憑けば魂を削る事になる。憑くと言う事は、力を食らうだけでは無いのだぞ……魂の力が回復しないまま我が憑き続ければ、その時は、我が術では癒せぬぞ……我が術では魂は回復せん……よいな」

「……おお、覚悟は出来てる」悲しそうな顔で説明する白菊に、龍之介は頷いた。

その時、白菊は何かの気配を感じ、美貴の方を向いた。美貴の体が光っている。

龍之介も何が起きているのか分からずに美貴の方を見詰めていた。

美貴は全身を煙に包まれ、電撃の様なショックを受けて気を失っていた。

気絶している中で、美貴は『これで死ぬのかなあ』と、夢の様な思いの中で、死への恐怖より、龍之介への思いが浮かんで来た。

『勢いで、告白しちゃったけど……振られた。だけど、先輩も部長に振られた……そうよ！まだ、チャンスはある！こんな所で死ぬるかあ！』と、龍之介への未練が沸々と沸いて来た。

何処までも、前向きな美貴ちゃんです。

「くっそうおうう！」と、美貴は、まだ意識が朦朧としている中、全身に力を込めると、不思議な事に力が漲っている。美貴は、膝を付いてから一気に立ち上がった。

頭がふら付き前が良く見えないが、美貴は鎧武者の気配のする方を向いて手に気を溜めた。

送り込まれた気は、今までとは違い、激しく閃光を放ちながら眩しく輝いている。

「鬼追！」

「主！」龍之介と白菊の声に気付き、美貴はやっと回復して来た視界に、

「先輩……白ちゃん……」龍之介達の、無事な姿を見付けほっとした。

そして、自分の体に纏わり付いている紫色の煙に気が付き、

「はっ！」と、気合を込めて払い退けると、美貴の全身が閃光を放ち、紫色の煙は吹き飛ぶように消え去った。美貴は輝く手を見て、自分の力が以前より強くなった様な気がした。

自分の力に戸惑っていると、股間から何か流れるものが、太股を伝うのを感じた。

始めはお漏らししたのかと思ったが、どうやら美貴は初潮を迎えた。

「やだ、何？……何で、こんな時に！」太股を伝う血を手で拭い、美貴は途方に暮れていた。

「主！」白菊が心配そうな顔で美貴の傍に飛んで来た。

「白ちゃん」美貴はどうして良いのか分からずに、不安な顔で白菊を見た。

「主、無事か？……どうしたの……凄い気……」白菊は美貴を見て驚いている。

まじまじと見つめる白菊に、美貴は恥ずかしくなって、顔を赤くしながら、

「えっ？やっぱりそうなの……」と、美貴は戸惑い光る手を見た。
「先程の滅火に近づいたせいで……影響されたのやも知れませんか……」

「滅火の……とにかく早く憑いて！」やっと立ち上がった鎧武者の姿を見て美貴は焦った。

「はっ、承知……はうっ！」白菊が美貴の背中に回り込もうとした時、急に倒れ込み苦しそうに全身を小刻みに震わせている。

「きゃっ！どうしたの白ちゃん！」美貴は咄嗟にしゃがみ込み白菊を見た。

苦しんでいる様に見える白菊が気になるが、立ち上がり美貴を見ている鎧武者も気になる。

美貴はどうするか悩んでいた時、白菊の体が急に光を放ち炎を上げた。

「白ちゃん！」光に驚き、美貴は身を引いた。

白菊の全身が青白い狐火に包まれ、大きくなりながら白い毛が生えだし、尻尾が伸び狐の姿へと変化し始めた。

「どうやら……妾も、滅火のせいで……影響を……受けたみたい……」

「大丈夫？」白菊は大狐に変化して、小刻みに体を震わせて、まだ苦しそうにしている。

「大事ありません！憑きます！」四本の足で立ち上がった白菊の大きさは、美貴と目線の高さが同じくらいにあった。

「行くよ！」

「承知！」白菊は、美貴の言葉で霊体へと変化し美貴の中に入って行く。

美貴は入ってくる白菊に、今までとは違う強力な力を感じた。

「海神先輩！鬼斬丸！」美貴は鎧武者に駆け寄りながら龍之介に叫んだ。

「あっ……おう！」龍之介は美貴の言葉で、反射的に美貴に向かって鬼斬丸を投げた。

美貴は飛んで来た鬼斬丸を掴むと、一気に気を送る。空気を震わせ鬼斬丸が激しく輝く。

二mぐらいの長さで、刀の様に伸びた緑色の光を、青白い狐火の炎が包み込む。

と、その時、鎧武者が太刀を水平に振り払い、美貴に向かって衝撃波を放った。

美貴は、咄嗟に足を踏ん張って、

「はあっ！」気合と共に鬼斬丸を両手で目の前に突き出し、障壁を張る。

衝撃波は、美貴の張った障壁に激突し、障壁と共に砕け散る。

衝突した衝撃で、美貴は地面に線路道を描いて、五m程押し下げられた。

鎧武者が、上段に太刀を構え直すのを見て、美貴は躊躇せず、鎧武者へと鬼斬丸を水平に構え駆け出した。

鎧武者が太刀を振り下ろした時、美貴は瞬時に横に飛び退き、同時に鬼斬丸を右上から袈裟懸けに振り下ろした。

「はあっ！」鎧武者が放った衝撃波は美貴の横を通り過ぎ、振り下ろされた鬼斬丸から放たれた光の矢が鎧武者を貫いた。

貫かれた鎧武者はその場に膝を付きしゃがみ、苦しそうに美貴を睨みながら太刀を再び構えようとしている。

「たああああ！」鎧武者に駆け寄った美貴は、鬼斬丸を一気に振り下ろし、鬼斬丸から伸びた気の光が空気を震わせ、鎧武者を袈裟懸けに切り裂いた。

手から太刀が滑り落ち、身を屈める鎧武者の傷口から、血の様にどす黒い煙が噴出し、バツクリと開いた傷口の周りには、どす黒い煙が渦を巻いている。

美貴は、その傷口の中で何かが蠢うごめいているのを見た。

鎧武者は、崩れる様に片手を地面に付き、傷口をもう片方の手で押さえている。

美貴は、蠢く物のおどましさに一瞬身を引いたが、今しかないと

鬼斬丸を上段に構え直し、

「くたばれ!」と、叫び、鎧武者の首を狙い、一気に振り下ろした。碧の閃光が走り、鎧武者の首が宙を舞う。

鎧武者の傷口から、どす黒い煙が噴出し、鎧武者は崩れる様に煙となり消えた。

「か、勝てた……」鎧武者に勝てた事を、美貴は驚きながら、激しく輝く鬼斬丸を見ていた。

しかし、そんな事に驚いている暇は無いと気付き、

「白ちゃん!早く、司ちゃんを!」

「承知」白菊は美貴に返事をし、大狐の姿で飛び出して美貴から離れ、司の脇に降り立った。

「早く!頼む!助けてくれ!」龍之介が白菊に叫ぶ姿を見て、

「お願い!助けて!」翔子も泣きながら訴えた。

「……」白菊は、翔子に抱かかえられている司の額に前足を置いて様子を見ている。

「白ちゃん?」狐の顔で表情は良く分からないが、黙っている白菊の姿を見て、美貴は不安になって来た。

「魂が……離れかけています……上手く行くかどうか……」

眉間にしわを寄せ、重苦しい表情で呟く白菊に、龍之介は苛立ち、「何でも良いから、カラスにやったみたいに、直してくれよ!」白菊に詰め寄り、怒鳴った。

「……分かった、其処に寝かせろ」龍之介の必死な顔を見て、白菊は司に向き合った。

翔子がゆっくりと、司を気遣いながら地面へと寝かせた。

白菊が、司の額に前足を置いたまま癒しの術をかけると、司の全身が青白い光に包まれた。

「……駄目か……はああ!」司の変わらぬ様子を見て、白菊が気合を入れなおす。

白菊が気合を入れ術をかけると、司の体を包む青白い光が、閃光を発し激しく輝いた。

「……駄目だ……」暫くして白菊は、術をかけるのを止めて、司から前足を下ろした。

「駄目って……おい！何とかしろよ！頼むから！助けてくれよ！」龍之介は白菊の肩を掴んで激しく揺すりながら、必死になって頼んでいる。

「いや！司ちゃん！」翔子が司を再び抱かかえ叫ぶ。

「魂が離れた者は駄目なんじゃ！……どうしようも無いんじゃない……」激しく揺する龍之介の目を見て、白菊は悲しそうな声で呟くと俯いてしまった。

「そんな……そんな……司！司！司！」龍之介が取り乱し、翔子に抱かれている司を揺り動かしながら呼びかけた。

「司ちゃん！司ちゃん！嫌よ！死じゃだめ！」目の前で起きている、司の死と言う現実を認めたくない翔子が、泣きながら叫んでいる。

「ごめんなさい……ごめんなさい……私のせいで……」美貴は、がくつと地面に膝を付いて涙を流しながら、巻き込んでしまった事を後悔し、齒を食いしばって悔やんでいる。

「馬鹿！そんな事、許さないから！私の傍に居たいって言ったでしょ！勝手な事しないでよ！傍にいなさいよ！ずっと、傍にいなさいよ！」

？ごめんね？の一言だけを残して自分の前から消えた響子。

思いを寄せる美貴は、恐らく自分が望む形では振向いてはくれないだろう。

そして、傍にいたいと言ってくれた司が、自分を庇って、今、死に掛けている。

「何よ！返事しなさいよ！黙ってないで何とか言いなさいよ！返事してよ！」

翔子は、虚ろな目で空を見ている司に向って、狂った様に叫んでいる。

大勢の中で、一人でいる事に何とも思わない翔子だったが、抜け

殻の様な司を見ながら、身近に思う人達が自分から離れて行く事に、胸を締め付ける孤独感を始めて感じた。

「嫌、嫌よ……そんなの嫌よ……」

翔子は怖かった。司を失う事が怖かった。自分と分かり合えるはずの司を、崩れそうな心を支えてくれるはずの司を……

「嫌よ！勝手に逝かないで！傍にいてよ！お願い！お願いだから、傍にいてえ！私の傍にいてえええ！お願い、一人にしないでえええ！」翔子が天を仰ぎ絶叫した時、

「！……待て！どけ！」白菊は翔子を突き飛ばして、司の横に座った。

「はあぁっ！」白菊が両方の前足を司の胸に当て、気合と共に癒しの術をかけた。

辺りは、術の輝きで明るく照らされ、周りの者は息を呑んで見守っていた。

「……帰って来た！……おうううう！」そう言って、白菊は更に気合を入れる。

司の体の周りを、激しい閃光が稲妻のように飛び交っている。

「……よし……」白菊は術をやめ、司から前足を離れた。

まだ稲妻が司の体の表面に飛び交っている時、司がびくっと仰け反り、

「うっ……ごほっ、ごほっ……」と、苦しそうに咳き込んだ。

「司！」

「司ちゃん！」翔子が司に飛び乗るように抱き付き、龍之介と美貴も司の脇にしゃがんだ。

「先輩？お姉様？美貴ちゃん？」司は自分の顔を、泣きながら覗き込んでいる三人を不思議そうに見ている。

「よし！生きてるう！生きてるう！」龍之介は立ち上がり、拳を振り上げながら叫んでいる。

「司ちゃん！あうっ、ああああ……」翔子は、自分を見詰める司を抱きしめて泣き崩れた。

「お姉様……怪我は？」司は、何があったのか、やっと記憶の整理が付き、翔子を気遣った。

「ありがとう……大丈夫よ……司ちゃんは何？痛い所無い？」翔子は少し落ち着きを取り戻し、微笑みながら司を見ている。

「私……あの、どうしたのか良く覚えて無いですけど……さっき、声がして……お姉様と呼んでいる声が出て……それで……良かった、お姉様が無事で……」司は、優しく微笑みながら翔子の頬に手を当てた。

「ありがとう……ありがとう司ちゃん……」翔子は、司の手に自分の手を添えている。

「あのな、篠崎。お前に酷い事をしたのが男なら……お前を命がけで助けた司も男なんだぜ……まあ、今更、言う必要も無いと思うけどな」龍之介が笑顔で翔子に言うところ、

「そうね……知っているわ」と、翔子も笑顔で答えた。

「奇跡じゃ……離れきってはいなかったとは言え……離れなかった魂が、戻るなんて……」

白菊は驚いて、不思議そうに司を見ている。

「私の力が強くなったとは言え、返魂はんこんの外法げぽうを使えぬ我では、離れなかった魂を戻す事など出来ん……なのに……」

「愛の力だよ……」白菊の言葉に、美貴は溢れる涙を指で拭いながら答えた。

「えっ？」白菊が不思議そうな顔で美貴の方を見た。

「篠崎先輩の、司ちゃんを思う心が、呼び戻したんだよ」

「愛……そうですか……理解する様にします。でも、強いんですね。その、愛って力……」

「うん！」柔らかく微笑む白菊に、美貴は笑顔で返事をした。

「狐さん……ありがとう。司ちゃんを助けてくれて……」翔子が目に涙を貯めながら、今まで見せた事の無い笑顔で、白菊に礼を言った。

「狐さん……」その呼び方に聊か不満はあったものの、二人の姿を

見て満足そうに微笑んだ。

翔子に続いて、龍之介が白菊に振向き、

「あっ、白ちゃん！ありがとうな！……」と、礼を言った途端、

「あっ？……」急に力が抜ける様にぼたっと倒れた。

「先輩！先輩！」美貴は慌てて龍之介の脇に座り、龍之介の体を揺さぶっている。

「海神君！」翔子と司も突然の事に驚いている。

「あああ、やっぱり……だから、言わんこっちゃ無い……」呆れる様に白菊が呟くと、

「何？どうしたの？何があったの？」美貴が不安そうに白菊に問いただした。

「いえね、こ奴に憑いたんですけど……言っただけですよ、死ぬ気かって……」

「えっ？先輩に憑いたの！そんな、無茶な！」美貴は驚き、白菊を怒鳴り付けた。

「だってえ……主が危なかったしい……こ奴、死ぬ覚悟は出来ているって、言うしい……」

白菊が言い訳っぽく、ぶつぶつと言うのを聞いて、

「えっ？じゃあ、先輩……私を助けるために」美貴は、自分が気を失っている間、龍之介が自分を助ける為に、命がけで戦っていた事を知り感動した。

正義感の強い龍之介だから、何も美貴の為だけでは無い事は分かっていたが、身を挺した龍之介の行動に『先輩が私の為に……』と、美貴の心が、どっぷりとヒロインしかけた時、

「あっ！白ちゃん！早く！先輩を助けて！」遠くに行きそうな自分の心に気付き、美貴は我に帰って白菊に頼んだ。

「えっ？死ぬ覚悟は出来ているって、言ってたよ……」と、白菊が素っ気無く言うのと、

「あほかぁ！だからと言って、見殺しにする気かぁ！」と、美貴は鬼の様な形相で、白菊を睨み、力いっぱい怒鳴り付けた。

「はあ……」白菊は面倒臭そうに返事をして、倒れている龍之介のそばに座った。

「随分、力使ったのに、ほんとに、狐使いが……」と、白菊がぶつぶつと呟いていると、

「何、ぶつぶつ言ってるのよ！死に掛けてるのよ！早く！」美貴が再び怒鳴り付けた。

「はああい……」と、他人事の様に返事をして、白菊は尻尾をぼそつと龍之介の額に置いた。

「ぐっ……あんたね……」龍之介の事が心配で、気が気でない美貴にとって、面倒臭そうな白菊の行動が一々気に触った。

そして、白菊が術をかけると、ほんの一分ほどで龍之介は気が付いた。

「あれ？……」気が付いて、今までの痛みが全て消えている事に龍之介は驚いている。

復活した龍之介の姿を見て、

「よかったあ！先輩！」美貴は思わず、龍之介に抱き付いてしまった。

龍之介は、抱き付いて来た美貴に一瞬驚いたが、

「すまなかったな、心配かけて」と、言いながら笑顔を浮かべ、美貴の頭を優しく撫でた。

「まったく……馬鹿な奴じゃ……」白菊が龍之介を見て、呆れるように呟いた。

「ああ、馬鹿だよ……守りたい物があるから……だから馬鹿になれるんだよ」

龍之介の守りたかった物。

それは、汚けがしたく無いプライドと、失いたく無い仲間、そして……龍之介は、自分の胸にしがみ付いて泣いている美貴を見て、素直に成れそうな気がして来た。

そんな二人を、微笑む様な顔で見ている白菊に気付いた龍之介は、「どうかしたのか？」と、訝しげに尋ねると、

「えっ？……いや……ああも強くなれるものかと……」と、白菊は、しみじみと言った。

まだ目に涙を浮かべ、龍之介に抱き付いている美貴の傍に、何時の間にか翔子が近付き、

「美貴ちゃん、貴方、始まったの……」と、耳元で囁くと、美貴はビクツと驚いた。

「あっ、あの……」美貴は翔子と龍之介の顔を交合に見ながら、顔を真っ赤に染めている。

「ちょっと、こっち……」翔子はそれに気付き、美貴の手を引いて木陰の方へと向った。

「何だ、どうしたんだ？」突然の不可解な二人の行動に、龍之介は思わず声をかけると、

「来るんじゃないよ！来たら殺すよ！」と、翔子が叫んだ。

「なっ！何なんだよ……」翔子が言うだけに、真実味のある言葉に龍之介はたじろいだ。

其処へ、司が近付き、龍之介の脇にしゃがみ込んで、

「お花を摘みに行ったんですよ」と、そっと耳打ちした。

「えっ？何だそれ？花なんか何処にあるんだ？」きろきろと、辺りを見回す龍之介に、

「……鈍感……トイレですよ……」顔を少し赤くして説明する司の言葉で、

「ああ、なるほど。女は連れションか……」と、納得した龍之介だった。

龍之介のデリカシーの欠片も無い言葉を聞いて、

「……もう……」司は、膨れっ面で更に顔を赤くした。

一方木陰では、

「足に血が付いていたから、もしかして思ったら……駄目じゃない、始まりそうなら、何時も持っていなきゃ」と、言う翔子に、美貴は初めてだとは言えなかった。

翔子は膝を付いてしゃがむと、ウエストポーチから、ナプキンと

携帯用のウェットティッシュ、使い捨ての紙ショーツをドラエモンの如く取り出した。

「はい、これで拭いて、履き替えなさい」と、翔子が美貴にウェットティッシュを手渡すと、

「あっ、ありがとうございます……」美貴は恥かしそうに言っ受けて取った。

「良いわよ、気にしないで。あっ、それと……えっ？ 貴方、毛？」

翔子が、ふと振向いた時、ショーツを脱いで股間を拭こうとスカートを上げた美貴の下腹部を見て気が付いた。

「あっ！先輩！駄目！お願い！内緒！言わないで！」美貴は慌てて手で前を隠した。

「言わないわよ……」翔子は優しく微笑ながら、再び後ろを向いた。着替えが終わり、美貴は翔子に近付いて、

「ありがとうございます……終わりました」と、顔を真っ赤にして翔子に礼を言った。

翔子はそんな美貴を愛おしそうな目で見詰ながら、

「あのね、美貴ちゃん……私、あなたの事好きよ」と、静かに言った。

「えっ？ あ、はい。私も先輩の事、好きです！」突然の翔子の言葉に美貴は一瞬戸惑ったが、直ぐに屈託の無い笑顔を浮かべ元気に答えた。

翔子は美貴の笑顔を見て、満足そうに微笑んだ。

その妖精は春と共にやって来た。

心の凍て付いた雪の女王の元に。

愛した少女は？ ごめんね？ の一言を残して、自分の前から消えた。悲しかった。寂しかった。苦しかった……体が引き裂かれる様な心の痛み。

その痛みに比べれば、手首の痛みなど、蚊ほども感じなかった。冬の凜に首を竦める様に、硬く心を閉ざしていた自分。そんな自分を誰もが避けて通った。

だが、春にやって来た少女は、煩わしいほど、自分へと纏わり付いて来た。まと

その少女は、屈託の無い笑顔を浮かべ、皆が避ける自分へと、無防備に近付いて来る。

そして、何時しか少女の笑顔は、固く閉ざした心に暖かな風を吹き込んで来た。

そう、春の妖精の様に。

妖精が吹き込んだ春一番は、凍て付いた心を溶かして行った。

何時しか少女だけを見ている自分に気付いた。その時、少女の全てが愛しく思えた。

そして妖精は、次第に心の中で天使へと昇格して行った。

翔子には分っていた。美貴に自分の思いが受け入れられて貰えない事ぐらい。

中途半端な告白だったが、翔子はそれで満足だった。

「さあ、行きましょう」翔子は優しく微笑みながら美貴の肩に手を回して言った。

お願い、届いて……（前書き）

最終話です。

お願い、届いて……

○お願い、届いて……○

美貴達は、置いて来た部長達の所へと急いだ。

美貴は気になっていた。鎧武者を倒したのに結界が解けていない。倒した直後は、司や龍之介の事があって気が回らなかったが、落ち着くと其の事に気付き、美貴の不安は膨らんだ。

「ねえ、白ちゃん、あいつを倒したのに、何で結界が消えないんだろう？」と、美貴が走りながら白菊に尋ねると、

「これ程の規模の結界です。あ奴如きが張れる物ではありません……この結界は、他の誰かが張った物に違いありません」大狐の姿で走りながら、白菊が答えた。

「他の誰かって……」白菊の言葉に、美貴が不安そうに聞き返すと、
「……」白菊は無言で首を振った。

「部長！ 邦博！」大きな木の陰に隠れている二人を見付けて龍之介が声をかけた。

龍之介の目には、邦博の腕にすがり付いている部長の姿が映った。この異常な空間で、部長が怯えている事は理解出来るが、二人の様子に嫉妬の様な感情が湧き上がり、龍之介の胸は締め付けられる様な痛みを感じた。

龍之介は部長の前まで来て、

「あの……部長の好きな人って……」と、思わず聞いてから後悔した。

何故そんな事を聞いたのか、聞いてどうするのかと、答えを聞く事に怯えているのに。

龍之介の言葉に部長は黙って頷き、邦博は龍之介から顔を背ける様に横を向いた。

「そう……なんですか」分かっていたはずの答えにショックを受け、

龍之介が力無く言うと、

「あの……私、海神君に告白されて、それからあの後、邦博君に告白したの。海神君に告白されて、私も勇気を貰ったみたいで……」部長は小さな声で呟くように言った。

「よかった……安心しましたよ。邦博、いい奴ですから。俺、正直、安心しましたよ。好きな人がいるって……変な奴だったらどうしようって。でも邦博なら安心です」

龍之介は無理に笑顔を作りながら、寂しそうに部長に言った。

部長に振られた時は、心に穴が開いた様な、喪失感を味わった龍之介だったが、寄り添う二人の前で、自分の居場所を失った龍之介は、妙な孤独感に襲われた。

「龍之介、僕……」邦博が思いつめた表情で何か言おうとした時、部長が邦博のお尻を、龍之介には分からない様に思いつきり抓った。「!……」邦博は痛みに驚き、口を噤んだ。

龍之介がそんな邦博を不審そうに見ていると、

「主！誰か来る！気を付けて！」と、白菊が叫んだ。

白菊の叫び声に、龍之介は急いで白菊の所に駆け寄った。

薄暗い中、遠くの方にぼんやりと人影が浮かび、やがて僧侶の姿が現れた。

美貴は、鬼斬丸を強く握り締め、身構える。

僧侶は、龍之介達から少し離れた所で立ち止まり、薄笑みを浮かべながら

「鬼の血か……面白い。その体貰うか」と、言うと、体からどす黒い紫色の煙が湧き出した。

煙が体から抜け出すと、僧侶の顔から肉が溶ける様に崩れ落ち、そして全身の肉が溶け落ちながら白骨化して、その場に倒れた。

「きゃあ！」部長と司が、そのおぞましい光景に悲鳴を上げた。

美貴は鬼斬丸に気を溜め構える、白菊も全身を狐火で包み構え、「下がれ！」と、白菊が龍之介に怒鳴り、どす黒い紫色の煙へと飛び掛った。

その瞬間、煙から稲妻が走り、白菊を直撃し、

「ぎゃん！」白菊は地面へと転がった。

「白ちゃん！」倒れている白菊に美貴が駆け寄る。

そして、一人となった龍之介に向って煙が襲い掛かった。

「わあああ！」龍之介は、もがきながら煙を払い除けようとするが、煙に全身を包まれ、苦しそうにもがいている。

そして、煙の中で稲光の様な光が走り、龍之介は倒れ、ぐったりとして動かなくなった。

「先輩！」美貴は、さっきの事を思い出し、急に頭に血が上り、鬼斬丸をかざして龍之介へと駆け出した。

すると龍之介を包んでいる煙から、再び稲妻が放たれ、美貴の肩に当たり閃光を放った。

「ぎゃっ！」美貴は短い悲鳴を上げ、弾き飛ばされて地面に転がった。

煙は徐々に龍之介の体へと吸収される様に入って行き、全部が入りきった時、龍之介はゆっくりと立ち上がり、目を開くと、自分の体を眺めている。

白菊と美貴が、体を起こし苦しそうな表情で龍之介を見た。

「鬼の血……存外、期待はずれだったか……これも、長くは持つまい……」

龍之介の言葉の意味が良く理解出来なかったが、美貴は直感で、目の前にいる龍之介が、明らかに別の意思に支配されている事を感じた。

何が起きているのか分からずに、翔子が近付こうとした時、

「来ないで！皆、隠れて！」美貴が気付き、皆に向かって叫んだ。

美貴の言葉に翔子は足を止め、部長達と共に大木の陰に隠れた。

「白ちゃん大丈夫？」

「何とか……」美貴の言葉に、苦しそうに立ち上がりながら白菊は答えた。

「白ちゃん、憑いて！」美貴がそう言うと、白菊が美貴の脇に付き、

「主……大丈夫か？憑いても」と、心配そうに尋ねた。

「分からない……でも……」美貴は白菊の心配が分かっていた。

「鎧武者との戦いで、随分と力を使った後では……」

「そうだね……」

「確かに、滅火に刺激されて体が急激に変化し、強力な気が使えたからと言って……それは、出口が大きくなった様な物で、決して主の能力が上がった訳では無いから」

「うん、分ってる……修練によって得られる気の力と、成長によって使える気の力とは根本的に違うものね……」

美貴は、このまま白菊を憑けて、何処まで力が見えるのか分からずに不安だった。

美貴は警戒しながら、白菊に寄り添うように立ち上がった。

「ふっ、お主も鬼の血を引く者か……こやつ等よりは、幾許か、いくばくしか……」

龍之介が、美貴を舐める様な視線で見詰め、白骨化した僧侶の手から錫杖を拾い上げた。

「何者だ……」白菊が、美貴を庇う様に一歩前に出て龍之介に聞くと、

「名乗る必要があるのかね？」すかした笑みを浮かべながら龍之介が答えた。

「わ、”私”の先輩に、勝手に取り憑いて、えらそうに言うな！」美貴は、龍之介の態度に腹を立てて、思わず口走ってしまった。

「それは、したり……お嬢ちゃんの物とは知らなんだ」

「先輩をどうするつもりよ」

「知る必要があるのかね？」

その、すかした言い方に美貴は益々腹を立てて、

「勝手に先輩に取り憑いて！説明も無じゃ、無礼でしょ！」と、拳を振り上げ叫んだ。

「おおっ、これは、ひれいつかまつ非礼仕った……まあ、良かろう、冥土の土産と言う奴じゃな……」

「どう言う意味じゃ……」白菊は、牙を剥き出し警戒した。

「御主等は、あれを知った……故に、消えてもらう……で、如何かな？」

「何じゃと……あれとは、滅火の事か？」白菊が、崖下の滅火の方角を一瞬見て言った。

「滅火……なるほど、御主等はそう呼んでおるのか」龍之介も崖下の滅火の方を向いて、

「此処まで封印を弱めるのに、些か時間が掛かり過ぎた……これ以上の手間も掛けたくない故……御主らの口を封じる為に、此処まで呼び寄せた」と、静かに言った。

「何？ 貴様が……」目の前にいる者の力の強さを知り、白菊の不安は広がった。

「では、ムカデの化身も、鎧武者も貴様の差し金か」

「存外、役に立なんだがな……所詮は、下賤な虫と怨霊か」

「怨霊……あの鎧武者が怨霊……」美貴は鎧武者を思い出して言った。

「この辺りを漂っておる者を集めての。まあ、心持つ者は我糧わがかてとする故、殺すなどは厳命しておいたが……」美貴は龍之介の話を聞いて、未だに結界が解けない理由が理解出来た。

この目の前にいる奴がラスボスなんだと。

「白狐には消えて貰うとして……この体も長くは持たんでの……」と、龍之介は美貴を見た。

美貴は訳が分からない様子だが、白菊は体を低くして構えている。

「お嬢ちゃんの体を頂くか……」と、言う龍之介に睨まれ、美貴はビクッと身を引き、

「なっ、何いい！ 体って、いつ、嫌よ！ 先輩にあげるって決めてるんだからあ！」と、美貴は叫んでから『あれっ？ この場合は、相手は一応、先輩だけど』と、下らない勘違いに悩んだ。

「主……下がって……」白菊が、ずいっと美貴の前で立ちほだかり身構える。

「……どけ……邪魔だ、子狐……」と言って、龍之介が白菊を睨みつけた時、
「ぎゃああん！」と、白菊は何か弾かれた様にその場で跳ね上がり倒れた。

「白ちゃん！」何があったのか分からないまま、美貴は白菊に抱き付いた。

今の事で、目の前の敵が鎧武者とは桁違いの強さだと言う事を理解し、美貴は恐怖した。

「主、気を付けて……あいつ……」白菊は、苦しそうに体を小刻みに震わせている。

「ほう……あれで消し飛ばなんだか……さすがは白狐、格が違うか……」

薄笑みを浮かべて二人を見ている龍之介に、美貴は底知れぬ恐怖を感じた。

「されど、所詮、我に逆らう等、無駄じゃ。御主等の力は先だって拝見させて貰ったでな」

「それって……もしかして、カラス達を操ったのは……」

「わしの影じゃ、態と子狐を放って後を追った。ふっ、楽しませてくれる、まさか御主等如きが、あの様な大技を使い逃げようとは。

はははは、さすがわ白狐じゃのう」

「じゃあ、私を探すために白ちゃんを態と逃がしたと言うの……」「如何にも」

「だったら、私だけを狙えば良いでしょ！何で先輩達を巻き込んだのよ！」

「ははは、無茶を言わんでくれ。これだけ離れていれば、如何にわしとて、お嬢ちゃんだけを引き寄せる事は出来んでな……まあ、物のついでじゃ」

「な、なんですって……」龍之介の憎憎しい言い方に、美貴の頭に血が上った。

更に、白菊に酷い事をしたと言う怒りも重なって、鬼の血が美貴

に？戦え？と煽る。

龍之介は薄笑みを浮かべ、美貴に近付きながら

「では、その体頂くぞ」と、右手を差し出した。

美貴は恐怖と共に、体が熱くなって来る事を感じながら、龍之介が言っていた？殺すな？と鎧武者に命じていた事を思い出し、生きていないと不都合なんだと思い、

「この体が欲しくば、くれてやる！ただし、屍である事を覚悟しろ！と、とっさに鬼斬丸を自分の喉下に押し当て立ち上がった。

「……………」龍之介の足が止まり、薄笑みは消え美貴を睨んでいる。「勇ましきかな。されど、出来るのか？お嬢ちゃんに」と、言いながら龍之介が一步出た時、

「試して見るか！」と、美貴は脅しでは無いぞと、更に鬼斬丸を強く押し当てた。

「流石は、鬼の血を引き継ぐ者……荒ぶるが如く、容易には屈せぬか……」龍之介は再び立ち止まり、薄笑みを浮かべて美貴を見ている。

「あれをどうする気よ……」

「答える必要が……」

「五月蠅い！答えろ！」

「……あれを、知っているの难道？」

「私達は、滅火と呼んでいる……この世を滅ぼす物だぞ！分っているのか！」

「……滅火か……そうだな、承知しておるよ」

「なら、滅火をどうするつもりよ！」

「あれを、滅びる為以外に、どう使うと言うのだね……愚問だな」

「馬鹿な……滅びたいの？」美貴は予想外の答えに驚き、啞然として鬼斬丸を喉から離れた。

「如何にも……」龍之介は、凍り付いた様な冷たい目で美貴を睨んだ。

「善き悪しきは、人により、時勢により移ろう物。必然として善悪

の間尺が代わるは致し方無いが……進んで、滅びを選ぶ愚か者は居らぬぞ」

「白ちゃん……」

何時の間にか立ち上がった白菊が、再び美貴を庇うように前に出た。

「滅びを選ぶ事が、何故、愚かな事だと言えるのだ」

「長きに渡って築き上げて来た物を、無へと化するのだぞ……愚かでは無いのか？」

「それは人の都合であろう……些細な事だ」

「滅びる事が些細だと……では、貴様は何を大儀と掲げ善とする？」

「そも、善悪たるや、何ぞや……人の作りし物であろう……この世に在るは、人だけでは無い。善悪の仕分けなど、全ては人の欲に絡むものではないか」

「確かに、この世に居るは、人ばかりでは無い。しかし、滅火は全ての生き物を滅ぼしてしまうのだぞ。それが悪で無くてなんとする」
白菊と龍之介の問答を、美貴は必死で理解しようとしているが、よく分からないでいた。

「そうでは無い……善悪等に関らず、星が滅びを望んでいるとしたら……」

「馬鹿な！ その様な事が有ろうはずが無かろう！」

「相容れぬ事は承知。されど、そうじゃのう……先程のお主の問いに答えるなら、我らは創生が大儀、滅びるを持って善とする、とても申そうか……滅びの後に創生がある」

「全てが滅んでは、誰が創生させると言うのじゃ」

「それは、私の預かり知らぬ事、我は、只、消え去るのみ」最後に龍之介が微笑むのを見て、

「馬鹿な……」白菊は、龍之介の表情に迷いが無い事に絶望を感じた。

「よいか、この世に流るる気と言うものは、星の息吹である事を、その星の息吹が宇宙を作っている事を……そう、お主等や生ある者

……この世の全てを星が生み出したと言う道理を心得て居るな……」
淡々と話す龍之介に、美貴は何も出来ずに黙って聞いている。

「星の息吹に善悪は無い……されど、無知な人はその力に恐れ、救いを求める為に神を作り出し、善悪を仕分けした。全ての神と、その教えは、元をたどれば皆同じ様なもの……」

「今、御座^{おわ}す神や仏まで否定するのか？」白菊は、龍之介に対し身を構え聞いた。

「大いなる意思は否定せぬ。が、愚かなるは、人によって作られた教えじゃ。その時代の権力者により、人心を掌握し支配するに都合よく変えられ、利用されて来ただけの事……欲を捨てよだと……笑止！所詮は、極楽を求めるも、善行を重ねるも、悟りを求めるも、全てが欲では無いか！欲で汚れた業を背負い、欲に溺れる者が良き者か！」

「されど！……」反論しかけた白菊に、龍之介は掌を差し出し制止し、

「滅火とは、誰ぞが作りしものか？……否！^{あまた}数多の気同様、滅火も星の息吹では無いのか！」と、白菊を睨み付けながら続けた。

「……」美貴は、龍之介の話が良く理解出来ずに苛々していた。
「滅火を押さえるは、宇宙の理^{ことわり}に反する事とは思わぬか？滅火を封じるは、所詮、人の欲ではないのか？」

どうやら、龍之介に憑いている者は、人間と言う存在を否定している事は何となく分かり、美貴は段々と腹が立って来た。

「恐竜の絶滅しかり、神話で語り継がる滅び……星は、新たな高みへと至る為に、幾度と無く、滅びを繰り返して来た事は事実であろう。人類の進化の過程において、埋まらぬ溝がそれじゃ……それを、所詮、人如きの欲で抑えるのは、傲慢とは思わぬか？滅び、創生する事は星の意思なのだ。しかるに……」

「ばっかじゃないのお！」突然、美貴の怒りが爆発した。

「あ、主？」美貴の突然の怒鳴り声に白菊は驚いた。

「さっきから聞いてりゃ、ごちゃごちゃと。欲の何処が悪いって言

うのよ！」

「いや、主、それは……」白菊は、勢い良く前に出ようとする美貴を、前足で止ようと体を起こした。

「白ちゃんは黙ってて。あれが欲しい、これがしたい、何て欲があるから、人は頑張れるんじゃない！ステキな彼氏が欲しいとか、美味しいケーキが食べたあいつとか、欲があるから、楽しく生きられるんじゃない！」美貴は更に前に出て、龍之介を指差し怒鳴り付けた。

「あ、主……」話の一部だけを理解して怒鳴る美貴を、白菊は困った表情をしながら、前足で美貴を押し戻そうとしている。

「ええっと……だから、欲が無かったら寂しいじゃない、前に進めないよ。欲があるから上を目指そうって思うんじゃないの！」美貴は、白菊の前足を払い退けながら演説を続ける。

「凡俗が……」龍之介は、美貴の演説する姿を、蔑んだ目で見ている。

「私だってね、先輩と仲良くなりたいうって、思ったからこそ、毎日シャンプーしてリンスして、お手入れだってやったのよ！勉強だって、馬鹿だと思われたくないから一生懸命やって」

「主……」白菊が龍之介を気にしながら、前足で更に美貴を押し戻そうとしていると、

「今日だって頑張って……」と、美貴が言いかけ、急に俯き黙ってしまった。

「主？……」急に静かになった美貴の顔を、不思議そうに覗き込んだ。

美貴は、今日振られた事を思い出してしまった。

まだ、チャンスはあると立ち直ったものの、振られたショックは大きかった。

白菊は大人しくなった美貴から、前足を下ろし、龍之介へと振向いた。

「相容れぬ事は分かった。人とは、強欲な者だ。それは、我も承知

しておる。満足すると言う事が無い……」静かに龍之介に語りかけると、

「その、強欲な者を庇うのか？」龍之介も静かに問いかけて来た。

「そうじゃの、人と言う者は善きに付け、悪しきに付け、欲と言うものに支配される。奉仕だと申しても同様じゃ。されど、欲というもの醜悪であるとは限るまい。願う心、思う心、心によって、欲は姿を変えるものじゃ。我は、先程見た……愛と言う力を……愛にて欲する力は、強く美しく、気高い力であつたぞ。我はその心を、人が持ち続けるのであれば守りたい。御主の言う様に、星の息吹の流るるままにと滅火を受け入れる事は、虚無じゃ。悟りを開いた釈迦でもあるまいに、生きとして生ける物が、到底受け入れられるものでは無いわ！」白菊は言い終わると、足を踏ん張り構える。

「で、あろうのう……故に、知る必要があるのかと、問うたのじゃ」「所詮、徒な押し問答か……」姿勢を低く牙を剥き出して白菊は構える。

「話しても分かるまいに……」龍之介は、冷ややかな目で白菊を見下ろす。

「お主は、いったい何者なのじゃ……」

「……さあ……気が付けば、我は自我を持って存在しておつた……滅びる事を目的にな……では、小娘の体は貰つたぞ」美貴は小娘に格下げされていた。

龍之介は、ゆっくりと向き直ると、美貴に向かって手をかざした。

「主、下がって……」白菊は美貴のスカートの裾を咥え、龍之介から離れる様に引っ張る。

「何？えっ、どうするの？」落ち込んでいた美貴が、はっと我に帰り白菊に聞いた。

「無理じゃ……残念じゃが、力が違い過ぎる……妾が時間を稼ぐから、其の間に……」と、白菊は諭すように言い、更に力を入れて美貴を引っ張ると、

「えっ？ちよつと、待って。逃げろって言うの？待ってよ！先輩を

助けなきゃ！絶対に助けるんだからあ！」美貴は、白菊に抵抗してスカートを引っ張り返した。

「……それは、無理です……」白菊は、美貴のスカートを放し、顔を曇らせた。

「えっ？無理……って……」白菊の表情に不安を感じた美貴は、恐る恐る聞き返した。

「悪しき者に憑かれた者は……」答えを洩る様に俯く白菊に、美貴の不安は更に深まった。

「な、何よ、何なのよ！先輩はどうなる訳？あのままなの？ねえ！どうなるのよ！」

「……何れは……心を喰らわれ、力を吸い尽くされて……」不安が焦りに変わり、白菊に食って掛かり問い質す美貴に、白菊は悔しそうな表情で、白骨化して倒れている僧侶を見た。

「……そんな……そんな……嫌よ、絶対に嫌よ」白骨化した僧侶を見て、美貴は絶望的な恐怖を感じ、龍之介が骸骨になる事が頭に浮かぶと、急に頭に血が上り怒りが爆発した。

「そんなの絶対に嫌よ！」美貴は叫ぶと鬼斬丸を構え、龍之介に飛び掛った。

「あっ！駄目！」白菊が美貴を追い越し、体を被せる様に美貴を庇った瞬間、

「ぎゃあん！」と、白菊は叫び声を上げ弾き飛ばされ、美貴と共に地面へと叩き付けられた。

「ぐっ……いやっ！白ちゃん！しっかりして！」美貴は白菊の下敷きになり、ぐったりとしている白菊を揺り動かしている。

「手間ばかり掛かるのう……」龍之介は、冷酷な目で二人を見ながら手を翳した。

怒りで我を忘れた美貴だが、龍之介の冷酷な目を見て我に帰り、今更ながら目の前の敵と自分では、力に雲泥の差がある事を改めて実感し、恐怖に震えた。

美貴は睨み付ける龍之介に恐怖と絶望を感じていると、

ズッドオオオオン！と、行き成り、少し離れた林の中で土煙が舞った。

「なに？……」突然の事に、美貴は土煙の方を見た。

「……」龍之介も、その異変を眉を顰めて見ている。

空を覆っている結界の一箇所に、穴が開いて外の光が揺らめく様に差し込んでいる。

何かが、結界を突き破り、地面に落下した様だ。

何が起こったのか分からずに、美貴が結界に開いた穴を見てみると、その穴はどす黒い紫色の粒子が、渦巻く様に塞がって行った。

すると、土煙の中から、青白い光が一筋、美貴の方へと飛んできて、龍之介へと炎弾を放った。

炎弾に気付き、龍之介は飛び退きその場を離れると、炎弾が着弾し炎を上げる。

「えっ？まさか……玉ちゃん？」美貴は、上空の光の中に、実体化した巫女姿の玉江を見付け呟いた。

其の後を、もう一筋の金色の光が、美貴の方へと真っ直ぐに飛んできた。

美貴は、子馬ほどある白菊の下敷きになりながら、体を引き出し上を見て、

「えっ？お父さん？将ちゃんも？何で此处に？」と、二人の姿に驚いた。

父親の信仁は槍の蒼天撃を持ち、龍の化身である将鬼丸の背中に掴まって飛んで来る。

近くまで来ると、美貴達に気付いたのか急にコースを変え、

「馬鹿野郎！何だよ！何で此处に居るんだよ！」と、着地して美貴に向かって怒鳴り付けた。

「私にも、分ないわよ！そんな事！」美貴も負けじと怒鳴り返す。
「分かんないってお前……お母さんから近付くなって言われただろう！」

「言われたけど、気が付いたら此处に居たのよ！」

「……まあ、良い……訳は後で聞く」美貴は、信仁に助けられながら白菊の下から這い出た。

上空から巫女の姿で、龍之介に炎弾を放ち続ける玉江を見て、
「駄目！玉ちゃん！先輩を攻撃しないで！」と、美貴が叫ぶと、玉江は其の声に気付き攻撃を止め、そのまま美貴の傍に着地した。

玉江の、乱れた白く長い髪の毛の合間から覗く、美しい顔の目の淵には、赤い隈取が浮き上がり、額にも赤い十字の文様が浮いていた。

「あつ、でも、お父さん。結界どうしたの？」

立ち上がりながら、美貴は不思議そうに信仁に聞いた。

「破る方法はあるよ。随分と時間がかかったがな……それより、無事か？なんとも無いか？怪我は無いか？」

勢いよく怒鳴った信仁だったが、美貴が立ち上がると、急におろおろと大きな体を小さく屈め、心配そうに美貴の体を見回しているのを、隣で将鬼丸が呆れた目で信仁を見ている。

「う、うん……私は大丈夫。だけど白ちゃんが、白ちゃんが……」

「白菊！しっかりしろ！」二人は白菊の脇にしゃがみ込んだ。

信仁の声に白菊が気付き、

「信仁殿か……面目ない……」と、薄目を開けてか細い声で言った。

「馬鹿……ありがとな。美貴を守ってくれて……お前、大狐になったのか？」

「行き掛かり上……」白菊は少し恥ずかしそうにしている。

「訳は後で聞く、ゆっくりしてな」白菊の頭をくしゃつと撫でて、信仁は立ち上がった。

「かたじけない……」白菊は、信仁の言葉に安心して微笑んだ。

「将鬼丸！憑け！」信仁が、将鬼丸に向かって叫んだ。

「おおっ！」将鬼丸は力強く返事し、金色の光を放ちながら霊体となり信仁に憑いた。

「美貴！此処を動くなよ！」全身から金色の光を放ちながら信仁が叫んだ。

「うん……あつ、お父さん！先輩、助けてよ！怪我させたら駄目だからね！玉ちゃんも、お願い、先輩を助けて！」

「先輩って？……あいつか……」信仁は、玉江の攻撃の後、美貴達から二十m程離れた所に立っている龍之介を睨んだ。

「うん」美貴は不安な表情で頷いた。

「……ちっ、憑かれてるのか……」信仁は、険しい表情で龍之介を見詰めている。

「お父さん！」信仁の表情に更に不安が膨らみ、美貴は我慢出来ずに叫んだ。

「……何とか、出来れば良いんだが……お前は、あいつが何者か知らんだろけど……」

「えっ？……お父さん知ってるの？」

「いや、俺も良くは知らんが、厄介な奴だって事は知ってるよ」

「厄介な、って……」

「とにかく、此処を動くな！」信仁はそう言い残し、龍之介へと駆け出した。

信仁の後を追う様に、玉江も龍之介へと向った。

激しい気の打ち合いで、幾つもの土煙が舞い上がる中、美貴は龍之介が心配だったが、信仁や玉江も心配で、現状では、どちらを応援して良いのやら分らず混乱していた。

「おい、大丈夫か？……あの人は？」邦博達が、美貴の傍が安全になったと思いやって来た。

「本田先輩。大丈夫です……私の父です」美貴は、戦っている信仁を見て答えた。

「えっ？あつ、そうか……で、あの、モデルみたいな美人の巫女さんは……」照れる様に聞く邦博を、そっちか！と言う顔で皆は邦博見て、部長は邦博のお尻を捻った。

「近江の玉江、お母さんに憑いていた、白狐です」

「でも、あれで龍之介、大丈夫なのか？それに、何で龍之介の奴、おかしくなったんだ？」邦博は、お尻の痛さに耐えながら、心配そ

うに聞いた。

「……分かりません……」美貴は、今にも泣きそうな顔で呟くように言った。

「分からないって……お前……」皆が心配そうに美貴を見ている。

「何かに取り憑かれて、おかしくなったみたいで……それで……もう、駄目かも知れないって……うっ、うっ、白ちゃんが……ひっく、ひっく」

「美貴ちゃん……」泣き出してしまった美貴を翔子が優しく抱いて、美貴の頭を撫でている。

爆発が一段落して、玉江が美貴達の傍に降りて来た。信仁も美貴達の前で蒼天撃を構えている。龍之介は二十mぐらい前で美貴達を見ている。

「少しは、相手に成る様だな……」龍之介は薄笑みを浮かべている。「やかましい！お前の寄わらを傷付けない様に、手加減してやっているんだよ！ありがたく思え！」信仁は叫びながら、大きく蒼天撃を頭の上で振り回し、ふたたび構えなおした。

「信仁！駄目じゃ！これ以上加減すれば、我らが危うい。あ奴、神通高大ぞ！」

「しょうがねえか……」将鬼丸の言葉に信仁の顔が険しくなる。

「だめえ！先輩を助けてよ！」美貴は、信仁の言葉を聞いて叫びながら信仁に駆け寄り、

「お願い、先輩を助けてよ！」信仁の腕を強く掴んで訴えた。

「美貴殿、無理じゃ……悪しき者に憑かれた者がどうなるか、分かるであろう」

泣いて縋^{すが}る美貴に、言葉の無い信仁に代わって、玉江が冷たく言い放った。

「嫌よ！玉ちゃん！助けてよ！大切な人なのよ！私の大切な人なのよ！」

泣き叫びながら玉江に言った言葉を信仁が聞いて、

「なに！美貴！どう言う意味だ！今のは！」と、行き成り怒り出し

た。

「私の大好きな先輩だって事よ！」何を言っているのだと言う様に、美貴も怒鳴り返す。

「おい！俺は聞いてないぞ！そんな事！おい！そう言う事はだな、ちゃんと、親にも言っただな……」と、場違いな親馬鹿を見せる信仁であった。

「信仁殿！場所をわきまえよ！」玉江が怖い顔をして信仁を怒鳴り付けると、

「あっ、でも……くそっ……」睨み付ける玉江の迫力に信仁は負けた。

「で、どう言う関係なんだ……」だが、どうしても気になるので、美貴に囁く様に尋ると、

「どう言う意味よ……」と、美貴は信仁を睨みながらぼそりと言った。

「……つまり、その……何処まで、行ってんのか……」言い難そうに信仁が聞くと、

「そんな事！どうだって良いでしょ！」と、美貴は真っ赤になって怒鳴り、

「よかねええよ！親に言えない様な関係なのか！」信仁も拳を握り怒鳴り返す……そこへ、

「二人とも！何をやって居おる！」玉江が二人を睨み付けながら、更に大声で怒鳴った。

怒鳴りあっていた二人は、玉江の迫力で静止した。

「全く……美貴殿、立ち入った事を聞くが、あの者も美貴殿を懸想しておるのか？」

「けそうって？」美貴に近付き、尋ねる玉江の言葉の意味が分からず、美貴は聞きなおした。

「つまり……」玉江は眉間に寄せたしわに指を当てて、困った様に考えている。

「愛しているのかって聞いてんだよ！」横から信仁が、面白く無さ

そうに言った。

「えっ、それは……」そう言われて美貴は言葉に詰った。
可愛いとは言ってくれた。しかし龍之介が好きなのは部長だ。

「どうした……内輪揉めは済んだか？」龍之介が、ゆっくりと美貴達に近付いてくる。

「じゃかまっしやい！家族の会話に口を挟むな！いてまうど、ぼけ！」信仁が龍之介を睨み、拳を高く振り上げ怒鳴り付ける。振り上げられた拳は、中指がファツキュー！と立っていた。

既に信仁は取り憑いている者より、龍之介自信を敵視していた……困ったもんだ……

「ふふふ、こ奴に憑いて、こ奴の思いがよう分かるわ……己の慰みの為に小娘を利用しようとしている事がな」にやける様に龍之介が言うと、

「何だと……」信仁は殺気を孕んだ目で龍之介を睨みつけた。

「己の傷心を癒したいが為に、その小娘に取り入ろうとしているのだよ」

「美貴殿、惑わされるな……」玉江は、美貴に耳打ちするように言った。

「うん、大丈夫だもん、知ってるもん……先輩、ちゃんと行ってくれたもん。部長が好きだって」美貴は、今にも大声を上げて泣き出しそうな自分を、歯を食いしばって我慢していたが、

「そうよ！言ってくれたもん！それでも先輩の事好きだもん！可愛いつて言ってくれたもん！それだけでも嬉しかったもん！部長の代わりでも良いもん！私で、先輩を慰める事が出来るんならうれしいもん！」美貴は、我慢しきれずに泣きながら叫んだ。

そんな美貴の姿を、玉江は黙って見守っていた。自分にも覚えのある一途な思い。玉江は泣き叫ぶ美貴を見て、遠い昔を思い出していた。

「おんどれ……よくも家の娘を泣かしてくれたのお。許さんど外道、覚悟せえや……」殺気を孕んだ目で龍之介を睨みつけ、信仁は正に、

可愛い娘に近付く害虫退治の気分であった。

「くくくく、茶番だな……」龍之介が信仁を、馬鹿にしたような目で見て笑うと、

「おお、ええ度胸やないけ、じきに、閻魔様に会わしたるさかい……其処を動くな！」信仁は龍之介の態度に激怒し、蒼天撃を構えた……娘の事となると直ぐに地が出るパパであった。

「ふん、愚かな……良からう。そろそろ集まって来た頃だ……」

「なんだと……」不気味に笑う龍之介の言葉の意味が分からず、信仁は眉を顰める。

龍之介が、錫杖を高く翳すと、谷の下から無数の化物達が姿を現した。

そして、地を這うムカデや蛇の化物、空を飛ぶ蜂や蛾の化物等、数百匹の化物が龍之介の背後に集まった。

「貴様……滅火の封印を解きやがったな……」

群がる化物達に怯む事無く、信仁は龍之介を睨み付ける。

「まだ、完全では無いがな……こやつら相手に、何処までやれるか見せて貰おうか……」

龍之介が、不気味な笑いを浮かべながら錫杖を振り下ろすと、化物達が一斉に信仁に向って襲いかかった。

向って来る化物を見て、信仁は蒼天撃を頭上高くに振り上げ、「舐めるな！」と、叫ぶと同時に蒼天撃に氣を送り、金色に輝く蒼天撃を袈裟懸けに振り下ろした。

振り下ろされた蒼天撃から、目も眩む様な閃光と共に光の玉が放たれ、そして大きく膨らんだかと思うと、光は無数の光の矢と成り、散弾の様に広がって化物達へと飛んで行った。

光の矢は、群がり向って来る化物達を次々に貫き飛んで行く。

そして、貫かれた化物達は、黒い煙となって消えて行った。

「やるな……」にやけながら龍之介は、再び錫杖を振り下ろした。

すると、信仁の攻撃で散開した化物達が再び集まり、信仁へと襲い掛かった。

「おおおおお……」それを見て、信仁は蒼天撃を水平に構え氣を送る。

「どおりやあああ！」輝いた蒼天撃を氣合と共に水平に振り払うと、大音響を轟かせて稲妻の様な光が、無数に広がり化物達へと飛んで行った。

雷は、次々と化物達を貫き、化物達は煙となって消えて行った。

それを見て、龍之介の顔からにやけた笑いが消え、信仁を睨み付ける。

龍之介の顔色が変わったの見て、

「どうした……まだまだ、これからだろ……」と、信仁が龍之介を睨みながら挑発すると、

「思い上がるな……」と、龍之介は化物達に囲まれながら、錫杖を信仁へと突き出し構える。

美貴は、始めて見る信仁の戦う姿に感動していた……昼間のパパは、ちよつと違う。

日頃家では、百合の尻に敷かれている様な情け無い信仁が、無数の化物相手に一步も引かずに戦っている姿を見て、美貴は素直に？かっこいい？と思った……昼間のパパは男だぜ！

信仁は、蒼天撃を大きく頭上で振り回し、構え直すと、
「覚悟しやがれ！」と、叫んで龍之介へと飛び掛った。

それを見て龍之介は、後ろに飛び退きながら、錫杖を振り下ろすと、信仁は化物達に囲まれ、その中で信仁は、次々と化物を蒼天撃で薙ぎ払って行った。

「お父さん！」美貴は、そんな信仁が心配になり思わず声を上げた。
「大丈夫じゃ、心得ておられる」

「で、でも……」玉江の言葉を聞いて、美貴は不安そうに玉江へと振向いた。

「信仁殿なら懸念するに及ぶまい……それより、あの者を助けられるやも知れぬ」

「ほんと！」玉江の言葉に美貴は、ぱつと笑顔を咲かせ、玉江を見

た。

「お玉殿、まさか！だめじゃ！そんな事したら……」

「黙っておれ……子狐……」白菊が叫ぶのを遮り、玉江が睨み付けた。

「私の力であれば出来るかも知れぬ……我が美貴殿に憑いてすれば……」

「ほんと！じゃあ、お願い憑いて！」美貴は縋るように玉江に言う
と、

「出来ぬ……私は、美貴殿に縛られては居らぬ」と、玉江は冷たく
言い放った。

「そんな！……白ちゃんは憑いてくれてるのに！」美貴は必死で訴
えた。

「斯様な子狐と同じに見てもらっては困る……良いか美貴殿、私は
齡千の大狐じゃ。たかが、百年も生きられぬ人如きを、何故に、主
と呼ばねば成らぬ」冷たく言い放つ玉江に、

「それは……」美貴は言葉無く黙ってしまった。

「我に主と呼ばせたくば、縛らねば成らぬ」腕を組み見下ろし、上
から目線で玉江が言うのと、

「どうやって……」身を縮め上目使いで、下から目線で美貴が問い
掛けた。

「方法は人それぞれじゃが……まあ、呪詛まで掛ける必要は無いが、
何より、我に美貴殿が上位の存在である事を認めさせねばならぬ」
プライドの高い玉江が諭す様に説明すると、

「じょういって？」と、美貴は意味が分らずにボケをかました。

「……」再び、玉江は眉間に寄せたしわに指を当てて、困った
様に考え、

「つまり、我より強いとか、尊敬出来るとか……」と、言葉を選び
ながら玉江が説明すると、

「そんなの、無理よ！玉ちゃんに勝つなんて……」美貴は、その条
件に絶望した。

ロケットエンジンに、やっと普通乗用車に昇格した自分が勝てる訳など無かった。

「そうとも限らんぞ……じゃんけんで……どうじゃ……」玉江が少し照れながら言うのと、

「はあ？」と、美貴は玉江の口から出た言葉が、直ぐには理解出来ずに聞きなおした。

「勝負には変わりなかる……」玉江は照れているのか、ぷいっと美貴から顔を背けた。

「……素直じゃないんだから……」二人の会話を聞いていた白菊が、ぼそりと言うと、

「だ、黙れ！子狐！」玉江は、恥かしそうに白菊を怒鳴りつけた。

「それでも、勝てる確立は五分五分じゃぞ、いかがする？」玉江の言い訳の様な理屈に、

「……分かった……やる！」美貴は意を決して同意した。

「いざ……」と、お互いが真剣な顔で向かい合う。そして美貴が気合を入れて、

「よし！最初はぐう！じゃんけん、ぽん！」と叫び、手を振り出すと、

「主……」と言って、ぐうで負けた玉江は、美貴の前に跪いた。

「子狐、受け取れ」飛び上がり喜ぶ美貴の横で玉江は立ち上がり、気を手に溜めている。

「うっ……」玉江から緩やかに放たれた気が、白菊に吸収されるように入って行く。

「預けておく……分かるな……」玉江は微笑みながら白菊に言うのと、

「……承知……」と言いながら、白菊は起き上がった。

「大丈夫なの？」美貴が心配そうに白菊に尋ねると、

「気を分けてやりました……子狐にはあれで十分でしょう」横から玉枝が美貴に説明した。

玉江の言った意味は理解出来たが、美貴は、白菊の顔が思い悩む様に暗い事が心配だった。

「主、最初に申して置きますが、必ずしも上手く行くとは言えませぬぞ」

「……どう言う事？」真剣な目で話す玉枝の言葉に美貴の不安は膨らんだ。

「あの者に憑かれてから、どれぐらいの時が経おりますか？」美貴は玉枝に言われてはっとした。正体の分からない者に憑かれる前にも白菊が憑いている。体力の衰えは白菊に直してもらえるが、削れた魂は直す事は出来ず、自然と回復するのを待つしかない。

そして限界を超えて魂が削られれば、それは死を意味している。龍之介の体力は白菊の術で回復はしているものの、魂の具合までは分からない。

「我らが憑く事と、奴が憑いている事は根本的に違います。我らが憑いても主には自分の意思が残っています。それだけ浅いのです。ですから我らは補助的に力を介助する事は出来ても、主は我らの力を直接使えません。それ故に、主の気の消耗は激しいのですが……」玉江の説明を理解しようと真剣な表情で美貴は聞いている。

「宿主の意識を押しつぶし、奴ほど深く憑けば、憑いた者が直接、力を使うため、宿主の気の消耗は少なく澄みます」

「あ、でも、自分の力を使っているなら、メリットないじゃない。何で憑くのよ？あいつは何のために先輩に憑いたの？」

「詳しくは存じませんが、奴らその物では、長くは存在出来ないと思います。奴らは人に憑き、人の心を喰らい、存在を維持しているのです。だから、時間が経てばそれだけ、元の宿主の意思は押し潰され、通常、宿主が死にでもない限り、離れる事はありません」

「そんな……」玉江の説明に、美貴は愕然とした。

「心の奥まで入り込んでいる者を、無理に引き剥がせば、宿主の精神に大きな負担をかける事になり、良くて廃人、悪くすれば死にます」玉江のネガティブな説明に、希望を見出せない美貴は、貧血で倒れそうな気分で黙って聞いている。

「そこで主がああ男に心で呼びかけて下さい。妾は狐火の浄化の炎

で奴を追い出します。あの男が主の呼びかけに気付き意識が戻れば、奴は憑いている事が出来なくなり、妾の炎で追^やい遣^やられ出て行きます」

「心で呼びかけるって……」美貴は、僅かな希望の方法が理解出来ずに不安だった。

「入れば分かります。難しい事では有りませんから……そして、あの男の心に主が居ればそれに気付きます。主の存在が強ければ強いほど確実に気付くでしょう」沈む美貴を元氣付けるためか、玉江は少し微笑みながら言ったが、美貴は自信無さげに頷くだけだった。

確かに自分は、後輩として龍之介の中に存在している……だけど……

自分の心の中に、大きく憧れとして存在している龍之介にとって自分は、どれくらいの存在なのか分からずに美貴は不安だった。

「それと、主、よく聞いて下さい。主はまだ未熟です。長くは憑けません」

「わかってる……」力無く美貴は頷く。

「ですから、信仁殿に攻めてもらい、隙を作ってもらいます。そして、奴の隙を見て何処でも良いですから、あ奴めの体を掴んで下さい。近付かなければ精神は繋げません。そして、絶対に放してはいけません」

「それで……先輩と話せるの？」と不安そうに尋ねる美貴に、

「はい……」と玉江は優しく微笑んで答えた。

「でも話すって何を話せばいいの……」

「素直な想いを……思い人に対する気持ちを語りかけて下さい」微笑みながら美貴に説明している玉江は、さっき泣きながら、自分の思いを叫んでいた美貴を思い出していた。

「素直な想い……分かった……」美貴は、自信無さそうに返事をした。

「憑きます」と言って、玉江は霊体になり、炎を上げ美貴の背中に回りこむ。

「お願い」美貴に入って来る玉江は、明らかに白菊とは格段の差がある事が直ぐに分かった。

美貴は凄まじい力を感じ、苦しいぐらいに体が熱くなり、立っているのがやっとだった。

苦しみが通り過ぎると、今までに無い力を感じ、美貴は少し自信が沸いて来た。

「行くよ！」

「承知」

叫ぶと同時に飛び出すと、軽く二十mぐらい飛び上がり、美貴はその力に驚いた。

「わっわっわっ……飛び過ぎ……何？この力？」と、美貴は驚きながら、注意して力を使わなくてはと思った。

「お父さん！」美貴は一気に信仁の後ろに着地した。

「馬鹿！来るな！」信仁は美貴に気付き、叫びながら龍之介に大きな雷を放った。

化物達はすべて倒し、今、信仁は龍之介と一対一で戦っている。

信仁の攻撃を躲し、龍之介が離れたのを見て、美貴は信仁の所へと駆け寄った。

「大丈夫、玉ちゃんが憑いてくれてるの」

「何？玉江が？……まさか……」

「信仁殿、あの男から憑物を追い出す」

「何？あれをやろうってのか！お前それは……」信仁は玉江の言葉に驚き、愕然とした。

「承知している……助太刀頼む」静かに玉江が美貴の中から言うと、

「でも、お前……」信仁は不安そうに聞き返した。

「頼む、”我が主”のためにも……」

「お前って奴は……まだ、百合ちゃんの事……」信仁は玉江の気持ちがかかった。

命を共に懸けた戦友の、百合の大切な美貴を悲しませたくないと言う気持ちだ。

「任せたぞ……」

「分かった……」 玉江の気持ちを察した信仁は、一言だけ言って龍之介に向った。

全身に気を溜め金色の光に包まれ信仁は、龍之介の放つ雷の攻撃を躲しながら、蒼天撃から幾つもの気を放ち威嚇し、隙を見ては、右へ左へと瞬時に移動し間合いを詰めて行く。

美貴は、その凄まじい信仁の戦い振りを見て、再び感動して、

「凄い、お父さん、かっこいい……」と、思わず呟いてしまった……
：昼間のパパは光ってる。

「主、早く！後を追って！」

見惚れて居た美貴は、玉江の言葉にはっと気付き、慌てて信仁を追って走り出した。

信仁との気の打ち合いで、一瞬、龍之介が怯んだ隙に、信仁は蒼天撃を大きく振りかぶって、大型の気の塊を放った。

それは、龍之介のすぐ側に着弾し、龍之介は爆風で体を飛ばされ倒れ込めた。

「今だ！」と、美貴は、倒れ込んだ龍之介に一気に駆け寄り、飛び掛かって抱き付いた。

「何をする！うっ……」抱き付いた瞬間、美貴の額から稲光の様な光が龍之介の額へと飛び、龍之介は苦しそうに顔を歪めながら、美貴を引き剥がそうと立ち上がる。

美貴も頭に衝撃を感じながら、引き剥がそうとする龍之介から離れてたまるかと、強く腕に力を入れて抱き締める。

「主、行きます。放さないで！」玉江が叫ぶと、

「分かった！」美貴は、龍之介を放してたまるかと、更に腕に力を込める。

普段であれば、美貴にとって気絶物で嬉しい事なのだが、今はそんな余裕は無い。

そんな中、美貴は段々と意識がぼやけて行く様な気がした。

「主、想い人に語りかけて下さい」ぼやける意識の中で玉江が語り

かけて来た。

「でも……どうすれば良いの」美貴は、まだ具体的にどうすれば良いのか分からなかった。

「大丈夫です……素直な気持ちで」そんな、無責任な……と美貴は感じたが、とりあえず龍之介に話しかける事にした。

美貴が龍之介に意識を向けている時、玉江は渾身の狐火で龍之介を包み動きを止めていた。

美貴の背後から自分の霊体を分離して、もう一人の玉江が炎を上げている。

封じられている龍之介の精神に入っても、憑き者の精神までは支配出来ないため、玉江は美貴の中でサイコダイブさせる役と、外で美貴を守る役とに分かれている。

「はああああ！」玉枝の気合と共に、凄まじい炎は渦を巻いて二人を包み込んでいる。

「くっ……」狐火の結界に縛られ、動けない龍之介が苦悶の表情を浮かべる。

龍之介本人の意識の中に繋がっている美貴には、外での戦いは知る由もない。

龍之介の意識の中で美貴は、自分の肉体も感じず、視覚もなく、どうして良いのか良く分からないので、とりあえず呼んでみるかと、心の中で大声で叫んだ。

「先輩！海神先輩！いますかぁ？」美貴は、それが正しいのかどうか分からず不安だった。

しかし呼び続ける事しか思い付かない美貴は、ひたすら龍之介を呼び続けた。

「せんぱあーい！おーい！わたすみせんぱあーい！おーい！りゅうちゃああん！」

呼び続けているうちに、

「素直な想いをもって言ってたけど、これで良いのかな……」と、言っていた玉江の言葉を思い出し、美貴は益々不安になって来た。

「先輩が好きなのは、部長……私の声なんか届くの？ 私なんか……」
自分の存在なんて龍之介の中では無いに等しいのでは。

そんな思いが美貴を更に不安にさせ、

「お願い！先輩！答えてよ！お願い！私に気付いてよ！」と、張り裂けんばかりの思いを込めて叫んだ。

だが、何の変化も無く、

「駄目なの、先輩……私じゃだめなの……気付いてくれないの……」
と、美貴は落ち込んだ。

自分じゃ駄目なのは分っていた。だけど……だけど、諦め切れない自分が居る。根拠の無い虚しい期待をしている自分が居る。

儚い望みを捨て切れない美貴の心に、龍之介への思いが膨らんで来て、

「私ね、高校に入って、一人で寂しくて……そんな時、先輩優しくしてくれて。嬉しかったよ。先輩に出会えた事。本当に嬉しかったんだから。だから私も美術部に入って、それでね、ずっと好きで……何時も見えたよ、先輩の事。ずっと、ずっと見ていたのに、気付いてくれなくて……でも好きだよ、先輩の事。大好きだよ。かっこよくて、優しくて……あのね、先輩に手紙書いたんだよ。優しくしてくれたお礼……私の気持ち伝えて書いてんだけど、結局、好きですって書けなくて……伝えたいのに書けなくて……知って欲しいのに、勇気が無くて……へへへ、当然、怖くって渡せなくて……恥ずかしいけど、まだ鞆に入ってるんだよ。それでね、それでね……でも……でも……駄目だよ、先輩、部長の事好きなんだもん。しようがないよね。分ってるよ……でも、諦めきれない……諦めるなんて出来ないよ。港で、やっと好きだって言えて、先輩、私の事可愛いって言うてくれて……嬉しかった、嬉しかったよ、嘘でも、嬉しかったんだからあ！私、嬉しかったんだからあ！本当に、嬉しかったんだからあ！」万感の思いを込めて美貴が叫んだ。

深い深い泥沼の底……真っ暗な中、押し潰される様な重圧が息苦しい。

そんな感覚に縛られていた龍之介が、何か暖かいものに包まれて行くのを感じた。

「ああ……」暖かさを感じて居ると、泥沼から浮上していく様に、自分を押し潰している物が、徐々に軽くなって行った。

そして、心地良い浮遊感を感じていると、誰かの声が聞こえる。

「……振られた時、告白しなきゃ良かったなんて思ったけど、今はちゃんと伝えたいんです……振られたけど、もう一度伝えたいんです、私の気持ち。この思い、届けたいんです……だから、お願い、気付いて……私に気付いて……」

「……き……い……」

「あっ！」僅かに呻く様な声が聞こえ、そして、

「……鬼追なのか？」続けて、はっきりと龍之介の声が頭の中で響いた。

「先輩！」

「何処に居るんだ……」

「傍に居るよ……」

「……ああ、分かるよ……」

「……うん……」意識の中で出会った二人には、お互いの姿は見えないが、その存在をはっきりと感じる事は出来た。

「どうした？鬼追……どうなっているんだ……」何が起きているのか認識出来ない龍之介は、ただ夢の中での出来事のように感じている。

「ううん、なんでもないよ……大丈夫だよ」美貴は、龍之介が自分に気付いてくれた事を嬉しく思い、心が安らぎに満たされて行った。

「そうか……さっきな、なんか、今まで苦しかったのに急に、とても暖かくて……柔らかな物に包まれて……気付いたら、鬼追の声が聞こえて……」

「うん……」

「これ……夢なのか？……」

「そうだね……夢みたいだね……」

龍之介を近くに感じながら、美貴も暖かな物に包まれて行くのを

感じた。

「先輩……先輩の事、好きだよ。先輩と出会ってから、ずっと……」
その中で、美貴は何の拘りも無く、素直に自分の気持ちを伝える事が出来た。

「うん、ありがとう……」龍之介は心地良い浮遊感の中、近くに美貴の存在を感じながら、

「お前って、本当に可愛いな……」二人が溶け合って行く様に思えた。

二人が暖かな浮遊感に包まれた時、

「行くぞ！主！」突然、目を覚ます様な玉江の声が響いた。

美貴は、夢の様な感覚から引き戻されると、何か蠢く物を感じた。視覚の無い世界で、二つの蠢くものが、絡み合い殺気を放っている事を感じた。

「何……あれ？」と、今までとは打って変わって、氷の様な冷たい物を感じた時、バシッ！と再び美貴の頭の中に衝撃が走った。

「どおりやあああ！」

美貴が気が付くと、龍之介と抱き合い、玉江の狐火の中にいた。

玉江の気合と共に、炎が龍之介へと、強風に煽られる様に流れる。

「えっ！」龍之介が気付き、自分が炎の中にいる事に驚いている時、龍之介の体から染み出すように、青白い炎と、どす黒い紫の煙が、絡み合いながら出て来た。

青白い炎は煙から離れると玉江と同化し、煙が直径1mぐらいの塊となって飛び去ろうとした時、

「このがきやああ！」信仁が抱き合っている二人に向って、鬼の様な形相で駆け寄って来た。

「いっ？」龍之介は現状を理解出来ず、迫る信仁の迫力にたじろいだ。

龍之介は、咄嗟に身をかわそうとしたが、美貴が顔を摺り寄せ、鬼の様な力で強く抱きしめているために逃げられない。美貴ちゃんは幸せタイム真っ最中で周りを見ていません。

信仁が、龍之介の背中に蒼天撃を振り下ろし、龍之介が『殺される！』と、死の覚悟を決めた時、初めて標的は自分ではない事を知った。

「えっ？」蒼天撃は、龍之介の背中で空を切り、信仁が、逃げて行く煙を追いかける。

「てえええい！」どす黒い紫の煙が、上空へと逃げながら雷を放って攻撃して来るのを、信仁は蒼天撃で躲し、

「追うぞ、将鬼丸！装龍術だ！」空中の煙を睨みながら叫び、蒼天撃を地面に突き立てた。

「おおっ！」と、将鬼丸が答えると、光に包まれている信仁から更に激しく閃光が走った。

「はああああ……」信仁が両手で蒼天撃を地に立て、気を貯め、信仁を包み込んで行く。

「どおりやああああ！」気合と共に信仁は飛び上がると、勢いで気が長く後ろに流れる。

龍之介に抱き付いてた美貴は、その凄まじい気の気配に顔を上げ、信仁の方を見た。

装龍術、美貴は初めて見た。信仁が、龍の様に長く伸びた気に包まれ空を飛んでいる姿を。

空中で、信仁と煙が絡みつく様に戦っている。

戦いの余波で、戦っている空間が徐々にどす黒い紫の雲に覆われて、信仁達の姿が見えなくなって来た。

すっかり雲で覆われて、何をしているのかは見えないが、雲の中で幾つもの稲妻や閃光が光を放っている。

一瞬、凄まじい光が雲を突き抜けたかと思うと、信仁と煙が雲の中から飛び出し、二つに別れた。

龍が天空で体をうねらせ、ループを描き煙を追い詰める。

信仁が蒼天撃に気を送る。空気を震わせ蒼天撃が閃光を放つ。

「せいやあああ！」信仁が気合と共に蒼天撃で斬り付けると、煙は二つに引き裂かれた。

引き裂かれた煙は二方向へ別れ、飛び去りながら粒子を散らし消えて無くなり、同時に周りが明るくなった。

結界が解け、全てが終わった事を美貴は知った。

その時美貴は、憑いていたはずの玉江の気配が無い事にやっと気が付き、

「あれ？玉ちゃん、玉ちゃん、何処？」まだ抱き付いていた龍之介から離れ、きよろきよろと辺りを見回していると、

「主……よかったな……想い人を救えて……」と、か細い声が下から聞こえた。

「えっ？玉ちゃん？……いやっ！玉ちゃん！どうしたの！体が……」美貴の足元で、今にも消えそうな弱々しい狐火が、人が倒れている様な形で燃えていた。

玉江は霊力を使い過ぎ、姿を維持出来ないでいた。

「全く……お玉殿ともあろう方が、一か八かの勝負をするとは……」と、少女の姿に戻った白菊が、面倒臭そうに頭をかきながら近付いて来た。

「五月蠅い！御託は良い！預けた物を返してもらおうか。御主にしか出来んからな……」

「承知！」弱弱しく怒鳴る玉江に、白菊は少し自慢げに返事をした。たっぷり十分位の時間をかけて白菊が玉江に癒しの術をかけると、玉江の姿は徐々にはっきりと、元の姿を取り戻した。

「良かった！玉ちゃん！」美貴は喜び、立ち上がった玉江に抱き付こうとしたが、霊体の玉江を通り過ぎてしまい、慌てて振り返り照れ笑いをしている。

「主……」美貴の喜ぶ姿を見て、玉江は少し照れていた。

玉江は、そんな美貴の姿に、出会った頃の百合の姿を重ね、昔を懐かしんだ。

「全く無茶よのう、お玉殿は。主に憑きながら、あれだけの霊力を放出するなんて、正に身を削る様なものじゃ……下手したら消えてしまおうと言うに……」白菊が呆れる様に言うと、

「えっ？ そうなの？」と美貴は、白菊と玉江を交互に見ながら驚いている。

「あのね、主にあんな力あるの？」白菊の言葉に、美貴はプルプルと首を横に振っている。

そんな二人を見て、

「白菊！」と、玉江は恥かしそうに、白菊を怒鳴った。

「だって、そうではないか！ 主を守りながら……奴を追い出すために、どれだけの霊力が要るんじゃない！ 現に消えかかってたくせに……」と、白菊が呆れる様に言うと、

「えええい！ 黙れ！ 子狐！」と、玉江は、又、恥かしそうに白菊を怒鳴った。

「ひっどおおい！ もう、大狐になれるんですからね！ 子供じゃないわい！」

「ふん、大狐と言えど、まだ毛も生え揃っておらん様な者が何ぬかす」

白菊の力いっぱい反論を、玉江は冷ややかな目で一笑に付すと、「玉ちゃんそれは失礼よ！ 毛が生え揃って無いって！」美貴が自分の事のように抗議した。

「はああ？」訝しげに見る玉江に、美貴は慌てて口を噤んだ。

「霊力が、かなり消耗する事は分かっておりまして……それ故、事前に白菊に気を預けておきました」

「預けるって？」

「白菊は気を霊力に変え、やり取りが出来ますゆえ……」と、玉江が話していると、

「……ほんと、素直じゃないんだから……癒しの術は妾しか使えないもんだから……格下の妾に助けられるのが、面白くなって、？ 預けた？ 何て……」その横で白菊が愚痴を言うと、

「その口が災いと成る事を教えて欲しいか？」玉江は、白菊の両頬を指で力いっぱい摘んだ。

「ふえっ、ふうみまへえん……」涙目で誤っている白菊を見て、美

貴は可哀そうに思うと同時に、霊体同士だと触れるんだと初めて知った。

白菊を駈け（？）ている玉江に近付き、

「玉ちゃん……ありがとうね……本当にありがとう……」美貴が、涙を浮かべて礼を言った。

玉江の命懸けの働きで龍之介を助ける事が出来て、美貴は言い尽くせない感謝の気持ちでいっぱいだった。

「主……」そんな美貴を、満足そうな笑顔で見ていた玉江は、

「た、但し、美貴殿を主と呼ぶのは、今限りじゃからな……」と、急に、恥かしそうに顔を背けた。

「えっ？何で？」玉江の態度の豹変が理解出来ず、美貴は戸惑い聞き返した。

「当たり前じゃ。考えても見よ。あのような勝負だけで、我を縛ろうなどと、片腹痛いわ」

上から目線で、美貴を見下ろすように玉江が言うと、

「自分から言い出したくせに……」と、横から白菊がボソッと呟いた。

「何！」玉江が白菊をギンッと睨み付けると、

「い、いえ！……」白菊は慌てて、ほっぺたを両手で隠した。

「玉ちゃん……」美貴は、自分が何も出来なかった事に、玉江が腹を立てたのかと思い、不安な顔で玉江を見た。

不安そうに見詰める美貴を、

「良いか、美貴殿。修練を積まれよ。今の美貴殿では、我が憑けば負担になるだけじゃ」

「玉ちゃん……」優しく微笑みながら話しかける玉江を見て、美貴は少し安心した。

「何れは美貴殿も、お役目としての覚悟を決められるであろう……そして、修練を積まれ、我を憑けて役目を果たせる力を持たれた時は、我は喜んで美貴殿に縛られよう……」

「玉ちゃん……」

「百合殿の様に、強くなられよ……力だけでは無く、心もな……」
「……うん、頑張る」

笑顔で答える美貴を、玉江は愛しいそうに微笑みながら見ていた。
「ちょっと、君……海神君だっけ……」

「えっ？」龍之介より十cmは上背がある信仁が、殺気の滲んだ目で見下ろし威圧している。

「家の娘^{うち}とは、どう言う関係なんだ！」と、怒りに燃える目で睨み付け、龍之介に詰め寄ると、

「えっ？えっ？」と、訳が分からず、信仁の迫力に押され、龍之介はたじろいだ。

その様子を見て、美貴は二人に駆け寄り、

「お父さん！いい加減にしてよ！」と、信仁を怒鳴りつけた。

「だってえ……」美貴に怒鳴られ、信仁は急にしおらしくなった。

「お母さんに言い付けるわよ！」と、美貴が再び怒鳴り付けると、
「えっ！そんな！いやっ……ちょっと……」と、どの様な家庭の事情なのか分らないが、よほど不味いと見え、信仁は慌てている。

「えっ！お父さん？あっ、始めまして、海神龍之介と言います」と、龍之介が丁寧^{ていねい}に頭を下げる姿を見て、信仁は反射的に、

「あっ、父の信仁です……」と、つられて頭を下げた。

「よろしくお願いします」何がよろしくかは分からないが、

「えっ？……うん、まあ……よろしくな……」と、信仁は照れながら頭をかいている。

丁寧^{ていねい}に挨拶をする龍之介を見て、なんだ、良い奴じゃないかと、信仁は少し安心した。

「それより、先輩、体、大丈夫ですか？」美貴が信仁を押し退け、心配そうに聞くと、

「あ、ああ……なんかだるいけど、痛い所は無いな……」龍之介は思いついたように、体のあちこちを触りながら答えた。

「幾らかは魂が削られている様だが……暫く大人しくしていれば直るじゃろ。主も同じじゃ」

白菊が二人をじろじろと、交互に眺めながら診断した。

「あの、なんだったんですか？あいつ」龍之介が、美貴に押し退けられて、すねて煙草をふかしている信仁に向って聞いた。

「なんだったんだろね……」信仁は、煙を噴出しながら遠くを見ている。

「えっ？分からないのですか？」龍之介が聞き返すと、

「ああ、分からんよ……」と、煙草を携帯灰皿に押し込み、信仁は険しい表情で答えた。

「何者か分からないと言う事ですか？」

「そうだな、分かっている……かな？奴らとは、何度か戦ったけど、人じゃ無いつて言う事位かな、分かっているのは……いや、敵だと言う事も分かっているな」

「奴らって……他にも居るんですか？」

「ああ、居るよ……また、始まるのかもしれんな……」信仁は遠くを見詰めている。

「えっ？」

「この程度の滅火なら、その影響範囲は大した事無いんだよ。本気でやる気なら大規模な滅火を何箇所も同時に開放しないと効果は無い。奴の目的は恐らく、大規模にやらかす前に、滅火を取り込み、力を付ける為だろうな……」

「滅火って……さっきの奴が言っていた、人が滅ぶって事ですか？……」横で聞いていた邦博が心配そうな顔で聞いた。

「そうだな。たぶん説明しても理解出来んだろうけど……霊的な毒で、生きている者を全て滅ぼす物だと思って間違いないよ」

「そんなのが、他にもあるんですか？たとえば町の中とか……」

「あるよ。場所が分かっている物もあれば、こいつみたいに分からなかった物もあるよ。町の中とかにも在るけど、殆どが神社や寺の結界に守られて封印してあるから大丈夫だよ」

龍之介達は、信仁の話を興味深げに聞いていた。

大団円

「いい……湯だなあ……」ふうう……

「景色も良いし……」うんうん……

「極楽ですねえ……」だよなあ……

龍之介達、美術部男子三人は、越前海岸を一望出来る露天風呂から、合宿三日目の夕日が沈み、茜色に輝く空を眺めながら幸福感に浸っていた。

「ああ……生きているって、素晴らしい……」

「そうだねえ……」

「ほんとですねえ……」

龍之介達は、生きている事の喜びを噛締めていた。うむ、平和が一番。

あの後、信仁の話によると、漏れ出した滅火は寺の坊主達が修理に来ると言う事で、信仁は漏れが大きく広がらない様にと、滅火を取り囲むように札を埋めていた。

皆は旅館まで、白菊と玉江に乗って送って貰ったのだが、シートベルト無しで剥き身のまま空を飛ぶと言う、ジェットコースター等とは比べ物に成らない恐怖を味わった。

龍之介は、もう二度とかかわる事も無いだろうと、水平線を眺めていた。

「あの……龍之介……」 邦博が何やら遠慮がちに龍之介に声をかけた。

「あ？何だ？邦博」呼ばれて龍之介は、隣の邦博を見た。

「すまん！」邦博は、お湯の中で正座して頭を下げている。

「あ？何の事だよ……」とまで言っ、龍之介は直ぐに部長の事だと気付いた。

「お前が部長の事、好きだって知ってたのに……」

「馬鹿、だったらなんだよ。そんなの関係無いだろ。それに言っただろ。俺は部長の相手がお前で安心してんだよ」

「龍之介……」

「まあ、正直、悔しいよ……本音はな……今でも部長の事は好きだからな」

「……すまん……」

「でもな……俺、本当に安心したんだ。部長から好きな人が居って聴いて、それで、お前と上手く行って……だから、これで部長は振られて悲しむ様な事は無いんだって、切ない思いをしなくて良いだって」

「龍之介……お前……」

「まあ、余計なお世話かも知れないけど、部長を泣かす様な事はするなよ……お前に限ってそれは無いと思うけどな」

「龍之介……僕の事、嫌いにならないよね」邦博がおずおずと聞くと、

「何でそうなるんだよ！嫌いになんかならないよ」呆れた様に龍之介が答えた。

「ずっと、友達でいてくれるよね」邦博は、龍之介の両肩を掴み涙目で訴えている。

直接、男に肌を触られるのは、あまり気分の良いものではないと思っただが、

「ばっ、馬鹿だなあ……何言ってるんだよ。当たり前だろ」涙を浮かべる邦博を見て、龍之介は戸惑った。

邦博が、恋と友情の板挟みに苦しんでいたのかと思うと、

「おまえ……そんなに悩んでたのか……」と、改めて邦博への友情を深く認識した。

「だって、龍之介に嫌われたくないもん……」龍之介を失いたく無い思いを込めて、邦博が真剣な目で龍之介を見詰めながら、掴んだ肩を強く握る。

「馬鹿だなあ、お前……嫌う訳ないだろう。俺達ってそんな程度の仲か？違うだろ。小学校の時から、嫌な時も一緒に励まし合ってた仲じゃないか。これからだって、変わらないよ。変わる訳無いじゃないか」邦博の姿を見て、思い余って、龍之介も邦博の肩を強く

掴んだ。

見詰め合う二人を、熱い沈黙が包んでいる。

図らずも、邦博は部長のお陰で、龍之介と強い心の繋がりを得る事が出来た。

「邦博……」龍之介の目に涙が光る。

「龍之介……」食い違う万感の思いを込めて、裸で抱き合う二人を見て、

「先輩……」と、司は勘違いの感動をしていた。

合宿最後の夕食の時、部長と邦博のカップルが誕生した事に、皆は盛り上がった。

部長と邦博は、皆の冷かし攻撃を、顔を赤らめて恥かしそうに受けていた。

「てめえ……上玉掴みやがって！」

「ふふふ、ありがとうございます」

部長は何時もと違い、酔っ払って絡んで来る葛西先生からの祝福の冷かしを、感謝の気持ちを持って嬉しそうに受けていた。

食事の後は、皆はロビーで合宿最後の夜を楽しんでいた。

合宿と言う物は独特な雰囲気があり、美術展に向けての準備が表向きの主旨だが、懇親会的な要素が強い。

先輩達から受け継いだ、学年を超えたフレンドリーな雰囲気的美術部を、龍之介は司達一年生にも引き継いでもらい、そしてずっと伝えて行って欲しいと願っていた。

「お姉様！飲み物買って来ました！」司がカップのジュースを四杯お盆に載せて通り過ぎた。

テレビの前でソファに座って、翔子が高村達と楽しそうに話している。

「ありがとう羽山君」高山と三島が、礼を言ってカップを受け取った。

「ありがとう」微笑んで迎えた翔子の隣に、司がちょこんと座った。まだ、ペットの子犬を連れている様な雰囲気の二人だが、翔子の

司を見る目が、安らぎを持った柔らかい目に成っている事を龍之介は気付いている。

「ちよつと……邦博君、だめじゃないの！何やってたの、スケッチ全然だめじゃない！……何？このガードレール？」部長は、邦博のクロッキー帖を見て怒っている。

「でも……部長……」と、邦博が言い訳しようとした時、

「……もう、碧って呼んでよ……」と、頬を赤く染め横を向いて、邦博のお尻を抓った。

部長と邦博は、明らかに部長の尻に敷かれていると言う雰囲気だったが、時折見せる、駄々っ子の様に邦博に甘える部長の姿を、龍之介は見逃さなかった。

少しの未練が、龍之介を寂しい気分にしたが、好きな人が笑顔で居る事で『それで良いじゃないか』と、龍之介は満足だった。

龍之介は決心した。

決心して、少し離れた所から、皆には気付かれない様に美貴を手招きで呼んだ。

呼ばれて、不安そうにやって来た美貴は、

「なんでしよう……」と、龍之介の顔を見るのが恥かしいのか、頬を少し染めながら俯いている。

「すまん。話があるんだ……外に行こうか」龍之介も恥かしそうに、美貴から顔を逸らして言った。

龍之介達は旅館を出て、裏の階段から海に下り、コンクリートの防波堤を背にして並んで、夜の海を見ている。

コンクリートの堤防は、昼間の太陽のせいであまり温かい。

美貴は不安だった。今日の事を龍之介がどう思っているのか。

龍之介の意識の中で告白したけれど、龍之介はそれをどう受け取っているのか。

あの後、二人で話をする機会も無く、まだ返事を聞いていない事に、美貴は不安でいっぱいだった。

もしかして龍之介は、あの時の事を夢だと思っているのかも知れ

ないと思うと、残念に思う自分と、何故かそれを願う自分も居る事にジレンマを感じた。

美貴は、隣に並んで立っている龍之介とは、港での五十cmの距離から、十cmの距離へと昇格しているのに気付き、嬉しい気持ちと共に、龍之介に呼び出された理由を、僅かな期待と不安いっぱいでもドキドキしていた。

龍之介も、何から話そうかとドキドキしている。

言いたい事は決まっているのに、美貴を目の前にして、なかなか切り出せないで居た。

龍之介は、一度大きく深呼吸をして『怯むな!』と、心の中で叫ぶと、

「今日は色々あったな」と、暗い海を眺めながら静かに言った。

「はい」美貴は、龍之介の顔を見ながら返事をした。

「今日はありがとうな、俺を助けてくれて」龍之介は、笑顔で美貴に礼を言った。

「いえ、そんな、先輩こそ……私を助けてくれて、ありがとうございました」美貴は龍之介と目が合い、二人は恥かしそうに俯いた。

「俺さ……あの夢の中で、お前の声を聞いて……」

「先輩……」美貴は不安そうに龍之介を見詰めている。

「うれしかったよ。ありがとうな」微笑みながら礼を言う龍之介に、

「いえ……」美貴は、少し安心して微笑んだ。

微笑んでいる美貴を見て、龍之介は改めて決心した。

「俺が部長の事好きでも、好きで居てくれるのか？」

「……はい……」

「……そうか……手紙、読んで見たいな」

「えっ？」

「お前を見ていると、消さなきゃならない部長への想いを、塗り替えてくれそうな気がする」

優しく微笑みながら龍之介が言うと、

「先輩……」美貴は、大きな目をさらに大きく開いて龍之介を見詰

めた。

「そして、何時かは、お前だけを想っている俺が居るんだ……」

「先輩……それって……」

「俺の事……ずっと好きでいてくれるか？」

「……はい……」 龍之介の言葉に、美貴は胸に暖かい物が込み上げて来るのを感じた。

「ありがとう、俺も好きだよ」

「……………」 美貴は、龍之介の返事を聞いて嬉しくて嬉しくて、言葉が出てこない。

恋愛は告白する事がゴールじゃない。其処から始まるんだ。二人の心を繋ぐために。強く繋ぐために。愛にゴールなんて無いのだから。

「あのさ……その……み、み、美貴って、呼んでも……いいかな……」 恥かしそうに鼻をかきながら、途切れ途切れに龍之介が言うと、
「……はい……」 美貴の目から涙が溢れる。

「なんだよ……泣くなよ……」 笑顔に涙を浮かべる美貴に龍之介は戸惑っている。

「……………」 美貴はどうとう、両手で顔を覆い泣き出してしまった。
「えっ？えっ？……」 泣いている美貴を見て、龍之介はどうすれば良いのか分らずに、あたふたと戸惑い『なんだよ！どうすりゃ良いんだよ！なんだよこの破壊力は！』と、女の子の涙の破壊力に完全に打ちのめされ、思わず美貴を抱きしめてしまった。

高校二年生の夏休み、美術部合宿の最後の夜、海の上には空いっぱい星が瞬き、波の音と共に流れてくる海からの涼しい風は、磯の香りを運んで龍之介達を包んでいた。

そして、龍之介の腕の中で、幸せいっぱい美貴がいた。

最後まで読んでいただいて、ありがとうございました。

お願い、届いて……（後書き）

感想を一言頂けましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1853v/>

滅火-変形六角関係顛末記

2011年8月27日03時24分発行